
いつかどこかの俺の世界

世空 心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかどこかの俺の世界

【Nコード】

N3137X

【作者名】

世空 心

【あらすじ】

物語の世界に憧れた、そんな俺は、自分自身が描いた物語の世界の中に入り込んでしまう。そこで出会ったのは、自らが創った設定が原因で孤独を味わう少女だった。「もし、神様が居たらね？何を思って、この世界を創ったんだろうって、そう、思うんだ」神様の立ち位置に居る一人の少年と、世界の中に住む一人の少女を中心とした、シリアスだったりちよっとコメディが入ったりする物語。

プロローグ「全ての始まり」

物語の世界に憧れた。

それはいつからだったのか、もう俺は覚えていない。ただ、気づいた時には自分で考えた世界を書きだしていた。

剣を振るって戦う英雄だとか、未知の力を操る魔術師だとか、居るはずのない生き物たちだとか、そんなものに憧れていた俺は、その想像ができる限り、ノートに書き込んでいった。学校での生活や部活動に時間をとられながらも、いつの間にかそれらはノートの山になっていった。

「……l……i……e……」

そして今、俺は最後のノートに文章を書き込んでいる。授業で使ってるようなものとは比べ物にならないぐらいに細かく書かれているそれは、買って間もないながらも一種の年季のようなものを漂わせていた。

ようやく、最後の一文字が、ちょうど最後のページの隅っこにぴたりと収まった。

「いよっしゃ！　ようやく完成だぜ！」

書き上げた喜びの、その勢いのままに立ち上がって、蛍光灯の光を弱めた俺は、同じようなノートが詰め込まれているバッグにソレを詰め込んで、抱きかかえるように持ち上げた。部屋の外に声が漏れないように声を上げていると、自分自身が描いた世界の、その産声を代わりにあげているような、そんな気分になった――その時だった。

「……………ん？」

声を、聴いたような気がした。自分が呼ばれたかのような、そんな感覚をうけた俺は、バッグを抱きかかえたまま振り返るが、周囲には人影などあるはずもない。

「空耳……か？」

そう、結論付けた。そして俺は、少々の倦怠感と共に、瞳を閉じてベッドに仰向けの姿勢で倒れこんだ。

その直後、目を閉じている筈の俺の目に、不鮮明な映像が飛び込んできた。赤く塗られた荒野に、旧式のテレビにありそうな砂嵐と共に吹く風、映像。地平の向こうまで見渡せそうなほどに遮蔽物のない情景の中に、一組の甲冑がオブリジェのように鎮座していた。

剣を垂直に地面に突き刺し、それを寄る辺にするかのようにもたれかかるその鎧は、傷つきひび割れ、防具としての寿命はとうに迎えている。赤さびた汚れの漏れ出すその隙間からは、色の着いた靄が滲み出ていた。

そして、声が聞こえる。不鮮明だが、先ほどよりもはっきりと。

「神よ……………その御身、真に……………ならば……………」

鎧の人物のこえだろうか、そう思われる砂嵐交じりの音声。優しげな深みのある低音の売れに、意思の強さが垣間見えるような、そんな印象を受ける声だった。

砂嵐が、激しくなる。

「どうか……………を……………だろうか」

その言葉を最後に、映像はふと途切れてしまった。

いつまでたっても、ベッドは俺をとらえてはくれない。そんな、妙な浮遊感と瞼の裏の暗闇の中、俺はゆっくりと瞳を開けた。

そんな俺の目の前に広がっていたのは、心地よい陽気に満ちた青空だった。

「つて、何でさあああ!?!?」

そんな叫び声と共に、重力を思い出した俺の体は、地面に向かって落下していった。急な事態に混乱した俺は、ただただ身を固めて目を強く閉じ、迫る衝撃にそなえて身を丸める。

どこかの森の上だったのだろうか、背中に軽い衝撃を受けると枝が折れるような音が耳に入る。同時に枝に生えている数々の葉っぱが、俺の体を撫でる様に包み込んだ。そんな、枝の上に落ちて、折れて、落ちてを繰り返し、減速していった俺の体は、数十秒の間を経てようやく地面に落下した。

「いってえ……くそ、一体何が……」

体の節々に痛みを感じながらも、衣服にまとわりついている葉っぱを払い落とす。混乱しつつも、俺は自分の置かれた状況を理解しようと、頭についた葉をつまみつつ周囲を見渡そうとした。直後、人影が目に入る。

少女だった。

「————え？」

それはどちらの声だったのだろう、俺は目の前の少女の存在に驚いて、少女は突然落ちてきた俺に驚いて、そうして、俺たちは互いに視線を交わしていた。妙な感慨に塗りつぶされた時間だった。

少女の髪は長く腰まで伸びていて、その黒は木漏れ日を受けて艶

やかに輝いている。カソックにも似た濃紺の衣服を着ていて、そこから除く顔の肌色はその白さを以て、幼い顔つきながらも達観した何かを感じさせた。

だがそれよりも何よりも、俺は彼女の目——右目に惹きつけられる。深く濃い、人間が持ちえるとは思えない程に透き通った色彩の紅。よく見ると鈍く光っているようで、それは酷く俺の心を惹きつけた。

ああ、ここはそうなんだ——目の前のソレを最たる証拠として俺は、自分の身に起こった現実を理解できたような、そんな気がした。でも、やはり心は混乱していたのだろう。らしくない、臭い台詞が口からこぼれてしまっていた。

「綺麗な……………目だな……………」

それが、コトの全ての始まり。

第一小節「それは唐突なことだから」(前書き)

初版を見てた人は、何が違うか分かる……かも。

第一小節「それは唐突なことだから」

それは、唐突だった。

自分の知覚範囲よりも更に外に感じられる世界の歪み。その歪みから作られた波が、人ならざる存在の、その一部にのみ聞き取れる音となって広がっていた。

「!…今のは…」

その歪みの中心から、さほど遠くは無い場所、そこに居たある精^{人なら}霊が、その波を感知する。

いくら中心から遠くは無いといっても、それは本来自分が知覚できる範囲の外。そのことにその精霊は首をかしげた。

「私の知覚範囲外からですか…：…ですが、この感覚は…」

その精霊は、懐かしいようなそうでないような、そんな感覚をその波動から感じていた。歪みが消えた後も、その感覚が残っている。

「何なのでしょ…」

気になる、という好奇心より、行かなくてはならないという使命感到に似た何かが感情として沸き起こる。自身が気づいた頃には、体はその中心に向かっていった。

この後、その精霊はその波動を感知出来たことを神に感謝することになった。

目の前の出来事に、思わず言葉を失ってしまう。

森の中を通る道。獣道と呼んで差し支えないような、そんな道を歩いていると、自分の目の前に叫び声と共に少年が落ちてきたのだ。枝が幾本も折れていく音と共に落下してきたその少年は。体中葉っぱまみれで、落下の衝撃のせいか顔を顰めている。

そんな急な登場に思考を停止させながらも、少女は僅かに動く一部分をもってその落下してきた少年を観察し始めた。自分と同じ黒い髪を短く刈りそろえ、やや逆立てている。？を基調としたその服装は見たことも無い様式をしていたが、それが動きやすさを求めたものであることは理解できた。その彼の傍らに転がっているバッグも、彼女の記憶には無い独特な形状をしている。

「いってえ……つくそ、一体何が……」

苦しそうな面持ちのままですらう呟いた彼は、体についた葉っぱを払い落とし始める。まだ彼は少女の存在に気づいてはいないようで、そこに視線をやるといふこともなかった。だが、彼が頭についた葉を取ろうとすると同時に周囲を見渡そうとすると、そこでようやく、彼女の存在に気づいた。

「……………え？」

少年は大きく目を見開いて、頭の上の葉を抓んだままの恰好で固まった。そのままお互いが見つめあう妙な数秒間ができて……………

不意に、少年が小さく口を動かした。だがそれは非常に小さな声で、聞きとることが出来ない。

「――――」

「え？」

少年のつぶやいた言葉に、少女は反応する。その疑問を表す声に、少年は意識を現実に戻したのか、呆けていたその表情を戻すと、気恥ずかしそうに頭を掻きながら立ち上がった。

「ああ、いや悪い悪い、何だか驚かせちゃったみたいだな、これが」

そんな、気の抜けるような台詞。今まで形成されていたやや張りつめた感のある空気が一気にほどけたようで、少女は体の力が緩むような、それでいて何故か呆れ返るような、そんな気分になった。本来持つべきだったのであろう警戒心も、少女はこの少年には働かない。

だがそれでも、少女は少年に訝しむ様な視線を送ると少年に質問をした。

「貴方……何者？」

少女の問に対して、少年は一瞬だけ首を傾げると、明るい調子でこう答えた。

「俺か？ ああ、俺は■■■■■■■■■■ってい……………」

またもや、少年が凍りついた。少年の名乗りを聞き取ることができなかった少女は、眉をひそめる。

「わ、わりい、えっと……あ……ラスティハルト」

そう、言い聞かせるように、軽く目をつぶってそういうと、視線を再度少女に合わせた。

「……ラスティハルト・ジーンっていうんだ。ちょっと長めなんで、ラスティって、呼んでくれ。それで、君はなんて言うんだ？」

聞きたいことはそれではなかったのだろう。その少年、ラスティの嬉々とした様子での自己紹介に完全に毒気を抜かされたのか、少女は小さく気づかれぬようにため息をついた。しばらく間があって、一言、自分の名前だけを彼女は告げる。

「……ティアマツト・マキナ」

「そっか……あのさ、いきなり申し訳ないんだが……」

少女、ティアマツトの名前を聞くと、ラスティは気恥ずかしそうに自分の後頭を掻くと、地面に落ちていたバッグを拾い上げてこういった。

「……最寄の町にさ……その、どうやって行けばいいか教えてくれないかなって思うんだが……」

「……何故貴方は、上から落ちてきたの？」

「う……いや、あのさ、俺道に迷っちゃまって、それで木の上から見渡せば町か何か見えるかなって思ってた、これが。んで、上まで登ったはいいいんだが、さっきみたいに落ちちゃってな？ いやあ、

落ちた瞬間は焦った焦った」

今度こそ、ティアマットは拍子抜けしたとばかりに大きくため息をついた。その横でラストィも安心したように深く息を吐いているのに、彼女は気づくことは無かったが、視線を彼の方に戻すと、その視線を逸らしたのちに言った。

「……着いてきて。途中でわかれる道があるから」

「おお、マジか！　ありがたい！」

無表情に歩みを進めていこうとするティアマットに、非常に嬉しそうな様子で礼を告げたラストィは、バッグを背負うとその隣に並び立とうとするように、彼女の後ろを追いかけ始めた。

最低限の舗装がされた道の上。修道服にも似た意匠の紺色の衣に身を包み、腰まで伸びた黒髪を吹く風と共になびかせてティアマトは歩いていた。

荒い土を蹴るブーツにつく砂埃が、彼女が歩いてきた道のりを物語っている。

「変な人」

森が拓けた所で、そう、何か思い返すように唐突に彼女は呟いた。歩く距離が積み重ねられていく内に、周囲に見えていた木々は少しづつその姿を消していき。代わりに舗装された石タイルと幾分かの人影が姿を現してくるようになる。

そうして目の前に、門が見え始めた。

その門を構成している光沢の無い灰色の石材は、見るものに年季を感じさせる。ただし、そこには古臭さが感じられず、それがまた荘厳さを演出していた。城の城門でも、これほどのものだろうか。一瞬思わせるそこには、門の上から垂れ幕がかかっている。それが、校門の持つ威厳とギャップを感じさせ、いささか滑稽に見える。

『私立ハルバルト学院』

そう、風に棚引く文字が、彼女たち————新入生を迎えていた。門に近付いていくように歩いていく彼女の周囲の生徒たちは、これから待ち受けるであろう学院での生活に夢を膨らませ、友人たちと会話を交わしている。そんな喧騒には一切の関心を向けることなく、彼女は人ごみを通り抜けた。

校門を通るときに、その表情に変化が見られたが、それが何を意味するかはわからない。

ゴシック様式を思わせる石造りの外観の校内に入ると、受付を任されたと思しき上級生が少女を出迎えた。その人物に荷物を預け、自身の名を告げる。するとその生徒から、案内の冊子と学院生であることを証明するバッジが手渡された。左右非対称の幾何模様が描かれたその裏には、持ち主の名前が刻まれる。

T i a m a t t ・ M a x i n a———そう刻まれた文字を見て、彼女はその表情をわずかに暗くした。

第二小節「式と箱舟」

ティアマツがこの学院にたどり着いてから幾分か後、その正門の前には疲れ果てたラスティハルトの姿があった。彼が今まで乗っていた馬を引く係員の男性も、その後ろ姿を僅かばかりの同情の念を込めた視線で見つめている。

「あゝ、最悪だ。何でこんなことになるかな……」

乗り慣れない馬での移動で疲れ果てた様子の彼は、もう通る人数が僅かになっている校門を後にして、受付に向かう。もうそろそろ仕事も終わりだと気を抜きかけていた受付の先輩に向かって、ラスティは先ほどもでは持っていなかった紙を提出し、自分の名前を告げた。そして手渡されるバッジ。裏に書かれた文字は *h a l t ・ X e e n*。

「これが、生徒証明の物になるってことか。何かセキュリティでも組み込まさってんのか？」

そんなことを呟きながら、彼はこれから入学式が行われるという講堂に向かって、廊下に設置された標識通りに歩き始めた。

天井までが非常に高く、石造りの構造体が立ち並ぶ廊下には、非常に高価そうな絵画や彫刻等の芸術作品の数々が陳列されていた。ここに来るまでに写真でしかお目にかかったことのないような価値のある物たちを前に、知らず知らずのうちに視線が泳いでしまう。小さな声で、語りかけるように呟いた。

「流石は、お金持ち学校、沢山金かけてるなあ……」

教育機関の施設の規模だとは到底思えないこの学院をそのように評するラスティ。すると突然、彼は誰もいないはずの隣に向かって語り始めた。廊下には誰の人影も見ることとはできないのにだ。

「ああ、ここはな……7年前に空城になった城を、この校長が異常なまでの安値で国から買い取って、それを学院にするために大規模な工事をしたそうだ」

そう語る彼の表情はどことなく嬉しそうで、こういったことが好きなのだらうということをおぼろげに思わせる。姿の見え無い何者かが彼の隣に居るのだという風に、彼は小さ目な声で説明を続ける。廊下に人影が無いことには、一応それを見計らって話しているのだらう。

「何でもこの校長は国王と仲がいいようでさ、かなり協力してくれてたみたいだな。何でも次世代を担う新しい人材を育てるためだつてさ。貴族・平民を問わずね」

ヨールティニアと称されている大陸の、西部に存在する中規模の王政国家オステレイ。その北部にこの学院は建っている。貴族、平民関わらず教育し、国を担っていく人材を育てるという目標を掲げているこの学院には、人口比で一对一の割合で貴族と平民の生徒が存在していた。

「時代の変化を感じて、貴族だけでの国家の運営に限界を見出したか……俺のいたところなら、さぞかし賢王とたたえられただろうな」

そんな皮肉げな言い方とは裏腹に、その表情には影が無い。言葉はともかくとして、感心しているのは本当のようだった。

そうこうしているうちに、彼は講堂にたどりついた。開かれた、

その分厚く異様に高い扉の向こうには、同世代の少年少女たちが、立食パーティーとしゃれ込んでいる。平民も混ざるといふ事からの配慮だろう。テーブルに並ぶ料理たちは、サンドイッチなどの手で持って食べられるものや、とにかく食べ方をあまり気にせずにいられそうなものばかりが並んでいた。

貴族と思われる人たちは準正装。平民と思われる人たちはそれなりに高そうな衣服を着込んでいる。お金持ち学校という異名はここでも発揮されていて、四桁の人間が軽く収容できるであろう床面積に、廊下よりも更に高い天井。光すら、シャンデリアに彩られているのではないかと錯覚させるような光景が、そこに広がっていた。

ジャージでいる自分が、不釣り合いだと思えて仕方がない。

そこに居る生徒たちにも、ラステイは興味を抱いている。彼らを見るその表情には、まるで動物園にきた少年と同じような光が宿っている。流石にはしゃぎはしないのだが。

「（おお！すげえ………ブロンドだぜブロンド。俺初めて金髪碧眼なるものを見たぜ………お、あれがシルバーブロンドか………ん？なんか今生物学を完全無視した色が見えた気がしたんだが………）」

興奮が抑えきれない様子であたりを見回しているそのしぐさから、こういう光景が日常ではない事がありと感じられる。そうして時折サンドイッチを食べつつ散策していると、視界に懐かしいと感じられる色が介入してきた。

「（お！俺以外の黒髪を発見………）て、あれ？」

その人影は、先ほど出会ったティアマットのものであった。やわらかい曲線が彫られたやや細めの白い柱に背を預け、広場をずっと

見つめている。その表情は、何処と無く険しい。

「あいつここに居たのか……って、そういやティアマツトが歩いていった道って学院方向だったもんな。むしろ新入生と予測しとくのが普通か」

そう一人で自己完結をしていると、ふとあることが気になった。周囲の人口密度が明らかに少ないのだ。円を描くとまではいかないが、彼女の周辺に人が全く居ない。まるで人避けの結界が張られているかのように、そこには空間と呼べるものが出来ていた。

「（避けられてるのか？ 確かにあのムスツとした雰囲気は近寄り難いと思うが、余りに不自然な気がする……）ま、とりあえず挨拶しとくか。一応世話になったんだし」

そう言いながら、ラストィは彼女に向かって、柱の後ろから回り込むように、近付いていった。

「はあ」

先ほど手渡されたバッジを手で弄びながら、ティアマツトは講堂の片隅、柱に寄りかかるようにして立っている。その眼前には、料理ののったテーブルが並び、新入生たちが思い思いにその交流を広

げている。乳白色の大理石を初めとした白を基調とした内装が、シヤンデリアの灯りを受けてうす赤く色づいている。

それを辟易した様子で、彼女は眺めている。周囲には誰も居ない………筈だった。

「わざわざ、入学式、にこんなに料理を用意しなくてもいいでしょうに」

「まあ、お金持ち学校だから仕方ないんじゃないか？」

「っ!？」

独り言に対して、突然死角?…?殆ど背後?…?からかけられた声に驚き、彼女は危うくバッジを落としかけてしまう。何とか手にバッジをおさめた彼女は、その表情をあからさまに険しくさせ、振り返る。

「おっと、わりい、驚かせちゃったか？」

そこに立っていたのは、背の高い黒髪に、黒を貴重とした同意匠の上下の衣服?…?ここに来る道中で出会った……いや遭遇した少年、ラストイハルトだった。

背後から突然話しかけられ、謀らずとも恥ずかしい姿を見られてしまったことに若干顔を紅潮させながら、彼女は彼が発した、驚かせたか、という質問に答えた。

「いきなり後ろから話しかけられたら、誰だって、驚く」

口調こそ意識して穏やかだが、そこには怒気が見え隠れする。だが彼は、そんな彼女の視線を受け流して、涼しい顔で答えた。

「いやあ、済まない。正直悪気はあったんだが、ここまで驚くとは思わなかった」

悪びれた風も無く、少年は苦笑いを浮かべながら弁明にもならないことを口走る。そんな様子にすっかり毒気を抜かれてしまったティアマツトは、肩を落として溜め息をついた。今日初めて会ったはずなのに、何故こうも調子が狂わされるような気がするのだろうか、そう、彼女は思案する。

「それで、なにか私に用事でもあるの？」

追求はすまいと、先ほどのことを無視することにしたティアマツトは、素っ気無い態度で少年に接する。ラスティの方は、そんな態度を気にした風は無いが、その反応には一言言わせて貰っていた。

「どうかさ、まずは俺がここにいることに驚こうぜ？」

確かに、ラスティとティアマツトは、ここに来る途中、近くの町への分かれ道の所で別れたのだった。だがこうして目の前に居ることを考えると、どうやら新人生としてここに来たようであった。

「確かに驚いたけど、特に気にすることでも無いもの」

向こうの友好的な態度にも関わらず、ティアマツトは素っ気無い態度でラスティに対応している。だがそんなことをラスティのほうも相変わらず気にする様子は無い。ただただ、楽しそうな表情を浮かべたままである。

「まあ、俺にも色々あってな、これが……」

学院への道のりを聞くために町に向かったのだろうか、そう、彼女は考えたが、すぐにその考えを振り払う。聞くならば初めから学院への道のりを聞いてくるはずなのだ。

「(……でも、私には関係ない……)」

こうして遅れずに間に合っているところを見ると、馬か何かを飛ばして来たのだろう。そう、彼女は考え——それで思考を終えることにした。

「……まあ、俺ここに知り合いなんて居ないし、暇だなあって思ってたらティアマツトを見つけたんだよ。どうせなら挨拶しとこうかなってさ。ま、とりあえずよろしく、な」

気を取り直したかのように背筋を伸ばした彼は、ティアマツトに右手を差し出す。それが握手を求めていることに気付くのに一瞬間があり、また呆けた表情をしてしまったが、無事(?)彼女はそれに応じた。

その時彼女は、ラスティの背後に違和感を覚えた。何も無いはずのその空間を、彼女は凝視する。

その視線の先には、大理石の壁があるだけのはず……だった。

「?…?..?」

気を配らなくては気づかないような小さな歪み、風景が捻じ曲がっている。それはまるで、透明な何かがこの人物の背後に存在しているようだ、そうティアマツトは感じた。

そこに視線を向けたままで、彼女はラスティに疑問を投げかける。

「あなたの後ろ…何か居る？」

それは予想外の反応だったのだろう、一瞬目を見開いたラスティは、思い出したかのように呟いた。

「そっか……ティアマツトには見えるんだな。……アーク、可視光線の透過率を維持したまま概念視へのステルスを解除してくれ」

そう言ったラスティの背後に現れたのは。人の上半身のシルエットを持つ半透明のナニカだった。周囲に何の反応も無い以上、他者には見えていないのだろう。

「コイツも紹介しとくよ、俺の使い魔のアークだ」

主人の紹介にあわせて、アークと呼ばれた存在がお辞儀をする。その様子を、彼が現れた時とおなじように見つめるように見ていた。一般にいわれる”魔術師”という存在。彼らは使い魔として、何かしらこの世に存在する生命を従える事がある。狼や鳥といった動物や、サラマンダーやワイバーンといった魔獣。力量のあるものならアップサラスや精霊といった幻想種・世界種と呼ばれる超上生物を従える者さえいる。

ポリゴン体でかたどられたかの様なそれは、歪な輪郭をしている。ただ人の上半身を模しているとだけは分かった。だがそれが、果たして何のカテゴリーに属するのか彼女には検討がつかない。

「……見たこと無い種ね」

「あ、意外と驚かないんだな」

「確かに驚いたけど、人の使い魔に一々驚いているようじゃだめだ

もの。使い魔を持つ魔術師は少なくないから」

正直相当驚いていたのだが、ラスティの発言にこれ幸いと便乗する。苦笑いを浮かべるラスティは、気付いているのかそれとも気付いてないのか分からなかった。

「まあ何にせよ、正体は秘密だってことで」

「別に構わない」

相変わらず、対応は素っ気無い。

結局そのまま、ラスティとティアマツトは話し続けた。ラスティが話して、ティアマツトが素っ気無い対応で返すそういう形が大半だったが、後半になると次第に、ティアマツトの方から話を持ちかけることもでてきた。ただ、それは殆どラスティへの質問だったが。

そしてしばらくすると、式が始まる様子が見受けられた。どうやら入学予定者が全員到着したようである。その周囲の変化に、ラスティが反応した。どうやらこの会話もここまでのようだった。

「おっと、もう時間か……俺はもう行くわ。じゃあな」

「ええ」

会話を交わすようになって、結局ティアマツトの素っ気無い態度は変わらない。

（まあでも、いいんじゃないか？）

そんな心の呟きを、使い魔にすらこぼすことなく、彼はその場を

後にした。

第三小節「夢に見ていた」

式が始まり、講堂の前方中央に備え付けられた巨大な教卓とも形容すべきものの上で、ラスティにはさして興味のわかないお偉い三の話というものが始まった。暇になりそうだと思ったラスティは、自身の使い魔と会話をすることにした。

「（アーク）」

特殊な契約を結んだ二者間で可能となる思念のみにおける会話、念話を行い、彼は自身の使い魔の名を呼ぶ。空気を媒体としないために、周囲に居る生徒たちにはその声が聞こえることは無い。傍から見たなら、熱心に話に耳を傾けているように見えるだろう。

「（はい）」

アークと呼ばれた、透明になっている彼の使い魔がその呼びかけに答えた。電子音的な響きを持った中性的な声、男とも女とも取れそうな声が脳内に響いた。ラスティの感じる限りにおいて、アークと呼ばれたその存在の気配が強くなる。

「（なあ、気づいてたか？ あいつ………ティアマツトさ、俺たちが来たとき、周りに誰も居なかったよな）」

「（確かにそうですね。ですがマスター、わざわざ後ろから気配を殺して話しかけるのはいかなものかと思うのですが………）」

「（まあいいじゃないか。そんな細かい事は気にする必要はないん

だぜ、これが」

「(いえいえ、そうではなく、話しかけるのはもう少しタイミングを見計らった方が驚いたのではないかと私は思うのです)」

そんなことを言うアークの口調は、かなり真剣なものである。どうやらアークは悪戯好きなんだろうなと、主であるラスティは認識した。

「(…………ともかくだ、俺には彼女がああやって孤立していたように見えたのが気になる。何か分かるか?)」

「(……………いえ)」

正直人のこういったことに関して聡いとは思っていなかったの、その答えに不満を持つことはなかった。アークがひどく残念そうな気配を感じさせるので、気にするなと彼なりに励ますと、とりあえずこの話題は保留することにした。

「(まあ、いいさ。きっとその内分かるだろう)」

そうして念話を切ると、始まった学院の説明に耳を傾けることにした。

????????????

式が終わり、皆が開放された気分でいると、教師のほうから通達があった。どうやら、今日は入学式ということで、まだこのパーティ形式の食事が続くらしい。この場で交流でも作って欲しいとでもいうのだろうか。だがそれは自由参加のようで、部屋に戻りたくない

った生徒は寮に向かってもいいそうだ。講堂から出たあたりに、自分たちに割り振られた寮の表が出ているらしい。

「そういえばさっき言ってたな……二人で一部屋か、どんな奴がルームメイトになるのか楽しみだぜ」

そう言ったラストィの言葉に反応して、同じテーブルでサンドイッチを食べていた少年が質問してきた。その服装から、恐らく平民の出だと思われる。

「え、ここの寮って二人一部屋なんですか？」

これはさっき話していた筈なのだが……そんなことを口には出さず、この（恐らく）ボーっとしていた少年にこのことについて説明することにした。

「……ああ、ここの寮は一応ベッドルームは個別に与えられるが、ベッドとタンスがあるだけの小さいスペースしか確保されてないんだ。机やら工房スペースやらは二人で共同で使用させることになっている。要は寝る意外は共同生活ってことだ。（自前で作れるなら）飯食ったり宿題やったりするのも、自然二人ですることになるんだろうな」

そう説明してやると、何故か急に不安げな表情になった。何故だろうかと思うと、直後に紡がれた言葉でその不安の理由が分かった。

「も、もし貴族と平民が同じ部屋になったら大丈夫なんですか？ その可能性を思うと少し不安なんですけども……」

「ああ、それなら大丈夫だ。ルームメイトは必ず貴族と平民とで組

ませられるらしいぞ？それに人員比でも一対一なんだから例外はないだろうな」

さも涼しげにそう語るラスティに、その少年はもう一つ疑問を投げかけた。

「あの……その何処が、大丈夫、なんですか？」

「いやほら、貴族（または平民）と一緒にいるかならないか分からないという不安が解消されただろう？この情報によって寮に行ったときの心構えが出来るってわけだな、これが」

そう言うラスティの顔は、妙に晴れやかだった。

生徒一人一人に与えられた寝室。

城の荘厳な外観とは裏腹に質素に落ち着いた色でまとめられているが、簡素でありながら丁寧に作りこまれた少数の家具が、この学院の資金の豊富さを物語っているように感じられた。その、自身に割り当てられたベッドの上。そこで仰向けになりラスティは天井を眺めている。

「……………夢じゃ、無いんだな」

真っ直ぐ突き上げられた拳、その甲を見つめながらそう言った。
そこには薄く光を放つ刻印が刻まれており、それがアークとの契約の証であることを示している。しばらくすると。その刻印は光を失い、後には普通の皮膚の色だけが残っている。

「…………アーク」

「はい」

ラストィの呼びかけに答えるその声は、先ほどとは違って高いものだった。ラストィが不思議に思っ確認しようとするより先に、いきなり空色の髪の少女が顔を覗き込んできた。

「つておおわぁ!?!? え!?! はい!?! 誰さお前!?! つ
うか何でさ!?!?」

突然現れた少女に、飛び上がり勢いよく後ずさる。ベッドに隣接した壁に勢いよく頭をぶつけてしまい、その場にうずくまる。そんな彼の様子に、少女は悪戯が成功したコードモのような表情で嬉々として口を開いた。

「フッフ、アークですよ、マスター。私に性別の概念は存在しません。ですから人型に化身するときは、このように外見を任意の性別に設定できるのです。もっとも、髪色と目の色は変えれないのですが……」

そういうながら、彼女はその姿を一瞬靄のようなもので包ませ、次の瞬間にはそこに少年が現れていた。そしてまた、その姿を少女のものに戻す。服装はゴシッククロリータとでも言うべきものだが、

生物学的に無いだろう髪色をみて納得したラスティは、ある事に思
い至った。

その考えに思い至った彼は、その少女を睨みつける。

「くっ……アーク、お前黙ってたな？ このタイミングで俺を驚
かせる為に黙ってやがったな」

「いえいえ、そんな事はありません。マスターでしたらこのことを
ご存知だと思いましたので」

それでも面白いな表情を浮かべているアークを見て、彼は咎める
ようにさらに強く睨んだが、そんなことを気にしない風にアークは
口を開いた。良くも悪くも似たもの同士の主従なのかもしれない。

「マスター、私を呼んだという事は何かあったのですか？」

「………まあ、いいさ。アーク、俺のバックの中から、ノー
ト一つ取ってくれ」

「……どれでもよろしいのでしょうか？」

「あ、悪い。背負ったときに背中になる方にあるやつだ。一番端の
やつだぞ？」

そう指示を出されたアークは、部屋の片隅にあるバッグ……？
？これは受付の係の生徒が運んでおいてくれたそうだ……？……？
？の中から、一冊のノートを取り出す。

「えっと、コレでしょうか……マスターの持っているノートは不思議
ですね。今までここまで綺麗なものは見たことが無いのですが……

…」

そう言いながらラスティにそれを手渡す。確かにそのノートは、使い込まれた形跡はあるものの、この世界で使われるどんな紙よりも白く、綺麗なものだ。そのことに、どこか自慢げに答えるラスティ。

「当たり前だ。俺が居たところは、こういう物を作り出すのが十八番だからな」

そのノートには、‘公用語’^{ニホンゴ}で題が記されていた。

設定資料・舞台となる物語・世界観

「……………自分で書いた’ノートを、こういうシチュエーションで見ることになる」と妙な気分になるな、これが」

そのノートを見つめる眼は、どこか郷愁を漂わせている。押し黙るアークに、ラスティは視線をやらずに語りかけた。

「‘世界を創ったのが神だ’というなら、人の手で書かれた物語の神はその人になるのだろうか’、か。懐かしいな。どこかでそんなことを聞いて、こうして少しずつ世界観を作りこんでいった物語が昨日のことのようだ。実際は…………どのくらいだったかな」

そうしてノートをめくっていく。そしてふと、あるページでその動きが止まった。ある部分を一心に見つめているその目の揺らぎに、傍らのアークは感情の動きを感じた。

「……………そっか」

何かに納得したように呟くラスティ。

その視線の先には、
‘水晶眼’、
そうかかれていた。

第四小節「もう慣れたと思っていたのに」(前書き)

ちょっと短めかもしれないです。

第四小節「もう慣れたと思っていたのに」

講堂からの拘束が解除された時点で、すぐにティアマットは寮に足を進めていた。顔を俯かせているせいで、その表情は見えない。ただ、何かに追われるように廊下を案内に沿って歩いていった。

大分広い間隔で、講堂とは違って生活観を感じられる落ち着いた褐色の廊下に並んだ扉の、目当ての番号が書かれた扉の前に立ち止まり、部屋に入る。

学生の身分に与えられるにはいささか豪華すぎるのではないかと思われる家具の数々。それが彼女を出迎えた。

そこは二人一部屋で割り振られている寮室で、ここには彼女??ティアマットの他に、ルームメイトがもう一人来る事になっていた。

だがそのもう一人はまだ来ていない。

未だ見ぬルームメイトを待つ事も無く、部屋の明かりをつけることもなく、彼女は部屋の奥に二つ並んだ扉の左側を開き、入った。

その一人一つ与えられていたその部屋??寝室は、最小限のスペースが確保されているだけの小さなものだった。だが飾り気の無いその部屋は、本来の広さよりも少しだけ、広く感じられた。

後ろ手に摘みを掴み、ゆっくりと捻る。重苦しい金属音をたて、それは鍵がかかったことを示した。その音を聞き届けると、その場に力なく座り込む。扉の前から動くこと無く、膝を抱え、頭をうずめる。

その髪が砂埃に汚れた靴にかかり汚れてしまいそうであることにも構わず、彼女はうずくまっていた。

備え付けられたベッドがすぐ側にあるにも関わらず、座ったままにいる。呼吸で僅かに上下する肩の動きが無ければ死んでいるのかと思えるほどに、今の彼女には生気が無かった。

一言、呟いた。

「……………紅い……………眼」

それは自身の右目のことなのだろう。その事に意識を向け、今日一日のことを、彼女は思い返す。寂しげに衣服の擦れる音が、暗い寝室に微かに響く。

「……………災厄……………」

すれ違う人々の様子を思い返す。自分の顔を見て、悲鳴をあげないまでも顔を強張らせ、近寄りたくないといわんばかりの生徒たち。その生徒たちは口々に似たような事を呟く。音は耳まで届かないものの、その唇の動きから、何と言っていたか読み取れてしまう。

‘災厄の目’、‘血塗られた目’、‘凶つ星の目’、みな、このようなものだった。それを思って、懐かしむように呟く。かすれた声は、その部屋に響かせるには余りにも弱い。

「もう、慣れたと思ってたんだけどな……………」

そう、そう思っていた。少なくともこれは今に始まった事ではなかったのだろう。世間において、紅い眼は不吉の象徴という意味合いを持っていた。

それを持つ人物は、場合によっては異端審問されかねないほど、紅い眼は大きな意味を持っていた。

それを、彼女は持っていた。

それに加え、彼女の眼は淡い光を放つように輝く。人に恐怖を抱

かせるように、淡く、暗く。魔術という神秘が存在するこの世界においても、その光景は異様であった。いや、そういう神秘が存在するからこそ、その眼が光る光景に畏怖してしまうのだろう。

そんな彼女は、恐らく人々に忌避されるのは日常茶飯事ですらあった筈。だから尚の事、この十数年間で慣れてしまったと思っていたのだ。

だがそれが、慣れではなかった事を思い知らされたのだ。

‘ラストイハルト・ジーン’。今日出会った、不思議な少年。行き成り中空から現れたと思うと、彼女の顔を見るなり突然恥ずかしい事を言っただけだ。

『綺麗な眼だな』

今思うと、思わず赤面してしまうような台詞。彼自身は聞かれていないと思うているようだが、彼女の読唇は容易にその唇の動きを読み取った。

綺麗などと、言われるのは初めてだった。汚らわしいや醜いなどの言葉を浴びせられることはあっても、この眼で賞賛を受けることは、生まれてからというものの初めてのことだった。

普通に接してくるその態度は、無知から来るものだと思っていた。見るからに異国の入。伝承が無くとも不思議では無い。だがそれは違うとも思えた。彼は目についての発言を避けていたのだ。それかなり意図的に。それがこの眼のことを知っていることを証明することでは無いかも知れないが、それでもそう思えた。

「やっぱり……」

どこかで期待していたのだろう、この眼を気にしないでいれる生活。ラストイという少年と出会ってから、それを期待する心が抑えきれなくなったのだろう。

でもだからこそ、周囲の人間が浴びせてくる言葉が辛かった。期待していたからこそ、今まで当然であった反応にショックを受けずにはいられなかった。

私は居てはいけないの？

私は生きてはいけないの？

私は……………

「……………悲しいな」

もうルームメイトと顔をあわせる勇気も残っていない。もしその相手に拒絶されたら、避けられたら、怖がられたら……………それを確かめることは出来なかった。

逃げるように閉じこもった部屋の中で、弱弱しくすすり泣く声が聞こえていた

第五小節「朝の出来事」

私立ハルバルト学院の新生でもある、ゲルト・A・Fの朝は早い。領土持ちの貴族の長男として育った彼だが、いつも決まった時間になるとひとりで起きて歩き出す。

「……ふああゝゝ、おはよう……」

だがそれは、必ずしも目覚めが良い事とは一致しない。覚束無い足取りと、定まらない目の焦点は、彼が寝ぼけている事を如実にあらわしていた。そしてその事実を引き立てるように、癖の強そうな金髪は寝癖で氾濫を起こしている。

「……みず……ください」

そんな彼が毎日することは、起き抜けに水を一杯飲むこと。そうすることで毎日の目覚めを快適なものにしていた。

「はい、どうぞ」

手渡されたガラス質のコップから伝わる水の冷気は、起きたばかりの意識を刺激した。その水を、一気に飲み下す。喉を刺激する冷えた水は、一気に覚醒を促した。今日は良い一日になりそうだと思しながら、コップを――――

（……あれ？）

ここに来てゲルトは、ようやくおかしい点に気付いた。

彼は今現在、学院の学生寮に居る。実家と違って侍従の居ないこの寮室には、このように水を持ってきて手渡してくれる人物など居るはずがないのだ。

では誰が、手渡してくれたのだろうか。

恐る恐る振り返ると。そこには淡いそらいろの少女が居た。だが、その体は半透明で、後ろの景色が透けて見えてはいたのだが――

(ひ！！！ゆ、ゆうれ……………)

そこで彼の目の前は暗くなった。

「つたく、お前という奴は……初日の朝から何やってやがる！！」

腕を組み、全身から怒気を滲ませながら立つラスティハルトの前には、正座をさせられて涙目になっているアークの姿があった。その頭には、二段アイスクリームが鎮座している。

「うう……すいません」

ことの始まりはこうだった。マスターにあらかじめ言われていた起床時間が近付いたところ、何やら寝ぼけた様子のゲルトが出てきたのだ。そして水を催促している。これは面白そうだと、わざわざアークは半透明の状態でゲルトに水を渡したのだ。そのアークを幽霊と勘違いした彼は卒倒。そして今に至る。

「ま、まあまあラスティさん。そこまで怒らなくても……」

そう言いながら彼を宥めようとする金髪碧眼の少年は、ラスティのルームメイトとなるゲルト・アルカシアス・フィニエンス。隣国

の武家貴族の出のようだが、そんなことを露にも感じさせない気性をしている。白のシャツに、茶のベストというそれなりに地味ないでたちも、彼の気性を表している。

「……そういや昨日、アークのこと教えるの忘れたまま寝ちまったからなあ……アークだけじゃなくってこっちにも落ち度はあった（ったくアーク。面白そうなことするなら映像記録化するか視覚共有で俺にも見せろよ）」

「……！？ ……うう、すいません。（それならマスター、いくらなんでも拳骨は無いじゃないですか！？）」

「まあとにかく、済まなかった、ゲルト（体面だ、体面）」

「いえ、大丈夫ですよ。彼女の方も反省しているようですし」

裏で交わされている会話のことなど知らず、アルカスにはこやかにその謝罪を受け入れる。その無垢ともいえる清々しさに、思わず内心冷や汗をラストイはかいていた。そんな彼の心情を知らず、アルカスはアークを見て言う。

「それにしても……アークさんは精霊ですよ？　すごいなあ、僕なんて一生かかっても契約する自信なんて無いのに、化身級の精霊と契約できてるなんてすごいです！」

確かに、精霊と契約するには精霊からの何かしらの条件を満たして認めてもらわなくてはならない。しかもその条件は酷く厳しく、世界に存在する最下位級の精霊ですら人の高位の術者でも認めてもらわれない場合が殆どなのだ。精霊と契約していることはある種のステータスにもなる。

「けしんきゅう？ ……マスター、何ですかそれは」

聞きなれない‘人側での精霊の区分’に、首をかしげるアーク。
その疑問に、ラスティは念話も交えて解説した。

「ああ、要は人基準での精霊の区分でな。人型に化身するまでの存在規模を持った精霊の事だ（お前から言う、第三階位あたりだ）」

そう言われたアークは、表情を強張らせる。途端に講義を返して来た。勿論、言っては拙いので念話でだが……

「（だ、第三階位！？ 私はそんな有象無象と一緒にされているのですか！？）」

「（落ち着けアーク。気持ちちは分かるが頼むからせめて口には出さないでくれよ？ とりあえず愚痴なら聞いてやるから。） まあでも、そんな凄いことでもないよ。コイツと契約できたのも、ある種の偶然だったしな」

「そうなんですか……」

キラキラと目を輝かせアークを見つめるその表情に、小動物の印象を受けた。同い年の筈なのに、何故か年下のように見えてしまう。もっとも、向こうもラスティを年上のように接してはいたのだが。

「まあとりあえず、飯でも食いに行こうぜ。今日はクラスの発表もあるからな。とっとと済ませちまおうぜ」

「はい」

そう話題を切り上げたラスティは、着替えを済ませて朝食に行く事にした。

（これ以上話していると、なんか拙そうだったしな。）

そんなラスティの心情を、ゲルトは最後まで知る事は無かった。

「おお、ここが食堂か」

清潔さと高級さが感じられる白を基調とした内装に迎えられたその空間に、ラスティが感嘆の声をあげている。シンプルに直線で構成されたその施設、その見慣れないその光景に、彼は息を漏らしているのだが……隣のゲルトはそうでも無いようなところを見ると……やはり彼はブルジョワジーな生活をおくっていたと思われた。

皆の胃袋を預かるここ食堂。料理長を筆頭に、数人の部下（弟子）で構成された料理人団たちにより切り盛りされている。係りの人が動き易いように、置かれた円卓テーブルの間隔は広く、また数も多いため、その床面積はかなりのものであった。

今日は新生たちが初めて朝食を食べにくるからだろうか、奥から忙しなく指示を出す声がしていた。いや、この学院の人数を考えるとそれは何時ものことなのかもしれない。

「総勢千五百人だっけ？ この学院の生徒数って」

自分達の食事の食券（料理は係りの人が持ってきてくれる）を持って数ある円卓テーブルの内一つに座り、そう疑問を呈したラスティに、向かいに座ったゲルトが答えた。

「はい、そうですね。全三学年、各学年十クラス、各学級五十人ですから。他の学園に比べると、まだまだ規模は小さいようですね」

そう軽く言っただけのけるゲルトに、苦笑いで返すラスティ。まあ確かにそうなんだろうなと答え、丁度来た食事に手をつけようとしたそのとき、背後から声をかける者がいた。

「お！　ダレかと思ったらゲルト坊じゃねえか！」

「あ、ハイスさん！　ハイスさんもこちらに入学してたんですか？」

どうやらゲルトと顔なじみの人物らしかった。振り返ってそのハイスと呼ばれた青年の方を振り返る。そこに立っていたその青年は、脱色され乱雑に切りそろえられた髪を無造作に下ろしていて、目に少し髪がかかっている。全体的に荒々しさを漂わせる雰囲気、ライダーズジャケットと思しき衣服に細身のパンツを履いているそのいでたちは、とてもゲルトの知り合いなどとは思えなかった。その意外な人物に、ラスティは思わず言葉を失う。

「おう。オレもどっか学院に行かなきゃなんねえ年ってんでどこにすっかなあって思ってただよ。こっちに面白そうなところがあったんでオヤジに頼みこんだのさ。まさかお前さんもこっちに來てるとはなあ」

「でも本音は、親元から離れたかったというのもあるんじゃないんですか？」

そう切り返すゲルトは、相変わらず丁寧な言葉使いのままだ。恐らく誰に対してもそうなのだろう。そして、少々置いてけぼりであ

ったラスティに気付いたゲルトが、ハイスに彼を紹介する。

「あ、そうだ。こちらは僕と同じルームになったラスティハルト・ジーンさんです」

「ラスティって呼んでくれ」

そう言われてラスティはハイスに軽く会釈をする。こちらをみたハイスは、機嫌良さげに答えた。

「おう！ オレはハイス・グイリティ・シェーネスヴェッターってんだ。オレのことも普通に呼び捨てで……あと堅っ苦しいのは嫌いなんで碎けた調子でよろしくな。コイツにもよく言ってたんだが、どうにも直んねんだよなあ。あ、隣いいか？」

そう碎けた調子を求めてくるハイスに、ラスティは好感を持つ。身なりはアレだが、恐らく優しい人柄なのだろうと思え、ラスティは彼が求めたように接した。

「ああ、いいよ。確かにゲルトの口調は少々気になってたんだが……なるほど……ゲルトは誰に対してもそうだったのか」

ラスティが碎けた調子で話してくれたことに好感を持ったらしく、そのことにハイスが反応を示す。彼とは仲良くなれそうだと、その時ラスティは内心で思った。

「お！ 話が分かるやつでよかったぜ！ オレの周りのヤツはよ、オレが碎けた調子で話そうぜって言ってもなかなかそうしてくんなくてよお……まあオレんちが‘シェーネスヴェッター’だってのはわかるんだが、オレみたいな放蕩息子にまでへこへこしやがるんだ。家族で付き合いもあったゲルトの家で、フイエンスコイツにはどうにか碎

けさせようと思ったらさ……………」

今まで饒舌に話していたその口調がとまる。そして言葉を紡ぐようにして固まった表情が、少しずつ青ざめていった。その表情を維持したまま、ゆっくりとゲルトに向かい合い恐る恐る口を開いた。

「……………な、なあゲルトよお……………おまえさんが居るってことあ……………まさか、あの女^{クソアマ}も居やがるのk……………」

その言葉は最後まで続かなかった。またもや背後からかけられた声でハイスがフリーズしてしまったからである。

「あら？ 私がどうかしましたか？」

その声から、女性であることが推測できた。だがその声は不気味なまでに感情を抑えられている。その裏に煮えたぎる怒りを感じた更にハイスが青ざめていき、隣にいるラスティには彼の顔に冷や汗が流れるのをはつきりと確認できた。部外者であるラスティですら、その圧力に屈しそうであるのだから、直接それに向けられたハイスは一体何を感じているのであろう。……………少なくとも心地の良いものではないことは確かだ。

「それはともかく、‘兄さん’、隣、失礼します」

そう言いながら、回り込んでゲルトの隣に座り込んだ少女を見て、ラスティは咄然とした。周囲に気を配ってみると、その場の大多数が彼女に視線を向けていたようであった。

確かに、彼女の容姿を見たら目を奪われずにはいられないだろう。……その彼女の容姿は、周囲の興味を引くのに十二分の原因があった。それがゲルトと血縁……しかも二親等だとは誰も思うまい。

「クッ………テメエ、まさかここに来てるとはな………」

「あら？ 兄さんを見た時に悟りませんでしたの？ ‘双子の妹’である私が、兄と同じ学院に入学することは当然でありましょう？」

‘エメラルド’、そう形容すべきであった。生物学を完全に無視した宝石光沢を持つ明るい緑の髪を、恐らく昨日会ったティアマツトほどに長く伸ばし、それを髪留めでまとめている。その尋常とは思えない髪色は、しかし人工では無いと確信できる独特の光沢を放っていた。黒に濃緑色の入った男装風の上下は、彼女の引き立てるように存在していた。

金髪のゲルトと、エメラルドの彼女とは血縁だとは思えないという見解が周囲を占めていた。ただ、ラスティだけはそのことに納得をしていた。

「まさか、‘もう一人’居たなんてな」

そういったラスティの言葉が聞こえてか否か、その存在に気付くと、‘兄’と呼んだゲルトに向かって質問した。先ほどの口調はなりをひそめている。

「兄さん？ こちらの方は何方？」

「あ、うん。彼は僕のルームメイトのラスティハルト・ジーンさん。いい人だよ」

「そうですか。………初めまして、ラスティハルトさん。兄が世話になっていきます。私はゲルト・A・フィニエンスの双子の妹のポラリス・I・フィニエンスと申します」

非常に丁寧な物腰で会釈をするポラリスと名乗った少女。その容姿への驚きがまだ冷めていなかったが、ラスティは固まることなく対応した。

正直、ゲルトの数倍、武家としての雰囲気が出ている。威圧感と言うほどでもないが、独特な雰囲気を持っていた。

「今紹介してもらったがラスティハルト・ジーン。俺の名前はちょっと長いんでできればラスティって呼んでもらえると有難い」

ただそう呼んでくれと言っただけでは呼んでくれそうになかったので、どこと無くフルネームで言われるのが好きではないというニュアンスにとれるように、ラスティは説明した。

「そうですか。わかりました。ところで初対面でいきなり失礼とは思いますが、ラスティさん。貴方、何か、連れていらっしゃるのでしょうか？」

その発言に、別の意味で驚愕するラスティと、‘アーク’。事情の分かるゲルトは感心した様子で、ハイスの方は首を傾げている。

「うわぁ、ポラリス、流石だなぁ……………」

「あ？　おい、ちょっと待ってくれ、オレは事情が掴めないんだが」

「まさかとは思ったが……………」

三者三様の反応を示す彼らに首を傾げるポラリス。そんな彼女に、空気を読んだと思われるゲルトが答えた。

「その質問は、後で時間があつたら説明するよ。ほら、ポラリス、ルームメイトを待たせてるんだろう？」

質問に答えてくれなかったことに若干の不満の色を覗かせていたが、納得したように頷いて、席を立った。

「まあ、分かりましたわ。でしたら兄さん。今日の夕食の時にでもまた」

流石に兄妹には普通の口調で話すのだろう。それでも育ちの良さを感じさせる口調だが、彼女はそういつて待たせているルームメイトの元に帰って行った。それを見届けて、緊張が解けたようにハイスが崩れ落ちた。

「っはあゝ。やっと行つたぜ。………ったく、苦手なんだよあの女………」

そのことは直接彼の口から言われずとも察することができた。あえて指摘することは無かったが、それよりも今は優先すべきことが彼らにはあった。

「つて、こうしてる間にも、貴重な飯の時間が!？」

そんなラスティの深刻そうな発言を受けて、他二人は振り返って食堂に備え付けられた時計を見た。彼らにはもう殆ど時間が残されていない。

「マ、マズイぞ………」

「これは急がないといけませんね。」

もうすでにラスティは食事を掻き込み始めていた。そんな彼に合わせるように、二人も食事を掻き込み始める。

喉に詰まりそうになった肉を水で流し込みながら、ゲルトはふと思った。

「（そういえば、きっとポラリスは食事をすませてから此処に来たんだろうな）」

それから彼らが食べ終わったのは、教室への移動完了と決められた時間の、約四分前のことだった。

第六小節「それは遅ればせの」

朝日の差し込む寝室に、けたたましい金属音が鳴り響く。思わず耳を塞ぎたくなってしまうような音量の中、ベッドの上で毛布に包まっていた少女は、その中からゆっくりと音源に向け手を伸ばす。その中から覗く髪は、朝日を受けて鈍銀に輝いている。

「うう、あともう少し……って!!」

勢いよく意識を覚醒させ、飛び跳ねるように立ち上がる。同時に跳ね上がった毛布が、軽い音をたてて床に落下した。着込んだネグリジェはズレ、肩口までの長さのアッシュブロンドが、所々寝癖で跳ねている。

「拙い、まずい、マズイ!」

驚掴んだその据え置きの時計が示した時刻は、朝食の終了まで残り十五分。その事実には、彼女は必死に寝起きの頭脳を回転させた。着替えを高速で済ませ、寝癖を手製の道具で直し、校章をつける。ここまでおよそ三分。

「食堂まで、たぶん、十分……間に合ええええ!!」

年頃の少女らしからぬ雄たけびをあげながら、誰も居ない寮を後にする。

色の抑えられたステンドグラスから、角度の浅い朝の日差しが差し込んでいる。硬質な質感の垂直様式の廊下に、わずかに柔らかさが演出された。その中に、黒い髪が揺れている。

「ラストイハルト・ジーン……」

その少女ティアマツトは、昨日であった青年の名を呟いた。何の偶然があつてか、彼女は彼と同じクラスとなっていたのだ。

人が集まる前に手早く朝食を済ませた彼女は、人気の無い自身のクラス……一年四組に向かった。それが彼女に割り当てられた居場所だった。

学級エリアに近づくにつれ、建築様式が変化してくる。足音が変化したことに気付くまで彼女はそのことに意識が向くことは無かったが、その音が変わった瞬間、彼女は足元に目を向けた。

「木？」

その建造物には木材が使われていた。普通、ここまでの規模の建造物は金属や石材でつくられる。扉などは話は別だが、このような大規模の建築では木材が使われることは有り得なかった。普通は強度に限界が来てしまうからである。

彼女の乏しい知識ではその問題への解答を導き出すことは出来なかった。保留することにした。もとより関係の無いことだからと。

ごく普通（中央エリアに比べだが）の内装の教室には、五席一列で十列の机たちが並んでいる。横長の空間の部屋の前方には、教壇と思われるものがあり、その後ろには濃緑色の壁が広がっている。

そこには大きく白い文字が書かれていた。

「来た奴から自由に席に座っている……BY担任」

その文字を見て、ティアマツトは若干憂鬱な気分になる。

????????????????????????????????????
????????????????????????????????????

結論からいくと、間に合わなかった。もてる体力の全てを尽くし、アークに記憶させた見取り図から最短ルートを割り出し、果てには少々魔術の恩恵にもあずかっておきながら、三人は間に合うことがなかった。

彼らの教室となるところの前には、彼らの前に立ちふさがるように男性が立ちふさがっていた。恐らく担任教師だと思われる。

「ほう……………お前等……………初日から遅刻とはいい度胸しているじゃないか。」

焦げた赤茶の髪を後ろに流し、その力の籠った視線とローブを纏った上からでも分かる鍛え上げられた肉体が、彼らを威圧した。その威圧に耐えかねたように、ハイスが弁明を試みる。

「ち、違うんです、先生!! 緑のクソあ——」

その言葉は最後まで続かなかった。突如飛来した銀色の何かが、彼の後頭部に直撃したからである。

そのまま崩れ落ちるハイス。周囲の三人は何が起こったのか理解できず、言葉を失う。

「い、一体何が……」

その時アークから、視覚共有のアクセスがラスティにはいった。その脳内には、彼らの隣の教室の扉が、少しだけ開いている映像が映っていた。アークが興奮気味に解説する。

「席から立つことなく、風の精密制御・計算により風に乗せたシルバーブリットを視認していない対象に直撃させる……………これをできるのが精霊にでもどれだけいることか……………」

どうやら、ハイスの近くに転がっている銀色の物体は、ポラリスによつて放たれたものようだった。ラスティが隣を見てみると、ゲルトの引きつった笑いが見える。どうやら彼は犯人はわかつているらしい。………なるほど、ハイスが彼女を苦手にしているのも分かる。クソアマと言いかけた果てにこうなったことには同情しないが。

むしろ、このことで話が有耶無耶になったことに感謝をしたいぐらいであった。

.....

教師が一時不在になったからだろう、教室内に居た生徒たちは思
い思いにおしゃべりを始めていた。その方が遅れたことに注目され
すぎないからいいかなと、ラスティは内心想う。そして教師に連れ
られて、彼らは教室の後ろから入った。そして内装をみたラスティ
が、何かに気付いたように壁に手を一瞬あてた。

「へえ……………これはすごいな」

そう、ラスティはそう呟いた。その明るい色目の木の壁を興味深そうに見るラスティの様子に気付いた教師が、彼に話しかける。183cmある彼の身長より大分高い位置から、その視線は見下ろしていた。

「お、ラスティハルト。お前はこれがわかるのか？」

「はい。針葉樹の木材で、表層に薬品が塗られず簡単な魔法処理のみでこの明るい色を保つということは、高濃度の空气中魔力で育ったマツの類だと……………それもここまで白が強いということは北方王^{ルヘイム}領樹林からの輸送品ですね。いくら対魔力の強い木材だからって、ここまで使うと経費は馬鹿にならなかったでしょうに……………」

そう言う彼の様子を、教師は感心した様子で、ゲルトとハイスは啞然として、ティアマツトにだけ見えていたアークは誇らしげにそれぞれみていた。そんな彼らの様子には構わず、彼は続ける。その様子から、何か解析をしている風だとは見て取れてはいた。

「……………それに、分かりにくいけど何か奇妙な工程がある……………六角形？ ああ、‘ハニカム構造’か！ 一つ一つにルーンが……十二の二乗、百四十四文字周期で同じ文字列で刻まれていますね、これは。最初の六文字で分かります。有名な硬化刻印ですね。……………あたってます……………か？」

振り返ったラスティの視界には、彼を見つめて啞然としている生徒たちの姿が広がっていた。いつの間にか喧騒も止んでいる。

やってしまったというような表情をする彼に、面白いモノを見た
というような教師が沈黙を破った。

「正解だ、ラストイハルト・ジーン。驚いたな。まさか初見でこの
構造を見抜くなんてな……大抵のやつはここに木材が使われる理
由すら分らずに聞きに来るやつまで居るんだぞ？」

その言葉に、困ったよう、恥ずかしさを隠すように彼は苦笑いで
返す。まあとりあえず、席に座りましようと言ってその場を誤魔化
す。どうも、意外と恥ずかしがりやな面があるようだった。

そしてそこから逃げるように空いている席に向かって歩き、四席
空いていた席の内の一に腰を落ち着ける。そんな彼の行動にも、
周囲の人間は驚いていたようだった。

それは、窓側から二番目の列の一番後ろ。最後まで空くものと思
われていた席だった。

第七小節「空くはずだったそこは」

自身の隣に座った‘彼’のことが気になってしまふ。視線を外そうにもついつい視線を向けてしまふ……そんな状態にティアマツト・マキナは陥っていた。

????????

ティアマツトは教室に来るなり最も後ろの窓側の席に座り、何かをする事もなく、外の景色に眼を向けていた。碧の葉で遠くの視界を埋め尽くす木々と、やや風のあるせいか流れが速く見える雲が、何となく春を感じさせる。

後から少しづつ来る生徒たちは、各々好きな場所に席をとり、以前からの友人と思われる相手や、ルームメイト等と話始める。ティアマツトに意識を向ける者は居なかった。

それを寂しいなどとは思わない。寧ろ感心を向けなくてくれとさえ思う。自身に向けられる、恐怖と侮蔑の視線よりならば、無視であつたほうがよほど気が楽だと思えた。

だからだろうか。ラストイハルトと名乗った彼のことが一瞬頭を過ぎった。今まで生きてきて、この眼のことを悪く言わないで接してきた人間は居ないといえそうではない。だが‘綺麗’などと言つた人物は一人も居なかった。

眼を気にするなという事はあつても、あえて意図的にその話題を避けたのもある意味新鮮だった。打算も下心も無く、ただ知り合っ

たからと、そんな理由で話しかけてきた。
そして何故なのか、そんな彼の行動を疑う気持ちには、なれなかった。

唯一、興味が持てたと言っても過言ではない。

私の眼のことに気付いた人たちは、意図的に視線をそむけて来る。
私の近くの席だって、しぶしぶといった感じで、恐る恐るといった
ようすで、そうして不必要なほどに恐れながら席に着くのだ。

未だ、私の席の隣には誰も居ない。

あの人だったら、ここに座ってくれるのかな？

何でも無い風なようすで、よろしくと、そう言ってくれるのかな？

「ううん、止めておこう………」

そうして、そんな思考を断ち切った。

そうでなかった時に、悲しさで潰れてしまいそうだから。

????????????????????
????????????

そう、期待していなかったと言えば嘘になる。だから余計、その
ことが現実になって彼女は動揺していた。

「よ、同じクラスみたいだな。よろしく」

「え………うん」

そういつて極当たり前のように私の隣に座り、先ほど饒舌に木材
について解説していたことを後悔しているように頭を抱え始めた彼

に、素っ気無い返事しか返せなかった自身を少し悔やんだ。そのことで気を悪くする人では無いことは昨日のことであって、どうしてか、気になってしまった。返事を気にしたことなど初めてだった。

「くううう……おい、ゲルト、ハイス、何してるんだ。こっち来いよ」

そう言われたゲルトとハイスは、ラストイに促されるように、それぞれ彼の前と隣に座った。残り一つ、ティアマットの前の席を残して埋まった。それを見て、教師が口を開く。

「あ？　なんだ、まだ誰かきてん」

その時勢いよく、前の方の扉が開いた。

「すみません！！　おくれましたあ！！！！」

そこに勢いよく、銀髪青眼……このあたりでは比較的少ない……で、快活な印象を与える浅黒い肌の少女が飛び込んで来た。

????????????????????????????????????
????????????

ひとまず収まった朝の騒動。教師の男性が教団に立ち、皆が静まる。この時ようやく彼は、周辺に気を配る余裕ができた。

「やっぱ木はいいよなあ。前を思い出す」

木材で囲まれたその空間、その色合いに、ラストイは郷愁を感じていた。彼が知っている‘ソレ’よりははるかに広いが、それでも思い出さずには居られなかったようだ。

そんな感傷に浸っているうちに、教壇にたった教師は黒板に文字を書き出していた。

Alba・Archinam

「そういえばまだ、オレの名前を話してなかったな。　オレの名前はアルバ、アルバ・アーキナムだ」

名前を書き終えた教師？？？アルバ先生は、身を翻す。先ほどは分からなかったが、少々タレ気味の眼が可愛げに見えてしまう、が、少々強面の先生だった。

面倒くさいという心情が伺えるその表情に違わず、名前だけの自己紹介で終わらせる。とっととやることやっちゃおうと、そう意気込んで生徒達の方に向き直った。そして……

「さて、まず最初にやることだが……大体のやつは察していると思う。まずは委員長を決めるぞ！」

その瞬間。静かだったクラスがざわめきはじめる。まだお互いの自己紹介すらしていないこの状況下で委員長を決めようというアルバ先生の発言に、否定的にはないが驚いた。

「（まで、普通……こんな早いっけ？　まずは教科説明とかじゃないのか？　自己紹介とかは無しか？）」

そう、妙に動揺し始めたラスティを置いていくように、委員長を決定する話し合いが行われた。そんな空気に、どこも無く良くないことが訪れるような気配を感じた。

「自薦、他薦、どっちでもいいぞ？ オレとしては、早く決まるなら誰でもいい」

そうアルバ先生が言い放つと同時に、ハイスが勢いよく手を挙げる。そんな彼の行動に方眉を吊り上げた先生だったが、気にする事無く指名した。

発言権の与えられた彼は、よく通る声でこう発言。

「オレはラスティハルトを推薦します！！」

「いや、なんでさあ！？」

そんな本人の講義の声も軽く流され、その理由をハイスは問われる。

「彼は、この中の誰もが気付かなかったこの建物のすごさを見抜いてました。魔術だけではありませんが、ここがそういったものを中心に学ぶ以上、その実力の一部を披露した彼を推薦したいと思います。またこのクラスは、それぞれの人間性を考慮できるほどにお互いをよく知っているということもないので、実力の面からの判断とさせていただきました」

その不良ともとれる容姿からは思いもよらないまともな発言。やはり貴族という事でそれなりの教育を受けてきたのだろう。普段もそうしていれば両親に怒られることも無いでしょうにというゲルトの呟きが聞こえる。

そんな彼の自信に満ちた発言に、何故か周囲も納得したかのよう

な雰囲気を見せ始めた。やはり、先ほどのラスティの行動が原因の一つでもあるのだろう。

そうして、彼の発言が終わる。彼は、何かをやり遂げたかのような清々しい笑顔を浮かべていた。そんなさわやかな雰囲気のまま、ラスティに向かって小さな声で告げる。これから起こることが楽しみで仕方が無いという風な様子だ。

「いやあ、アンタが委員長の方が面白いって思ってたよお」

発言が終了するなり小さな声でそう言ってくる彼は、周囲の空気も、ラスティが委員長の方向で纏まってきているようでもあった。

やはり、彼が先ほど披露した知識の断片と、その後のハイスの発言が彼らを納得させたそうだ。

もう逃れようがなさそうな事態に陥ったことに、机に突っ伏すラスティ。そんな彼に、アークは嬉しそうな声色で念話をつなげて来た。

「（凄いじゃないですか、マスター！ クラスのリーダーですよ！）」

そんなアークに一言言う気力も、この時のラスティには残されていなかった・・・ただ突っ伏したまま呻くだけである。

第八小節「ころろふくらませ」

短い十分の休憩の時間。

教室の窓側から二列目の一番後ろの席、ラストイハルトの席となったそこには、本人が突っ伏していた。その体勢のまま、呻くように呟く。

「くそ、何故だ、何故こんなことに……………」

結局のところ、彼の必死の抵抗もむなしく、彼は満場一致で委員長にされてしまった。半ば無理矢理の形で引き受けさせられたが、とりあえず諦めてその職をこなすことにしようだ。

彼の前の席に座っているゲルトが、後ろに振り返って恨めしげに彼を見ている。

「だからって僕を巻き込むことは無いと思います。」

その次に決めることになった副委員長の役職は、選抜の権限を与えられたラストイが即座にゲルトを推薦していた。何でハイスじゃないのかとゲルトに問われたが、働いてくれそうにないからと一蹴、否応なしにさせられることとなった。

そんな彼らに、ラストイの右隣に座るハイスはまるで自分にはまったく関係の無いことのように発言をした。

「ま、諦めろや、やばくなったらオレも手伝ってやるからよ?」

「……………お願いしますよ?」

だが元はいえれば彼が発端なのだと、そう恨めしげな視線をハイ

スに移したのをラスティはちらりと見ながら思った。

謀らずとも委員長と副委員長となった生徒は同じ寮室の生徒同士である。これなら都合がいいときもあるのだろうなと……今更と
いうものではあったが……。

そんな他愛も無い会話をしているうちに、鐘がなり、アルバ先生が入ってきた。授業の時間である。

「起立！」

号令をするのは、ここでは委員長の仕事であつた。鐘が鳴ると同時に起き上がったラスティが、元氣良く声を上げるとそれにあわせて皆は立ち上がった。

「礼!! 着席」

????????????????????
????????

「さて、今日やることだが、本格的な授業はまだやらない。まあ知
つてゐる奴が大半だと思うが、今日はここでお前等がこれから勉強し
ていくこと……その中の魔術についてから話させてもらう。」

そうアルバ先生が告げると、赤褐色のローブの懷から四色の鉱物
を取り出し、皆に掲げて見せた。透き通ったその色合いは、どこか
宝石を思わせる。

「『魔石』……まあ皆まで言わんでもわかるだろうが、コイツは
魔術の使用に欠かせない重要な触媒だな」

そしてわずかに唇を動かし、何事かを告げる、すると教壇の上に、

魔方陣らしき図形が現れた。その上に、手から離れた四色の、魔石、達が下方から力をうけたかのように浮かびあがる。

「赤、」

「青、」

「黄、」

「緑、」

告げた言葉の順に、それぞれの魔石たちが光を放った。それをじっと見つめる生徒達に、先生は説明を続けた。

「これらはそれぞれ、火、水、土、風、を象徴すると言われている。魔術はこれら魔石なしには発現できない。まあ、例外はあるんだがな。」

「これら魔術……が生み出す、幻想、……これは様々な用途で使われているな。魔術は才能に左右されることはあっても、誰にも使用は可能な力だ。だがこれは、それなりに学が無ければならない。お前らには、地理歴史といったもののほかに、こういった魔術のことについても学んでもらう。」

ゆくゆくは国を支える人材としてな、と最後に先生は付け足した。それと同時に、教壇の上の陣は消え、魔石が先生の手のひらの上に落ちる。

「（お、アルバ先生、手袋してるぜ）」

魔石が落ちた手のひらには、手袋がはめられていることに今更ながらラスティは気付いた。そしてそのことに気が付くと同時に、目だけで左に視線を向ける。

その視線の先には、頬杖を着きながらもしっかりと話を聞いているティアマトの姿があった。そしてその彼女の手にも、黒い手袋がはめられている。

「（そういえば、ティアマトも手袋してたんだもんな。……なんだだろう？）」

そんな一瞬の疑問をとりあえず保留させておき、視線を教壇に戻した。

「魔術において大切な要素として、魔石・式・詠語の三つが代表的なものとして挙げられるな。

魔石は、それ自体が魔術の力の根源となっているが、こいつは石のカットの仕方や加工の手順の違いで違った性質を見せることもある。同じ魔術でも、魔石の加工によっては違ったものとなることがあるぐらいだ。こういった事柄を、‘魔石工学’として学んでもらう」

「式、A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z。これらの文字と図形の組み合わせで魔術の骨組みにもなる部分だ。これらのことを、‘式学’として学んでもらう」

「詠語、精霊たちの言葉とされるオレたちとはまるで毛色が違う言葉で、魔術の詠唱はこいつ無しには出来ない。そのまま、‘詠語学’」

「あと、魔術実践については、一年生の内は基本的なものを全属性………二年後半と三年では、選択制でどれか1、2つ学んでもらうことにもなってる」

「あと、選択制で強制では無い教科もあるが……………面倒だな……………」

そう呟きながらも、しっかりと説明をするアルバ先生だった。それを聞いているうちに、気分が徐々に高揚してくるようにラスティは思えた。未知の生活に心を膨らませ、彼は鐘が鳴るまで熱心に聞き入っていた。

・ ・ ・ ・ ・

まだ初日の彼らの日程は、まだそれほど大変だとは言えない。各教科については簡単すぎる説明があっただけで、課題すらまだ出されていない。

午後からは校内見学の時間として、生徒一人一人にパンフレットのようなものが渡され、学院内を自主的に見学することとなっている。自分たちのクラブ活動の宣伝が許されていることもあり、上級生たちはこぞって下級生たちの勧誘に乗り出している。

アークに校内の構造を全て記録させているため、既に構造の把握をする必要のないラスティは、どう行動をしようか決めかねていた。

「どうすっかなあ……………勧誘の先輩たちに絡まれてあんま色々見て回れなさそうだし……………」

「どうするのですか？ 確かに構造自体は問題ないでしょうが、そ

れだけでは分からない情報というものもあるのですよ?」

すでに皆が教室を出払っていたため、教室には彼らのほかには誰も居ない。そのためアークは姿を現すことはしないまでも、肉声（?）で会話をしていた。退屈そうに頬杖をつき、パンフレットを眠そうな目で見ているラスティにアークは進言する。今のアークは少年の姿でいるようだ。声に若干の変化が見られる。

アークの進言にも興味なさ気な彼は、探索などよりもしたいことがあった。

「なあ、アークよお……：そういえば俺、昨日ずっとノート読んであんまり寝てなかったんだよな……：さっきまでは興奮で^{アドレナリン}どうにかなってたが……：流石に眠くなってきた。何処か昼寝によさそうなどころないか?」

どうやら睡眠欲が最優先らしい。仕方なくアークは、言われたとおりに場所を提案する。

「本棟の屋上などはどうでしょう? あそこなら人は来ないのでと思います」

「お、そいつはいい。確かにあそこなら人は来ないな……：よし、直行するぞ」

先ほどのまでの無気力な様子とは打って変わって意気込んだ表情を見せた彼は、意気揚々と歩き出す。姿を現さないアークの、そんなに元気があるのなら……：という呟きは、先にすすんでしまった主には聞こえていなかった。

??

本棟屋上。敷地内の建造物の中で最も高い本棟の屋上は、それに広い空間となっている。なんの装飾のされていない殺風景な様相に、予備の資材と思しきものが置かれているその様子からは、屋根のない物置のようなものなのだろうか思われる。

乾燥した気候の空気は春先の強めの風と相まって肌に冷たい感触をもたらす。防風にと簡易結界をわざわざ張ってくれるアークのような存在が居なければ、誰も好き好んでこのような場所には来ないだろう。

そんな睡眠には持って来いの環境に気を良くしたラスティは、それに適した寝場所を探し始める。

「それにしてもマスター。こんなに食事を買って何をするつもりなのですか？」

誰も来ることは無いだろうということで、アークは実体化している。少年の姿のその精霊の手には、大きく膨らんだ袋がさげられていた。

ここに来るということで、後で夕食はゲルトとハイスでも呼んでここで食おうと思えば立ったらしいラスティが、あらかじめ買い込んだものだった。

「何って……あいつ等呼んで此処で飯食おうってただけって言うたろ？ まあ、どうも貴族っぽいあの微妙に堅苦しい雰囲気ではなんか飯が味わえなくて……というのが本音だ」

今朝のあの慌しい食事に堅苦しいも何もあったものでは無いのはと、つい突っ込みかけたアークだったが、あれが普通に食事を取っていたならばそう（堅苦しく）なったのかと思ひ至り、言う事を変えた。

「あのお二人が断るとは思わなかったのですか？」

「その時はその時、俺とお前で食い尽くすのさ」

「確かに私は、必要が無いといえど食べる事はできますが……」

とほど堅苦しい会話の少ない貴族然とした食事が嫌いらしい。暇を見ては念話で交信してきていた今日一日の主の様子を見て思ったが、どうやら彼は話すという事が好きなようだった。

そうこうしているうちに、ラストイは寢床に最適な場所を探し出す。そこに寝そべると、結界を維持してくれているアークに向けて言った。その視線は流れる雲を見ている。

「頃合になったら起こしてくれ」

そういつてすぐに目を閉じる。睡眠を欲していたその意識は、了解の返事をするアークの声を遠くに聞き届けると、すぐに夢の世界に落ちていった。

Ark's memo「登場人物」

傍らで寝ている自身の主を柔らかな視線で見守りながら、アークはその隣に腰をおろしていた。その髪の色は空と重なるようで、アークの精霊としての性質を物語っているようでもあった。

ラストイを見つめたまま、優しい声が発せられる。

「全く……マスターにも困ったものです。本当に自身に正直なのですから」

そういいながらも、表情は微笑んだままであった。そんなアークの様子は、主に寄せる愛情にも近い忠誠を伺わせるのに十分だった。主から視線を外し、主が直前まで見上げていた空を見る。その心は、彼と出会った時に飛んでいた。

まだ彼と契約してからの期間は二日でしか無い。

長い付き合いのように話し、慣れたようにアークを使役するラストイであったが、その関係はまだつながれたばかりでしか無い。

ティアマットと別れ町に向かい歩んでいた彼の前に姿を現し、契約を求めたのだ。その時の台詞を、イントネーションも完璧に覚えている。

『……………貴方は、もしか……………?』

『俺か? ……………俺の名前はLastiehalt・Xeen,
ラストイハルト

（‘ジーン’）だ』

出会い頭の短い質問と、答えられた名前を聞いて化身の身が震わされたのは今でもはっきりと覚えていた。

‘記録’、する必要を感じないほどに、その時の情景は鮮明に‘記憶’に残っている。

直後に求められた契約に、戸惑いながらも何の疑問を口にするこ
と無く答えるように差し出された手。

震えそうな化身の身を抑え、その手を握った自分。
触れるだけで流れ込むその存在の有り様。

存在規模は人の範疇でありながら、微細なソレを全く感じさせない。
い。

精霊の我が身が直感的に感じた、その甘美な有り様に……

……惚れ、憧れ、敬い……気付けば完全な主従契約を結んでいた。
いた。

それが済んだ時に、少し驚いた表情をしていた主となった彼。

そんな回想に浸っているうちに、自身の口元が笑っているのを感じた。

だがそれを可笑しいとは思わない。

世界種と呼ばれる精霊のその中でも上位に位置する自身が、実際にその存在に触れ、感じ、認めた主を想い、仕えることを可笑しいとは思わない。

「そういえば……‘メモ’なるものをマスターは書いていましたね」

回想に浸っていたアークが記憶の中で気になったのが、主が書い

ていた自身に起こった出来事やちよつとした事を書き込むだけのメモ。何を書いているかはアークは見えていない（見せて欲しいと言えば見せてくれそうなのだが）が、何かを書き記すという行為を真似してみたいともアークは思った。

「ですが……何を書きましょうか………」

何処から取り出したか、手帳サイズのノートと筆記用具をいつの間にか手に握っていたアークだったが、いざ書こうというときに何を書こうか思い浮かばない。

「……そうだ、今までマスターが出会った方々で、これから色々関わってくるでしょう人物の‘メモ’を書くことにしましょう！」

そう意気込んだアークは、なれない手書きに必死になりながらメモを書き始めた。

『アークのメモ・人物』

ラストイハルト
「Lastiehalt・Xeen」
シーン

・敬愛する私のマスター。黒い髪に黒い目で、細身で背の高い自慢の主です！！

・誰かと会話するのが好きなようで、暇になれば私に念話をよく繋いできます。クラスの委員長に推薦されたそうですが、マスターならば出来ると信じています、頑張ってください！

・まだであって二日目なので、まだマスターのことは詳しく知りませんが、その人生一生御仕えするでしょう私は、少しずつマスターの事を知って行きたいと思います。

・片方が紅い眼のティアマツトという少女のことを気にかけているようですが、何故なのかはまだ分かりません。恋愛感情では無いようですが、気になる次第です。

・XEENを名乗っていらっしゃるのですが、これでは世界種たちに自分のことをばらしているようなものだと理解しているのでしょうか？ ひよっとすると分かってないかもしれません。

・この書き方は箇条書きというそうです（あれ？ ひよっとするとこれは書かなくても良かったかも知れません）

・名前の意味は教えていただけませんでした

「ティアマツトTi a m a t・マキナM a x i n a」

・ここに来たマスターが一番最初に出会った少女だそうです。羨ましいです。黒い髪はマスターとおそろいです。羨ましいです。私ももう少し化身が上手ければ、マスターとおそろいの髪色に出来たのかもしれませんが・・・今ほどこれを恨んだことはありません。もう一度言います……いや書きます、羨ましいです。

・ 紅い眼は魔石のように輝く時があるのですが、これは何故なのでしょう？ マスターは知っているようですが、まだ私には教えて下さいません。

・ どうやら他の皆様には避けられているようです。マスター以外の方と言葉を交わしているのを見たことはありません。眼と関係があるようです。

・ 私が化身していないのにも関わらず存在に気付きました。かなりのつわものなのでしょう。あるいは特殊な事情があるのでしょうか。

・ 名前は、どうやらどこかの神話に出てくる女神さんのものと同じらしいです。きっとそれに意味があるのでしょう。

「Gel^{ゲルト}d・Arc^{アルカシアス}asius・Fin^{フィニエンス}iens」

・ マスターと一緒にのルームになった（消された跡があるが、よく見ると、‘虐め甲斐が’と書かれている）可愛げのある少年です。

・ 武家貴族の出なそうなのですが、とてもそうには思えません。（消された跡があるが、よく見ると、‘弱’と書かれている）優しそうな方です。

・ 双子の妹がいるのですが、似ていません。

・ 地味です（消されかかった跡があるが、どうやら消すのを途中でやめたらしい）きっと他の皆様方の中に埋もれてしまうでしょう。

・名前の意味は‘おカネ’、だそうです………巻上げましょうか？

「Hais・Guillity・Schenesvetter」
ハイス グイリテイ シエーネスヴェッター

・ゲルトさんとお知り合いであつたらしい方です。ご自分の髪を脱色されているようです。

・荒々しくて馬鹿っぽい発言が目立つときが多いのですが、本当はそれなりに頭が回りそうな方です。

・ゲルトさんの妹さんが苦手なようです。その妹さんのようすからは恥ずかしさを隠しているというふうでも無く、純粹に彼のことと気に食わないようです。残念です。世に聞くツンデレというものに期待していたのですが……ちなみにこのことをマスターに報告すると、私と同じように残念そうな様子でした。

・名前の意味は‘熱’、だそうです。………マスターは凄いです。私たちは、自分の名前の意味など知らずに死ぬことが普通ですのに………

「Stella・Ermi・Winnings」
ステラ エルミイア ウイニングス

・マスターのクラスメイトで、左前に座っている方です。元気がよさそうです。

・まだマスターとはあまり会話を交わしていませんが、ティアマットさんに声をかけているとちらちらとマスターに視線を傾けています。

・これは確証かどうか分かりませんが、これからよく関わって

きそうな気がします。

・今度、彼女の名前の意味を聞いてみたいと思います。教会の洗礼でつけられた加護のある名前は、きつとなにか意味があるはずです。

「Poralis・Iiria・Finens」
ポラリス イイリア ファイニエンス

・ゲルトさんの双子の妹さんです。緑の髪が可愛いです。ゲルトさんより、彼女が一緒のルームの方が・・・そういえば人は性別の問題がありましたね。

・ゲルトさんと違って強そうな雰囲気があります。

・ハイスさんには生理的嫌悪を抱いているようです。きっと脱色された髪がダメなのでしょう。彼の頭を見る度にイライラし始めるのが分かります。

・彼女も、ティアマットさんと同じように私の存在に気づきました。本当に兄とは大違いです。

・北極星だそうです。

「Alba・Archinam」
アルバ アーキナム

・マスターのクラスの学級担任です。マスターより大きいです。

・少し話し方がマスターに似ているような気がします。マスターの方が全然いいですが。

・右腕に違和感を感じます。

・ 暁らしいですね、髪の色が暁ですね、はい。

いたラスティは、ゆっくりと意識と姿勢を起こす。まだ寝ぼけ眼まなこのその目が、アークの姿を捉えると、その表情は何やら焦っているように見えた。そこで意識をようやくはっきりさせた彼は、アークに話しかけ・・・いや、アークが話しかけていたようだ。

「……って、聞いているのですか？ マスター」

「ん？ ……ああ、聞いていない。」

どうやらアークは、ラスティが意識を完全に覚醒させる前に、何かを話していたようだった。だがそれは肝心のマスターの耳には届いてはいなかった。肩を落として見せたアークはもう一度ラスティに状況を説明しだす。

「…………ではもう一度言います。どうやらここに、誰かが来る、ようです。恐らくあと一分程で到着するでしょう」

「…………ここに何しに来るんだ？ もう夕食だろう？」

自分がここで夕食をとろうとしている事を棚に上げての発言。だが、その次に発せられたアークの発言で、その疑問に少しだけ答えが出たような気がした。

「それで、恐らくなのですが、此処に来るのは……………」 「……………そうか」

……………

人気の無い屋上への廊下を一人歩いているのは、長く黒い髪に、修道服に似た意匠の濃紺の衣服に身を包んだ少女？？？？？ティアマット・マキナであった。廊下の石床に打ち付けられるブーツの底が、廊下に残響をもたらししている。

たどり着いた屋上への扉は、金属で作られドアノブがあるだけの簡素な創り。そのノブを掴んだ手に、革手袋ごしに冷たさが伝わる。開いたドアの隙間から流れる風は、冷たい。開いたドアの向こうに見える夕日の色だけが暖かく感じられた。彼女は‘赤’が嫌いだが、この色だけは嫌いになれないでいた。

資材置き場か物置のようなその屋上は、階下の内装の様子とはかなり違った様子を見せる。初めて来るはずなのに、そこに懐かしさを感じた。

「こうやって、‘屋上’に来るのは何回目かな……………」

初めて来る場であるにも関わらず、もう何度も来ているように感じられた。歩く彼女を、冷たさを持つ風が撫でる。その風に目をつぶり、呟いた。

「今日‘も’、何時もより寒い……………かな」

その声は、人に聞かれている事を想定してはいない。

??
?????

入ってきた彼女の死角になる位置に、ラストイは居た。元々寝ていた場所が小高い場所であったため、隠れるのにわざわざ場所を移すようなことはしなかった。そんな彼に、ティアマツトの弦きが聞こえる。

「今日、も、何時もより寒い……………かな」

そんな独り言が耳に届き、その言葉に眉をひそめてしまう。今日、も、とはどういう意味なのだろうと、そんなことが頭を巡った。思考に沈んでいるうちに、足音が止まる。静まり返った音と風に、ラストイは気付き、そして何故か安堵してしまっていた。

何をするのだろう?????そんなことを思考の中で口にするよりも先に、何処からとも無く鈴の音のようなものが聞こえた。ただそれは例えるものに一番近かったのが鈴というだけだ。その音はとも澄んでいて、それでだから儚さを含んでいた。

直後、オーロラが地上に出来たのではないかと錯覚してしまうかのような光が、辺りを満たした。赤、青、黄の三色が、思い思いに折り重なっている。実物は見たことが無いが、オーロラよりも美しいのではないかと確信したものがあった。

「……………これは……………」

主人の言葉を代弁するかのように、隣に座るアークが驚きの声を漏らした。その光景に見覚えは無くとも、知識に該当する現象があ

ったのも大きい。

そして言葉が歌われた。直後に押し寄せる旋律に、何の心構えもないままに――

「T u f e m i r i e s i e r n o r u r , f i g h a
a q u q l s i u d i r i e m (遠く向こう空の下、日は赤く
沈んでく)」

誰に聞かせるともなく、ティアマツトは歌っていた。結界のように音を内にとどめるボールが、その声に深い響きを持たせている。その歌に……まだ最初の一節でしかないにも関わらず、ラストの心は瞬時に最高潮にまで震え出した。

「K o l i d i a z o i e r o l k e r , h i a a i x a
s i e r q i u (小高くそびえる丘のうえ、ここで私は空を
見る)」

音が心に共振する。反響する音に未だ震わせられている中に次の音が飛び込んできて。そんな既知で未知の歌に息を止めた。

「F o u k a c i n e r v i w l i m o l n , t i u n u
a s u k i a s i e r q i u (何処か違う別の場所、違う人
が空を見る)
T i m i a , o l n i a , n e l m i a , w e i x i a . . .
o r k a t i g u r i e k i l u k e r u m u (時や場所や
名前や歳や・・みんな違っているけども)」

自身の潜められた息や衣服の擦れるささやかな音、果ては心音までもが邪魔に思えてくるようで仕方が無い。

そんな主の精神の状態が流れ込んでくるアークは、その情報を整

理するだけで精一杯だった。音を聞いて連想される情景が、走馬灯のように次々に流れ込む。

「soufia asiewenna quekilila (それでも同じ夕日を眺めてる)」

紡がれるその言葉は詠語によるもの。そしてそのメロディは、どこか聞き覚えがあるもの。だがその覚えは面影だけで、はっきりしたものは浮かんでこない。そのようなことを記憶と照らし合わせることもさえも、ラストイは放棄していた。

「Owl nexia fum ririe (いつも隣に誰か居て)」

「nokt hopium siekilila (そう願いはしな
いけど)」

その歌から寄せられる寂しげのあるイメージに心を軋ませる。それは幻聴となって耳元で鳴っているように感じられた。

「sefie oxiar kelfim quokie oul
n (せめて同じ景色を眺めて欲しい)」

「softalewriesa hopiens (そんなささやかな願っだけ。)」

これは、彼女の、歌なのだろうか？ 既存の歌に、ここまで心を乗せきって歌うことが出来るのだろうか？ そんな疑問さえも、押し寄せる感情の流れに押され跡形も無くなる。

ただ音を受け止めるだけの思考をもって、ラストイはずっとその歌に聞き入っていた。

「……………」

一曲を終え、屋上に静寂が戻った。静まり返った空気とは逆に、ラスティの心は様々な音をあげる。音が過ぎ去ったというのに、その心中はまだ激情の渦中の中に居た。

その余韻ともいえる音に耳を澄ませ、ゆっくりと開かれた彼の目には、ようやく冷静さを取り戻した色が見える。次の瞬間、意を決したように勢いよく立ち上がる。

「よっと!!」

今まで身を隠していた物陰から勢いよく身を乗り出す。そんな行動でたった物音に反応し振り返ったティアマットは、突然現れた人影に驚きの表情を浮かべている。そんな彼女の表情を見て笑うラスティは、先手と言わんばかりに挨拶した。

「よっ!!ティアマット」

ラスティから発せられた簡単な挨拶の言葉さえも上手く飲み込めていないうちに、その場からラスティは飛び降りる。立つ場の高さが同じになった。

「いい歌だな。」

それは、心の底からの賞賛だった。

第十小節「それは一番訊きたかったこと」

「……………」

歌い終えた彼女は、深くゆっくりと、残りの息を吐き出す。周囲を彩っていた光は既に止み、それが歌の終わりを示しているようだった。

またもう一曲歌い出そうとしたその時、背後から物音がした。

「！」

勢いよく、何かに身構えるように、彼女は振り返った。その先には、こちらに笑顔を向けている男子生徒？？？？ラスティの姿があった。突然現れた彼の姿に動揺した彼女は、思考がフリーズする。

「よー！！ティアマツト。いい歌だな。」

呆然とする彼女に、そう笑いかけるラスティ。ここに来てようやく、盗み聞きされていたという事実には彼女は思い至った。見る見るうちに顔が紅潮していく。顔が火照る感覚は、一気に彼女の冷静さを奪おうとしていた。

「もも、もしかして……………きいてた？」

「おう！」

余りにも爽やかすぎるその返事に、ティアマツトは怒鳴り出す。それはラスティには初めての表情で、彼女にとっても久しぶりなも

のであった。

「って、‘おう’、じゃないでしょう！！だい――」

「ほい」

「――たい何で……え？」

怒鳴り始めたティアマットの勢いを削ぐように差し出されたのは、大きく膨らんだ袋。いぶかしむように、その袋を見つめる。怒るタイミングを、完全に失ってしまった。

「まだ飯食ってないだろう？折角だから食おうぜ。」

どうやらそれには、購買部から買ってきた食糧が詰め込まれているようだった。ラスティの、拍子抜けするその提案に、急に力が抜けたように大きく溜め息をつく。

「はぁ………」

「溜め息なんてついてたら、幸せが逃げちまうぜ？」

その様子に茶化すようにラスティが言う。対するティアマットは、もうどうでもいいという風に返した。

言ってしまったから、その事を後悔した。

「そんなの、どうせ元々無いよ。」

その返事に、ラスティの表情が一瞬……固まったことを見逃しはしなかった。何気ない、そんな一言だったが、その言葉にラスティ

イは今までとは違った反応を見せていたのだ。

「……………ごめん……………」

こちらが視線を外したと見せかけたときに彼が唇で呟いた言葉に、何故か申し訳ない気分になってしまう。

そして、彼女はこの時確信を持った。

ラスティは、この紅い眼に伝わる云われを理解している、と。

??

屋上でも、吹く風が弱い場所に、二人は並んで座り込む。

屋上の外郭近くに、並んで夕日を臨むようなかたちだった。

そして、アークがかけた簡易結界に気付いたティアマットは眉を吊り上げる。が、アークによるものだと思い至り、その表情を元に戻した。そんな表情の変化を隣でラスティがニヤニヤと笑いながら見ていたのに気がつき、勢いよく顔を背ける。ラスティから見えるその耳は、すこし赤かった。

二人の間にラスティが買ってきた食糧を置くと、彼がティアマットに話しかける。

「購買のもんだが、俺からの奢りだ。半分までなら持っていいぜ。」

そう言われて覗き込んだ袋の中には、明らかに一食分とは思えないほどの食べ物が詰め込まれていた。

(これだけあれば、私だったらどれだけでもつかない……?)

恐らく二日三日ぶんはあるだろうと、彼女は検討をつける。ソレと同時に、これだけの量を一人で食べるつもりだったのかと疑問に思った。その事を口に出す事は無かったが。

「半分も食べれない。……これでいい。」

そうぶっきらぼうに言い放ったティアマットは、牛乳とパンを二つほど貰う事にした。それからラスティは、自分が食べるものを選び出す。取り出したサラダのラベルには、パインサラダと書かれていた。

「はは、コイツは何か作為性すら感じるぜ。」

そう言いながら、そのサラダの名前に笑う様子に、ティアマットは訝しむと同時に、どこか彼が子供っぽいと思う。そこまで考えて、自分がラスティをじっと見つめていたことに思い至り、慌てて顔を背ける。その先には、地平に沈む陽が淡く輝いていた。

始めのうちは無言で食べていた二人だったが、唐突に、ラスティが口を開いた。

「ほんと、吃驚したぜ。屋上で何やるんだろうって思ったら。まさかティアマットが歌を歌うなんてな。」

「う………ら、ラスティこそここで何してたの?」

「ああ俺か? 昼寝、さ」

あっけからんとしたその答え、彼は本当に何を考えているのだろうか、彼女は疑問に思った。

「……………呆れた」

「まあまあ、いいじゃねえか。学院の中そのものはアークが俺の代わりに全部覚えてるんだからさ。」

そんなことより……………本当、上手かったぜ、歌。」

「そう……………かな」

ここにきて突然の賞賛。辛うじて答えるその声には、自信がこもっていない。

そうだよと、微笑んで励まされて彼女は更に顔を赤らめる。それでも、そうかなと、まったく同じ言葉を返すだけだった。だがそこには、今まで見受けられた少し張り詰めた印象が感じられなかった。

「今まで誰かから、歌について何か言われたこともなかったから……………」

そう語るティアマットの表情は、少し寂しさを垣間見せるも、嬉しげなものだった。

そんな彼女の表情を見たラスティは、安心したように言った。それは、今までに無い優しげな声色だった。

「そっか……………じゃあ俺は、ティアマットの歌を評価した最初の人間ってわけだ。」

そう言って何故か嬉しそうに笑うラスティ。そんな彼に、彼女は

子供っぽい印象を抱く。

人と殆ど接することの無い彼女は、こんな彼の反応に戸惑いつつも、思わずくすぐったくなる。

新鮮だった。

そうして時を過ごす。特に会話をする訳では無いが、並んで夕日をみて食事をとることが、彼女には新鮮だった。

こんな時間が続けばいいと思っている自分からしくないと感じたが、不満ではなかった。

夕日を臨み、並んで食事をとる。その食事は購買で購入したもので、味は食堂の物には劣る。だがそれは、‘肴’次第で単なる食事以上の何かに昇華する。

決して会話の数は多くは無い。ラスティが話し、ティアマットが受け答える・・・そんな会話が途切れ途切れでありながら何度も繰り返された。

歌の話題などで上機嫌に、返る言葉が少なからうとも積極的に話すラスティ。恥ずかしそうに言葉数少なくではあるが、いつも見せていた他者を寄せ付けない表情に親しみを浮かばせながら答えるティアマット。それは、少女が心の中で憧れていた日常だった。

時間にして、一日の二十四分の一と少しでしかない僅かな時間。そんな時間であっても、ティアマットには二十三倍のソレよりも価値があった。

何か思惑があるのかもしれない、なぜ‘そう’してくれるのか分からない。だがそれでも、自分を‘紅い眼を持つもの’では無く、‘ティアマット・マキナ’として扱っていてくれることがそんな疑問をどうでもいいものに思えさせてしまうほどに、彼女は嬉しかった。

会話が無く、ただ夕日を前に沈黙を重ねるだけの時間にさえも意味があった。ただ過ぎ去っていかばいいと思った時間とは違う。引き止めていたい何かがあった。

「……………こうして夕日を見るのってのもいいな。」

今までよりも短く、しみじみと同意を求めるような声。ティアマツトの方を見ずに、空の向こうに沈みかけたそれを見ながらも、あれだけあった大量の食べ物をすべてその胃に収め、後方の積み上げられた木材の壁に背を預けてその体を休めていた。

そんな彼に、ティアマツトは自身の髪を吹く弱い風を感じながら答えた。彼女は彼の隣で、膝を抱え込むようにして座っている。

「うん、そうだね……………赤は嫌いだけど、夕日は嫌いじゃない」

それは以前から抱いていた感情だった。誰にでも同じく、優しく照らしてくれる夕日。昼間空高く上がっているそれとは違い、直に見ても目を焼く事がないそんな光。赤は嫌いであつたが、そんな光をだす夕日のこんな赤だけは、彼女は嫌いではなかった。

「……………赤は嫌いかな？」

ラスティから返されたその言葉は、質問の内容の割りに長い時間をかけて発せられたものだった。そんな僅かでもない時間の間の変化に、自身が感じた確信をより確かにさせる、そんな証拠のようなものを見つけたような気がした。

「うん……………やっぱり、私、‘こう’だから」

そう言ってラスティの方に振り返る。同じように彼女を見つめているその目に、自身の紅く淡く光る眼を焼き付けようとするかのように見える。質問と行動の意味を何となく分かっているラスティは、彼女が視線を外すまでしつかりとその眼を見続けた。

‘人々に嫌われる原因であるこの眼の色を好きになれる訳が無い’

その眼はそう言っているようにラスティは感じた。きっとソレは間違っていないだろう。

伝え終えたようにティアマツトが視線をそむけた後、その場には先ほどとは違った沈黙が訪れていた。ただお互いに並んで、風に吹かれ、沈む陽を見て・・・同じようで少し違うそんな状況の中で、ティアマツトはこの日初めて自分から話題を振った。

それは…………、普通、の人には大した話題ではないだろう陳腐なものだった。

「ねえ、神様って…………居ると思う？」

息こそ飲みはしないが、その予想だにしていなかった質問に表情を固めるラスティ。ティアマツトが夕日を見つめたままでさえなければ、その様子の変化に何か察したであろう。彼は、自身の動揺が気付かれないように答えた。

「さあ…………どうだろうな」

らしくも無く素っ気無くなってしまった対応に、内心で舌打ちをする。だがそんなラスティの状態に気がつかないかのように、彼女はその言葉を受けて話した。

一瞬、風が少しだけ強くなる。それは、主人の感情の起伏をうけたアークが一瞬だけ出してしまった、結界の綻びによるものだった。

「もし、神様が居たらね？ 何を思って、この世界を創ったんだろうって……………そう、思うんだ」

質問ではなく、ただ、自分は疑問であると。世界を創った神たる存在が、一体何を思っているのかを形作ったのだろうと……………それは、彼女が抱く疑問としてはある意味当然といえるものである

った。

夕日を見たままの彼女の横顔を、ラスティは見つめる。既に結界のほころびは収束され、座ると地面につく程であった彼女の長い髪は、風が収まると再び地面にその黒を横たえる。

その一瞬舞い上がった髪の奥で垣間見たティアマットの表情に、ラスティは疑問を投げかけずには居られなかった。

「……………なあティアマット……………君は、その神を恨むか？」

その質問の中に、答えを求める渴望を滲ませる。彼女はその質問には答えず、ただその口元を緩めるだけだった。

無言のまま、今まで座っていた小高い場所から地面に向かって飛び降りるティアマット。二メートル近くはあるだろうその高さからの衝撃を微塵も感じさせないやわらかい音で着地した彼女は、衝撃を逃がしたその足でクルリと振り返る。遠心力で舞った濃紺の服と漆黒の髪が、彼女の眼がラスティを捉えると同時に舞い降りる。

「さあ……………どうでしょうね」

先ほどのラスティの発言に対するあてつけのような物言い。その口調と、陽が沈みきったせいで少し見えにくくなってしまったその表情からは、感情を読み取ることは出来なかった。

第十一小節「それは話することできないこと」

「ラスティ、明日もまた此処に来るの？」

「歌を聞かせてくれるというのなら、来ようかな」

そんなからかったようなラスティに、肯定ととれる短い返事を返して、彼女は屋上から去っていく。時間はそれなりに遅かった。

ティアマットが去っていったのを見届けて、ラスティは飲み干したパックの飲料の空を、袋の中に投げ入れる。それは少しだけ狙いが外れて、中に納まることなく傍らに転がった。

「一番聞きたいことだったんだけどな……これが」

沈んでしまった夕日の跡を見つめるようにして、そう、呟いた。

ティアマットが居なくなってしまうてしばらくしてから、ラスティはそこから立つ気配を見せなかった。アークは少しづつ冷えていく気温を和らげようと、無言のままに結界を強める。

話相手を求めるような主の雰囲気、アークはその姿を現す。そこは、先ほどまでティアマットが居た場所だった。

「……物語を書くときにな、俺は身の回りの色んな物事を参考にして、とにかく多くの事象を、設定、として取り入れた」

それは、ただ物書きが自身の執筆についてのことを語るようにしか聞こえない語り。だが、その語りが持つ意味を、傍らで耳を傾けているアークは理解していた。

今は少女の姿をしているアークが、その長い髪も相まってティアマットに重なって見える。こちらを見つめるその表情に、背格好な

ど色々な点で相違があるが、なぜかラスティはそう思ってしまった。

「アルビノって、知ってるか？」

傍らに居る自身の使い魔たる精霊に、質問を投げかけるラスティ。その視線は未だ中空に向けられて、その心情を読み取ることは出来ない。

僅かに首を傾げさせたアークが、少々自信なさ気にその質問に答える。

「確か、生まれつき色が異常に白い個体……でしたでしょうか？」

その答えを受けたラスティは、それに詳しく説明を付け加える。

「ああ、遺伝子の異常のせいで色素が作られないおかげでそうなるんだ。そしてな、アーク。その眼は網膜の血液の色を反映すること……」

そしてゆっくりと眼を閉じる。それは祈りをささげるような表情で、懺悔を重ねるようであった。

‘ 紅く見えるそうだ ’

まあ、ティアマットのソレとは違うんだけどなと、あとに続いたその言葉は消え入るように小さい。だがそれを、しっかりとアークは聞き取っていた。無言で聞いているアークの様子を受けて更に語る。それは‘ ココ ’ではアーク以外に話せないことで、そうすることが今のラスティの精神を安定させているともいえた。

「ソレを知ったのは、インターネットって言って、まあ………要は

色々と情報を集められる端末だと思ってくれ…………その時はネタ探しに夢中だった」

「そんな時に見つけてな…………そのアルビノの動物は、世界では神聖と崇められるか、不吉だと恐れられるかどちらかだった…………」

そこまで言われては、何故自分の主がこれほどに苦しそうな表情をしているのか、その事を容易に察する事が出来た。事情を理解し始めたアークが、その表情を揺らがせる。不気味なほどに無表情な自身のマスターにかけたその声は、酷く震えていた。

「ではマスター……………貴方は……………」

アークの言わんとするところを察し、ラスティは自嘲気味に微笑む。とても笑っているようには、アークには見えなかった。

「ああ……………俺が選んだのは後者だった」

そう無機質的に告げる主の声が、アークにはつらかった。‘そう、思わないで下さいと、出来るのなら言ってしまう良かった。だが、感情を表に出そうとしない主の表情が、それを許さない。

「そう、俺はこの世界を、‘そうしたんだ、’」

もう、やめて下さいと……………そう……………言いたかった。だが、主のその懺悔にも似た告白を、アークにはもう止めることは出来なかった。自分に悟られまいとしても、自然に流れてくる感情に、そうする事を躊躇させられた。服の上に乗せられた手が、薄青色のスカートを強く握り締める。

「俺が、彼女を独りにしたんだ」

声を荒げる訳でもない。涙を流す訳でもない。

「偶然に過ぎないのは分かっている……だが、こう、思うんだよ、もっとうさ、平和な世界を創ってやれたらなとかさ……」

‘何を思っこの世界を創ったんだろう……’

この言葉が、彼にとってどれだけ辛いものであっただろう？

主との繋がりから感じられるその感情を直接的に理解してしまうから、アークはラスティのそれが痛々しくて仕方が無かった。

ただ無言で、彼の言葉を受け止めることしか出来ない。彼の心を癒す手段が、精霊たるアークには分からない……そのことが、ひどく胸を締め付ける。

「なあ、アーク……俺は……アイツに何をしてやれる？」

そんな質問に、アークは何も答えることが出来なかった。ただ黙って主の手を握り、化身の肌がそのぬくもりを感じる……

私は、マスターに何をしてあげれるのでしょうか？……そんな言葉投げかけることのできる相手が、アークには居なかった。

その翌日の昼休みのことだった。非常に混み合う学院の食堂に行きたがらないラスティは、購買で購入した弁当をゲルトとハイスと食べていた。ラスティの机の位置に集まるようにして、ゲルトが向かい合わせ、ハイスがその横につけるように机を動かしている。ラスティの提案したこのようなことが新鮮だったのだろう、机を移動させてくっつけるというただそれだけの行為に、二人は目を輝かせ

ていた。

それを見ていた他のクラスメイトたちも、彼らと同じように机を動かし始める。貴族出身の生徒たちも、全員ではないがその貴族らしからぬ行動にゲルトたちと同じような表情を浮かべていて、そんな彼らをみる平民出身の生徒たちもどこか楽しげだ。

こうして見ていると、この学院に入学している貴族出身の生徒たちはその立場を洩にかけることなく、平民出身の生徒達とこの二日でかなり仲良くなれているように思える。

平民からしてみれば、装飾こそ豪華だが、そこには貴族特有の堅苦しさや陰湿さを感じず……

貴族からしてみれば、空気こそ緩いが、そこに安っぽさを感じない。

きっと、そうほうに配慮した校風にしようという側面もあるのだろう。だがそれ以上に、ここ七年間で行われたという貴族たちの意識改革なるものが功を奏しているという。何が行われたかはわからないが、それのおかげで、貴族たちの平民に対する態度がかなり変わったという。まだ完全にというわけでは無いらしいが、この教室を見てみるに、大分効果はあるのだろう。

「いやあ、やっぱこう、堅っ苦しくない生活っていいわなあおい」

「ハイスさんに堅苦しさというものが、今までにあったかどうか分かりませんが、どうなのでしょう？」

こうして、食事をしつつ雑談する貴族の光景は、この学院では珍しくなくなりつつあったらしい。もちろん、‘礼節科’なる選択教科で貴族の生活上必要な要素を学ぶ機会はあるらしいが、普段のうちは気にしない。

そんな貴族の様子は、育ちの良いだけの友人という認識を平民出身の生徒に植えつけるのには十分だったようだ。

「（思っていらっしゃったよりも、貴族と平民は仲がよろしいのですね）」

「（時代の流れが、そういう風になってたってことだ、これがな）」

嬉しそうに教室の光景を見ているラスティの様子をうけて、アークが話しかけて来た。その陽気な声色に、念話で同意の返事を返す。そんな食事も終わり、残りの時間を談話でつぶしていると、そこに一人、介入してくる女生徒の姿があった。灰銀の髪を短く切りそろえ、ティアマツトの左眼のように濃くはないが青い眼をしている。

「ねえいいんちよ？　ちよつといいかな？」

そう言ったのは、ステラ・E・ウィングス。貴族出身の生徒だが、その元気の満ち溢れた気性と言動で、平民出身の生徒達にかなり親しみを持たれている子である。

かといって貴族出身の生徒たちに受けが悪い訳でもなく、このクラスで貴族と平民の関係の橋渡しにもなっている。そんな存在だった。このクラスの仲がいいのも、彼女の存在によるものが大きいのだらうとラスティは考えている。それと同時に、ゲルトではなく彼女を副委員長にすればよかったとも考えていた。

「え、俺？」

座った姿勢から、見上げるようにして反応するラスティ。その隣では、ゲルトとハイスも同じような反応をしている。色気のあるような話題では無いようだが、どこか言いにくそうにやや小さめな声で、用件を言った。

「うん……ちょっと相談ごとなんだけどさ……それが………テ
イアマットちゃんについてなの」

「アイツの？」

だれかれ構わず愛称や‘さん’‘君’果ては‘ちゃん’づけで呼ぶような彼女だったが、その口から出てきた名前に驚きを含めてラストィは眉をひそめる。

彼女はラストィの左前に座っていたので、椅子をラストィの机まで持ってくると、話が長くなるというように、その白桃色のスクートを丁寧に扱って座った。言動とはちぐはぐなその所作は、やはり貴族出身なのだろうかわせる。

何故自分なのだろうと考えていると、そんな表情を見て取ったステラが答えた。

「うん……ほら、いいinchよってあの子と仲いいでしょ？」

「そういやそうだな。オレとしては、すこしばかり気になんぜ」

「確かにそうですね」

その言葉は、ラストィを置き去りにしたまま、他二名を納得させる。初めは納得のいかない様子ではあったラストィだが、彼女に話しかけるのは自分しかいないという点に思い至ると、少々ではあるが納得した。

「それでね？　ここからが本題なんだ……あのね？　わたし、あの子と……話したいんだ」

恥ずかしげに、気まずそうに言うその様子は、何か思いつめたよ

うでさえあった。

自分から話しかければいいだろうという言葉を追いつくようにして、どうしてという言葉が、先に口を飛び出していた。

そして彼女の口から、入学式の日にあった話が語られた。

第十二小節「二人の心、鈴音に」

「はあゝ。紅い眼の人かあ……」

入学式の日、ステラ・E・ウィニングスの寮に向かうあしどりは重かった。ソレは、彼女が耳に挟んだことが原因である。それは、彼女の情報通の先輩からもたらされた。

曰く

‘ 今年の入学生には、紅い眼の女性とが居るらしい ’
‘ 名前はティアマツトというらしい ’

そして見た部屋割りの表の中で、同じ番号の四角の中に囲まれた、自分の名前とティアマツト・マキナという名前。自分が思っているほど、自身の運は強く無いらしいと、その時の彼女は思った。

どうやら自分のルームメイトは、そのうわさの紅い眼の持ち主であるらしいとわかった彼女の、その足取りは重い。式後のパーティからは早々に出てきた彼女は、その紅い眼についてのことばかりを考えていた。

紅い眼は災厄の象徴というのは、この国……いや、この大陸の人間には共通の認識だった。紅い眼の吸血鬼の伝説、魔獣と呼ばれる存在の眼？？？？？そして七年前に現れた異常な存在たちの存在も、それに拍車をかけていた。

突然現れ、隣国を巻き込んで国中に恐怖をばら撒いたその存在は、みな総じて眼が赤かったという。血濡れの眼の悪魔たちと、当時は言われたものであった。その傷跡が完全には癒えていない今の世の中は、その紅い眼を恐れている。

勿論、その紅い眼の持ち主がその存在たちと同じということは無いだろう。それなら学院に入学など出来ない。

だがそうは言っても、不安にならずには居られない。

そうして悩んでいるうちに、いつのまにか、気付くと彼女は既に部屋の前まで到達していた。

その扉の前に立ち止まり、彼女は扉を開けることを躊躇する。

「（ええい！！　らしくもない。こうなりや覚悟を決めるんだよ、わたし！）」

そう奮い立たせるようにしてドアを開けた彼女を出迎えたのは、明かりの付いていない暗い部屋だった。その様子に、ステラは軽く口をあげたままで固まっている。

「おろろ？　これってもしかして、未だ来てないって………ん？」

再起動し、まだ相手は来ていないという判断を下した彼女を下そうとした彼女の耳に、ゆっくりとした金属音が聞こえる。それは、ドアの鍵を閉める音だった。

どうやら、ステラが到着する僅かに前に、ここにはその人物が到着していたらしい。鍵を閉めるのにどれほどゆっくりなのだろうと思うほどに緩やかでちいさなその音が、その存在を告げていた。

布の擦れる音の後、部屋からは物音が消えた。

部屋に明かりを灯そうとした姿勢のまま、彼女の動きは固まっていた。

ゆっくりとドアを閉めた彼女は、物音を立てないように部屋に入り、そして紅い眼の少女が入っていったであろう部屋の前で立ち止まると、自らが尊敬している学者を真似して額に指を押し当てて思案した。

何故鍵をかけて、早々に寝室に入ってしまうのか。

扉の向こうで何をしているのか。

だが、どう悩もうとも、そんな曖昧な疑問には、思いつくコトな

どいくらでもある。

そしてそれはどれも想像でしかなし、確実性など論外だ。そこで彼女は……

「（こうなったら、確かめてやろうじゃないの）」

……貴族らしからぬ気合の入れ方でガッツポーズをとると、最新の注意を払いながら扉に近付いた。その真剣な表情は、まるで建物に忍び込んだ盗人の様。つまり、盗み聞きでもしようというのだ。そして、眼と鼻の先までドアに近付いたところで、部屋の中からはすすり泣きが聞こえてきた。

「え……………」

耳を近付けようとしたその動作がとまる。眼は驚きに見開かれ、肺は一瞬その役割を忘れる。彼女の思考は混乱した。

それは、彼女が予想だにしていなかったことだから……………
……災厄の眼を持つという少女が、薄い扉の向こうでしていることは、すすり泣くということだから……………

怖い……………まだ顔を合わせてもいない少女に抱いていたはずのその感情は、いつの間にか消えていた。

だが、代わりになる感情が、彼女には浮かんでこない。混乱した彼女の脳は、抱くべき感情をたたき出せない。

わたしは何に怯えてたの？ 彼女はどのようにして泣いてるの？

そうしてそのまま立ちすくむステラは、その泣き声が止んでしまったあとも暫くそこを動くことが出来なかった。その手は知らず知らずのうちに、お気に入り色のスカートの強く皺を作っている。その手からは、何時までも力が抜ける兆しは無い。

そして……………その部屋に、その日明かりがともることは無かった。

今日も屋上で、空を眺めながら仰向けになっている。徐々に色付きつつある空が、時計に代わり時を告げている。
大きなあくびをする。その行為は、これから来るであろう人物を待っているが故のもの。

「やっぱり今日も来たんだ、ラストイ」

その声は、待ち望んでいた‘彼女’のものだった。振り向いて彼女の姿を、彼はその視界にとらえる。同時に、昼にステラが呟いていた言葉を、思い出す。

『わたし、あの子のルームメイトなんだけど……まだ、話したことないんだ』

まだ部屋で顔を合わせたことも無いと言うその発言を思い出して、普段は何をしているのだろうと、そうラストイは質問したくなった。そんな彼の心中は知らず、彼女は昨日座っていた位置に立った。その右腕に、包みが握られているところを見ると、彼女は今日は食料持参で来たらしい。

「えっと……待ってたの？」

『最初の日にね、わたしが来たころにはもうあの子は部屋（寝室）に居たんだ。それでね、近づいてみて分かったんだけど……あ

の子、泣いてたんだ』

そう尋ねてくる彼女は、きっと不安だったのだろう。寝室が分かれてるとはいえ、同じ部屋で暮らすことになる相手に、拒絶されてしまうのが怖かったのだ。

そして、そう思えば思うほど、ラスティの中の罪の意識は大きくなる。

「ああ。言っただろう？ 歌を聞かせてくれるなら明日も来るって」

そう言われて、軽くではあるが嬉しそうに微笑を垣間見せる彼女は、何を思っているのだろうか？

『君は、その神を恨むか？』

昨日聞きたかった疑問が、どうしても頭から離れない。

『放課後、屋上に来てくれ。ついでに弁当も』

そうラスティにいわれて屋上に行き、指示を受けて隠れるように物陰に隠れていたステラは、入学式の日のことを思い出していた。彼女と話したいと言ったのはいい、だが何を話せばいいのだろう。どう接すればいいのだろう。冷たい風が奪っていくものは、体温だけではないような気がした。

「(ステラさん。どうやら彼女が来たようですよ)」

思案に沈むステラに声をかけたのが、半ば無理矢理連れてこられ隣に座っているゲルト。そしてその一つ奥には、半ば無理矢理連れてきた張本人のハイス。二人は今回の件に便乗したようにこの場に居た。

やっとかよ、そう呟くハイスと同じ心境で、彼女は耳を澄ませた。ティアマツトの方から声をかけているのが分かる。これは少々意外だった。

「えっと……待ってたの？」

「ああ。言っただろう？ 歌を聞かせてくれるなら明日も来るって」

そう言葉を交わす二人の様子は、傍から見ると待ち合わせをする恋人の様。そんな二人の……？特にティアマツトが放つ言葉のその声色は、クラスに居た時よりも明るいのが容易に分かる。それほど彼女はラスティに心を開いているのだろうか。

「(会話だけ聞いてっとカップルみてえだな、おい)」

「(そんなこと本人に言ったら多分怒りますよ?)」

「(二人とも静かにしなさいよ。聞こえちゃうよ)」

確かにハイスが言ったことは他二人も思っていたことだが、少なくとも、ラスティが彼女に持っている感情は少し違うような気がするとも思っていた。

それにしても、歌とは何だろう？

その疑問を誰が口にするよりも早く、聞こえてきたのは鈴のような澄んだ音。見えたのは赤・青・黄三色の光のボール。

そんな異様な光景に、意外にも心当たりがあったのはハイス。彼

の口からは、二人には聞きなれない言葉が聞こえてきた。

「鈴唱、……………マジかよ」

「(え、何? ハイス君しってr——)」

その疑問をさえぎるように、直後その場を歌が満たした。それは、開けた空間で歌っていることが信じられない程に響きを持っていた。反響する音が、その場に居た全ての心に染み渡る。

それは、詠語の歌。神秘の宿る言葉の歌だった。

「Tuf e mir ie sier nor ur, figh a
aquql siud iriem (遠く向こう空の下、日は赤く沈
んでく)」

「Kolidia zoier olk er, hia aixa
sier quiu (小高くそびえる丘のうえ、ここで私は空を見
る)」

「Fouka ciner viwlim oln, tiunu
asukia sier quiu (何処か違う別の場所、違う人が
空を見る)」

Timia, olnia, nelmia, weixia. . . wo
rkati gurie kilukerumu (時や場所や名前
や歳や. . .みんな違っているけども)」

「soufia asiewenna quekilia (それ
も同じ夕日を眺めてる)」

「Owl nexia fum riiie（いつも隣に誰か居て）」
「n o k t h o p i u m s i e k i l i a（そう願いはしないけど）」

「s e f i e o x i a r k e l f i m q u o k i e o u l
n（せめて同じ景色を眺めて欲しい）」
「s o f t a l e w r i e s a h o p i e n s（そんなさや
かな願いだけ。）」

その歌が終わるまで、誰も何も言葉を発しなかった。いや、発せなかった。その残響は空気を震わせなくなってもいまだ意識の中に残り、感傷を与える。

「すごい……………こんな歌があるなんて……………」

賞賛の言葉を捜すには、あまりにもその心は震えすぎている。感動で紅潮しているその顔は、寒さに凍えていたことなど忘れていくかのよう。隣のゲルトも同じような表情を浮かべていて……

「あれ？……………ハイスさん？」

……………さらにその隣のハイスは、以前からの知り合いのゲルトさえ見たことも無いような表情で、歓喜に打ち震えていた。

それは歓喜を通り越して驚愕になり、ハイスの顔を蒼白にさせていった。

第十三小節「歌を聴いて」

「…………ふう…………」

歌い終えたティアマットが、肺に残った息を最後まで吐き出す。三色の光の中で映えていた彼女の黒髪は、つい先ほどまでは光に喚起されたかのように重力を無視して軽く風に吹かれていた。

眼を閉じていたラスティが眼を開く。視界からの情報を遮断することにより鮮明に音に聞き入ろうとしていた彼は。眼を開いた時に目の前に広がっていた空をはっきりと認識するまでに僅かなタイムラグを感じたような気がした。それほどに聴覚に自分は集中していたのだろうか、そう自覚して笑う。

「ああ…………昨日も聞いたが、やっぱりいいなあ」

そう呟いて恍惚の表情を浮かべる彼は、本当にここに歌を聴きに來てくれているだけなのかもしれないと彼女に思わせる。そこまで評価されているは余りにも恥ずかしいものなのだが、自分の歌が賞賛されるのは悪くない気分ではあった。

ラスティを覗き込むように移動する。彼の相当に色の濃い眼は、確かにティアマットの眼を正面から見つめている。

ティアマットに語りかけるといふ風でもなく、独り言のように呟くラスティにティアマットは、上から覗き込むようにその近くに立つ。髪が重力に引かれ、手を伸ばせば届きそうな位置にあった。

「どうする？」

それは、まだ歌ってくれるという意味なのだろうか。それともま

た別の意味だろうか……ラスティとしては、もう一、二曲歌ってもらいたかったのだが、‘用事’があったことを思い出し、それはまた次の機会にとっておくことにした。

仰向けの姿勢から上半身のみを起こし、彼女の眼を見据える。ただかすかに光を放ち続けているそれと、光を引き込むように在る深青のもう片方を見つめて、言葉を告げた。

「ああ………：そういえば、言い忘れてた、んだが、今日はまだ‘お客さん’がいるんだ」

その言葉の意味が理解できなかった彼女は、彼がその‘お客さん’を呼ぶまで固まってしまっていた。いや、呼ばれてなおさら固まることになってしまう。

「おい！　そろそろ出てきてくれ！」

????????????????????????????????
????????????????????

「さて、今日は観客同席で飯を食おうってな、これが」

夕日側から見て右から、半円を作るようにステラ、ティアマツト、ラスティ、ハイス、ゲルトの順で並んでいる。丁度その中央になるように座ったラスティが、その食事を進行(?)した。

弁当を持って来いという彼の指示は、こういうことだったのだ。同じ釜の飯を食うとでも言いたいのだろう……ラスティの作り出

した流れに半ば巻き込まれるようにして、今のかたちを作っていた。せめて何か言ってくれてもよかったのに……そんな恨めしげなラスティへ向けた視線は、今回は効果があったと見える。視線に氣付くと氣まずそうに後頭部を掻いた。

「なあ？ どうだった？」

そんな視線から逃げるように皆に質問を投げかけるラスティ。彼は一体何がしたいのだろう……そう思ったティアマツトは、直後に発せられた回答の主に視線を投げかけた。

「ああ、すげえいい。マジで、ホントに……ああ、アレが鈴唱^{れいしょう}かあ」

即座に回答したのは、脱色された薄い色の金髪に暗めの赤の細身のライダーズジャケットを着ていたハイス。ティアマツトが見ていた限り、普段はもっと気合の入らない表情で、ガラの悪いという印象の強かった彼だが、今このときのその眼は子供じみて輝いていた。

「すっげえよなあ！ あんな大規模に制御された力場んなかで、あんなに綺麗に歌えるんだぜ！？ それにあの旋律……原曲が、アウス・デア・ノイエン・ヴァルト’の第二番だってえのはわかるが、まさかあんないい歌にしちまうなんてなあ！！」

今まで黙り込んで難しい表情をしていた彼が一変、決壊したかのように饒舌になり始める。それにつられたように、その話題にラスティが介入していった。

「アウス・デア・ノイエン・ヴァルト。……ああ！ そうか、あの旋律だったのか！」

「お！ ラスティはわかんのか！？」

どうやら話題が一致したらしい彼らは、途端に歌について話し始めた。驚いたようにその二人を見つめていたティアマツトに、話しかけたのはゲルトだった。困ったように苦笑を浮かべている。

「すみませんティアマツトさん。こう見えてハイスさんは音楽好きなんです」

どうやらラスティさんもそうみたいですけどね、と後に付け加えた。困ったようにしているティアマツトに、視界の外から、今度はステラが声をかけてくる。

「バカは放っておこう？ バカは」

そういう捨てて同意を求める彼女の表情は明るい。そこには、以前まであった恐怖の色はすっかり抜け落ちていた。

そしてこの時、彼女はようやく、ラスティ以外の人間と会話をした。

「うん。……そうしたほうが、いいかもしれない」

ただ受け答えるだけの反応だが、こうして会話できたのは、双方にとって大きな進歩。簡単なことで、何気ない日常の一コマになりそうですらない小さなこの一言は、ティアマツトにとっては希望を象徴しているようにさえ思えた。

歌について語ってばかりのラスティとハイス。時々からまれ巻き込まれるゲルト。怒鳴り、人が困^{ティアマツト}っていると彼らに怒鳴るステラ。そして、そんな彼らを見て笑うティアマツト。それは、今までに

見せた事の無い、晴れやかなものだった。

「あ、もうこんな時間です。今日は課題やっておかないと拙いですよ」

そんなゲルトの一言に、日が完全に落ちかかっていることに気付いた一同。この集まりは、もう終わろうとしていた。

自分で作ってきた弁当を纏めるステラ。広げていた包みに全てを包み終え、背後に人が立っていることに気付く。

「ん？」

それは、何か言いにくそうにこちらを見ていたティアマットだった。まるでなにか期待して、でも期待が持てなくてといった、そんな様子。

クスリ、そう笑って、彼女の意図を察する。立ち上がって、彼女は少女に向き合った。ティアマットよりも一回り大きいステラの視線は、少し高い。

「一緒に帰ろう？」

「うん………そうする」

素っ気無い言葉でそう返事をした彼女のその表情を、沈みかけた夕日の光が最後に明るく照らし出していた。

そしてこの日初めて、彼女たちの部屋では、‘おやすみ’の挨拶が交わされた。

明るくなった?????????入学から三日間のティアマツ・Mのことを見ていた者であれば、四日目の彼女を見れば誰しもが驚くことだろう。

彼女は、誰とも言葉を交わすことは無かった。まるで自分の方から避けるように、教室の窓側の後席にすわり、休み時間中もずっと空を眺めているだけだった。彼女が声を発する時と言えば、隣の席のラスティハルト・ジーンが挨拶をしてきたのに返すぐらいであった。

だが、きょうはどうだろう？ クラスの中でも中心的存在になりつつあったステラ・E・Wが彼女と一緒にクラスに入ってきたのだ。クラスは騒ぎ出すことは無いが、皆その光景に視線を引き寄せられている。

彼女たちが向かった席の隣では、何時にもまして笑顔を見せているこのクラスの委員長、ラスティハルト・Xの姿がある。その周囲には、隣国の有力貴族でもあるハイス・G・Sとゲルト・A・Fの二人。

彼らと交わす彼女の返事は、言葉そのものはいままでとかわらないが、その声色は喜色を帯びている。

‘何が起きたのだろうか?’

それはこの日から暫く、クラス中で話題になった。

第十四小節「魔術って何だろう」

「ねえ？ 魔術ってなんなのかな？」

ある日の夕、ステラの口から発せられたその疑問は、その日の授業から来るものであった。

その日の式学の授業、‘同一魔術においての個々人ごとの違い’という題で行われた。場所は競技場、教師は担任のアルバ先生である。

「魔術は未だ謎が多い。魔石と式と詠唱の三つで行われるというところまではわかつているが、同じ現象を起こすものでもその組み合わせは大きく異なる」

そうして彼は、生徒たちに三人以上でグループを組み、何かしら特定の魔術を決定させ、ソレをグループ内で相互に観察。レポートを提出するというものだった。

勿論、ラスティはゲルト、ハイス、ティアマツト、ステラの五人放課後に屋上に集まるメンバーでグループを作った。彼らが設定した魔術は、‘赤’の初歩の初歩：一般に‘ファイ・ツィボール火炎球’と呼ばれるものである。

標的として立てられた案山子を前に、彼らは集まっていた。順番を決めるためである。その決定方法は、古来世界で己が身一つで出来る運の勝負とされる‘ジャンケン’?????勝った順に魔術を

行うことになっている。五人は等間隔に並び輪を作り、真剣な表情でお互いを見ている。

「よし、いいか？」

ラスティのその呼びかけに答えるように静かに頷く四人。それを見て、ジャンケンの音頭をラスティがとる。

「最初はグー！ ジャンケンポン！！」

その掛け声と共に、五人は己が運を託した手を繰り出した。そしてその勝敗は？？？？？

「くそお！ 何故だ！？ 何故俺は！？」

そういつて膝から崩れ落ちるラスティ。その悲愴に満ちた表情が、ジャンケンの勝敗の結果を物語っていた。ラスティが繰り出したのはグー、そして他のメンバーが繰り出したのはパー。一回目のジャンケンでは、ラスティ一人のみが敗北する結果となった。その確立は八十一分の一、百分率にして約一％。そんなある意味幸運とも取れる確立の低い状況を、ラスティは引き寄せた。その運の低さは一般的なソレを凌駕している。

輪の外で肩を落とすラスティを、アークが慰める光景を（ティアマットだけが）見ながら、残る最後以外の順番を決めた。

そして、その最終的な順番はステラ、ゲルト、ティアマット、ハイス、ラスティの順となった。

「よし！ それじゃあ行つくよお！」

その元気を表すような灰銀のショートヘアの輝きを携えて、ステラが詠唱に入る。魔石を握った左腕を、案山子に向かって突き出す。詠唱と共に、小さな赤の石片は浮かび、輝き、小さな魔法円を形作る。

「s a k t i e , v e l k e s o m h a i l t o r t e (描こう、熱いその心のままに)」

呼びかけるような文面で詠唱された詠語コトバに答えるように、その魔法円の前に直径二十センチほどの火球が現れた。その火球は目標たる案山子を僅かにそれて、右腕に当たる部分を焼いて通過した。

その結果に、悔しそうに口を曲げるステラ。

「うう~~~~。外したぁ！」

「これなら、案山子の交換は要りませんね。では、次は僕が行きます」

励ますのでも無く、ある種の薄情ささえうかがわせるようにゲルトは言い放ち、自身の詠唱に入った。その様子を恨めしげにステラは睨んでいるが、彼にそんな悪意が全く無い以上、責めることは出来ない。励ましの声をかけるべきなのか、ルームメイトのティアマトは少しなんだ???が、結局言わなかった。

ゲルトは、魔石を持った右手を何か透明な球状物体を持つように形作り、目を半眼にして詠唱した。

「V a r t e , I o a n t e z i o s e t u e (焼け、汝その熱を以って)」

曲がりなりにも武家貴族なのだろう。普段の温和なゲルトとはかなり印象がことなる印象を受ける詠唱だった。恐らくこのような文面で世界種たちと会話をしたら、彼らはゲルトを堅苦しい人間だと思っただろう。

右手の中に、直径十センチ弱の火球が現れる。ステラのものより規模こそ小さいが、その密度は高い。まるでハンドボールのように振りかぶると、その火球を案山子に向け投擲した。放物線を描いて案山子に直撃したそれは、瞬時に案山子を火達磨に包む。その様子を、ゲルトは満足げに見ていた。

「うん！　こんな感じかな」

そうして燃え尽きた案山子の跡に、新たな案山子を立てる。次はティアマットの順。

「次は…私」

そう言った彼女は紅い石を見つめ、強く握りその姿を掌の中に覆い隠し、胸の前に両の手で連れてくる。それを胸に押し付けるような体勢で瞳を閉じて、告げた。

「Soie amt hopicut, timusuta Yuke kolkokitaisoialcorikut daxis amaxu wio furashe（その祈りと願いは、何時しかアナタを請い焦がし…その尽くを塵と灰に帰すでしょう）」

彼女らしいと思える、そんな文面の詠唱。眼前には、今までの二人より複雑で大きな魔法円が出現する。その中心からは、直径にして一メートルはあろうかという火球が作り出されていた。ゆっくりと目を見開き、その火球を見つめる。

「a u i r e , a n h e (お願い、行って)」

その言葉に答えるように、火球は加速を伴って案山子を焼き尽くす。案山子の背後数メートルの地面にまで、余波の炎は焦げ跡を作っていた。

「な、なんちゅう火力だ…」

周囲の声を代弁するようなハイスの呟きに、振り返ったティアマットは照れたように頬を掻く。視線をななめにずらして言った。

「…えっと…うん」

そんな反応に力の抜けた一同は、気を取り直して新たに案山子を立てた。先ほどの地点は、アルバ先生が苦笑いで鍊金処置で焦げ跡を丁寧に消していつている。その行動を、チラチラと申し訳なさそうにティアマットは見ていた。

「さあて」

自分の番になったハイスは、魔石をペンに見立てたかのように空中に線を描いた。紅い光は、その軌跡を残し文字を作っている。くの字のようなそれは、ルーンだった。

「K a n o c i o (燃えな)」

メンバーの中で最短の詠唱で行われたそれは、数発の火の弾丸を生み出し、案山子を焼く。局所的に焼き落とされ、案山子が崩れ落ちる。ティアマットとは違い、技量をうかがわせるその魔術に、自

慢げにハイスは胸をはる。確かにその技量はなかなかのものだった。

そして出番はラスティに回る。立てられた案山子を見据え、ラスティは左手に魔石を握る。腕を力なく落とした体勢から、彼は詠唱した。

「O a l e x i o r a s s e (その意志は紅く)」

人差し指を案山子に向け、標準をつける。その指先に、三つの魔法円が球をつくるように描かれる。それは異質な式だった。異常に濃い色の赤い光が、球状に生成されている。

「a m u r h a l t a e r l a i e s i l f e n t (私の心は在らぬ軌跡^{みち}を駆け抜けよう)」

瞬間、熱量が収束された光球が打ち出される。それは案山子に当たると、其処を中心にするように球が膨張した。時間が経ち徐々に消えていった光の跡には、灰すら残さず案山子が消えた空間だけがあった。

驚く皆に振り返り、先ほどのハイス以上に誇らしげにしている。

「ま、こんな感じだろうな、これは」

「∴魔術、かあ」

‘魔術って何だろう？’ ステラが言った、根本的な様で普段誰も気にする事のないような疑問。魔術一つにしても個々人というだけでアレほどまでに差が出るというその日の授業であつたことに、彼ら∴ラスティ以外は疑問に似た何かを抱いていた。

ステラから発せられた質問に、まずはハイスがパンをほおぼつたまままで答える。

「式と詠語^{ゴトバ}で紡がれた世界の理’だっけか？」

「ごく一般にはそうですね」

そうゲルトが付け足す。そう言った‘人側の解釈’を聞いて、次はアークが発言した。此処最近、アークも一個人として話すことが多くなってきた。この日は少女の姿で化身していて、服装は薄い空色の長い髪に、ゴシッククロリータ調の服装？？？少女すがたの時のアークのお気に入り（？）だ。

「‘世界と自己の存在のつながりとそれをもたらす心の力’と、私たち精霊は魔術^{コレ}をそのように考えます。ですが、私たちのものと皆様方人間のものとは、大分様式は異なるようですね」

「一応私も、それに近い感じで教わった」

教会を中心とした‘世界主義’と呼ばれる魔術に対する考え方のものだ、ティアマットの言葉にラスティは付け足すように言った。∴ここまで来ると、言っていないのは自分だけ。皆からラスティに向けられる言葉は、容易に予想がついた。

「じゃあ、ラスティくんのところはとうだったの？　どんな考え方をしたの？」

その日見せた異様な術式が、その記憶に残っているのだろう。きっと彼の故郷は特殊な考えをしているに違いない？？？？？そんなステラの声が聞こえてきそうな表情だった。

ため息をついてから、降参だというように両手をあげて、‘正直に’、いうことにラスティはした。

「正直、俺の故郷でどんな考え方をしたかは知らんぞ？　でもまあ、俺はこう‘考えた’」

その言葉に、皆は興味深そうな視線をラスティに送る：ただ、アークだけはその表情を強張らせ、緊張の面持ちでいた。それに皆は気付かない。

「あくまでも俺個人の‘考え’、だからな？　深く考えないでくれよ？」

その言葉の、本当の意味を理解しているのは、彼の使い魔であるアークだけ。アークがその姿勢を正すのを見て、息を吸いなおして…告げた。

「実現された夢。空に描かれた理想。‘魔術の根本はそうである’、と、俺は考えている」

「なんだそりゃ？　それじゃあまるで、この世界が神の夢ん中みてえじゃねえか」

そう言うのけて馬鹿馬鹿しいと言うハイスに、ラスティはただ

苦笑いを浮かべるだけだった。

第十五小節「事の前の事」

「あれ、から意外と経ってないんだよな、これが」

「そうですね……」

数日が経ち、もう日課のように放課後の屋上に集合するようになっていたラスティ、ティアマツト、ゲルト、ハイス、ステラの五人ここに集まっているときだけは、アークも実体化するようになっていた。最初に実体化させたときのハイスとステラの驚いた表情は、まだ記憶に新しい。

「お、今日も早えなあ」

「ハイスさんが遅いんですよ」

そう言い合いながら、二人並んで屋上にハイスとゲルトが姿を現した。今日は神学の授業のあったゲルトは、魔術師然としたローブのままで今日は来ていて、ハイスは何時もの格好であった。その口ぶりから、ハイスのことを待ってゲルトは遅くなったのだろう。そして、そのすぐ後ろにはティアマツトとステラの姿も見えている。

「お、やっと皆揃ったみた……ステラ？　‘ソレ’、なんだ？」

今日のステラの手には、夕食以外にも別の……何やら筒状にまとめた紙を持っていた。皆が弧を描くように座ると、待ってましたと言わんばかりに仰々しく話し出した。

「ふっふっふ……良くぞ聞いてくれましたラスティ君！」

そうして勢いよく見せたのは、‘新聞’……この世界は、個人の移動手段なんかはまだ馬に頼っていたりするのに、妙なところで技術が発達していたりする……その一面には……

「あ？　なんだ？　‘遺跡’？」

「そう！　そう！　この学院から結構近いところにね？　遺跡が見つかったらしいの！」

そう嬉々として顔を紅潮させて話すステラは、将来学者になるのが目標らしい。なんでも尊敬する学者が居るらしい。

「それでねそれでね！　どうやらその遺跡にねあの‘アルナ・アマルティア’が来るらしいの！」

「へえ、あの最年少で導師号を持つあのアルナ博ですか。確か僕たちと同じ年でしたよね」

突然出てきた未知の人名に、ラスティとアーク、ティアマツトは首をかしげている。どうやら他三人の様子を見る限り、その人物は有名人であるようだ。それに気付いたステラが、驚いたようにまくし立て始めた。

「ええ！　三人ともアルナ導師を知らないんですか！？　超有名人ですよ！？」

「俺は最近此処に来た人間だ」

「精霊にそれを求めないでください」

「えっと……」

三者三様の反応で答える三人。そして、ラスティとアークは、そう言ったことを後悔した。

二日ほど前、‘七年前以降の常識的な歴史の流れを知らない’、ということを経験した時に、それから日が沈みきっても延々と説明された時があったのだ。彼女の眼には、その時と同じ光が宿っている。そして彼らに、ここぞといわんばかりにステラは説明を始めようとした???

「あれ？ この日って確かクラス合同での体技指導の日じゃありませんでしたっけ？」

???その時、（空気の読めない子の）救いの手が差し伸べられた。

この（話を聞かなくて済む）好機を掴もうとするラスティとアークは、ここぞとばかりに話題を転換しようとした。ティアマットは置いていかれ気味である。

「体技指導？（アーク、お前はカリキュラムを全て記録していた筈だ。速攻でこの質問に答えろ。だが程よく不十分にだ）」

「（イエス・マスター）えっと、そうですね。三クラスほど合同で、競技場の方で護身術レベルで体技指導があるそうです（どうでしょう、マスター）」

「（上出来だ）あれ？ 俺は体技とってるからいいが…クラス全員なのか？」

「はい。これは、最近はどうな職種でも、護身術レベルの体術は必要だろうという学院側の教育方針があるからだそうです。過去の戦乱での教訓が生かされているようですね」

その場の雰囲気を読み込んだ二人のやりとり。先ほどの話題からこの話題に転換することに、ラスティとアークは成功していた。

「げ！ マジかよ！ オレ体術なんてやだぜ？」

意外にも一番難色を示したのはハイス。印象的にスポーツ万能そうな彼ではあったが、意外なことに体術には自信が無いらしい。そんなハイスに、あきらめましょうとゲルトは言う。やはり一応は武家貴族の出ということなのだろうか。きっとそれなりにできるのだろう。

「あゝあ、雨でも降んねえかなあ…。」

そんな希望的観測を打ち砕いたのはゲルトの一言。

「ドームを覆うように雨避け用の結界式が土地にはられているのでどっちにしろ中止はありませんね」

そう言われて沈むハイスをからかいつつ、この日も五人は夕日が沈むまでこの屋上で語らっていた。

彼らは気付いて無かったが、この日話題が変わるまで、ティアマツトは会話に入ってくることは無かった。

????????????????

どこか、少しだけ遠くの場所で。

曇天の暗がりの下で、全身黒で身を包んだ男と二メートル半はあろうかというヒトガタが対峙している。その周囲は土肌が見え、草木がえぐられている。ところどころにある砕かれた石が、これまでに行われていたことの次第を語っていた。

「O^{オー} a^{アイレ} i^{ファイネ} r^ネ f^{ジーン} e^ン e^ン x^ン e^ン n^ン?」

そうつぶやいた男の左手には、陽炎を纏う剣が握られている。その鍰は楕円状で、やや長めの刀身は細く、そしてやや歪曲している。この大陸では全く見られない意匠だ。

男が駆ける。踏み切られた地面は深く抉れ、その踏み込みの強さをうかがわせる。その加速度は人が可能なそれを凌駕している。それに呼応するように、ヒトガタに握られた巨大な得物が男を迎撃に奔る。

「甘いんだよな、これが」

頭上から重力加速を伴って振るわれるそれは、人が受けようものなら一撃で骨身を粉碎するであろう。だが、男はその軌道の真横に進路を取ることと容易くかわしてしまう。ただ無駄に地面に全運動エネルギーを注ぎ込んだだけのそれは、余りに致命的な隙になっていた。

男とヒトガタの影が交差し、ヒトガタの左腕が肩との結合を失い、地に落ちる。男は反撃を警戒してすぐさま横に跳ねた。その空間を横なぎに暴力が通過する。

距離を開けての着地。地面を削るように停止した彼は、その口元に笑みを浮かべて告げた。

「アルゴリズムの単純なお前なんかには、負けるわけなんざ無いだろ

うが！」

それは、事の前のことだった。

「もう、分かっていると思うけど、私前は教会に居たんだ」

いつものように屋上に来ていて、この日はラスティとティアマトが早く来ていた。アークは実体化せずに主人の後ろに控えている。その日は珍しくティアマトから話が始まった。だがそれは、世間話などではなく過去の告白。

「私は孤児だったの。でも、教会の騎士の人に拾われた」

まるで大きな独り言のように夕日を見つめたままで話す彼女に、ラスティはただ相槌を打つ。仰向けになり流れる雲を見ていた。

「歌は、そのときに覚えたの。ミサの歌が、好きだった」

「じゃあ、聖歌隊に居たのか？」

体を起こしてそう質問を返したラスティに、ティアマトは首を軽く横に振ることで答える。何時もよりもひざを抱え寄せて座っている彼女の横顔を、彼女の髪は隠している。

「ううん。入、れな、かった」

その答えは本人の意思とは関係なくそうだったことを示している。いつもと同じ濃紺の服に、皮手袋の指が少しだけ食い込む。うつむき加減の彼女の視線は、夕日を捉えてはいない。

「騎士見習いだったの。剣騎士^{セイバー}だった。養父の騎士の下で、そうしてきたの」

そう告げた彼女は、片腕を：その手にはめられた皮手袋がよく見えるようにラスティ側に手を伸ばす。使い込まれたであろうそれは、特に小指の部分が擦り切れている。

「私の手は傷だらけだから、こうしてるの。やりすぎだって義理の兄に言われてた」

肉刺^{まめ}と傷跡のついた手を、普通今の年頃の少女ならば持たない。

そんな違いに、彼女は劣等感を感じていたのだろうか。

夕日の光であっても、感情を押し殺したその声に温かみの取り戻させることはできていない。

「訓練が終わってからは、人気の無い時間にその聖堂に居たんだ。その歌唱指導のシスターは、いつもその時間帯は聖堂を空けてたの。戻ってくるころまで、そこで歌ってた」

紅い目を持った彼女に、本来教会に居場所などあるわけが無い。拾われた時点で殺されてもおかしくは無かったのだ。それが分かっていたからこそ、彼女はそうしていたのだろう。

「時間になってからは、聖堂の上に隠れて、こうやって座りながら

ずっと歌を聴いてた」

聖堂内で聖歌を聴くことさえ許されない。そうして隠れて聴くほどに聴きたくても、それは紅目ティアマット・マキナには許されなかった。

「だからかな？ 赤は嫌いなのに、どうしても夕日は嫌いになれないんだ」
あのアカ

そう言う彼女の視線は、いつの間にか夕日に向かっていた。

結局その日、ゲルトたちが来てから、彼女は何も話すことは無かった。

第十六小節「事は突然に訪れて」

三クラス合同による体技指導の日、この日の天候は、乾燥気味のこのあたりとしては珍しく雨であった。いつもは蒼い天に暗灰色が漂っていると気分も同じようになってくる……それはおそらく皆が思っていることだろう。

ラスティたち四組の生徒たちは、三組と五組と合同で体技指導が行われる。午後に各自で本棟から北西にある競技場に集合することになっていて、現地で各クラスごとに委員長が点呼をとり、担任に報告することになっていた。

全体が整形された黄土色の石材で構成されておりそこには目立たないように素材と同色の‘式’が刻まれている。これは落ちてくる雨を逸らし、雨天時にも問題なくそこがしようにできるようにとされたものだった。故に式を編むためその全体的な構造は円筒形になっていて、中央部の広場を見下ろすように観客席が囲んでいる。俗にコロッセオと呼ばれていた。

その競技場の中では、百五十人ほどの生徒たちと二人の教員が居る。広い競技場の半分も埋め尽くされていないが、それは各クラスが集まるのに障害なりえるものでもあった。各クラスは集合に手間取っている。広くてどこに集合すればいいのか分からないのだ。

「おおおおおおおい！ 一年四組はここだあああああ！」

そんな中、その人ごみに向かって叫んでいるのは、ラスティハルト。彼らのクラスは、他のクラスに比べて集合は早かった。彼の髪の色は黒、これは全く居ないというわけでも無いが珍しい色で、百八十二という身長もありクラスの目印になるには十分だった。だが、単に目立つというのであれば、一年三組の委員長ポラリスの方が上だった。宝石光沢に近い輝きを放つエメラルドグリーンという人の

色素を無視したその色は、ラスティ以上に目立っていた。四組の集合が早かったのは、ラスティが大声で叫んでいたことも大きかった。

「ら、ラスティさん。こんな近距離で大声を張り上げないでいただけないでしょうか！」

三組を整列させているポラリスは、耳が痛むかのようなそぶりを見せながら上目遣いでそう抗議する。ラスティが彼女と顔を合わせるのはこれで二回目のことであつたが、双子の兄のルームメイトということもあつてか、（彼女にしては）それなりに親しく話しかけてくる。

対するラスティは、同じ年であるならば誰だろうと親しく接する。ポラリスのような隣国の上位の貴族であつても物怖じしないため、その口調は親しい友人と話すときのようなものだ。

「ああいや、すまない。だがこうでもしないと早く集まんないだろう？」

確かに彼の行っていることは効果を發揮している。だがポラリスは貴族ということもあつて、そのような行動をとるのは流石に躊躇せざるをえない。彼の言い分はもっともだと思いつつも、肩を少し落とすような仕草をみせ言うことをあきらめた。

それから少し経ち、ようやく全員の集合が完了する。時刻を少し過ぎていた。

「よし！　ようやく集まったな？　あまり喋っていると時間が無くなるが、次からはもう少し早く集合するようにな！」

整列した生徒たちの前に立ち、そう叫ぶ四組の担任教師でもあるアルバ・アーキナム。そしてそれに続いて、その隣にたっていた男

性から説明があった。

「この合同指導の中で体技指導の模範演技を担当するゲイルだ。これから皆には……………」

その時、競技場内にあわただしく飛び込んでくる鳥が現れた。教員用の連絡用の使い魔である。足にくくりつけられた紙を、アルバが読む。その間にももう一人の教師は生徒たちに説明を続けていたが。連絡の紙を呼び終えたアルバが、もう一人の方に駆け寄る。その顔は、血の気を失っていた。

『何故俺にだけ言ったんだろう？』

整列し、先生の話が始めると、彼は昨日のことを思い返しはじめた。結局あれから、ゲルトたちが来ると口をつぐんでしまったティアマット。いつものように談笑に笑うその姿に、直前まで纏っていた雰囲気は残っていなかった。

『何か、俺は大切なことを忘れてる？』

そんな調子でラスティは、整列してからは先生の話を全く聞いていない。視線が完全に空の彼方だ。そうして集中を全くしていないことを、アークが諷めた。

「（マスター、教師の話を聞かないのはどうかと思います）」

「(いいんだよ、別に。だってs????????おい、なんか来たぞ?)」

ラストイの視線の先には、鴉のような鳥型の使役獣。その足に手紙らしきものをくくりつけているところを見ると、どうやら何か連絡用のものようだ。そしてくくりつけられた手紙を見て血の気を引かせていくアルバ先生の様子に呼応するように、アークからはあわただしく念話がよせられた。

「(マスター。競技場周辺に複数の反応があります。敵性反応です)」

そしてその言葉の真実を裏付けるように、教師から本棟への避難の指示がだされる。あわただしいその物言いと、アークからの深刻そうな雰囲気、ただ事でないことをラストイに理解させた。だが、その直後に放たれた言葉は彼の想像を超えていた。

「今日の授業は中止！ 全員本棟に避難しろ！ 墮^{オチガミ}嚙^{ガミ}が来るぞ！」

その言葉を待っていたかのように、軽い音が聞こえてくる。耳を澄ますと、それは確かに詠語^{ことば}を発していることをきいてとれた。

「katuke katuke, kiticheto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ) … katuke katuke, kiticheto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ) …」

その骨を打ち鳴らしたような呪詛は、競技場を包み込むように幾重にも重なって聞こえた。ラストイには理解できるその呪詛は、他の生徒には不可解な奇音にしか聞こえない。

「己^{コウベ}憂部だ！ 堕^{オチガミ}嚙に見つかったぞ！」

そう叫んだある生徒の視線の先には、皆が入ってきた入り口とは反対側の選手入場口から湧き出てくる異形たち。青白く餓死した死人のようにやせ細った人型の外見、だがその頭部は膨れ上がった風船のような形状をしており、血管らしきものが浮き出ている。その膨れ上がった頭部には、一つ目だけがついていた。

口が無いその姿にも関わらず、それらはみな同じ呪詛を発し続けている。

「k a t u k e k a t u k e , k i t i c h e t o (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ) …… k a t u k e k a t u k e , k i t i c h e t o (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ) ……」

それは、己の憂う部位、???己^{コウベ}憂部と呼ばれるもの。世に祝福されず、世界から加護のある言葉???詠語???による名を与えられなかった、否定された存在。

堕^{オチガミ}嚙が使役する使い魔のような魔物に分類される存在で、周囲の情報^{オチガミ}を親に伝える役割を持っている。

つまり、己^{コウベ}憂部に見つかったということは、堕^{オチガミ}嚙に見つかったのと同義であった。

恐怖に駆られた生徒は、裏返りかけた声でさらに大きく叫ぶ。

「二、逃げろ！！ 食われるぞ！」

体技の訓練とあって、普段装備している魔術品は最低限のもの。その普段みにつけていた武器なりえるものを持っていないという恐怖も相まって、誰かのあげた叫びに皆恐慌してしまう。

「う、うわあああああつああ！」

その反対側、己^{コウベ}憂部の侵入口とは違う方向に、生徒たちは我先にと駆け出した。

「katuke katuke, kitcheto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ) … katuke katuke, kitcheto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ) …」

「katuke katuke, kitcheto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ) … katuke katuke, kitcheto (喰らえよ喰らえ、我等を満たせ) …」

骨を打ち鳴らすような、乾いた‘喰らえよ喰らえ’の声。数えるのも億劫になるほどの己^{コウベ}憂部から発せられるその呪詛に、生徒達は恐慌して我先にと逃げ出す。

三組、四組、五組の生徒達は、自分達が並んでいたエリアから最も近い出入り口へ逃げ込む。三組は左手に見える通路へ、五組の生徒達は反対側に見える通路へ、そして四組の生徒達は??????

「(マスター! マスター!)」

何かに気付いたとみえるアークが、ラスティの脳内に盛大に警鈴を鳴らす。クラスメイト達の後方を走っていたラスティは、その速度を弱める事無く反応した。その直後、アークから帰ってきた答えに、ラスティは驚愕する。

「(この通路は、司会席直下の用具庫へのもの……ここから先は‘行き止まり’です!!)」

第十七小節「願いは十字にかけられて」

「（この通路は、司会席直下の用具庫へのもの……ここから先は行き止まり、です！！）」

その声を聞き、クラスメイトを呼び止めようとしたときには、もう彼らは行き止まりに行き当たるほどに突き進んでしまっていた。彼らを呼び戻し、別のルートで逃げるにはもう時間は無い。三桁に及ぶ己^{コウベ}憂部の群れたちが、距離をのこり百メートル強ほどにして迫っている。

講ずるべき手段が思い浮かばずただ焦るだけのラスティに、担任の教師の声が届いた。ギリギリまで足止めをしていたのだろう。すぐ後ろに己^{コウベ}憂部の群れを引き付けながらこちらに駆けてくる姿が見えた。

「ラスティハルト！ 門だ！ この門を閉めるぞ！」

「（マスター！ 先生の方角を見て左方向、あれが恐らく門の開閉の制御術式です！）」

アルバ先生の声に答えるようにアークが制御式の在処をラスティに告げる。それに返事をする時間も惜しまないといわんばかりに黙して駆けた。

その制御装置は魔術の心得の無いものでも扱えるような簡略なもの。‘閉’の文字が書かれたボタンを叩くように押し込む。そして左右から、分厚い石の壁が迫ってくる。閉じるギリギリのタイミン

グに間に合わせようと、担任教師は走る速度を引き上げる。

「おっしやあああああ!!」

滑り込むように隙間に飛び込むアルバ。そしてそのすぐ背後で石の扉は重苦しく、何体かの己憂部^{コウベ}を両断して閉じる。だが、こちら側にたどり着いたそれらの中には、なんの損害も無く入り込んだ個体も僅かに居た。その姿を見て盛大に舌打ちをしたアルバが叫ぶ。

「くそ、入り込みやがった! 行けるか、ラスティハルト!」

その返事を待たずにアルバは地を蹴った。一跳躍で一体の己憂部^{コウベ}と開いていた距離をゼロに、そして跳躍したまま腰ダメに構えられていた右腕を打ち出す。その攻撃に反応する間も無く、その拳は膨れ上がった頭部に食い込み、己憂部^{コウベ}の体からその部位を吹き飛ばす。崩れ落ちた瘦躯は体を砂にして崩壊した。

そのままヒット&アウェイの要領で襲撃と離脱を繰り返すアルバ。それを脅威に感じたかは定かでは無いが、半数ほどがラスティの方に向かってくる。アークの補助を受けて大きく後方に跳躍した彼は、一応のためにと幾分か持ってきていた魔石をジャージのポケットから取り出す。皮肉げに叫び、先の質問に回答した。

「こちとら実戦経験は無いですがね!」

そう叫んだ時、背後から誰か駆けてくる音が聞こえ、ラスティに向かつて叫ぶ声が聞こえた。その声がティアマツトのものであったことに驚き、思わず詠唱を忘れて振り返ってしまう。

「???????ラスティ、手伝う!」

そうして彼の隣で止まった彼女は、肩で息をしている。恐らくここまで全力で走ってきたのだろうか？？その彼女の視線は何時に無く鋭く、紅い右目の眼光は冷たく己憂部を見据えている。いきなりの登場で驚くラスティの隣で、彼女は自身の胸元から、今までも首に掛けていたであろう十字のネックレスを取り出し：それを勢い良く引きちぎった。チェーンのパーツが目標の足元に飛び散る。

そして、教会騎士団特有の武装の開放詞が彼女の口から告げられた。

「E-l-o-o-a-u-s a-h-s-i-u-m-t d-e-s-t (アナタたちは灰と塵に還りなさい)」

歌う時のものとは違う冷たい声に、十字架は光り輝いて反応する。その光は伸びるように拡張し、‘剣’の姿をとった。

長めの柄に、彼女の身長近い刀身。一少女が用いるには不釣り合いな、^{ハーフアンドハーフソード}片手半剣が、その右手に握られていた。その剣をゆっくりと正眼に構え敵を見据えたティアマットは、ラスティに手短に作戦を通達した。

「私が壁になる。ラスティは狙撃系の魔術で援護して」

それが出来るかという問いも無く、その小さな背中中は飛び出す。瞬時に接敵し、両の手で得物を水平に振りぬく。それは先頭の敵を捉え、吹き飛んだソレは壁に叩きつけられた。未だ勢いの残る剣を、ベクトルを変更して頭上まで持ち上げる。すでに捉えられていた次

の標的に、それは叩きおろされた。

その剣閃には、いまだ未熟さが伺える。だが、瞬時に二体の敵を葬って見せたその小さな背中中は、騎士を彷彿させるには十分であった。

「通さない」

彼女らしい短く告げられたその言葉には、背に命を庇う騎士の精神が見えた。

????????????????????

突然現れ、突然告げ、突然駆け出す。狙撃魔術が可能かどうかを聞きもせずに駆け出したそのそっかしい行動は、一応信頼されているのだろうか。ラスティに苦笑いをもたらす。アークに指示を出すその表情は、始終緩みっぱなしだった。

「はは……たく。何なんだかなあ、アイツは。(アーク、索敵と戦況把握を最優先。俺のサポートは二の次でいい)」

「(了解しました。マスター)」

指示を出したラスティは、左手を突き出し半身に構える。右手は小さな魔石の粒が握られ、力なく降ろされている。半眼に標的をにらみつつ、小さな声で詠唱を始めた。

「Fantaxia, sept redint. Soie me
im zia: Qeisi xeeni vini je cok
isuta (幻想式、構築開始。素は記憶に準ぜ……鳴弦は空に響か

せよう)」

それは、異質な詠唱……いや、‘詠唱’^{うた}と呼べるべきかも怪しい、そんな暗号^{コード}だった。静かに直立するラスティの口から紡がれるその詩には旋律も韻律も存在せず、ただ作業のように告げられるコトバが在るだけである。

告げられたその瞬間、突き出された左腕の中に青い光が現れる。それは上下方向に伸び、大きな和弓の形を作り上げた。右手に持つ魔石を実体の無い弓に番えると、そこから同質の光が発せられ、光の矢を生み出した。

それら光の弓矢の非実体を証明するかのように滑らか過ぎる会^{フルドロー}。その引き絞られた鏃^{コウベ}の先では、既にティアマツトが三体目の己憂部の頭部を砕いていた。

その防ぐ腕^{アタマ}諸共急所を薙ぎ払うその一撃は、小さな体軀からは想像も出来ないほど重い。だがその大振りな一撃は、他の敵との距離が近い中で行うには余りにも拙かった。振りぬくフォロースルーの硬直で動けない彼女の側面から一体が迫る。その振り上げられた腕に、ラスティは慌てて標準をあわせた。

「(あんの馬鹿……) Terxentis. Balfesip
tem. Olxeex (目標補足。射線設定完了。貫け)」

弓の形をした圧縮術式から放たれた矢は、寸分の狂いも無く標的の腕部に命中。その部位を奪い去っていく。突如失った自身の腕に困惑したのか?? 動きを止めた己憂部^{コウベ}に、ティアマツトは振り返りざま引き戻した剣を叩き付けた。そこで僅かに距離をとり、視界に全ての敵を収め直す。

「お願い。背中、任せる」

そう告げて再度攻撃を仕掛ける。ラスティは彼女に言われる前から既に次の矢を番え^{つが}終えていたラスティは、集中を途切れさせないため、第二射を以って回答とした。

「Nect baren levair. Terxentis. O
lxeexe (次弾装填。目標補足。貫け)」

ティアマツトの一撃必殺志向の攻撃が生む隙の、その間を縫うように閃光が援護する。彼女はただ力任せに薙ぎ払い、彼はただ近い順に打ち抜く。ただそれだけの二つのワンマンプレーが、傍から見ると連携しているように見える。ヒットアンドアウェイを繰り返しているうちに、全部で二十数体居た己^{コウベ}憂部達はそのことごとくを塵に帰されていた。

戦闘が終わり剣を収め、式の弓を消したラスティとティアマツトの二人の元に、担任のアルバ先生が歩み寄る。疲れを感じさせないその表情は、どこか無理をしているように感じさせた。

「ふう、助かったぜ、ラスティハルト、ティアマツト」

グローブを嵌め直し、全身を覆う傷一つ無い赤褐色のローブのままで、その教師は現れる。今も浮かべている、普段のやる気なさげの彼からは想像も出来なかったが、短詠唱の魔術と体術のみで効率よく己^{コウベ}憂部を葬っていくその姿は、若いながらも教師として職に就いていることを不自然に思わせないものだった。

「そんな事無いですよ。きっと先生だけでもやれました。」

「阿呆。オレが疲れるだろうが」

ぶっきら棒に言っただけの彼は、すぐに顔を険しいものにさせる。そして声色を落として告げた。

「あの場に居た教師で、礼装を、^{もつて}装備して、いたのはオレだけだった。救援を呼びに行かせたが、ヤツラが現れたのは北西側から：本棟や寮の方も恐らく襲撃を受けているはずだ。ここに救援が来るには幾分か時間がかかる」

そして二人の方に顔を向ける。その碧色の視線が二人に緊張感を生む。ゆっくりと、彼は口を開いた。

「……そして此処には一番最初に己^{コウベ}憂部どもが襲撃してきたらしい???遠見係の職員から届けられたあの手紙は、ここに向かってくるヤツラの群れの存在を警告するものだった???そしてオレらは此処に居る…この意味が分かるか?」

「^{オチガミ}墮嚙に一番最初に獲物認定されたのは???じゃあ!」

「そうだ、恐らくヤツは此処に来る。そして此処の石扉はヤツの臂力に耐えられないだろう……オレらはヤツと闘^ヤりあわなくちゃならん」

出来るか? そう、言葉に出さずに問うてくる。

だが……

その言葉に回答する暇も与えられることは無く……^{オチガミ}突如、壁に金属塊を叩きつける音が響いてきた?????墮嚙^{オチガミ}がとうとうたどり着いてしまったのだ。

第十八小節「囓むことを堕ちたもの」

「おい！ どういうことだよ！」

「他に、他に道は無いのか！？」

「まだ、まだ死にたくない！」

一年四組の生徒達が逃げ込んだ道？？？それが地下に向かっているという事実気付くことなく進み続け、到着点が逃げ場の無い行き止まり（闘技場の地下）に気付いた彼らは、恐怖に混乱していた。胆の据わっている生徒も居るが、混乱の中に巻き込まれ皆自分がすべきことを見失っている。

そんな中、傍観者オブザーバーのように遠目に見つめている少女の姿がある？？？ティアマット・マキナだった。彼女は、その場に居た人数を数えている。

「……五十人中…私も入れて四十九人」

足りない、内心でティアマットは焦っていた。誰か逃げ遅れたのだろうか？ あるいは他のクラスに混ざったのか…誰が足りないのかを照らし合わせるため、必死で心許無い記憶の名簿を照らし合わせる。

誰アノヒトが居ないのかは直ぐに分かった。クラスで最も彼女と交友が深い生徒が居なかったのである。

「ラスティが居ない…」

「なに？ おいマジかよ」

その言葉に反応したのはハイスだった。数少ない胆の据わった生徒の一人で、ゲルトを引き摺って人の輪から抜け出していた。密集した人の空気の中に居て気分が悪くなったらしい彼を看病しながら、見上げてそう聞いてきた。ティアマツトは首肯で答える。

「きつと、足止めに残ってるのかもしれない」

そう答えるなり、今まで来た道を駆け戻り始めるティアマツト。焦りがありありと見て取れるその背中を、ニヤニヤしながらハイスは見守っていた。

「全く、ずいぶんとお熱じゃあねえか」

そして振り返り、この事態にどう収集をつけようか思案し始めた。そしてそれは、ハイスが考える必要も無く……自分達が来た道から響く轟音によって成された。

その音に、皆が総じて総身を強張らせる。

ヤツが来た。

そんな言葉を発することさえ出来ず、ただただ震えていた。

????????????????????

一つ音が鳴り響くごとに、壁の亀裂が大きくなっていく。硬化刻

印を全体に刻まれたソレを、魔術を用いずに物理的力のみでねじ伏せる：その想像を絶する運動エネルギー量に、その場に居た三人は戦慄した。冷や汗を流しながら、アルバは黒髪の生徒達に問う。

「…お前ら、オチガミ堕嚙オチガミについての知識は？」

「（この世のどんな）人より持っている自身はあります」

「それなりには」

そう答えた二人に頷き、再度確かめるように問いかける。

「じゃあ、何故オレがお前ら以外に援軍を呼びに行かせないか分かるな？」

その問いに、首肯だけで二人は答える。もう、あと二、三撃で崩壊するであろうところにまで亀裂は広がっていた。アルバが拳を握り、ティアマツトが剣を構え、ラスティは魔石を握る。アルバが、壁の崩壊の直前に叫んだ。響く打撃音が、耳の感覚を少し弱めていたのだ。

「いいか！ ‘ 気をしっかり保て ’ ！ 今のオレ一人じゃ絶対倒せねえし、守ってやる余裕なんぞ無いんだからな！！」

その言葉が言い終わると同時に、石の扉は碎けた。

「????????????????????????????????!!!!!!」

空気とは違うモノを媒体に、その叫び声が彼らを襲った。

????????????????????????????????

砂塵の奥から、巨大な人影が姿を現す。その体長はおよそ二メートル半。

生きたままで、材料' になった人間の形をとどめているが、その手足の筋肉組織は異常な肥大化を見せており、先ほどの轟音がその腕に握る得物である^{デツノカタマリ}ことを裏付ける。それは一本の腕で握られていた。

かつては剣であつたであろうソレは、幾度も石の壁に打ち付けられたことで刃が完全に潰れ、剣としての機能は既に持っていない。だが、その筋力から予想される一撃の重さの前には、そもそも武器に刃をつける必要性があつたのかどうかさえ怪しい。

そして頭があるべき場所には、複雑な幾何模様が刻まれ鈍い金属光沢を放つ、拘束具^{ノロイ}が付けられている。首の無い像のようなシルエットだつた。

これが、墮^{オチガミ}嚙' ??? 噛むことを墮ちた者??? かつて七年前の戦乱で使用され、国中の人々を恐怖に陥れた人口魔獣。人を殺す兵器という、その目的は知られているが、いったい誰が創つたのかは、設定^{知られて}されて' おらず、未だ謎に包まれたままでいる。ただ隠された研究所に資料が残されているだけであつた。

????????????????????????????

「katuke katuke, kiticheto (喰らえよ喰

らえ、我等を満たせ）…katuke, katuke, kitcheto（喰らえよ喰らえ、我等を満たせ）：katuke, katuke, kitcheto（喰らえよ喰らえ、我等を満たせ）…katuke, katuke, kitcheto（喰らえよ喰らえ、我等を満たせ）…」

オチガミ 墮嚙の後ろから、己憂部たちが入り込んでくる。だがそれは、決して彼らに襲い掛かってくる事は無く、爪を食い込ませ壁を這い天井に付き、その膨れ上がった頭部の目で監視する。オチガミ 墮嚙の使役獣に過ぎない彼らは、本体の狩の時にはこうして周囲を取り巻くだけ。三対一というこの状況は、オチガミ 墮嚙にとって数で押し切る必要が無いのだ。

妙に新しい薄赤い肉色の左腕を見て、アルバが憎々しげに言った。

「くそ！ 左手一本切り落としただけで、どっかの馬鹿が逃がしやがったな！」

そういうアルバの顔には冷や汗が流れ、その表情はどう見ても強がりにしか見えない。いや、強がれるだけでも流石といえた。その斜め後ろに居る二人は、逃げ出さないようにするだけで精一杯でしかなかった。

「（マスター！ お気をしっかり！ 飲み込まれてはダメです！）」

戦闘経験があるティアマツトですら、その「現象」キョウフ に対してそうなのだ。後方支援するだけの実戦経験を積んだだけのラストィは、アークの必死の呼びかけでかろうじて保っているだけである。

「これが…、共振現象、か…流石にきついんだな…コレが」

共振現象。ただ肉体的に異常に強化された‘だけ’の墮^{オチ}噛^{ガミ}が、幾人もの戦士と人々を狩ることが出来た最大の要因。

強すぎる感情が、外向きに発せられた異常な感情の震えが、空气中の魔力を震わせ対象にその感情の猛りをぶつけるもの。古くは殺気とも呼ばれていた。

「……………」

叩きつけられるのは飢^{タベ}餓^{タイ}感。拘束具でむき出しにされた本能と、喰らっても喰らっても満たされる事の無い空腹。肥大化され、魔術的に増幅されたそれはいかなる戦士も動きを鈍らせ、ことごとく狩られていった。

これが曲がりなりにも実戦を経験した者でなければ、戦力になるどころか失神していたかもしれない。

足竦む彼らに、墮^{オチ}噛^{ガミ}が一步を踏み出した。

第十九小節「墮ちたカミは神秘を纏うか」

「ティアマツト、オレと一緒に前衛だ！ ラスティハルトは下がって援護しろ！」

一步踏み出した墮^{オチガミ}嚙に反応し、アルバが叫ぶ。散開した彼らの中央には、鉄塊の一撃が振り下ろされた。衝撃で飛び散る石片が、その衝撃を物語っている???直撃しようものなら容赦なく挽肉にされるだろう。

左右挟み込むように移動した二人とその中央の墮^{オチガミ}嚙を視界に収め、ラスティは距離をとる。右手に先ほどよりも大きな魔石を持ち、先ほどの弓の魔術の構えをとった。

「（アーク、周囲の己^{コウベ}憂部どもは無視しろ。魔術行使のサポートを頼む）……Fantaxia, sept redint.（幻想式、構築開始。）」

「（了解しました、マスター）：Fantax-ea, sept fantc（幻想準式、接続開始）。」

詠唱を唱えたラスティの声に、アークの声が重なる。ラスティの詠式と同じような様式で重ねられるその詩は、主の魔術を直接支援するものだった。憑依に限りなく近いその行動は、高位の精霊だからこそ出来るもの。ラスティの姿に、僅かに陽炎が重なる。

「Soie meim ziea：Qeisi xeeni v
inije cokisuta（素は記憶に準ぜ：鳴弦は空に響かせよう）」

先ほどのものよりも澄んだ輝きを見せる弓状圧縮術式、蒼穹、
青空の名を冠するにふさわしいその色に、矢が番え^{つが}られる。

赤（火）、青（水）、黄（土）、緑（風）：そのいずれにも属さない非実体の概念のカタマリ。薄い青は水かと思われたが、そこに液体は存在しない。

「Terxentis（目標補足）」

静かに告げるラスティの網膜の裏には、鏃から標的を結ぶ線が見えている。実際には見える事の無い魔術的な光学照準^{レーザーサイト}は、射撃の心得の無い彼を一流の狙撃手に変えていた。
手が、離される。

「Olxeexe（貫け）」

そう命令を与えられた矢は、線^{ライン}の上を寸分も違うことなく疾走する。胴を狙ったその一撃は?????その肉体に到達すること無く霧散した。細かく砕かれえた硝子のように光り、砕け、その矢はことごとく幻想に還された。

「!!!」

「……まさか……」

目の前で起きた現象に、ティアマツトは息を呑む。肉体が強化されただけであるはずの墮^{オチガミ}嚙。魔術に対する抵抗力こそあれ、魔術を霧散させてしまうなど考えられなかったのだ。

だがラスティは、その原因が分かっていた。故にそれほど驚くこ

となく、また別の矢を番える行動を取り始めている。動揺を見せる
ティアマツトには、叫び声でアルバが回答した。

「あの体表にこびり付いてるのは魔石だ！ ヤツは神秘層^{ベール}を纏って
やがる！ 中途半端な強度の魔術じゃ、ダメージなしで消されるぞ
！！」

堕嚙^{オチガミ}の体表には、濁った白色の結晶が覆うようにこびり付いてい
る。恐らく今まで活動してきた範囲で、自然に体表に魔石が結晶化
するようなことがあったのだろう。普通人間なら死に至るものだが、
相手は魔獣化された元人間。それを神秘の層^{ベール}として纏うことが出来
ている。体に纏わり付いた濃密度の魔力が、強度の無い幻想を打ち
壊すのだ。

故に求められるのは規模（量）ではなく強度（質）。大掛かりな
魔術だろうが、そこに強度が伴わなくては星の数ほど撃とうとも堕
嚙^{ガミ}に届くことは無い。

「……ふざけんじゃないぞ、魔術きかねえ奴をどうやれってんだよ
……」

周囲に聞こえないように、アルバがそのように小さく悪態をつく。
通常、魔術による攻撃が有効かつ最も被害の出ないものだとされて
いる魔獣であるが故に、魔術が効かないという事態は想定外であっ
たのだ。

堕嚙^{オチガミ}がゆっくりとティアマツトの方に向きを変える。
拘束具の中央が？？紅い光を放った。

「?????????!」

強い共振波が、ティアマツトを襲う。その突然の感情の密度の変

化に一瞬反応が鈍ってしまった彼女を潰そうと、巨大な鉄塊が襲い掛かる。辛うじて後方に強く飛ぶ事で事無きをえたが、無理な跳躍がその体勢を乱す。致命的な隙になっていた。

「阿呆！ ヤツは攻撃対象決めたときにそいつに更に強い感情ぶつけるんだ！」

その振り下ろした姿勢の墮^{オチガミ}嚙に、アルバが後方から接近する。体勢を崩したティアマットに追撃を仕掛けようとしていた墮^{オチガミ}嚙は、後方から迫るアルバが見えているかのように、床にめり込んだ鉄塊を持ち上げ、振り返りざまそれを振り下ろす。

後方が見えているかのようなその行動を予期していたように、持ち上げる動作を始めた段階でアルバは詠唱を始めていた。

「Waio tsa（唸れ！）！」

短く叫ぶと共に急停止、左手を前に、右手を腰溜めに：腰を下ろして正拳突き of 構えをとる。三つの魔方陣が右腕を軸にするように現われた。

振り下ろされる鉄塊。肥大化し頑強になった筋肉組織がもたらす力が、数十キロもの鉄の塊を片腕で軽々と振り下ろされる。自分の攻撃範囲内にその重量物が侵入する直前、絶妙なタイミングをもってアルバが叫び、右腕を繰り出す。

「Varlen（爆ぜろ）！」

鉄塊の側面をアルバの右腕が捉え、閃光。爆発音と共に左方向に逸らされたその一撃は、アルバから十センチも離れていない場所に落下した。

その隙を好機と、アルバが右腕を突き出しつつ跳躍。その一撃は

鳩尾に食い込む……だがそれは致命にはほど遠い。

「って、クソ!!」

次の瞬間、後方に飛び去るアルバ。その彼を、太く隆起した右足が襲う。その一撃に吹き飛ばされた彼は壁に打ち付けられたものの、未だ戦意を失わずに立ち上がった。そのローブは今の攻防で破れ、その意味を成していない。ソレを理解したアルバは、ローブを地に捨て去った???その下もまた赤褐色のシャツで、その下には鍛えられた肉体と…金属で構成された右腕が見て取れた。

「っコノ! 地味に高えんだぞこのローブ!」

冗談半分そんな悪態をつく彼は、ややふらつきながらも戦意を失っていない。彼は二人に呼びかけた。

「ラストihalトはヤツの足元の床を狙え! デカイ魔石は温存している! ティアマットはオレとアイツで作った隙を突いて斬れ! 魔術主体のオレらじゃ致命傷を与えられん! さっきので少しは慣れただろう???いや慣れろ! 攻勢に出んとやられるぞ!」

「「っはい!」」

アルバの渴に返事を返す二人。
そこから本格的な戦闘だった。

????????????????????

地下の用具庫の中、四十八人の生徒達が身を寄せ合うようにして

一塊になり座り込んでいる。先ほどから内部を照らしてい魔石灯が、やや湿ったその空間を満たしている。そこに居る生徒達は、皆恐怖に体を竦めていて…その集団を包み込むように薄膜のようなドーム状の結界が存在していた。

ステラが知識として知っていた‘共振現象’。その効果範囲は非常に広く、一度発し始めたらモノによっては町ひとつを包み込んでしまうこともあったそうだ。それを聞いたゲルトとハイスが、皆から急いで魔石をかき集め、内部と外部の魔力共振を阻害する結界を張った。これもステラの案によるものである。

だがそれでも、薄膜のような結界の外から伝わる病的なまでの激情^{タイ}は生徒達に動揺を広げている。七年前、彼らがまだ十にも満たない年齢であったときにその感情を受けた事がある生徒が大半で、そしてそれと同数の生徒がトラウマに似たものを持ってしまっていた。この結界が無ければどのようなことになっていたか、それは想像に難くない。

ソレとは別に、床に重い物質を叩きつける音と、何か爆発する音も通路の向こう???上のエリアから伝わってきていた。それが何によるものかは分かっている。いつものような服装と違う動きやすいシャツとズボン…主に暖色で纏められたその薄い生地を握り締め、ステラは小さく呟いた。

「戦ってる…のかな？」

ここに居るのは四十八人。クラスの人数は、担任の先生を含めて五十一人。アルバ・アーキナム、ラスティハルト・ジーン、ティアマット・マキナ、この三人がこの場に居ない。その声には、ゲルトが答えた。

「そうだと…思います。きっとあの三人が、今、オチガミ堕噛と戦ってるんだと…そう…思います。」

影響の大部分をそぎ落としているはずのこの結界。僅かなその影響でさえも疎みあがってしまっている彼らには、この外で実際にオチガミ堕噛と対峙するなど想像もつかない。

「私達、どうなるのかな？」

その言葉に答える者は、誰も居なかった。

第二十小節「非常食」

「Terxentis. (目標補足) Varlen (爆ぜろ)！」

貫通力では無く固体の破壊能力を重視した矢が、ラスティの‘蒼穹’から放たれる。その着弾先は、今まさに踏み込まんとしていた^{オチガミ}墮囓の足元。足元が破碎し、その体勢が崩れる。

「OKだラスティハルト！ 上出来だ！ Ol tlienst
puel kuleruein (其は三度^{みたび}積み重ねん)」

右腕の義手、アルバの魔術礼装たる金属で構成されたその技手は、シルエットだけならば完全に人の腕だ。だが彼の詠唱と共に腕の装甲が浮かび、その間から紅い光りが漏れ出した。どうやら内部に魔石を大量に仕込んでいるらしい。

魔術式が腕を包む腕甲のように浮かび上がる。‘三度’の言葉によるように、それは三重に重なっていた。

「Ine kureia kurt pul ainetse fut
a (そしてその尽くを一度^{ひとたび}で打ち出そう)」

^{ドリエーネンアイン}古式三重一層と呼ばれる技法。三つの同一の術式を同時に発動させ、それを同じタイミングで同じ座標に発現させるというもの。ただの出力式を重ねているだけだが、その制御は困難を極める。針に糸を通すよりも緻密な制御を要求されるこの技法を、この精神的負担の大きい状況下で、それも生徒を褒める余裕を見せつつやってのけるアルバの技量は高い。

だがそんな技巧も、^{オチガミ}墮囓には決定打とはならない。幻想？？？魔

術による攻撃を封じられ、打撃による攻撃しかできないのでは、その肉体の奥にダメージを与えるなど困難。そのような事をする前に、その得物に吹き飛ばされてしまう。

だからこそ、アルバの拳の向かう先はその得物。魔術で威力を上乗せされた金属の拳は、その鉄塊を弾き墮^{オチガミ}の姿勢を更に大きくよろけさせた。

「っ！」

その大きくがら空きになったわき腹に、ティアマットは自身の剣を突き刺す。切っ先の食い込んだそこは、‘神秘層^{ベール}の効果範囲外’であった。

「:Aie ficta um fielansa um xai
shem oul ipt sioren（この仮想と火槍と火
葬が道しるべとなるでしょう、）’, ashetue—ish（
お逝きなさい）」

握った魔石ごと、左腕で柄を抑える。ティアマットが飛び退いた瞬間、その部位が炎を上げた。その炎はわき腹の一部分を焼き、その箇所を崩壊させる。対霊^{ソレヒヤゴースト}種の式であったため、曲りなりにも生きている墮^{オチガミ}にはそれほど効果は無かったが、ようやく有効打を与えることが出来た。そのことに僅かに気が緩む。

その時だった、周囲の己^{コウベ}憂部たちが突然今までとは違う声を上げ始める。

「k u e t u m, k u e t u m, h e a l t i e c x e t u k a
（空いた、空いた、腹を欠いた。）・
x u e k i x u e k i x u e k i x u e k i x u e k i x
u e k i x u e k i x u e k i x u e k i x u e k i x u e k i x

いたいたいいたいたいいたいたいいたいたい
）
c h e k u t a c h e k u t a c h e k u t a c h e k u t
a c h e k u t a c h e k u t a c h e k u t a c h e k
u t a c h e k u t a c h e k u t a （みたせみたせみたせみ
たせみたせみたせみたせみたせみたせ）」

乾いた音で同じ言葉を繰り返して唱え始める。ただの雑音として聞いていなくては混乱に陥ってしまいそうなそれは、次に墮嚙オチガミがとるある行動の前触れだった。アルバとラストィの血の気が引く。

「ま、拙い……コイツ、非常食、持ってやがる」

その言葉を聞いて、ティアマツトも同様の反応を見せた。墮嚙オチガミにおける非常食とは、以前狩った得物の血液を特別な己憂部コウベの中に溜め込み取っておくものである。その保存食を墮嚙オチガミが作るには、一般的に成人男性およそ五十人分ほどの血液が必要であり???それを一度の狩で用意する必要がある???その賞味期限オチガミ（鮮度を保てるの）は一週間ほど。賞味期限が切れる前には墮嚙はその保存食を消費してしまう。

つまり、ここ一週間以内で墮嚙オチガミによる五十人前後かそれ以上かの虐殺が行われたことを示しているのだが、いまここで重要なのはそこではなかった。

「紅いのだ！ 頭の紅い己憂部を探せ！！ ヤツに喰わせるな！」

その声が聞こえる前に、もう既に二人は探し始めていた。この時オチガミ墮嚙チガミが襲ってきたならば、被害は甚大になっただろうが、その墮嚙オチガミは、ただ拘束具を紅く光らせ非常食を呼んでいるだけである。

その目標を、一番最初に見つけたのはティアマットだった。

「居た!! 堕噛の上!」

「(こちらでも確認しました! 堕噛の直上から門の方向へ約四メートル。あの頭部が紅い固体です!)」

その声に、他二人も上を見上げた。天井を伝うようにして、頭の紅い己憂部が堕噛の直上を目指して移動している。それを射落とそうと、ラスティが蒼穹を構える…その時だった。

「ラスティ!! 避けて!」 「(マスター! 避けてください!)」

「あ?」

二人の声が聞こえたと思った直後、ラスティの頭部に激痛が奔る。

「(マスター! 避けてください!)」

それは、ラスティが堕噛の‘非常食’を打ち落とそうとしたときだった。その攻撃の気配に気付いたのだろう。今まで沈黙を守っていた堕噛が、その獲物で地面を打ち付け、将に矢を射んとしていたラスティに石片が襲い掛かったのだ。いくつも飛来する石片は、そのうちの一つがラスティの頭部を捉える。

「マスター!」

アークは人目も気にせず実体化し、倒れようとした自らの主を寸でのごとく受けて止める。アルバはその様子を目を見開いて見ていたが、アークの方はそんな事を全く気にしていないようだ。ティアマットも慌てて駆け寄り、介抱する。

どうせ墮^{オチガミ}の食事をコレ以上邪魔すると、無数の己^{コウバ}憂部が襲い掛かってくる事は目に見えている。そうやってしまっただけでは、二人で補給を止める事は不可能になる。その上再び狩の続行になるまでソレらの相手をしていたのでは、割りに合わないというものではない。それに食べ終わる（全回復してしまう）まではこちらに危害を加えはしない????????何においても食が最優先であるその行動原理を理解していたアルバは、その処置を手伝うために走った。

「マスター！ マスター！ マスター！」

ラストィを抱きかかえ、ひたすらそう呼びかけるアーク。精霊であるアークには、こういうときに何をしたいのか分からない。走り寄ってきたティアマットにすぎるように、アークは半ば半狂乱しと言った。

「ティアマットさん！ マスターが……マスターが！」

「落ち着いて！ あなたがそうでは、傷に響いてしまう」

焦っているのはティアマットも同様だったのだが、以前居た場所の性質上、こういうときに落ち着きを無くしてしまっていたはいけないということも知っていた。ラストィを仰向けに寝かせ、傷の具

合を確かめる。

頭部の傷は深くない。今は布を巻きつけるだけでいいだろう。だが、他の部位に当たった石片の中に、体内に入り込んだものが無いかを探さなくてはならない。見るだけでは、それを判断する事はティアマットには出来なかった。

アークに向き直り、手短に質問した。

「アーク、さっき飛んできた石片がラスティの中に食い込んでないか調べられる？」

「え？……あ、はい！」

答えたアークは、目を瞑り何事かを呟き始めた。契約のラインを通じて、ラスティの体内を探っているのだろう。その間に、駆け寄ってきたアルバ先生に何か汚れてない布が無いか質問をした。一瞬なにやら思案した彼は、ポケットの中からこれまた赤褐色の巻物らしきものを取り出す。それを放り投げて、有無を言わさぬ口調で言った。

それと同時に、アークの解析も終了する。この時すでに、オチガミ墮嚙は非常食に手を掛けていた。

「コレを使え、幾分か切ったら腕や胴の包帯代わりにも使え。」

「右前腕と、左太ももにありました！ ティアマットさん！」

アークが指摘した箇所には、確かにティアマットはソレを確認した。アルバ先生が、自分で改良した魔術があるからと、摘出を代わり、その間にティアマットはラスティに包帯（代わりの布）を巻いていた。

その時、今まで染められた布だと思っていたそれが、微細にルー

ン文字が敷き詰められた術符であるということに、ティアマツトは気付いた。

「ティアマツト、何してやがる！ とつとと巻け！」

止まったその行動を咎めるように、その術符を渡した本人は怒鳴る。慌てて彼女は、出血箇所^{クイタイ}に布を巻いた。巻き終わるか巻き終わらないか、その微妙なタイミングで、またあの激情が襲い掛かってきた。

「????????????????!!!!!!」

「ちー！ とうとう食い終わっちゃった！ おい、そこの青いの！ お前の主人叩き起せ！」

「は、はい！！」

堕囃^{オチガミ}が、既に空になった己^{コウベ}憂部の頭をうち捨てる。濡れたタオルを壁に投げたときと全く同じ音を上げて壁に張り付いたそれは、紅い染みをつくっていた。

床に置いていた鉄塊を拾い上げる。どうやら、狩の再開のようだった。拘束具の光と、共振現象の効果が、先ほどよりも強いように思える。

「つくそ、奴め食事直後で気が立ってやがる！」

いざとなったらティアマツトに担がせて避難させる…そう考えた時だった。

「マスター！ 起きて下さい、マスター！！」

「あー…く…か？」

ラストイが、目を覚ましたようだった。

「とっとと起きろ！！ ヤツのツマミの時間は終わったぞ！！」

第二十一小節「硝子の箱舟」

自分のことを呼ぶ声がしたような気がした。その呼び声に答えるように少しだけ目を開くと、蒼い色が最初に目に入る。

「あー…く…か？」

覚醒しかけたその意識は、確かに自身の精霊の化身姿を確認していた。だが、それ以外の情報を整理することが出来ない。

何故俺は倒れている？

何故アークはなみだ目でいる？

何故ティアマットは安心している？

何故アルバ先生は焦っている？

まだ意識の半分も覚醒し切れていない思考は、激情タベタイの中でも半ばまどろんだままでいる。

叫びあう声が聞こえ、体が地面から浮く感覚を覚える。

誰かが自分を抱えているようだ。

視界に入る青が空を連想させるようで……

「？」

そこでようやく意識が覚醒しきる。

何故俺は倒れていた？ それは墮嚙にやられたから。

何故アークはなみだ目になっていた？ それはきつと俺を心配してくれたから。

何故ティアマツトは安心していた？ それはきつと俺を介抱してくれていたから。

何故先生は焦っていた？ それはきつとまだ墮嚙オチガミがまだそこにいるから。

さっき叫んでいたことはなんだった？ ‘アークはラスティを連れて……’では無かったか？

では俺を今運んでいるのは……

目を見開くと、其処にはポリゴン状の輪郭をしたあのアークの姿があった。

大きな手で俺の体を支えている。

アークが俺を運んでいる……

その事実^{オチガミ}に、墮嚙オチガミの襲撃を知った時異常の衝撃を受けた。

「おい！ アーク！ 何をしている！」

まだ体に残る痛みを耐えながら叫ぶ。アークは目の無いその顔をこちらに向ける。

聞こえた声は、雑音交じりで、まともな発音すらなされていないかった。

「ます……ター……ゴブ……Z……」

アークのその声は余りにも拙過ぎる。

人型に化身する余裕すらない今のアークの状態が、‘何処まで行ってしまうているのか’をうかがわせた。

「何で、接続、しない!? おい! アーク!?」

もはや掠れる音しか聞こえない。今のままでは?????

「とまれ! 幾らなんでも無茶だ! そのままじゃ構成が追いつかなくなってる????????」

「消滅するぞ!!」

そのことに回答する代わりに、ガラスを引かくような奇音を出して、アークの体勢が崩れた。

????????????

堕嚙オチガミの非常食、それは空腹体の崩壊に耐えられなくなったときに補給する血液の塊。それは、行動に支障が出た時の回復薬のような役割も持今まで与えたダメージっていた。つまり、堕嚙オチガミが非常食を食べるということは、体組織の再生も意味していた。

加えて堕嚙オチガミは食事の間は誰にも邪魔をされないように行動する。ラストイが紅い己憂部コウベを狙撃しようとした意志を見せた瞬間、今までの動きとはまるで違う速さで彼に攻撃を仕掛けた。食べ物への恨みは恐ろしい……ここまで来ると、笑うことも出来なくなってしまう。

「マスター! しっかりしてください!」

「あー……く……か?」

もう戦闘準備に堕嚙オチガミは入ってしまったというのに。自身の主は失った意識を取り戻しかけただけで、とても戦列に加われる状態ではない。彼の担任の一喝も、意識を覚醒させるには至らない。

「????????????????????????????????!!!!!!」
「」

オチガミ
堕嚙が共振現象を再び呼び起こす。非常食を食べたばかりなのに……いや食べたばかりだからこそ、先ほどよりも強い感情の波が押し寄せている。その中でも、アレがレ獲物定めたあか指向性を持った波は?????

「え? コツチ?」

それは未だ半覚醒のラスティの方に向かっていた。新たに血が欲しくて、一番手っ取り早いのに獲物を定めたのか。あるいは先ほど食事を邪魔しようとしたことの仕返しのためなのか……その思考回路を窺い知ることが出来ないが、アークに感じ取れた指向性の波は、確かに自らの主に向かっていた。

堕嚙が、その巨体で駆け出す。その行動は今までになかったもので、このままでは十秒無いうちに彼が挽肉にラスティされてしまうだろうということ容易に理解できた。

それをさせまいと、一番先に飛び出したのは????ティアマット。

「アーク! ラスティを連れて逃げて!」

「阿呆! 無茶だぞ!」

アルバの制止を振り切って駆けていく彼女……そしてそんな彼女を追う担任教師。その姿を見て、アークは思う。今の自分は余りに無力だと。

そして……覚悟を決めた。いきすぎた
自分に許されないだろう権限外行動……自身の主を運び出すということ。

「マスター、お許し下さい」

ポリゴンモデルのよう…そう嘗て主に形容されたと記憶している姿に戻る???これが一番負担が少ないのだ???そしてその姿で、主の体を抱きかかえる???その瞬間から、それは訪れた。それは、存在をすり減らされることから来る痛みだった。

????????????????????????????????

「????????????????!!!!!!」

振り払い、振り戻す。その単調でありながら、有り余る筋力で絶え間なく振るい続ける攻撃。今までのものとはまるで異なるその荒々しい暴力の前では、ティアマツトとアルバの二人は墮^{オチガミ}嚙の進撃を止める障害なりえなかった。

「つく！　なんでラスティを狙うの!？」

普段から寡黙で、言葉数少ないはずの彼女も、答えの返らない質問を口にせずにはいられなかった。その焦りはいかほどのものだろうか。

アークに運ばれたラスティとの距離は少しずつ縮められていく。その神秘層^{ベール}を貫く魔術は、装備の乏しい現段階では使用できず、その膂力はたとえ長剣を軽々と振るうティアマツトであつても止める事はかなわない。

「(どうすればいい?　どうすれば…)」

墮嚙と並走しつつ、一定の距離をとることを忘れないようにしながら、懐を探るティアマツト。その左腕に三個一組で連結された彼女の消費型礼装使い捨ての感触を感じる。

コレを使えば、墮嚙を止めれるかもしれない。そんな確信にも似た予想がティアマツトに浮かんた。だがソレを握るための力が、左手に入らない。

彼女は躊躇していた…その礼装を使うことを。赤・青・黄それぞれの魔石が連結されただけの複合魔石でしかないその礼装は、彼女にとって…いや、世の中にとって大きな意味を持っていた。

「（コレを使っても…私は…）……え？」

その時、アークの姿勢が突如崩れた。姿勢を崩したまま、目の前の壁にラスティをかばうように激突する。

「アーク!？」

????????????

上位に初めから生まれついた精霊は、大きな力を与えられている代わりに、世界から役目と制約を与えられている。それは世界の防衛機構のような存在である精霊に感情を与えられているが故の制約だった。感情の赴くままに力を振るってしまえば、世界に甚大な被害をかえって与えてしまうことになるからだ。だが制約があってもその範囲外の行動であれば役割から外れたことでもその殆どが許容されてしまう。

????? 「グ……ガア……っ!」 ?????

「……全身を、その行動を世界が否定する……」
「……止める止めると、苦痛をもって警告する……」

だが一度制約に反する行動を取ってしまったら、その行動を停止するまで世界から直接自身の存在への攻撃が始まる。存在そのものをすり減らすその修正力は、精霊が総じて恐怖を抱く苦痛だった。

「……だがそれでも、アークは少しでも堕嚙との距離を離そうと移動する……」

「……堕嚙との距離が少しずつ縮まっていく事を感じる……」
「……」

「……それはアークの努力をあざ笑うようだった……」

アークに与えられている力は、堕ちた世界種を処理するための力。そして与えられている制約は、世界種以外の存在に対する過度の干渉の制限。故に普段は、化身している姿から考えられるよりもさらに弱々しいのではないかという程の物理的干渉しか出来ない。

「……手元の方から声が聞こえる……」
「……主の心配そうな声が聞こえる……」

それを破っている今のアークは、例えソレが主と認めた存在であっても世界からその存在を削られる。世界に融通という概念は存在しない。

「……その様子だけが感じ取れる……」
「……言葉も顔も、その情報の詳細を感じれない……」
「……でもそれが、自身の身を案じているとは感じれた……」
「……」

活動を停止させてしまうか、存在そのものを消し去るまで、その苦痛はとまらない。発せられる声は、最早言葉として聞き取れなくなっていた。

????大丈夫です。私、強いですから????

????一時的に力が減っても????

????消えてしまうことは無いでしょう????

存在としての‘階位’が高いアークは、ラスティを抱える事が出来なくなるまで消耗しても、消滅することは無いだろう。アークの心中の告白は、主には雑音にしか聞こえていない。

????ですが今の私は、余りに無力です????

????幾ら大きな力を持っても、上位の精霊であっても??

??

????こんな時に、体を張って貴方を守る事すら出来ません

????

????有象無象と言って捨てた精霊たちよりも無力です??

??

失った力を取り戻すにはそれなりに時間がかかる。それは、この場では取り戻しのつかないものであるだろう。この苦痛は、低い階位の精霊には存在しない。

力を失いきる直前、アークは今までの中で最も悲痛な軋みをあげた。それはガラスを傷付けた時と酷似していた。

????ああ、こんなことならば????

「………こんな力なんて……欲しくなかった………」

第二十二小節「其は独り守るもの」

「おい、なんか音近くねえか？」

ソレは、ハイスが一番最初に気付いた事だった。先ほどまで遠くで聞こえていた戦闘音が、徐々に近づいてきている。

「ホントだ……………え！？！？」

突然、音のする方向の壁に、何かが衝突した。突然のその物音に、クラス中の視線がそこに集中する。何やら言葉が聞こえたと思った数瞬後には、その壁が破碎、人影が飛び出して、彼らの目の前に落ちた。

それは、血まみれの姿で呻いている、ラスティハルト・ジーンだった。

……………

突然、ラスティを運んでいたアークの姿勢が崩れる。姿勢制御の

ための力すら失ったアークは、ラスティを庇うように抱きかかえ、目の前にあった壁に衝突する。落ちるラスティ、クッションになるアーク。そのアークに寄り縋る様に呼びかける彼の姿は、先ほどの様子を逆転したかの様だった。

「アーク！ おいアーク、答えろよ！」

答えが無い事に、気を失っているだけだと判断したラスティは、アークとの契約印が刻まれている左腕を押し付ける。普段は見えない刻印が、蒼く浮かび上がって見える。

「阿呆！ 何暢気なこととしてやがる、オチガミ 堕嚙が来てるぞ！」

足元に投げた魔石を踏みつけるようにして行われたその行為は、アルバの体を加速させ、オチガミ 堕嚙を大きく追い越しラスティの元に向かわせた。ラスティの手元では、アークの体が少しずつ透明になっていっている。実体化を強制的に解かしているようだ。

アルバがその背にラスティを庇うように立った時、堕嚙は二人を射程に収めていた。

「????????????????!!!!!!」

距離を詰めた堕嚙が、壁ごとラスティを砕こうと、両の手で鉄塊を握った。片腕でも膨大な運動エネルギーをたたき出すその膂力。それが両腕で振るわれればどれほどのものになるのか、見上げるアルバには予想もつかない。それでも、彼は右腕を腰に構え、先ほどラスティに包帯代わりに使った布と同じような布の巻物を取り出した。

「CODE el ain, soif en albinam, o
ul om albinam (私は告げよう、来る陽を迎えよう、
黎明れいめいを呼び込もう)」

右腕と共に布が光り、意志を持ったように帯の全貌を見せ付けた。アルバの手を離れたその帯は、表面に文字を浮かばせながら周囲を回っている。墮嚙は、鉄塊を振りかぶった。それは今までとは比にならない力を持って落ちてくる。

「Yioe faie tulik ke in, Yesta fo
ie velik xe in, Aiwe tiqitum coi
essa tio pirim (君は遠く届く者、貴方は彼方に響くもの、私は此方に在りし者)」

右腕に巻きついたソレは、迫り来る鉄槌を捉えた。雄たけびと共に横に引くアルバ。そしてそれに同調する術布。それは、打ち下ろされた大質量の鉄塊の向きをまたもや変更してみせる。だが、変更できた軌道は僅かなもので、後方の壁と共に、その鉄の義手打ち砕かれた。もう、アルバに攻撃手段は残っていない。

「つくそ！ ラスティハルト！ 齒あ食いしばれ！！」
「え？」

行き成りのことに状況が飲み込めないラスティを、アルバは壊れた壁の方へ全力で蹴り飛ばす。その直後、振り下ろされた鉄塊が横に振り払われた。それはアルバの腹部を捉える。

吹き飛ばされ、壁に打ち付けられた。

瞬間、そこは静寂となった。ゆっくりと振りぬいた鉄塊を降ろし、体の向きをラスティに向けなおす。

邪魔者が居なくなり、ラスティを追撃しようと歩む墮嚙。だがその前に、別の一つの人影が立ちふさがった。

「F i g h a a q u q l s i u d i r i e m (陽は紅く沈み)」

鈴の音のような音が響く。戦場で聞くには余りに綺麗過ぎるその音。その音を前に、今まで止まることの無かった墮嚙が…とまる。

「Q u o i t a m i r i e a s i o c o l n e n (海はその色を映します)」

足元から立ち上るその光は三色。赤・青・黄。

「M e c h e h e m f i o t o i x a i a (山はそれを背に抱き)」

それは次第に綿密に折り重なるようになり、絵の具のように、その色を濃くしていく。

「A n d i e b l i o a d i a w o r e n (???黒く色づいているでしょう???)(?)」

それは、ティアマツト・マキナによるものだった。

????????????????

‘黒く色づいているでしょう’

そこで一息ついたティアマツトは、堕嚙を間の前にしているにも関わらず後ろを振り返る。そこには、彼女のクラスの面々が居た。

「（そっか：無事だったんだ）」

彼女の見つめる先には、ラスティの処置で辛うじて化身を保てるまでに回復していたアークが、自らの主を抱えあげながらこちらを見ていた。その表情は、読めない。ティアマツトは、そんなアークに向かって微笑んだ。

「大丈夫だから：私が?????」

後続く言葉を言わず、再び堕嚙に向き直る。何か察知したように、たたずみ、僅かに後ずさりしているようにも見えるその巨体。

そんな堕嚙に視線を向けたまま、ティアマツトはまた微笑む。ただそれは、堕嚈に向けられたものなどでは決してなかった。

赤・青・黄???色の三原色が混ざり合い、黒い光に練りあがる。その光景を、誰もが息を呑んで見ていた。

歌と共に黒く、澄んで：そうして体に剣にまとわりつく。

「Yoe el siebe, soie kosutim wil
ia-eia (アナタを護る、そんな盾にはなれないけれど) to
uiwe veil, son shvexa wiOl-a-e-a
(代わりに折れる、そんな剣にはなりましょう)」

「CODE：Aron-Dait（私は、‘独り護る者’ですから）」

‘闇’をまといつつ、彼女は墮嚙に足を踏み出した。

????????????????????

その瞬間のことは、酷く衝撃的だった。

墮嚙の前に、ただ独り立ちふさがったティアマット。

そしてこちらを振り向き、微笑んだ彼女。その時にはもう、彼女を包む三色の光は闇になっていた。

CコードODEと告げた直後にティアマットを包んだ闇。墮嚙の神秘層ベールすら容易く突破して見せたそれは、墮嚙を瞬く間に押し返した。いまやその姿は見えず、剣戟の音が聞こえてくるだけである。

先ほどの光景を見ていたラスティは、僅かに回復したアークに抱きかえられたまま、悪態をついた。

「あの、馬鹿野郎……」

それは、彼女が行った行為に思い当たるモノがあったからだだった。墮嚙に匹敵するほどの戦闘力をたたき出すその術。それはラスティが知る魔術であった。そのことを察したアークが、ラスティに質問する。その声は、何処と無く力が無い。

「マスター…あれは…?」

アークに抱きかえられたままのラスティは、アークの疑問に、苦虫を嚙み潰すように重々しく答えた。

「アロン……ダイト」

アロンダイト、詠語から訳すと‘独り護る者’。赤・青・黄・色の三原色を混ぜ合わせることで黒を生み出し、その色の持つ闇の力を行使する魔術。

「剣を触媒にする類の魔術で……黒の頂点に位置する魔術だ。」

だが、重要なのはそこではなかった。彼が苛立つのはそこではない。ラスティは周囲を見回す。周囲のクラスメイトたちは、その闇に怯えていた。

「お、おい、何だよ、アレ、」

「……こ……わい」

ティアマットが行使した力に、クラスメイトたちは恐怖を抱き始める。魔術という神秘が存在するこの世界。ラスティのところで言う‘迷信’が存在するこの世界。迷信が迷信でないこの世界。紅い眼に対する恐怖も闇に対する恐怖も、彼が思っている以上に人々は強く持っている。その恐怖に、自らが護られたと思考する暇さえ無いのだ。

ソレを見るラスティの表情は……暗い。

「‘独り護る者’……なあ？ この意味、どう思う？」

そう訊く声は、苦々しく、低かった。アークは無言のままにいる。そしてアークの答えも待たずに、ラスティは語る。感情が留められないのだ。

「アイツさ……………二つも持っていやがるんだよ…」

そう、ティアマットは、伝承として伝わる恐怖の要素（紅い眼）と直接的に恐怖をもたらす要素（闇）の、二つの要素を持っていた。それが、今この場で、彼にとって何よりも重要な事だった。今自分の肉体が相当なダメージを負っていることなどとうに意識の外だ。

「偶然……………か……………」

その脳裏には、彼女の寂しそうな笑顔が浮かんでいた。

第二十三小節「それは俺のせいだから」

『ううん。入、れな、かった』

聖歌隊に入っていたのかと聞いた時に、返ってきた答えがこれだった。

歌が好きだったにも関わらず、剣を持つしか道が無かった。

意志など関係なく、そうしなければ居場所が無かった。

ソレを受け入れてしまっていたことに：何と言ってやればいいのか分からなかった。

『私の手は傷だらけだから、こうしてるの。やりすぎだって義理の兄に言われてた』

女らしくないからと、いつも彼女は手袋でソレを隠していた。

『うん………やっぱり、私、‘こう’だから』

赤は嫌いか？？？それに返ってきたのはこの言葉だった。

血まみれの眼？？？影でそう揶揄されてさえる彼女。

そんな彼女が、どうして赤を好きでいれるだろう？
元凶のイロ

『神様は何を思って、この世界を創ったんだろうって。そう、思うんだ。』

恨み言などではなく、本当にただの素朴な疑問。

一見戯言にもとれるこの質問は、俺には余りにも重かった。

どうせなら、はっきりと憎いと言って欲しかった。

『最初の日ね、わたしが来たころにはもうあの子は部屋（寝室）に居たんだ？？？』

『？？？あの子、泣いてたんだ。』

人々に拒絶されてきたその心は、いつしか恐れを抱き：

：ルームメイトに顔を合わせることも出来ずにただ泣いていた。

そのことを聞いた時、自分が思ってた以上に彼女を理解してなかったんだと理解した。

そう……それらは、みな自分が面白半分につくった‘設定’のせいなのだ。

憧れたのだ。剣と魔法の力の世界。

己が腕で今そのときを輝くそんな‘くだらないもの英雄’に、ありえないと知りながら夢物語を描かずには居られなかった。それが、始まりだったのだ。

奇麗事で世界は成り立たないと思っていた俺には、誰も傷つかないうような世界を描くことなんてできやなかった。そもそもとして描くつもりすら無かったのだ。

そうして書き上げた世界の中で、多数の偶然が重なったとはいえあんなものを持たせてしまっている原因は自分だと、そう思うからこそ？？？？？

？？？？？面白半分で創った？？？？？

その事実は余りにも重過ぎた。

まともには無いにしろ、墮嚙の一撃を受けたラスティは、もはや立ち上がる事にすら全力で挑まなくてはならない。

「俺の……せいなんだ」

覚悟などとは間違っても呼べない意識。

自分の創った世界で傷ついた人間など、それこそ掃いて捨てるほどいるだろう。

あるいは彼女など足元にも及ばないような不幸な人間もいるだろう。

それでも言うべきか、だからこそと言うべきかという思考の順序は、もう頭には無く…彼女に何かしてやりたい。

それが思考を占めていた。

????????????????????????????????

「…………アーク」

「……………先ほど私がここまでマスターを運んだ際、修正力により現在一割台まで存在が磨り減っています……申し訳ありません」

先ほどの行動のことだろうか、酷く落ち込んでいる様子が見受けられた。そんなアークに、強張った表情筋で笑顔を作って笑いかける。

「そんだけありゃあ……十分、だってな………これが」

「!?………ちょ、ラスティ!? 無茶だよ、そんな体じゃ!?」

幽鬼のように立ち上がるラスティの、その意図を察したステラが止める。全身が血で濡れているのだ、誰が見ても戦闘の続行など不可能だと分かる。

勿論本人さえも。

だがその言葉に耳を貸そうとはせず、懷から魔石の欠片を取り出す。ラスティは苦痛を押し殺して声を出した。無茶を通すために。

「If you can meet with triumph
and disaster and treat those
who impostors just the same（もしあ
なたが、勝利も敗北も等しく受け入れ、惑わされることがないとし
たら。）」

強さを求める意志ではなく、自らの義務と誇りを糧に、詩が体の機能を支える。ただ誤魔化しただけにすぎないが、確かにこの場では戦える余力を捻り出した。軋む様な痛さが、頭を襲っている。

「そんな！？いくら『戦詩』だって、そんなことして……」

無事ですむなどとは思っていない。だがそんなこと今はどうでもいいのだ。

「じゃあ、誰が行くんだ？」

「え？」

それは、押し殺した低い音だった。

突然の発言に、質問の意味を分かりかねたというような反応をするステラ。今までここまで静かな怒気を持った彼を、今まで見たことが無かったのだ。

その反応は、何故かラスティを苛立たせた。

「俺が行かないで、誰があそこに向かうんだ？」

「え……それは……」

ステラは自分だとは言えない。それが出来るだけの力量が無いというのもある。

だがそれ以上に、彼女は怖いのだ。あの闇が撒き散らす恐怖が。だがそれを咎めることは出来ない。世界をそうあるように、紅い眼を恐れるように、闇を恐れるように、そう仕向けてしまっているのは他ならない自分なのだ。

そう、自分なのだ。それがどうしても苛立たしくて仕方が無い。

「あいつは戦ってるんだ！ お前らを護ってるんだ！」

それを、八つ当たりだと分かっている。こんな事言っても仕方が無いと分かっている。それでも言わずには居られない。この感情を放たずには居られない。そうでもしなければ、自分が重さで壊れてしまいうさだたから。

「一人なら逃げ切れる力量があっても、それでもアレと独りで戦ってるんだ！ 紅い眼だからって怖がられたって、血まみれだってなんて言われたって、それでも護ろうとしてるんだ！」

紅い眼を持つだけなら、いつかそれを恐れないで接してくれる人がいたかもしれない。ただ眼が赤いだけで、普通の少女なのだから。

「アロンドイト闇’を出してまで戦ってるんだ！ 今までよりもっと恐れられることを承知で、それでもその力を出して戦ってるんだ！」

恐怖を呼ぶ力を持つだけなら、普段も恐れずに接してくれる人がいたかもしれない。ただ闇を操ったって、普段はただの少女なのだ

から。

「行かなきゃダメなんだ！今ここで行かなきゃ、またあいつは独りなんだ！」

災厄を呼ぶと言われる紅い色の眼を持ち、尚且つ戦では敵味方に恐怖を撒き散らす。あえて言うならばその髪色は闇を彷彿とさせさえする。そんな彼女に、誰が話しかけただろう。誰が支えてやれただろう。誰が隣に立っていただろう。

誰も立たないのだ。彼女がどんな人物であるかを知る前に、恐怖の印象で埋め尽くされてしまうから。

「アイツは勝手に呪いでも撒き散らすようなやつか！？ 目合ったぐらいで殺すようなやつか！？ 居るだけで邪魔なやつなのか！？ 違うだろ！！」

もう何のために声を張り上げているのか分からない。だが言わなくてはならない。そんな思いが先走った。止められる訳にはいかなから。今あの場に行けるのは自分だけだから。

「歌が上手くて、理論すっ飛ばしてるけど実技はよくて、あんななりでも馬鹿力で、でもどこか泣き虫で、少し人に臆病で……そんなやつなんだよ、アイツは！！」

それが、ラスティが入学してから彼女と接してきてしまったこと。彼と屋上に集まる仲間以外、誰も知らないこと。

そう一気に言い終え、肩で息をするラスティ。そんな彼に、言葉を発する者はいない。ただじっとラスティを見つめているだけだ。遠くから剣戟の音が、微かに聞こえてくる。それに耳を済ませているうちに、心が静まるのを感じた。

荒い呼吸も、徐々に収まってくる。

「……………くそ、何言ってるんだ、俺は。」

らしくも無い、そう搾り出したラストィは身を翻す。

走り出した。

呆然とするクラスメートたちが、その場に取り残される。

間奏「女の姿だったら」

それは、ティアマツトと墮^{オチガミ}嚙を追跡する道中での会話だった。通路一帯は壁が抉れ地面が削れ柱が折れて…その戦闘の激しさが伺えた。所々に灰のようなものが積もっていたりするところを見ると、いくらかの己憂部を巻き添えにしていたのも分かる。

今まで沈黙していたラスティが、ふと気付いたかのように聞いたのだ。

「…なあ？ アークは、ティアマツトを羨ましいと思うか？」

アークは、ラスティの言葉に息を呑んだ。

「……ですが今の私は、余りに無力です……？」

「……？ 幾ら大きな力を持っても、上位の精霊であつても……？」

「……？」

「……？ こんな時に、体を張って貴方を守る事すら出来ません」

「……？？」

「……？ 有象無象と言って捨てた精霊たちよりも無力です……？」

「……？」

独白が、その心中に甦った。隠したい心の揺らぎが、主に伝わっている事を感じた。

「何故…それを？」

今の自分が余りに無力だから、アークは先ほど見た闇の力を羨ましいと：確かにそう思っていた。だがその心中を主に明かしてなどいない。ましてや独白の内容など伝わっているはずが無い。だが、それを見透かしたかのように、ラスティは彼女の力が羨ましいかと問うたのだ。

「はあ：やっぱりな？　：一回止まる。アーク、一度化身しろ？？
？ああ、少年態でな」

‘接続’、したまま化身化する余裕が無い今のアークは、主に言われたとおりに、立ち止まった彼の前で化身した。その視線は、やや下向きである。

この急を要する中、彼は何をするつもりなのだろうか？？？？
そうアークが疑問に思っていると、いきなり、ラスティは右の拳を頭上に振り降ろした。だがそれは、事を咎め時のような力は籠っておらず：：少しだけ痛いと感じるだけの、そんなモノだった。頭の上の握り拳を軽く捻り込むようにして彼は話した。

「阿呆」

そう、短く言い放つだけだった。

頭に押し付けられる拳は、痛いという風でもなく、ただ微弱な刺激になっているだけだった。

「余りに病むな、お前にはお前にしか出来ないことがあるだろう？
普通人と契約するような階位の精霊が、‘記録’、なんて使えるか？
俺と‘フランク接続’、なんてできるか？」

「それは……」 「出来無いだろ？」

そう、確かにそうだった。‘普通の精霊’が扱える現象など、やりようによっては人に手が届くものでしか無いのだ。

指定された情報を、記憶以外の魔術的手段で保存したり、主と精神的にリンクして直接魔術の補助をしたり……確かにそれは、アークにしか出来ない事だった。

「お前がさ、直接的に物質界に干渉出来る力が羨ましいと思うのも分かる……でもな？」

手を離し、ラスティはアークと視線を合わせる。今まで下を向いていた視線は、ようやくラスティと向き合えるまでに上向きに戻っていた。一息ついた彼が言葉を発す。

「俺の世界のことを言って聞かせてもらえたり、俺の愚痴を聞いてやったり、俺の秘密を共有したり……そういったことがさ、そんなに劣る事なのか？」

「あ……………」

「俺はこの世界で正しく、独り、なんだぞ？ お前にしか話せないんだぞ？ 俺は凄く助かってるんだぞ？」

気付かされたように固まるアークに、一気に言葉を発したラスティは、拳を軽く突き出した。ソレは軽く、アークの左胸に当たる。

「もっと自分を誇れ。出来ない事を嘆くより、出来ることを喜べ。……大丈夫、俺の心は助かってる」

そうして彼は振り返った。その視線の先は、ティアマツトと墮嚙が向かったと思われる方に向いている。

「さあって、ここから先は強敵との戦いだ。準備は出来てるか？
‘お前がしっかりしてくれないと、俺やばいんだからな？’」

試合に臨むようなその口調。全身が傷で痛むだろうに軽い調子。
そんな様子に、アークはようやく微笑んだ。

「はい！」

「良い返事だ。…さて！ 行くか？ ‘相棒’」

残り少ない魔石を再び取り出し、左腕に握る。アークも化身を消耗を抑えるため化身を解き、詠唱の準備に入った。二人の声が重なる。

「:Fantaxia, sept redint. (幻想式、構築開始。)」

「:Fantax-ear, sept fance (幻想準式、接続開始)。」

ラストイの姿が、僅かに陽炎に包まれる。アークの力が弱まっているせいで不安定になってしまっているそれは、この時ばかりは力がみなぎっているかのように見えた。

そしてラストイは駆け出す。失った時間を取り戻そうと、移動補助の式を使いながら移動する彼の脳内に、アークの声が響いた。

「(ところでマスター。一つだけ聞いていいですか?)」

「ん？ どうした？」

このタイミングで、何か聞かなくてはならない重要なことでもできたのか：そういうぶかしんだラスティの思考は、見事に裏切られた。

「（先ほどの化身の際、少年の姿を所望されたのは何故でしょうか？）」

何かと思えばそんな事。だがその質問は、アークの気分が落ち着いたことを象徴しているように、ラスティには思えた。先ほどから感じていた、‘^{フアクト}接続’の違和感が無い。

「ははは！ 何だよおい！ 何かと思ったらそんな事か！」

ひとしきり声を上げたラスティは、高揚した気分のまま、アークにその意図を告げた。

「一喝するのに、女の姿だったらやりにくいだろうが」

第二十四小節「たまには俺にも」

「◆◆！！！！◆◆！！！！」

「つくう！！ はあ！」

オチガミ
堕囃の振るう鉄塊。その一振り一振りには、岩を砕こうかという威力が込められる。人ならば一撃で身を粉碎して余りある一撃を、どうかティアマツトは耐えていた。

アロンダイト
‘独り護る者’、その防御に特化した能力を生かし、過剰に行使した全身の機能を以って、堕囃と打ち合いながら後退させてきた。いつの間にか、競技場の真ん中にまで戻ってきている。

「◆◆◆！！」

「くう！ …はああ！」

防ぐことすら不可能なはずのその攻撃を、剣から立ち上る黒い影を利用することでしのいでいる。影の作り出す障壁と、打ち付ける剣戟で、彼女は耐えていた。だがその守りも長くは続かない。一撃ごとに、意識が削られていく。それでも遠のきそうな意識を精一杯に保っている。

「（護る…護る…）」

その意識だけが、今の彼女をつなぎとめていた。朦朧とした意識の中、ただそのことだけが、彼女の意識を保っていた。

自分が闇を出した時、幾人もの生徒が息を呑んだ音が、今でも耳に残っている。だが、そこにラスティは混ざっていないと、何故かそう確信出来た。

最後まで空いたままだろうかと思った席に、何とも無い風な表情???それどころか、彼女が危惧していたことは全く無縁な事に頭を抱えていた???で、ラスティが座った日を思い出した。

『よ、同じクラスみたいだな。よろしく』

あの時みたいに、気にする事が馬鹿馬鹿しいという風に接してきてくれるだろうか：今度は、少し期待してもいいだろうかと：そう、思う。

生き延びたら、また皆で屋上に行きたい。また歌いたい???また聴いて貰いたい。

そんな希望があったから、彼女はまだ踏みとどまることが出来た。そんな希望を護りたいと思ったからこそ、耐えることが出来た。

もうどれだけの回数、墮嚙の鉄塊を弾いたことだろう。アロنداイトの動作補助の効果を越えた体の酷使に、全身が軋みをあげていた。

その腕を受け止め、体を浮かせる。吹き飛ばされる形でティアマツトは、落嚙と距離をとった。

「!...!...腕、が…」

いつ来てもおかしくなかった体の限界。遂に見えた限界。今の一撃で彼女の左腕が折れていた。

いくらアロنداイトでも、片腕の力では防ぐ事は出来ない：ここまでかと諦めかけた。

その時、背後から一条の閃光が落嚙に突き刺さる。

爆発音とともにその巨体は姿勢を崩す。直接的なダメージは無い様だが、確かにその閃光は落嚙の動きを止めていた。そこにもう一撃。さらに後退した巨体は、その衝撃に耐えられず転倒する。

「え……」

神秘層ベールがあるはずの落嚙を魔術で転倒させたことよりも、ティアマツトはその閃光の色と音に聞き覚えがあることに驚いていた。

「あれは…ラスティの」

規模に違いはあれど、空の色をした閃光を、高く響く音とともに打ち出すそれは、間違いなくラスティの狙撃系魔術。

足音がする。そしてソレは、彼女の真横でとまり……

「あーあ、今の手持ちの中で一番でかい魔石で打ったのに、転ばさせただけかよ。ったく、何食えばあなるんだ。耐久性なら世界種に届くんじゃないのか？」

なあ？ と、同意を求めるようなその表情……そうやって、彼

女の隣には彼が立っていた。そのことに、ティアマツはただただ言葉を失うだけだった。期待していたよりもそれは????

そんな彼女の様子に気付いたのだろうか。ティアマツの方に顔を向けたラスティは、いつものように笑みを浮かべ??

「どうした? ありえないものを見るような目しやがって」

こんな状況で、まるで子馬鹿にするようにそんなことを言ってきた。だが、そんなことは露も気になることなどない。気にしないでいてくれる? そんな口にした疑問は消えた。

「あ……………」

その表情、口調、言葉……それら全てが、彼女の疑問を無意味にする。

そのままできてくれるのだ。

変わらないでいてくれるのだ。

恐れないでいてくれるのだ。

隣に立っていてくれるのだ。

その事実だけで十分だった。期待していた通りだった。

「う……………なんでもない」

「ああ、了解した」

そう答えたラスティの口調は優しい。その視線に、自分の疑問と葛藤を見破られていたような気がして、ティアマツは顔をそらす。恥ずかしい。非常に恥ずかしかったのだが、それ以上に彼女は安堵

していた。

視線を敵に向ける。すでにソレは立ち上がり、ありもしない視線でこちらを睨んでいた。

「今の俺じゃアレにトドメを刺しきれない。手札は残ってるか？」

ティアマツトが答えるより早く、立ち上がった落嚙が咆哮をあげた。

「◆◆◆!!!」

音としては伝わらないその叫びに乗るように、その激情が叩きつけられる。共振現象、貪欲な激情タベタイを叩きつけられても、あえて心を保とうとする必要などもう無い。折れた左腕など気にしない。今のティアマツトには、左腕以上に心強い者が居た。

「一つだけ。正式開放がある」

「アロンダイトのか？」

誰も知らないと思っていたこの魔術の名前を言い当てられ、本当に彼は物知りだと、驚く事もせず微笑む。
アロンダイト

「うん」

そう短く答え、ラスティの前に立とうとして?????彼も前に踏み出した。この事には驚いた。あわてて墮嚙から視線を外してラスティに向く。

「ラスティ！ 下がって、近接武器の無いあなたじゃ…」

「大丈夫、武器はある、」

徒手空拳でたたずみながら、そんな事を言っただけ。何も持っていないと言うよりも先に、両の手に大きな魔石を握って答えた。

「さっきからずっと護られてばかりだから……心配すんなって、ティアマツも右腕折れてるんだろう？」

「……確かにそうだけど、でも……？」

堕嚙が足を踏み出す。もう時間が無い。

「俺を信じろ、」

そう言われて、ティアマツの動きが止まった。信じる……先ほどまでコレを抛り所に戦っていた彼女は、そのワードに急に反論出来なくなってしまった。そんな彼女に、ラスティは言い残して駆ける。

「は！ たまには俺にも、格好つけさせてくれってな、これが！」

「ラスティ……！」

詠唱を始めながら、彼はティアマツを置いて駆けてしまった。残された彼女は、そんな彼を信じて止めの一撃の準備に入るしかなかった。

「……御武運を……」

目を閉じて、剣で十字を切る。

「散々格好つけて飛び出したからな！ 失敗なんて出来ないぜ？」

両の手で握り締めた魔石、直径五センチほどの球状のそれを広げるように持ち、立ち止まる。詠唱の構えを取って、アークに念話で問う。墮嚙との距離には未だ余裕がある。

「（用意はいいかアーク？ 結構長めの詠唱行くぞ？）」

「（はい！）」

共振現象を叩きつけられたにしては、余りに力の抜けた両者のやりとり。迫る墮嚙をモノともせず、両の手を前にかざして詠唱を始める。

それは、ラスティが良く使うものとは違い。どこかティアマツトのものに似ていた。

「Arfe arfe, infertia（強く強く、お願い）」

両の手を中心に、薄青い光りを放つ、線、が現われる。

「Tufetufe, thoviel tioliariolem-issa（遠く遠く、ただ雲居を追いかける）」

それは半球状にラスティを覆う。瞬く間に、ドームを形作った。

「Alcurim nowkia Lastimurma（憧れ

に伸ばした私の腕は)」

その魔法陣と言うべきか迷うそのドームには、幾重にも重なるように文字が描かれている。

「Katiam sol tie ertymous (鏡にその手を合わすだけ)」

脈動するかのように、収縮、膨張を繰り返すそのドーム。

「Carie livia Lastum wessa (駆けて生きた私の道は)」

それは、詠唱が進むと共に、周囲の魔力すらも励起させる。

「Irrelare mol wona (夢物語の海の中)」

空気中にスターダストのように現われたそれは――

「Venoum armatum Xeesa (私を覆う硝子の空には)」

――周囲を優しげな光りで包んだ。

「Zioeioe jelnik wein (爪が突き立てられるでしょう)」

気付いた時には共振現象の影響が消えていて、

「Xienolfillie Lasow halt (霞に浮

かぶ私の心は)」

体が軽くなったように、ティアマツトは感じた。

「Om ke in a c a i F e r f e l f a t u m （遠き日の名を探すでしょう）」

堕嚙との距離は徐々に詰まる。

「X o X e . . l e m o n a i n s o f （空を見て謡うこの音は）」

双方の距離が十メートルを切ろうとした。

「C a l s i e — e s s a （果たして）」

その時、詠唱は修了する。空が、謡った。

「O a i r e f e e n e X e e n ? （世界を感じているか？）」

ドーム状の式が、その形状を保ったままに拡大する。それは何物にも被害を与えることなく、徐々に薄まりながら、やがて見えなくなった。空気は静まり返っている。

それは誰の目から見ても失敗では、なかった。静まった空気は、何かが違う。目を閉じていたラスティが、静かに目を見開いた。

「…さあて…行くとしますか…」

現象の中心にたたずんでいた彼の右腕には、細めの鞘に入った剣

が握られている。ティアマツトが持つ剣と同程度の全長だと思われるが、ラストイの身長が高い分短く見える。体の前に持っていて、左手が柄を握った。

「カスミギリ
霞霧、」

そう告げると、勢い良く両手を開いてその剣を抜く。抜き去った後の鞘は硝子となって消え、左手に残った剣を重力に任せるように降ろした。曲線を描いた刀身が、鈍く金属特有の光沢を放つ。

「俺が一番、良く斬れると、思い込める、剣だ」

第二十五小節「海に還る」

「俺が一番、良く斬れると、思い込める、剣だ」

彼は、地を蹴った。怪我で血を流したとは思えないその速度に、やや遅れながらも墮嚙は反応する。右上段から、袈裟に鉄塊を振り下ろした。幾度も物に打ちつけられ剣としての面影すら残っていないが、武器そのものの重量から繰り出される一撃は、か細いその剣をへし折って余りあるだろう。

「当たらなければ？ ってな、これが！」

だがそれも、当たらなければ意味を成さない。走りこんだラスティが、その軌道を予測したかのようにそのすぐ左に身を入れる。右肩を前に半身になったラスティの背を、剣圧が撫でる。床に振り下ろされる鉄塊。振り下ろされた後の右腕が、ラスティの目の前にあった。

「Lain—Rede（描空を辿れ）」

詠唱と思われる一言と共に、左腕を振り上げる。その隆起した太い筋肉組織、その半分をその曲剣が切り裂く。低下した筋力を補うように左手も握った墮嚙は、打ち下ろした姿勢のまま横に振り払った。アルバを襲ったものと同じである。

だがソレを、人のものとは思えない跳躍でよけるラスティ。墮嚙の頭上、上空約三メートルほどの跳躍を見せたラスティは、左手を大きく振りかぶった。

「切り裂く…」

降下と共に振り下ろされた一閃は、墮嚙の右腕を完全に切断した。

ティアマツトは、その様子を驚愕した様子で見ていた。突然出現した見た事も無い意匠の剣。そして墮嚙の動きを読んだかのような動作???加えて彼女の右目（水晶眼）に見える、青い線。

「辿って…いるの？」

その線はラスティの剣閃に先駆けるように出現していた。魔術的な何かと思われるそこを、寸分の狂いも無く剣は辿っている。

見た事も無い現象に一時呆然としていた彼女だったが、自身の役割を思い出す。自分は最後の一撃を決めなくてはならないのだ。

地に剣を突き刺し、右手で左側のポケットから三色一組の魔石を取り出す。既に機能しない左腕は下げられたまま、その魔石ごと柄を握った。足りない握力を補うように、^{アロンドイト}「闇」が巻きついてそれを補強する。

「a u i r e , T i a — e l a m s a : : (私に応えて: :)」

目を瞑り、その準備に入る。

右腕を切り落とされた堕嚙は、それでも左腕で鉄塊を振るい続ける。先ほどの奇襲にも似た一連の攻防のように行くわけもなく、振り回される鉄塊をよけるのでラスティは精一杯だった。

「つくそ：体にガタが来たってってもなあおい！」

満身創痍の体を無理矢理誤魔化して動かしているだけのラスティ。リーチ差の違いが大きい中、彼は隙について懐に潜り込まなくてはならない。が、絶え間なく振り回す堕嚙には、その大きな隙は無かった。一撃食い込ませることが出来たとしても、その一撃では戦闘力を奪いきることが出来ず、射程からの離脱前にやられるのがオチだ。

「（マスターいくら何でも無茶をしすぎです！ 一度距離を離してください！）」

アークの声が脳内に響く。確かにアークの言う通りであると思ひ、離脱を試みる。だが、堕嚙は距離を詰めようと突進してきた。

「つくそ！ 距離は離させないってか！？」

全力で駆ければ逃げれないことは無いが、それでは意味が無い。

あまりティアマットと距離を離してはいけないのだ。

だが人の体は、そこまで長時間無酸素運動を続けられるものではない。堕嚙の肉体は、そもそもとして構造が変異しており、幻子で編まれたたんぱく質が強靱な組織を作っているのだ。通常のたんぱく質しか持ち得ない人間とは持久力そのものが違う。

「くそ！ アイツの準備はまだか！？」

避ける度に、全身の筋肉が悲鳴を上げる。意図的にリミッターを解除された肉体は、その組織の殆どを使い果たそうとしている。一撃を加えてから、まだ一分強しかたっていないが、それが途方も無く長く思えた。

「（マスター！ ティアマットさんの式の用意がそろそろ終わるようです！）」

アークが、砂嵐交じりの映像を送ってくる。脳内に再生された映像には、剣を握る黒い人影が見えた。恐らくティアマットだろう。それを肯定するように、ティアマットの叫び声が聞こえる。

「ラストィ！」

名前を呼ぶだけの声。だがそれが、準備が出来た事を示すものと容易に理解できた。彼女の攻撃を必中させるための隙を作るため、懐から最後の魔石を取り出す。今この場で、ラストィの切り札だった。

念話ではなく声に出して、ラストィは叫んだ。強く地面を蹴り、墮嚙と距離をとる。

「ラストィ！」

ティアマットが叫ぶと、その意図に気付いたかの様に後方に跳び、ティアマットと墮嚙、ラストィと一直線になるように立った。そして左手に剣、右手に魔石を持ち叫ぶ。

「突っ込め！ 俺がヤツの、視界を封じる！」

墮嚙と一定の距離を保つようにしながら詠唱に入るラスティ。その言葉を信じるように、ティアマツトは駆け出した。

ハンドランドハーフソード
片手半剣を肩口に、切っ先を墮嚙に向ける。その切っ先は墮嚙の背を捉え、このまま直進すれば墮嚙の背に突き刺さるだろう。

だが、墮嚙は背後にも目があるように行動することで知られる魔獣だ。死角など事実上存在しないといわれたその‘視界’を、ラスティはどうやって封じるというのだろう。その答えは、すぐに現われた。ラスティの詠唱が完成する。

「Quoliwen！（静め！）」

その瞬間、墮嚙の動きが止まる。目の前にラスティが居るにも関わらず、周囲を見回すようにその体を左右に向ける。勿論、ティアマツトのことなど認識していない。

「はあ！」

闇を纏った剣が、墮嚙に突き刺さる。神秘層^{ベール}を物ともしない強固な幻想が、その刀身を深くまで導く。一メートル以上の刀身のその大半が、埋め込まれた。その柄を押し込む腕は、まだ握り込まれている。

「D-Lac x elioren（ディラックの海にお還りなさい）」

その一言に、刀身から闇が開放される。

虚数空間に還す闇が、刀身を中心に多数の針となって現われた。肉体に埋め込まれた刀身から開放されるそれは、墮嚙の肉体を喰らう。その闇の針の貫いた跡の箇所は、その尽くを虚数空間^{ディラックの海}に飲み込

まれていた。

崩れ落ちる堕嚙の肉体。その肉体は、既に風化し、硝子のような光沢を発する粒子となって消えていく。肉体にこびりついた魔力の結晶たちが、肉体を世界に‘還して’いるのだ。結晶化現象と呼ばれるそれは、勝利を祝福するように二人を光りに包む。周囲の己憂部たちは、既に本体の絶命とともにその姿を崩していた。

「勝った……の？」

目の前の光景が信じられないかのようにティアマツトは呟く。堕嚙が光りに消えていく様子を見つめる彼女の隣に、ラスティが近寄っていく。

「はは…やっちゃまったぜ？ 堕嚙に勝っち…まっ…た…」

力なく座り込み、そのまま仰向け寝転んだ。ティアマツトもそれに習うように座り込む。お互い体を酷使しすぎて立っている事も出来ない状態に、皮肉げに笑いながらラスティは言った。

「あゝあ……疲れた……」

そう言ったきり、ラスティは何も声を発しなくなる。気を失ったのか眠ってしまったのかよく分からないが、その表情は晴れやかだ。そんな彼の表情を見て、急に意識が遠くなる。

「休んでいただいても大丈夫ですよ、ティアマツトさん。私がお二人を見ていますから」

踏みとどまろうとした時、アークのそんな声が聞こえる。その声に安心したように、ティアマツトも横になった。

「じゃあ…お願い…ね…」

そうして彼女も、深いどこかに沈んでいくような感覚の中、その意識を手放した。

暫くしてから来た救援の教師達が一番最初に見たのは、並ぶようにして眠るラストィとティアマツト。そして二人を見守るアークの姿だったという。

第二十六小節「ルビー・アイ」

もうこの世に残っていないと思われていた人造魔獣「墮嚙」^{オチガミ}の出現は、世間を大きく騒がせた。一般の新聞記者の取材が、学院に多数押し寄せた。

学院はその対処で一時授業が出来なくなり、その間生徒達は思い思いの行動を許された。とはいっても、実際に襲われた一年生？？特に四組、その中で更にラスティハルト、ティアマットの二名は事情聴取にその大半の時間をとられていた。

今回の事件で怪我を負ったラスティとティアマット（アルバ先生は義手を失っただけだった）は学院の保健室でその聴取が行われた。‘めんどくせえ、適当に誤魔化せや’と先生からの教えをうけ、聴取を任されたアルバ先生と三人でその調書を作り上げる。この時の話で、どうやらココに来る前に墮嚙が別の場所を襲っていたことが分かったらしい。近くの遺跡に調査を訪れていた一団の大部分が死亡したそうだ。

報告の調書を作り上げたそれから後は、お見舞いをうけつつ暇な日々を彼らは送っていた。

毎日異様に苦い薬を飲まされたおかげで、その怪我の治りは早い。ラスティは三日で保健室からの退室の許可を出された。退室してからも毎日屋上組と共に見舞いに訪れていた。

ラスティの退室から更に四日、今度はティアマットが保健室から退室した。

一週間ぶりに歩いた教室へ廊下を、ティアマットは懐かしく感じている。硬質の木の床にブーツの底が打ちつけられる音を聴きなが

ら、ティアマツトは妙に静かな廊下を不思議に思った。今の時間は授業中だっただろうか。

教室の扉に手をかける。その扉を開いた時、ソレは訪れた。

「主役の登場だ！ クラッカー隊、つてえ！！」

ラスティの号令と共に、数人の生徒達から放たれたクラッカーの一斉掃射がティアマツトの頭上に降り掛かった。突然の軽い炸裂音、降り掛かる色鮮やかな紙片。ソレを呆然として眺めていたティアマツトの手を、ステラが握った。

「ははは！ ティアマツトちゃん、コッチコッチ！」

「え？ え？ え？」

状況が飲み込めていないティアマツトの手を握ったまま、いつもは教壇が置かれている位置まで引っ張られた。そこで何かを羽織らされ、黒板を背にして立たされる。彼女が向かされた視界には、クラスメイト達の姿が映っていた。

『退室（退院？） おめでとう！』

事の発端は、ラスティが皆に放ったあの叫びだった。

『あいつは戦ってるんだ！ お前らを護ってるんだ！』

護っている。その事実を考えられた生徒は殆ど居なかった。

『一人なら逃げ切れる力量があっても、それでもアレと独りで戦ってるんだ！』

紅い眼だからって怖がられたって、
血まみれだってなんて言われたって、それでも護ろうとしてるんだ！』

その事実には、何人の生徒が驚愕しただろう。護ろうとしているというそんな余りに分かりやすい彼女の行動に気付かなかったことに、何人の生徒は考えさせられただろう。

『アロンドイト
‘闇’を出してまで戦ってるんだ！』

今までよりもっと恐れられることを承知で、
それでもその力を出して戦ってるんだ！』

『行かなきゃダメなんだ！』

今ここで行かなきゃ、またあいつは独りなんだ！』

そう、あの場で彼女の元に駆けつけようとしたのは彼だけだった。

『アイツは勝手に呪いでも撒き散らすようなやつか！？ 目合ったぐらいで殺すようなやつか！？ 居るだけで邪魔なやつなのか！？』

違うだろ!!』

誰もその言葉に異を唱える事が出来なかった。それは正しい事だったから。

『歌が上手くて、理論すっ飛ばしてるけど実技はよくて、あんななりでも馬鹿力で、でもどこか泣き虫で、少し人に臆病で……そんなやつなんだよ、アイツは!!』

そのことを、果たして何人が知っていただろう。先入観に先立てれるばかりで、誰も彼女の事を理解していない。ラスティ以外に彼女と話す、ゲルト・ハイス・ステラでさえも、始めは彼女に話しかけれなかった。

事実、彼女とラスティは墮嚙を最終的に打ち倒した。彼女は皆を護ったのだ。だがそんな彼女に、自分達は何をしただろう。

彼女を恐れ、遠ざけ、陰では貶める。それだけだったのだ。

何かしてあげれないか。そういち早く言ったのは、彼女のルームメイトのステラ・E・フィニエンスだった。彼女の最初の女友達であつた自分が、ティアマツトのことを怖がってしまったことを、本当に後悔していた。ラスティが駆けていってしまった後に、座り込んで泣き出してしまったのは彼には知られていない。

クラスメイトを集め、怪我が早く完治して先に保健室から出てきたラスティに、彼女達は押しかけた。そんな彼女達の様子に、ラスティは嬉しそうに笑いながら言った。

「アイツの怪我が完治したら祝ってやろうぜ! パーティだパーティ! 祝勝快復その他諸々ひっくるめて、祝ってやろうぜ!」

その日からの一年四組の行動は早かった。担任教師に直談判。彼女が快復した日に一日休みにしてもらえるように頼んだ。色々な利

害（その日が休みになる。自分は何もしなくてもいいe t c）の駆け引きで味方についたアルバ先生の協力もあり、その日を作ることに成功した。

「ふふ…でね？」

肩を優しく掴んで振り向かされた先には、赤いチョークで大きく書かれたアルファベットがあった。

R U B Y — E Y E

ルビーアイ 紅玉眼。そうそこには書かれていた。ソレは彼女の目の色、右目の赤い色にちなんだもの。数々のこの眼にちなんだ二つ名の中で、唯一、彼女を賞賛したもの。またも呆然とその文字を見詰めるティアマツト、その耳元で、ステラは言った。

「ラストィくんが考えたんだよ？　、　アイツの眼は血まみれなんかじゃない、　っていつて？　？　？　？」

「おいステラ！！！！　それは言うなと言っただろう！」

後方から、慌てて叫ぶラストィの声が聞こえる。それにおどけて首を竦めてみせ、彼に背を向けたままティアマツトに向かい舌を出して見せた。それはどういう意味なのだろう？

そこからは、その日一日中彼らは騒いでいた。
女子達が用意した昼食はまれに酷く辛いものが混ざっており、その大半をラストィが引き当て

何故か行われた腕相撲大会では、ティアマツトが男子の部で優勝

するという一大事件を起こし

ハイスは（腕相撲の）トトカルチョで荒稼ぎ（優勝予想ティアマツト）

早々に負けた人達はチェス大会を開き、そこではゲルトが優勝

その後行われたビンゴ大会では、ステラが最初の五つでビンゴをそろえてしまう

そんなお祭り騒ぎが、放課後になるまで続いた。
そしてその中に、確かにティアマツトは居た。

その笑顔は――――

エピソード「騎士の少女」

「え？ いいの？」

放課後になり、お祭り騒ぎの終わった一年四組はクラス総出で後片付けをしていた。ティアマツも手伝おうとしたのだが、ステラに止められてしまう。

「いいのいいの！ ほら、今日はキミの快復祝いなんだし！」

でも、と言い留まるティアマツ。そんな彼女に、ステラは耳元で呟いた。その悪戯したときのような表情は、ティアマツには見えていない。

「それにほら、ラストイくん。きっと屋上に居るよ？」

「え？」

何のことか分からないと、そう呆けた顔をしている彼女に、距離をとりながらステラは微笑む。

「ラストイくんもあの時は大変だったからね、だから二人には今日は休んでもらわないと！」

ほらほらと、押し出すようにしてティアマツを屋上に向かわせる。そして、彼女が教室から出る前に、ステラは忘れていたという風に一言言った。

「あ、そーだ。その‘コート’ね？ ラスティくんが作ってくれたんだよ、ちゃんとお礼しておくんだよ？」

ティアマツトが現在来ている‘コート’……教室に入った時に羽織らされた……赤いロングのコート。カソックに似たあれが、墮嚙との戦いで駄目になってしまったから、その代わりにと渡されたコート。皆からの贈り物と言われていたが、どうやら彼女が言うにはラスティからのものようだ。

それも、ラスティには言うなと言われていたのでは……？ そう思ったが、あえて追求はせず、了解の返事を言って教室を後にした。

……………

「お？ ティアマツトか」

一週間ぶりの屋上^{いっしょものばし}では、仰向けに空を見るラスティと、（少年姿の）アークの姿があった。顔だけ向けてティアマツトの方を見るラスティは、今日の感想を訊いた。

「どうだった？ 今日のパーティは」

その質問に、ティアマツトが彼の隣に座りながら喋る。すれ違いに、‘少しかってきます’と、‘か’の音を強調してアークが立って、その姿を消した。

「うん、楽しかった……？ ……なんだか、新鮮だった」

笑顔でそう答えるティアマツトに、満足そうに返事をする、また空を見上げ始めた。空が色付きはじめている。そのまま時間が過ぎた。腕を頭に組み仰向けに寝転ぶラスティ。膝を抱きかかえるよ

うにして座るティアマツト。特に何か会話する訳でもなかったその空気は、双方に最初の日のことを思い出させた。それを、ラスティが言う。

「何だかこうしてるとさ…最初にティアマツトの歌を聴いた日を思い出すな」

そう言ってラスティは体を起こす。足を組み、胡坐の姿勢に左手で頬杖をついた。ラスティのその言葉に、ティアマツトは首肯しながら肯定する。

「うん……そうだね…」

そこからまた、少しの沈黙。そこで、彼女はステラに言われていたことを思い出した。‘礼’を言わなくてはならなかったのだ。

「そういえば、このコート…ラスティが作ってくれたんだって？
…あ……………」

そこで彼女は思う。思い返してみれば、ラスティに礼を言うのは初めてだった。そもそも人に礼を言ったことすら彼女は思い出せない。ひよっとすると、ラスティはティアマツトが初めて礼を言う相手なのかも知れない。そう思うと、何故か恥ずかしくなる。

「……ありがとう…」

何とか礼を口にする。だが、ラスティはそんな彼女の心情など露も知らず。全く別のことに頭を抱える。これにも、何処か既視感が抱かれた。

何を恥ずかしがっているのか、頭を抱えたまま悶えるラスティ。そんな彼の様子に、礼を言うのを恥ずかしがった自分が馬鹿であったかのように思えた。ようやく心の平静を取り戻したラスティが、体勢を起こして言う。

「つまあ……一応アークと一緒に礼装処理したものだし、材料だって皆から集めたり買ったたりしたやつだ。だからそんな、俺一人で作ってたって訳じゃないんだからな？」

まるで弁明するかのようなラスティの口調。ティアマツトは、視線を夕日に向けたままで、短く返事をするだけである。ラスティは何か言いたげだったが、すぐにその表情を変えた。難しいものだった。

その表情の意味は、すぐにわかった。

「なあ……ティアマツト。やつぽ、赤は嫌いか？」

ふと氣になったその質問。彼女のコートは、赤い布で作られている。嫌いにならないでほしい???そんな願いが込められたそのコートを、彼女は氣に入ってくれたのだろうか?

一瞬の間。そして、いつかのように目の前の低い地に飛び降りる。右足を軸に、振り返る。赤いコートのすそが、翻る。

「ふふ……さあ……どうでしょうね？」

夕日の明かりに照らされたその表情は、はぐらかされた答えとは

別に、何か物語っているように見えた。

その日、久しぶりに夕日の歌を聴く。

聴衆がラスティだけなのは、最初の日以来だった。

「Tufemiriesiernorur,figha
aquqlsudiriem(遠く向こう空の下、日は赤く沈
んでく)」

「Kolidiazoiernolker,hiaaixa
sierqiu(小高くそびえる丘のうえ、ここで私は空を見
る)」

「Foukacinervivlimolt,tinu
asukiasiersierqiu(何処か違う別の場所、違う人が
空を見る)」

Timia,olnia,nelmia,weixia...wo
rkatinguriekilukerumu(時や場所や名前
や歳や...みんな違っているけども)」

「soufiaasiewennaquekilia(それで
も同じ夕日を眺めてる)」

「Owl nexiafumriie(いつも隣に誰か居て)」
「nokthopiumsiekilia(そう願いはしな
いけど)」

「sefieoxiarkelfimquokieoul

n（せめて同じ景色を眺めて欲しい）「

「softalewriesahopiens（そんなささやかな願いだけ。）」

「私の主は歌が好き」

X月Y日 木曜日 はれ

——私が前々から気になっていたことがありました——

・ ・ ・ ・ ・

「ラスティさんは、ホントに歌が好きなんですね？」

墮囃の襲撃事件から初めて皆で屋上に集まったその日、ティアマットの歌を聴いてご満悦のラスティに、ゲルトは言った。ラスティは、それがさも当然であるかのように口早に反応した。

——その質問をしたゲルトさんに、少しは役に立つと賞賛の声を送ってあげようかと思いました。その…少々私では聞きにくかったので——

「当然だろ？ 歌は、音楽は最高だ——人の創り上げた最高の芸術だと俺は思う」

よほど音楽が好きなのだろうと思われるその発言に、ステラが納得したように反応した。

「ゲルトくん、そんなこと聴かなくても判るじゃん！ ラステイクんってばいっつもいっつも、ティアマツトちゃんの歌が聴きたい！ っとな感じでそわそわしてるもの」

「お、俺ってそんな感じなのか？」

——私としては、彼女のことを気にするのに考えられる要因がもう一つ思い当たるので、中々聞きにくかったのですが…なるほど、やはりそうでしたか——

周囲からの風評に、引きつった笑みを浮かべるラスティ。その隣では、膝を抱えた何時もの姿勢で、恥ずかしそうに頬を掻くティアマツトの姿があった。

———そういえば、彼女は何故何時も膝を抱……タイイクスワリなるものをしているのでしょうか？———

「おうおう、そうだぜ？ オレらが早く来れば、‘アイツ（ティアマツト）は？’って何時も言ってくるじゃねえか」

———マスターの次に彼女の登場を待っている音楽好きが何を———（消された跡がある。よく見ると、‘言ってるやがる’と書かれていたようだ）———言うのでしょうか？———

そんなハイスの発言に、二人は揃って顔を赤らめる。ラスティは胡坐に頭を抱え込んで呻き、ティアマツトは膝に顔を埋める。二人の座る位置が並んでいこともあって、（アークを除く）周囲は声を上げずに笑った。

「ううううううううおおおおおおお！！！！」

急に叫んで立ち上がったラスティが、恥ずかしさを紛らわそうとしてかその場から走り去っていった。しばらくそのあたりを走り回っていれば、そのうち戻って来るだろう。そのことを皆にアークが告げた。

——お一人にしていた方がよろしいでしょうから、私は後を追いませんでした——

「あれ？　ラスティさん？」

——そんなマスターを見て、唯一その行動の理由が分かっていたなかつたゲル……鈍金（鈍い金^{ゲルト}）さんが首をかしげていました——

ラスティのその行動で空気が誤魔化された皆は、少々話題を変えた。

「そーいやよ、教会の魔術にある、聖唱術、って見たことあるか？」

ハイスが言ったその聞きなれない単語に、ステラやゲルトは首を傾げる。元は教会に居たティアマツトが、それに回答した。

「詠唱に旋律をつけて行う魔術……だったと思う。一応、私は少しだ

「使える」

「お！ マジでか！？　　すげえな！？」

彼女の回答に、心底驚いてみせるハイス。事情の分からない（アーク含む）三人は、ゲルトを代表にさせ？？して質問した。

「その聖唱術ってなんなんですか？」

「あ、わりいわりい。聖唱術ってのはな、さっきティアマツトが言った通り、‘詠唱に旋律をつけて行う魔術’だ。教会連中は、‘魔’の文字を入れたがん無いんでそう言ってる」

「旋律がある分、おっそろしく詠唱は遅いんだけどよ、その幻想の規模とか強度とかハンパねえんだ。まあ、術式に制御基盤が少ないらしいから、すっげえ精神力使うみてえだけどな？」

たまに発揮されるハイスのトリビア。そのことに妙に感心したように、ゲルトはうなづく。

「――そういえば、精霊の方にも似たようなものはありましたね――」

「なんでその技法が強い幻想を生み出せるかはわかってねえんだけどよ。何でも教会が言うには、‘歌は神への供物’だって言ってる――」

「――その会話は、マスターがお戻りになるまで続けられました――」

――
、歌は神への供物、言いえで妙だと思ひます――

「私の主は左利き」

——今日は、様々な魔術礼装の様式の授業がありました——

「ねえねえ、みんなの礼装って何？」

そんな、ステラの言葉から始まった。その場のノリというもので、放課後に皆の礼装を持ち寄ろうという話になった。

学院内に居る間は自身の専用礼装を持ち歩かないような生徒も多い（サイズなどの点から）ので、自然に魔術実技の授業でもなければ持ち寄らないようになっていた。そのためお互いの礼装を見たことが無かったのである。

——普通はこのような事などしないでしょうとは思いますが——

放課後、礼装を持ち寄ろうという話になり、ラスティは自分の寝室の中で悩んでいた。ベッドの上に仰向けになり、ベッドの端に（少女）アークが座っている。

礼装が無い……そもそもとして作ってすらないのである。

「いや、むしろ何時俺にそんなもん作る時間があつたかつては思っただけだな、これが」

いくら学生の身とは言え、自身の礼装を持っていないというのはあまりに不自然である。

礼装とは、この世界において何らかの神秘が込められた物を指すのだが、この場合は、魔術を行使する時に、自分が最も強い幻想を生み出せるものを指す。

それは杖であったり、剣であったり等様々だが、共通して言えることは、その使用者が最も丹精込めて作り上げたもの……というところだろうか。

——マスターは、いつも魔石のみで魔術を行使していましたから……

魔術を行使する際に必ず必要となるのが、魔石。人の意思の力に反応し、幻想を作り上げる力の源。人々は、ただ魔方陣を生成するのに必要としか考えていない。が、それは魔石が人の意思を受けて、幻想を形にするのに必要な形態をとっているだけに過ぎない。云わば幻想の設計図、器。そこに自身の幻想を注ぎ込むことで、魔術は完成する。

そしてその器の生成を補助するのが礼装。自身をより深い瞑想状態に導いたり、幻想の‘存在の保証’に用いられたりする。

意識をコントロールするための式を初め、様々な式や言葉が刻まれている。それを用いることで、人はより強力な幻想を創り出すことが出来るのだ。

——私の補助で、マスターは礼装無しでもそれなりの魔術を行使できますからね——

それを持っていないということは、余りにも不自然過ぎた。だからこそラスティは悩んでいた。

「アークが礼装っていうのも拙いしなあ……」

実際は殆どそうなのであったが、魔術士がそのように他の存在に頼りきっているという話も拙いのであった。集合までには、あまり時間が無い。

——私はそれでいいと思います……私がマスターの礼装：——

「なあ、アーク……何かいい案無いか？」

「（やはりそれでは駄目なんですか……）そうですね……あの、墮嚙^{オチガミ}と戦った時に用いた剣などはどうでしょう？」

「それだ!!」

アークの一言に、ベッドから勢い良く姿勢を起こすと、世話しく何かの準備を始めた。ストックしている魔石を、各色を三個ずつ持ち出し、ベッドの上に転がす。何やらノートも取り出したラストイは、急いでそれをめくっていき……やがて止まる。目的のページを探し出したようだ。

「ふっふっふ……よし！ アーク、^{フアネクト}接続、だ！」

——もうすっかり回復しきっていたと思っていた私でしたが……あれは辛かったです——

????????????????????????????

「ラストイくん遅いね。いつもなら一番最初に来てるのに」

ラストイたちを除くメンバーは、もう既に屋上にそろっていた。みな、それぞれの腕に何かしらを抱えている。

「そうだね……ラストイ、遅いね」

ティアマツトがステラの発言に同意する。その彼女の発言に、それだからかおうとハイスがある提案をした。意地の悪そうな笑みをしている。

「そんならティアマツト。あんたがラスティ迎えにいきゃあ良いじやねえか」

「え！？　な、なんで私！？」

妙に狼狽^{空気の読めない子}をしてみせるティアマツト。‘じゃあ僕が…’と言おうとしたゲルトがハイスの手で沈黙させられ、彼の脇に抱えられた。ティアマツトの様子に、更に笑みを強めるハイス。ティアマツトの背後では、ステラがハイスに親指を突き上げて賞賛のハンドサインを送っている。

「そりゃあ、だって…なあ？」

「ねえ？」

異様なまでにハイスとステラの息が合っている。二人に挟まれて、その行動への反応に混乱し始めた彼女に、救いの声が聞こえた。

「すまない、待たせた」

皆が振り返ってみると、入り口の方からラスティと何故かやつれた（少年）アークの姿があった。今話題になっていた本人が来てしまったことに、ハイスとステラは残念そうな表情を見せる。

「あゝあ、来ちゃった…折角ティアマツトを迎えに行かせようと思ってたのによお」

「ははは、なんでそこでティアマツトなんだよ」

何ら動揺もせずに受け答えるラスティ、そして何時もの位置…ティアマツトとハイスの間に座った。何故か今日はアークがうつ伏せになってラスティの後ろに居る。それに視線を向けた一同が、同じような質問をした。

「「アーク（ちゃん）、どうした（のorんですか）？」」「」

「いえ…何でも、無いです。どうぞお気になさらずに…」

うつ伏せのまま答えるアーク。苦笑いしながら後頭部を掻くラスティ。

とりあえず、皆はそのことを聞かないことにした。

——その御心遣いだけでも受け取ります…うう、マスターの馬鹿

——

????????????????

「えっと、今日は私から？」

その日はまたジャンケンで順番を決めた。今回は負けた順に発表するということになっていた。

「（何故だ…何故こうなるのだ…）」

今日は何故か、何を間違っただけラスティが勝利を収めた。

「私の礼装はね？　一応、これなんだ」

あれからよく着用している赤いコートの懷から取り出したのは、以前まで彼女のネックレスだった十字架状の物。それを見て、ラスティが　やはり　と反応した。

「教会の礼装の一種……クロスウェポン　十字兵装、だな」

「やっぱり…ラスティは知ってたんだね」

ラスティの出した名詞に、少し淋しげに微笑むティアマツト。その名詞には、皆が驚いたように反応した。いや、ハイスはそれほど驚いていないようだった。ステラが身を乗り出して言う。

「え！?!?」
クロスウェポン
「十字兵装って……教会の騎士が持つあの!?!?」

十字兵装…クロスウェポン。教会（正式な名称は別にあるのだが、この世界最大の宗教であるため、普通に教会と言えばその宗教の教会を指す）の保有する兵力、クルセイダース教会騎士団。そこに所属する騎士たちの標準の主力武装が、この十字兵装である。

その精製方法は門外不出で、持ち主の意思に応じて、武器を象る礼装。

半実体でなく、れっきとした実体を持った武器になるものであるが、その質量保存の法則を完全に無視した現象は、幾人の魔術士がその解析に挑んだ。が、その全貌を解析出来た者は居ない。そもそも理論自体は教会自身ですら把握していないのではないかというのが通説である。

持ち主に適した武装の形をとり、また武器としての性能も優秀。

尚且つ魔術礼装としての性質も持ち合わせるそれは、教会騎士がその特異性をあらわす要因にもなっている。

だがこれは、教会の騎士しか持ち得ない。教会に属していなければ所有できず、また第三者が発動させることも出来ないのだ。

「そうか：やっぱアンタは教会に居たんだな」

ハイスが重々しく口を開く。

「いっつも歌ってる‘鈴唱’、あれ教会のもんだもんな。教会に籍を置いてたことはあるんだろうっては思ってたけどよ：まさか騎士だったたあな」

ハイスの発言に、皆は押し黙る。教会に居た：それが彼女にとってどういう環境だったかは容易に想像できてしまったからだ。

少々暗い空気になってしまったので、話題を切り上げて次の礼装の紹介に移ることにした（彼女は他にも、黒黒を行使するための色の三原色の魔石を連結させた使い捨て礼装もあるのだが、紹介はしなかった）。二番手はゲルト。以前のジャンケンで決めた順番と同じである。

——このタイミングで、ようやく疲れが取れてきました——

起き上がってきたアークに少しだけびっくりしてから、ゲルトは自身の礼装を紹介した。

「僕の礼装は：これですね」

そういつてゲルトが取り出したのは、チェスの駒の形をした黄色の魔石。黄（地）の魔石で作られたそれは、使い捨て型の礼装だと

思われた。

主に魔石のみで作られることの多い使い捨て型の礼装。使い捨てというコストのかかる仕様は、大抵がそれ相応の力を秘めている場合がある。かなり上位の術者にもなれば、あらかじめ魔術を封じ込めておき短いスペルでその魔術を発動させる者も居る。

ゲルトが取り出したそれに、ハイスが反応した。何やら懐かしそうな表情をしている。

「お、ゲルトまだコイツ使ってたのか？」

どうやら彼には見覚えが見覚えがあるらしい。ゲルトは困ったように返事をして、説明した。

「この礼装は、歩兵^{ポーン}これが騎兵^{ナイト}、僧侶^{ビショップ}、城壁^{ルーク}、女王^{クイーン}」

「あれ？ ゲルトくん、キングが無いよ？」

ゲルトの手に置かれた駒型礼装の種類は五種類。名称からチェスの駒をもじったものであることは容易に想像できたが、ステラの言うとおり、確かにキングにあたる駒が無かった。ゲルトは、白いシヤツをまくり、腕につけられた腕輪を見せる。

「一応、これらを、制御^{キング}，するためのものです。これが王権^{キング}になります。」

この加工された魔石を核に、即座にゴーレムを作り上げる礼装です」

やや誇らしげにそう解説するゲルト。彼が言うには、それぞれが特定の役目に特化させたゴーレムらしい。今ここで使ったら大変だから、いつか機会があったら見せると、彼は言って終わった。

——流石はお金の名を関する子です。使い捨ての魔石製礼装が主力とは……——

次に紹介となったのはハイスの礼装だった。何やら大きな横長の箱が彼の隣に置かれていて：ハイスがそれを開け放った。それは――

「ぎ、ギター？」

ギターだった。クラシックギターのような形状のものでは無く、エレキのように刺々しいフォルムを持っている。朱色を基調に炎のようなペイントがなされている。ボディ下部は大きく、ネックには十二本の弦が張られており、ピックアップには弦の真下に来るように四色の魔石が交互に納められている。

「おお！ 凄い！ 十二弦ギターだ、初めて見たぜ」

「お！ 分かるか！？」

——本当にマスターは音楽がお好きなようです——

音楽という共通の趣味を持つ二人の間に、何やら熱い：むしろ暑い空気が出来上がろうとしている。放っておくと後が面倒だと思ったステラが二人を止めた。

「ハイスくん！ ほら、説明説明！」

「お、おおう。わりいわりい：コイツはな、ギターを元に作った礼装だよ？？」

脱色し乱雑に逆立てられた髪、引き締まった細身のパンツにジャケットというその出で立ちに、そのギターのフォームは似合っていた。

——確かろつくのぎたりすと　っぽいと、マスターはおっしやっていたような気がします——

「まあ、コイツの説明は苦手だかなあ…とりあえず、見て…いや、聞いてくれや」

そういつて彼は、ポケットから取り出した魔石を、ヘッドにあるジョイントに括り付ける。ベルトを肩にかけ、弾き始めた。

コードを鳴らした途端、ジョイントに括り付けられた魔石が弾け、粒子になる。やや早めのメロディーにあわせるように、それはハイスの周辺に魔方阵を作り出した。

「x a o r a m, x a o r a m (響け、響け…)」

通常の二倍の弦から生み出されるメロディーは、不思議な奥行きを持っている。弦が震える度に、真下につけられた魔石は光り、それを触媒に空気を震わせる。

徐々にテンポが早まる。それに呼応するように、魔方阵が光を強め、皆の上空に舞い上がった。

「Y e a h ! !」

その掛け声とともに、陣が弾ける。弾けた後の光が、何も燃やさない炎となって舞い降りた。皆はそれに見とれる。

「綺麗…」

ティアマツトが漏らした呟きに、少し恥ずかしそうにハイスは答えた。

「アンタにゃあ及ばねえよ」

——そんなことは無いと、私は思いましたけども…今回は、ハイスさんの評価はアップだとおもうのです、はい——

「うわあ…なんだかハイスくんの次にやるって不安だなあ…」

「別に何か演技でもするわけじゃねえだろうが」

ハイスの突っ込みを受けながら、ステラは一度その場から飛び降りた。どうやら下の方に置いていたようで、しばらく待っていることになった。

「みんな！ おつまませ！！」

——アレは……礼装だったのでしょうか？——

下の方から出現したその姿に、皆が絶句した。

腕を覆うゴツイ装甲。それに支えられた身の丈程の物騒な杖状の金属。黒く怪しく光るボディが、夕日を受けていっそう雰囲気のみを増している。

灰銀の髪にやや褐色の肌を持つ彼女は、まるで戦乙女とでも形容しようかという、そんな雰囲気をも身に纏っていた。

「対魔獣用 大型多機能重礼装…TYPE―B ばーじょんつー、スレイゲミル’だよ！」

――TYPE…Aなるものが過去に存在していたのでしょうか――

魔獣討伐
どう考えても特定の目的にしか使えない物騒すぎる装備。その姿を見て、彼らは彼女にまつわるある噂を思い出していた。

――「基本的には常識人、ただし礼装作りが趣味(?)で、素晴らしい才能を持っている。だが、時折物騒すぎるものを作り上げることがある。彼女のその才能が、別のものに向かうことを切に願おう」

これが、あるクラブの部室の研究室から出てきた三年生の
(気を失う前の) 最期の言葉でした――

ニコニコと輝くような満面の笑みが、無骨すぎる装甲に囲まれている光景は、かなりシュールなものであった。

「さってと、ようやく俺の番だな」

衝撃の光景から立ち直ったラスティが、待ってましたとばかりに立ち上がる。皆の顔が期待に満ちているのを見ると、眉をしかめて言った。

「言っとくがな、あんまり‘濃い’代物は出せんぞ？」

たまになる古風っぽい言い回しで、ラスティはジャケット〔オチガミとの戦いで、所有していたジャージは駄目になってしまい、新たに服を買うまではハイスのものを借りていたりする〕ラスティ1

82cm ハイスイ178cm)のポケットから薄い青色の結晶を取り出した。

——結構似合っていると思います——

「Xie nol filie Las ow halt (霞に浮かぶ私の心は)

Om keina cai Fer fel fatum (遠き日の名を探すでしょう)」

それは、墮嚙との戦いで詠った詠唱の一節だった。それが分かったティアマツトは、現れるものの姿を予想する。

結晶が、光る糸のような姿になり解ける。その糸は棒状にまとまっていき、次第に確固とした形をとり始めた。薄く青づいた銀色の刀身、それはゆるやかなカーブを描く細身のもので、不規則な波紋が刃に見て取れた。鏢が楕円状のそれは、ラスティのみが知る種類の剣だった。

——「うちがたな」と、マスターはおっしゃっていましたね——

「霞霧」

——「俺が一番、良く斬れると、思い込める、剣だ」
そのように以前はおっしゃられていました——

「ほお、ラスティ：剣士だったんだな」

その刀身に見入るようにしてハイスが言った。そして、その出現方法にある疑問がわいたステラが、彼に質問した。

「ねえねえラスティくん！　それ、クロスウエボン十字兵装と同じようなつくりなの！？」

「いんや、それとはちよつと違うんだ。でも作り方は秘密だぜ？」

——知っていても人には作れません、はい——

流石に秘匿された製法まで知ろうとはしなかったが、彼女たちはそのルーツを知りたがった。見たことの無い意匠だったのだ。

「…あれ？　でも…なんつかどつかで見たことあるような気がするんだよなあ…」

そういうなり額に人差し指をあてて考え込むステラ。その言葉に、驚いたようにラスティは反応した。

「おいおい、これは流石に無いと思うぜ？　一応、俺のいたとこの昔の剣だからな、これが」

——「そもそもとして、ここの世界観は、‘セイヨウ’のものだ。‘トウヨウ’のものが存在する筈が無い」　後でマスターはこのようにおっしゃってました——

「あ！　ラスティさん、左利きだったんですね！」

ここで久方ぶりに口を開いたと思えば、そのようなことを言うゲルト。それに突っ込む者は誰も居なかったが、皆の視線は彼の左腕に向いていた。唯一、ティアマツトだけが驚いていない。

「いっつも文字は右で書いてるからおかしいなって思ってたんだけ

ど、やっぱり、そうだったんだ」

「おいおい、ティアマットはラスティが左利きって知ってたのか？」

「えっと、一応ラスティって…その、左腕の方が一回り大きいからそうかなって…」

何故か恥ずかしそうに言いよどむティアマット。ラスティとは反対側の彼女の隣に座っていたステラが、彼女の耳元に顔を近づけて呟いた。その声は、彼女たちの他にアークも聞き取っていた。

「(さっすがティアマットちゃん！ちゃんと観察してたんだね！)」

「!?!?!? う、ち違うって！」

この日一番の狼狽を見せたティアマット。首をかしげるラスティを他所に、ハイスと二人で散々からかわれる羽目になった。

——真っ赤にはなりませんでした、

涙目でハイスさんの腹部に強烈なブローが入れたのはお見事の一言に尽きました——

地に臥せたハイスを、ゲルトが突っついて無事の確認をしている。ティアマットはまだステラにからかわれていて、場は少々混沌としていた。

霞霧を結晶の姿に戻して、ラスティはアークに言った。

——『なあ？ 何故俺が左利きという話題からこうなるんだ？』

『それはマスターが左利きだからです』——

アークが以前書いたメモに、
‘私の主は左利き’
が追加された。

「私の主は長い髪が好き？」

X月Q日 水曜日 雨 のち やや晴れ

——私の存在が始まってこの方、これほどの恐怖があったでしょうか——

堕囓オチガミの一件でアークの存在がバレ、ラスティが精霊と契約しているという話は瞬く間に広がった。だが事件直後のことであまり大きな噂も無かった——ので、開き直って学校内に居る間も実体化している内に、いつの間にかアークは一年四組のマスコットになっていた。

——少女姿って、ある意味便利だと思います。ちやほやされるのは、あまり悪い気がしません——

昼休みや授業中では、ラスティからは自由に行動していてもいいという時があり。ラスティの側に居たい気持ちはあったが、アークは沸き立つ好奇心を抑えきれず校内を散策することがあった。

購買のおばちゃんからもらった（少年姿の時は多めにもらえる）売れ残りのパンを（食べる必要は無いが、折角くれるので）ほおばり、その日は食堂内を散策していた。その時だった。

「あ！ アークちゃんだ！　ねえねえアークちゃん！　ちよつと来て来て！」

突然現れたステラが、アークの許可を取ることもせず、その腕をつかむと、引きずるように連行された。その先は食堂の一角、一年四組の女子が固まっているエリアだった。

——女子の皆さんは私をちゃんづけで呼ぶのです。なんだか少し恥ずかしいのです——

行き着いた先では、ティアマットが囲まれ、苦笑いを浮かべていた。

????????????????????

よく一年四組の女子は、昼休みに食堂の一角を占k y：席をとり、皆で食事をとるらしい。墮嚙オチガミの事件以降、ティアマットもその輪に加わるようになっていた。

「やっぱティアマットちゃんは委員長狙い？」

「何言ってるのよ、当たり前じゃないの」

「いいよねえ、そんなやつなんだよ、アイツは！　って。そういってもらえて、ピンチに駆けつけてもらえるなんて物語みたい！」

「でもまずは彼女が委員長落とさなくちゃ駄目なのよ？」

ここ最近の話題は、専ら「ティアマツトが委員長をどう落とすか」であった。墮^{オチガミ}嚙の事件のことは、クラス中にラブロマンスであるかのように広まり、こうして何故かまだ付き合っていないのにも関わらず「黒髪のカップル」なるものが彼女たちの脳内で形成されていた。

顔色こそあまり変わらない（でも時折真っ赤になる）ティアマツトであったが、彼女たちが始終展開するその話題には困ったような苦笑いを浮かべていた。最も、皆から見ればまんざらでも無いようであったが。

そんな中、ティアマツトがふと呟いたことが事の発端だったらしい。

『この髪…切ろうかな…』

この発言にクラスの女子は戦慄した。学院でも少ない黒髪…しかも学年唯一の艶やかな黒髪は、多くの（特に一年四組の）女子の羨望を集めていたのだ。

それを切ろうという、彼女たちには冒涇にも等しいその行動を予言するその言動は、すぐさま問い詰められた。

『え？ いや…だって、意外と邪魔になることが多いし、手入れもたいへん…だし…その…』

言葉を進める度ににじり寄って来るクラスメイトたちを前に言葉が尻すぼみになっていくティアマツト。そんな状況の時、彼女たちの視界にパンを頬張るアークの姿が見えた。

彼女の脳に何が閃いたかは分からない。だが、その姿を視認するや、人ごみの中を抜け、遠ざかっていくアークの腕を捕らえた。そ

の間ジャスト三秒。異常な速度であつた。

????????????????????????????????

「ふふふふふふふふふふ…アークちゃんにはネ？　ちよつつつと聞きたいことがあるの」

——「笑顔が怖いと思ったら覚悟を決めた方がいい」マスターのそんなことばが思い出されました——

「は、はい！　なんですか？」

「それはね？　——アークちゃんの長い髪って、キミのマスターの好みカナ？」

——答えなくてはいけない、そう私の精霊としての本能が訴えました——

何故その質問になるのか分からない。長い髪がマスターの好みであるかなど知る訳も無い。

だが、アークは答えを出さなくてはならない。分からないという

回答を口にした時、何が起こるのかアークには恐ろしく不安であった。世界種以外を相手取る場合には無力でしかない己の存在が、この時ばかりは恨めしくてしょうがない。

「そ、それはですね……………」

アークはチラリとティアマットを見る。実のところ最もその答えが気になっているようである彼女の、その右目は普段よりも強く輝いていた。それが、アークが口にする答えを導き出すきっかけになった。

——一度話し始めると、こういうものは止まらないのですね——

「わ、私は一応、マスターとのリンクがありますので、恐らくこの化身の姿はマスターの思考の影響を受けていると思われます。ただ、幼い姿なのは私が普段は力が出せないからです」

真っ赤な嘘だった。この姿は完全にアークの好みなだけであったのだ。状況が状況であるため、マスターに念話で聞くという選択肢が無いので、このような賭けに似た行動に出たのだ。

「長い髪はマスターの好みであるかは不明ですが、恐らく好ましいものであるとは思っているでしょう」

「…切るの、止めようかな…」

アークの（嘘の）答えを聞いて、ティアマットは一瞬の思考のうちにそのような決断を下した。それは、アークには無罪判決を告げる声のようだった。

ティアマットを除く、二十四名の女子の安堵のため息が一斉に漏

れる。

アークは、無事開放されたのだった。

その日の夜

「マスター、私のこの髪って長い方と短い方どちらがいいでしょう
か？」

「なんだいきなり？ ……まあ、そうだな………やっぱ短いより
長いほうがいいわな」

———どうやら、私の行動は間違いでは無かったようです———

「私の主はライスが好き」

X月K日 土曜日 あめ

――今日は乾燥気味のこの地域では珍しい、雨模様の天気でした――

「（マスター、今聞いたところによりますと、どうやら食堂に珍しい食材が入ってきたようですよ）」

それはアークの念話からもたらされた情報だった。妙に人脈の広くなったアークはこうして、時折こうした情報を寄せてくる。昼時にラスティに寄せられたその情報は、彼の興味を惹いた。

「（へえ…どんなやつなんだ？）」

「（はい、それなんですが？？？）」

――その食材の名前を告げた時のマスターの様子は異様でした――

「（‘ライス’なるものらし――）」

「なにい！？！？ （アーク！！ それはメニューに並んでいるか！？）」

教室に居て、いきなり声を上げてラスティは立ち上がった。直前の様子から、アークと念話していたことが側に居たゲルトとハイス

には分かっていた。が、そのただならぬ様子には流石に驚いていた。

「（えっと……この料理長が見聞きした調理法だとかで、水に浸して圧力をかけて熱——）」

「すまない、二人とも、少々急用が出来た。（それだ！！ アーク、今すぐそれを確保しろ！ 量を聞かれたらとにかく多めにだ！ 具体的に聞かれたら六百グラムと答えろ！！）」

そうして全力疾走で、ラスティは教室から去っていった。

「何だったんだ？」 「何だったんでしょう？」

二人の言葉は、教室に残っていた生徒たちの総意をあらわしていた。

????????????????????

「!!!!!!」

珍しい食堂があると、食堂に顔を見せていたアークが突然飛び上がった。その光景を見ていた一年四組の女子一同は、その様子に首をかしげる。突然アークが、‘ライス’を頼み始めたのだ。

「あれ？ アークちゃん、おニューのメニュー頼んでるよ？」

「あの奇妙な白いツブツブの？ 何ででしょうか？」

「多分ラスティが念話で頼んだんだと思う」

一年四組の女生徒の中で、（本人は気付いてないが）唯一ラストイを呼び捨てで呼んでいるティアマツトが、クラスメイトたちの疑問に答えた。ちなみに、彼女以外の女子の間では、ラストイのことを、委員長orくん、さん付け’で呼ぶということが徹底されている。

「委員長が？ …あれのことを知っているのでしょうか？」

首をかしげる女生徒に、ステラが答えた。

「この料理長がどっかで仕入れてきたらしいよね。ラストイくんも多分外国の人っぽいから、もしかしたら故郷のものなのかもしれないよ？」

その答えは、正しかった。

????????????

「こんなにマスターは食べるつもりなのでしょうか？」

お盆を持ったアークの目の前には、大皿に入った六百グラムのライスなるものが存在していた。それを運ぶアークに、声をかける男子生徒の姿があった。

「なあなあアークさんよ。そんなにライスを食べるのか？」

左胸につけられた校章の色（一年生 赤、二年生 黄、三年生 緑 去年の卒業生 青）から、二年生だと判断できた。

赤茶の硬質の髪を持ち、切れ目の中は翡翠色の瞳。アークの主よりも一回り大きな身長で、常にシャツの腕を捲くっているその男子

生徒は、ここに来た時に度々世話になっていた人物だ。アークは気付いたように言う。

「あ、アクセルさん！」

アクセル・アーキナム、主のクラスの担任教師であるアルバ先生の甥っ子で、ここに来たアークに色々と食堂の使い方について説明してくれた生徒だった。こうしてアークを見かけた時には、声をかけてくれる。

「いえいえ、違うんですよアクセルさん。これはマスターに頼まれて……」

「アーク!! 確保したか!?!」

丁度いいタイミングで、アークの主人が現れた。肩で息をしており、どれだけ急いできたかを物語っている。アークの姿を見つめるや駆け寄り、そしてアクセルの姿に気付いた。

「（アーク、その先輩は誰?）」

ラストイはアークに念話で質問する。アークは、その質問を口にして答えた。念話が聞こえないアクセルのための配慮である。

———こういったことは、良くマスターには気を使うように言われていました———

「あ、マスター! こちらの方は二年生のアクセル・アーキナムさん。アルバ先生の甥の方です。ここで何度かお世話になったんです」

「そっか。…始めまして、アクセル先輩。アークのマスターのラスティハルト・ジーンです」

「おう！ 噂はちょいとは聞いてるぜ、精霊使いの一年生ってな」

魔術師全体で見ても少ない精霊との契約者。その中でも、完全な主従関係、というのは更に珍しく、その噂はすぐさま学院全体に広まった。

「いえいえ、そんな大層なことでもないですよ」

謙遜して受け答えるラスティ。アクセルの方は、折角だから一緒に座るか、とラスティを誘い、小さめの円卓テーブルに腰を下ろした。アークから盆を受け取ったラスティも快く返事をして向かいに座る。

「あれ？ 先輩も、ライス、を食べるんですか？」

ラスティの視線の先には、ラスティと殆ど同量のライスがあった。その問いに、アクセルは笑う。

「おうよ！ 昔オヤジに勧められて食ったコイツの味が忘れられなくてな、こうして偶に登場しては食ってるんだわな、これが」

ラスティの口癖と同じようなこと（……これが）を言って、アクセルはそう答えた。

「そうなんですか、俺の方は故郷の味が忘れられなくて、アークからこのことを聞いて居ても立ってもいられなかったんです」

故郷の、のくだりにアクセルは興味を示したようだ。そのことを

聞いたそうではあったが、折角のライスが冷めてしまつてはもったいないので食事を始めることにした。ちなみに、ラスティの盆にはおかずは何も乗っていない。

ラスティが、懷に手を入れ何事かを呟く。そして引き抜かれた左手に握られていたものは、細い二本の棒????箸だった。

「頂きます」

????????????????

その頃、食堂の一角の一年四組女子集団。彼女たちは興味しんしんに、ライスを食べるラスティに視線を向けている。

「すごい、委員長あんなに食べるんだ」

「凄い美味しそうに食べてる」

「アクセル先輩も負けてないですよ」

白いライスを口に含み、途端にラスティの表情が至福に緩む。互いにライスのこの食事法をつくりあげた偉人に賛辞を送り、何時しか奇妙な友情を、彼らは作り上げていた。

その光景を見ていた女子は、すぐさま作戦会議(?)に移る。肝心のティアマットを完全に置き去りにしたそれは、非常に真剣な空気の下行われた。

「発見よ発見!! 委員長の大好物発覚よ!」

「これはやるしかないわ、ティアマットさんには是非ともあれの調理法を学んで頂きますと…」

「え? え?」

状況の飲み込めていない彼女に、クラスメイトたちは熱く語りかける。「黒髪のカップル」を成立させるための彼女たちの気合は尋常なものではない。

「何迷ってるのよ！ 彼の大好物よ！」

「貴女が手料理を送るに最もふさわしい食事です！」

「安心してください」

「私たちも共に学びましょう」

「どうやってやります？」

「調理クラブの部員に姉が居ます！」

「ナイス○○○○！」

「基本を元に、応用したバリエーションも学ばなくてはなりませんね」

「いや、料理長に教えを請うのもいいんじゃない？」

その日の昼休み、ティアマツト手料理作戦会議は昼休みの予鈴がなるまで延々と続けられた。

????????????????

「いやあ、ラスティ！ いい食いつぷりじゃねえかおい！」

「いえいえ先輩こそ！」

——あの量のライスを、お二人は本当に食べつくしてしまいました——
た——

キログラムに達する量のライスを食い尽くした頃には、二人は妙

な友情を築きあげていた。同志を見つけた二人は、互いの情熱を称え合い、拳を合わせる。満面の笑みを浮かべたままで、アクセルはラストイに告げた。

「オレのほうに、叔父（アルバ先生）の方から次は何時ごろ来るのか知らせがあるんだ。また来たらアークに教えてやるよ」

「ホントですか?!? 有り難う御座いますアクセル先輩!」

同じく満面の笑みで受け答えたラストイは、その同志たる先輩と握手を交わすのだった。

——マスターは、ホントにライスが好きなようです

彼女たちがあの場を見ていた以上、恐らくティアマトさんは皆に作り方を叩き込まれることになるでしょう…ご愁傷さまで。ですが、私も微力ながら応援させて頂きますので、どうか頑張ってください——

登場人物

名前…Lastiehalt・Xeen（ラステイハルト・ジー
ン）

身長…183?

体重…70kg

髪色…黒

瞳色…黒

名前の意味…????

トレードカラー…空色・黒

特技…????

好きな物…御飯・乳製品・ライス

嫌いなもの…魚以外の魚介類・多くの果物

趣味…音楽鑑賞・運動・読書

苦手なこと…運動

得意科目…式学・詠語学

「どんな人？」

本編の主人公。日本人。‘世界’に迷い込んでしまった少年。世界に対して創造神のような立ち位置に存在する人物だが、その力のごくごく普通の一般人。だが魔術を扱うことに慣れていないため、他者の手助けがなければその行使は困難であるため、むしろ一般人に劣るのかもしれない。

実技こそ苦手であるものの、その知識は非常に豊富で、世界種が知らないようなことさえも知る。だが逆に、一般知識とは乖離している部分も多い。

‘事情’により、ティアマットのことを気にかけており、彼女の最初の友人となる。音楽好きということもあり、彼女の歌が気に入

る。

名前…Ark (アーク)

身長…???

体重…???

髪色…蒼

瞳色…蒼

名前の意味…箱舟

トレードカラー…蒼

特技…同族殺し

好きな物…???

嫌いなもの…???

趣味…主人の観察。世界の観察

苦手なこと…???

得意科目…???

「どんな人？」

ラスティハルトの使い魔で、精霊。世界種と呼ばれる、世界そのものに属しその均衡を保つことを使命とする存在の一種。ラスティの出現を運よく察知し、彼にいち早く仕えた。

その力は特定の条件下においてでしか発揮できないもので、日常では多大な能力制限を受ける。よって普段はラスティのサポートに回っている。

ラスティに対し絶対の忠誠を誓っており、今のアークの行動原理はほぼ全てが彼に根差すものである場合が殆ど。ただ、物理干渉の制限により力及ばない部分があることに思うこともあるようだ。

名前…Ti a m a t t・M a x i n a （ティアマツト・マキナ）

身長…152?

体重…???

髪色…?

瞳色…青・赤

名前の意味…メソポタミア神話の女神「ティアマツト」

トレードカラー…赤

特技…歌（本人は認めないが・力仕事）

好きな物…???

嫌いなもの…???

趣味…歌うこと

苦手なこと…勉強・細かいこと

得意科目…音楽・実技系科目

「どんな人？」

本編のヒロイン。水晶眼と呼ばれる不思議な瞳を持つ少女。赤の瞳を持つが故に人々に恐れられ迫害に近い状況にあってきた。

教会の出身で元々は騎士見習いのだが、事情により学園へ入学する。生徒の中では数少ない実戦経験者でもあった。それ故実技に関しては成績はいい。ただし筆記系の科目はほぼ全滅と言っているほどに成績は悪い。

歌が好きで、人目のつかないところを探し出しては結界を張り一人歌う。学院に入学してからはラスティ等少数の生徒が聴衆となることが多くなった。自分の歌を評価してくれることに関しては、初めは恥ずかしく思っていたものの、嬉しく感じている。

尚、彼女は季節感関係なく厚着である傾向が強い。

名前… Gelt・Arcacius・Finien （ゲルト・アルカシアス・フィニエンス）

身長… 160？

体重… 47？

髪色… 金髪

瞳色… 碧

名前の意味… お金

トレードカラー… 黄・茶

特技… チェス

好きな物… ？？？

嫌いなもの… ？？？

趣味… チェス・貯金・資産運用

苦手なこと… 荒事

得意科目… 歴史・地理等

「どんな人？」

ラスティのルームメイトの貴族。武家の家系の出身なのだが、その気性は非常に穏やかで、得意な分野も文官のようなものである。ただし、資産運用の腕前には天性のものがあるようで、実家（特に母親）から受ける期待は大きいらしい。

チェスの腕前は相当なものであるようで、その筋の人には結構有名だったりする。

双子の妹であるポリスとは仲がよく、（似ていないため）時折恋人に間違われることもあったそうだ。

他の面子に比べて影が薄い。

名前… Hais・Gulitie・Shenesvetter （

ハイス・グリティ・シェーネスヴェッター)

身長…176?

体重…63?

髪色…脱色された金

瞳色…薄い茶

名前の意味…熱

トレードカラー…朱

特技…楽器演奏

好きな物…辛いモノ

嫌いなもの…???

趣味…十二弦ギター

苦手なこと…???

得意科目…どれもそこそこ

「どんな人？」

ラスティたちのクラスメイトで、ゲルトとは幼馴染。高い位の貴族の出身だが、両親との仲はあまり良好ではない様子。放蕩息子と自分で行っている限りはそういう自覚を持っているのだろうが、そうであろうとする部分も垣間見える。

音楽に精通しており、その手の話でラスティと非常によく合う。

ただしラスティは楽器を演奏できないのに対し、ハイスはギター等の楽器を演奏できる。

名前…Stella・Elmia・Winings (ステラ・エ
ルミィア・ウイニングス)

身長…170?

体重…???

髪色…灰銀

瞳色…青

名前の意味…星

トレードカラー…白

特技…モノづくり（礼装的なソレ）

好きな物…甘いモノ

嫌いなもの…辛いモノ

趣味…研究、料理

苦手なこと…????

得意科目…魔術関連の教科全般

「どんな人？」

ラスティ達のクラスメイトで、ティアマットのルームメイト。ラスティの次にティアマットと仲良くなった人物で、本人は「彼女の親友」を自認する。

その明るい人格から、男女問わず人望がある。特にクラスの女子の中心的な存在であり、ティアマットがクラスに馴染めるようになるのも彼女の存在の影響が大きい。

アルナ・アマルティアという名の最年少導師を尊敬しており、彼女が白い色の衣服を好むのは彼女の影響でもある。

名前…P o r a l l i s ・ I r i a ・ F i n i e n s （ポラリス・

イイリア・フィニエンス）

身長…160?

体重…????

髪色…緑

瞳色…碧

名前の意味…北極星・北辰

トレードカラー…緑

特技…武技

好きな物…???

嫌いなもの…???

趣味…???

苦手なこと…???

得意科目…???

「どんな人？」

ゲルトの双子の妹で、ラスティ達の隣のクラスの生徒。生物学的な法則をまるっきり無視したかのような髪色が最大の特徴で、彼女のことを知らない人間でも、その姿を見たことがあるというものは多い。

ティアマットと同じように、何らかの特異な現象が起きているようである。

名前…Alba・Archinam（アルバ・アーキナム）

身長…190?

体重…90?

髪色…朱

瞳色…碧

名前の意味…夕日

トレードカラー…赤銅

特技…???

好きな物…???

嫌いなもの…???

趣味…???

苦手なこと…???

得意科目…???

「どんな人？」

ラスティ達の担任教師。粗野な印象を与える風貌と口調の人物だが、面倒見がよく生徒たちからの人気は高い。元々は有名なある一族の出の人間で、その筋では非常に有名な人物であるが、負傷が原因で現在は一線を退いている。

全身を覆い隠すローブの裏地には多数の礼装が仕込まれており、見た目以上に重い。また、右腕は金属と魔石で作られた義手となっており、それが一つの礼装にもなっている。墮嚙との戦闘により粉々に砕け散ったため、製作主の元に修理に出したらしい。

世界観基本設定

「世界」

- ・ 剣、魔法。そんなファンタジーな要素を内包する世界。人種的には西洋と見受けられる部分が多く、黄色人種が非常に少ない。
- ・ 所々に日本的文化に酷似したものが存在する。ただしその成り立ちは異なるものである。

「公用語」

- ・ こちらの世界で言う日本語。精霊たち世界に近い存在からは、かりな仮名の言葉’ともしようにされている。人の世のなかに広く浸透しているため言葉としての神聖は無く、魔術的に使用されることは無い。

「詠語」

- ・ こちらの世界で言う英語・独語・仏語・羅語 e t c …… それらを全てひっくるめてそう呼ばれている。魔術的神秘性に富み、式の表記や詠唱文などには全てこの言語が用いられている。
- ・ 尚、魔術的に神秘性を持つこの言語は、人の名前としての言語の側面もあり、公用言語で名前をつけられる人は居ない。これは、詠語でなければ世界から加護が得られないからである。逆に他者から忌み嫌われるような存在たちには詠語の名前が付けられない場合が多く。漢字名となる。

「幻想」

・魔術の根幹を成す概念。その力の源は想いや信仰など心から導き出される。いわば、実現する夢、である。これにより実現される事象が、燃え盛る炎、であったり、力の強い自分、であったりする。ただこれは想像すれば良いという物でもなく、必要な手順が存在する。

「修正力」

・世界が幻想に満たされないようにするために、ソレを排除する力、修正力、が世界には備わっている。幻想は、この修正力により減衰・否定されていく。起こす事象が現実から引き離されていれはいるほど、その修正力は強く働く。それが魔術が万能では無い原因となっている。

「幻子」^{げんし}

・この世界に存在する特有の物質。一般には魔力と呼ばれている（幻子と呼ぶのは学術的に魔術を語るときが殆ど）。「原子」を元にした改良複製といえるもので、通常存在しえないはずの物質。意味・意思などの媒体となり魔術を魔術たらしめている存在。幻子の存在そのものは現段階では確認されている。

・幻子核は、「謡子」^{ようし}と、「宙醒子」^{ちゅうせいし}で構成されており。その構

造しだいで通常の原子のように振る舞うこともある。世界種などは全てが、幻想種は一部が幻子で構成されている。また、幻子核の周囲には伝子が周回している。

・純粹に謡子のみで構成された幻子の結晶は、‘魔石’と呼ばれ、人の意思が通りやすく魔術の媒体として利用される。不純物の構成により性質と色を変える。現在確認されているのは四種。

「幻想種」 げんそうしゅ

・本来神話・物語の中でのみに存在していた筈の生命体。人々のイメージに模かたどられた影響を、体の一部を構成している幻子原素が、本来の生命体にはありえない生態活動を助けている。

・空気中の幻子（魔力）濃度が濃い場所であるほど、同じ種の幻想種であっても大型に強力に育つ。また、体を構成する幻子の割合が多ければ多いほど、幻子が濃い所でしか生息できない。

「世界種」 せかいしゅ

・精霊、高位龍種など、世界とつながりを持つ存在。体の構成が全て原始であるのが特徴。

・生命体では無く。物理的な世界の防衛機構たる存在。種の数を調節したり、‘世界’に害を成す存在を消すなどをするために存在する。そのため、与えられたスペックは常軌を逸している。

・存在年数が短くまだ世界とのつながりを持っていない精霊は、世で自身が認めた存在と契約することがある。その事例は少なく、また完全に世界種として覚醒していない世界種であってもその力は大きい。彼らと契約することは人々の夢でもある。

「結晶体質」
けっしょうたいしつ

・高魔力濃度の空気の中などに居て、血液中の幻子の濃度が余りにも濃くなりすぎると、人は死に至る。だがそうならず自身自体の一部が魔石で構成されるようになったのが結晶体質。だがこのことは、発症率の極端な低さ故にまだ学会ですら存在が知られていない。この現象を知っているのは、精霊王などの極少数。

「水晶眼」
すいしょうがん

・結晶体質の発祥部位のパターンの一つで、発祥部位が眼球・網膜である場合の呼び方。（大抵は両目だが、ティアマツトは片方のみであるようだ。）効果はランダム性が高く、固定された恩恵は無い。

・ティアマツトの場合、現在確認できているうちでは感覚器官の視覚が強化されているようで、可視化していないアーク存在をうつすらと視認できていたようだ。

・意思が通りやすいためか、感情の起伏や魔術の行使で右目の水晶体が発光するようだ。

「鈴唱」
れいしょう

・鈴音の歌ともいわれる特殊な歌の技法。魔石を砕いた粒子をドーム状に展開し、その内部で音を反響させるもの。魔術士としてのある程度の力量も必要となるが、それ以上に世界に対しどれだけの干渉し、心を描けるかというものが大きい。才能ではなく、資質に影響される部分が大きい。

・元は教会で使われていて、儀式歌の一つとして用いられている。だが、この歌を歌う事のできる人物は相当少なく。大きな教会でさえ、鈴唱の歌い手が居ないほどである。

・通常、赤・青・緑の三色の魔石を砕いて発動させられる。

作中で使用された魔術・礼装

名前「火炎球」

属性色…赤

概念…燃・球

赤の属性色の火を扱った魔術ではオーソドックスなもの。火の玉を飛ばす、ということがこの魔術の定義であるため、魔術の個人差が非常にしやすい魔術でもある。アルバはこれを授業で取扱い、生徒たちに個々人ごとの差を自分なりにレポートを書かせて提出させた。

名前「鈴唱」

属性色…赤・青・緑（ティアマツトのものは、緑の代わりに黄を用いている）

概念…反響・満・音

教会に伝わる特殊な魔術。一定範囲内にドーム状の結界を張り、その内部で音声を反響、展開させるというもの。魔術士としてのある程度の力量も必要となるが、それ以上に世界に対しどれだけ干渉し、心を描けるかというものが大きい。才能ではなく、資質に影響される部分が大きい。

儀式歌の一つとして用いられている。だが、この歌を歌う事でできる人物は相当少なく。大きな教会でさえ、中々鈴唱の歌い手が居ないほどである。

名前「蒼弓」

属性色…不明

概念…弓・空・穹

ラスティが使用した狙撃用魔術。和弓のシルエットをした射出式を生み出し、魔石の矢を番えて撃ち放つ。通常 of 魔術の詠唱とは違い機械的・手順的な詠唱によって行使されるのも特徴。

規模と強度さえあれば非常に分厚かった墮嚙の神秘層を抜き、打撃ダメージを与えるほどの威力となる。貫通力重視であるらしく、攻撃力が高いわけでは無いらしい。

名前「符術・拳槍」

属性色…赤・緑

概念…拳・槍・布・ルーン

アルバが使用した長い符を用いた魔術。魔石による文字が書かれた符を触媒に、硬化させた符を操る。墮嚙の一撃を逸らすためだけに使用されたが、本来は攻撃的に使用されるもの。

名前「火葬する火槍」

属性色…赤

概念…槍・火・火葬・浄化

ティアマットが墮嚙に対して使用した教会仕様の魔術。アンデッド系の魔物に非常に有効なのだが、墮嚙は定義的に死んではいないので、浄化概念を含んだこの魔術の効果が存分に生かされることは無かった。だがそれでも、墮嚙に有効打を与えることはできていた。

名前「戦歌・赴く者」

属性色…なし

概念…誇り・戦

ラスティが使用した、古い魔術。ラスティが元の世界において好きであった詩の一節をそのまま用いている。身体能力に關係する効果があるようだ。

名前「独り護る者 アロンダイト」

属性色…黒（赤・青・黄の混合）

概念…湖・騎士・闇

ティアマットが使用した、秘文と分類される特殊な魔術。

元々はアーサー王伝説の円卓の騎士の一人、湖の騎士と呼ばれたサー・ランスロットが所有していた剣^{アロンダイト}Alondite。だが、

この世界にはアーサー王の物語は存在しない。

彼の有名な^{エクスカリバー}Excaliburの兄弟剣で、それゆえに世界では

光と対の闇を用いた力として扱われている。尚、エクスカリバーの詠語表記はEcs-Xariverとなっている。

アーサー王に領土を攻め込まれた時、守りに入っただけで攻勢を取らなかつたという話を元に、その能力は防御能力に特化したものになっている。精神力が保てるのであれば、龍種の一撃をまともに受け止めることも可能。

・幾つかの発動条件が存在する。

- 1・剣を触媒とし色の三原色（赤・青・黄）を用いて発動する事。
- 2・術者の名前が、水に由来を持つものであること（これは、ランスロットが‘湖の騎士’と呼ばれていたためである。）
- 3・術者が、精霊からの祝福をうけるか何かで、最低でも階位三以上の権威を持っていること。

以上、三つの条件を満たした上で定型文を唱えることで発動とする。

・発動後の効果（仮）

- 1・深層意識を媒体とした影を常に召喚。自動防壁に転用可能。
- 2・正式開放で虚数界を開く事が出来る。
- 3・動作補助。擬似節の生成。
- 4・単式で対物理または対幻想の結界を発動可能。

名前「ディラックの海虚数世界」

属性色…黒（赤・青・黄の混合）

概念…虚数・海

ティアマットが墮嚙に止めを刺す際に使用した魔術。発生部位から出てきた闇が、触れた物質を虚数世界へと取り込む。物理攻撃力としては、最高峰に位置する魔術でもある。

ただし、使用までの隙が大きく、発生する闇も遅く、また簡単な障壁に防がれてしまう等、使い勝手がいいものではない。

———礼装———

クロスウェポン
「十字兵装」

ティアマットが使用する、教会製の礼装。騎士団に所属するものはほぼ例外なくこれを装備している。詠唱を以て武器の姿をとる。個々人によりその形状には差異が存在する。ティアマットの場合は、

ハンドアンドハーフソード

片手半剣という、持ち手の長い長剣の形をとる。

礼装としての役割もあり、教会系の攻撃魔術は大抵がこれを触媒にして使用される。

小さな十字架型から剣になる等、質量保存の法則を完全に無視しており、また、損傷をその場で随時復元していくなど不可思議な特性を持つ。幻子が深くかわっているらしい。

「黒鋼の腕」

アルバの右腕である義手。魔石によって動いているらしく、ただ動かすだけでも精神力が必要とされる。だがその臂力は生身の腕よりも遥かに強い。

魔石が仕込まれているため、そのまま魔術を行使することも可能。強度が非常に高いが、流石に墮嚙の一撃を受けきることはできなかった。現在修理中。

カスミギリ

「霞霧」

ラスティの礼装となった打刀。アークの補助によりラスティの想像を結晶化したもの。「一番斬れると思いきめる」と本人が言うように、切断概念が込められている。

姿かたちは日本刀そのもの。だが製法や性質が全く異なるため、刀とはとても呼ぶことのできない代物である。魔術的に創造されたものであるため、その強度は精神力に比例する。つまるところ、その時々々の精神状態によって性能が大きく左右される礼装である。

断章「英雄」

「英雄」

その卓越した能力をもって、常人には真似できないことを成し遂げる存在。多くの人々が、その幻想に憧れたものだろう。ある男は、その夢を実現することが出来ないことを知っていたが故に、自らの手で英雄譚を描こうとした。

普段と変わらぬ日常を送り、その合間に非日常を思い描く。自らの憧れを追い、夢を詰め込んだその物語を、男は愛した。思い描く物語の中の英雄を自らに重ね、己の世界を参考にさらに世界に愛を注ぐ。

世界の存在を肯定したのか、世界がその存在を肯定したのか。卵が先か生み手が先か、それは定かになることはない。ただ確かに存在しているだけである。

世界がその存在を、自己を絶対とするならば、そこに住まう者は世界に名をつけることは無い。

命名されない世界は、ただその親の愛を求めた。

????????????????

英雄、そう呼ばれる男が居る。金紗とは言えないものの、光を反射する色の薄い髪を持ち、琥珀色の目は何時も何処か遠くを見ている。タートルネック乳白色の衣服の上に、明るい灰色のコートを纏

う。

草原の上で目を閉じたその男性は、風の音に耳を澄ませている。その右手には、曲がった鞘に入った剣が握られていた。

「もう、あれから七年経ったんだよなあ、これが」

その鞘を強く握り、風の収まった草原で目を開き、流れていく雲を眺める。

「…もうすぐ、貴方に会いに行くことができます…その時、貴方は僕の………ますか？」

他に誰も居ないその草原では、風に吞まれたその問いに答えるものは居ない。

オープニング「虹の少年・弧虹の剣士」(前書き)

シード編は別に連載、ということになりました。

オーブニング「虹の少年・弧虹の剣士」

ティアマット・マキナ。彼女の朝は早い。授業に間に合うように起きる彼女のルームメイトよりもゆうに二時間ほど早い。

寝返りをした様子も無く寝続ける彼女は、指定された時間に鳴り響く目覚まし時計で即座に覚醒する。ルームメイト――ステラ・エルミミア・ウィニングスから譲り受けた、轟音を発する金属製の時計を止める。目を瞬かせ起き上がると、寝巻き代わりに着ている薄手のシャツを脱ぎ捨てる。女性らしい曲線を窺わせながらも、引き締まった体が、彼女の姿勢を正しく綺麗に仕立て上げる。

黒に近い濃紺のシャツとズボンを履いて、ブーツに足を入れる。使い込まれた様子のあるそれに、打ち鳴らすようにして奥まで足を入れた彼女は、髪を手櫛で梳いて立ち上がる。丁寧に入れたものであろうそれは、たったそれだけの動作で艶やかな艶と統合性を取り戻した。

部屋を出る前に彼女は、部屋の一角に置かれた掛け具に向かい、そこに掛けられた紅いコートを手に取った。以前墮嚙^{オチガミ}が襲来してきた際に怪我を負い、保健室からの退院の際に皆から祝いの品として贈られたコート。製作はラステイを中心に行われたというそれは、いつの間にか彼女のトレードマークとも言えるものになっていた。

「行って来ます」

まだ夢の中のステラに届かない、小さな声でそう言うと、ティアマットは寮室を後にした。

??????????

墮嚙事件と称されるようになった事件の後、彼女は毎日朝早く起き、‘いつもの場所’で剣の鍛錬をしていた。もう自分は教会騎士団に所属する身ではないが、それでも有事の際に誰かを護れるように、自分を強くしたいと感じたのだった。それは、彼女だけでは無い。

いつもの場所――本塔屋上に向かう階段を登っていると、屋上の出入り口の前に緑の姿が見えた。ここで鍛錬をしているもう一人である。

「あれ？ ポラリス、どうしたの？」

彼女は、いつも屋上に集まるメンバーの一人ゲルト・アルカシアス・フィニエンスの双子の妹ポラリス・イイリア・フィニエンス。墮嚙事件の折に自分の無力さを痛感した、武家貴族出身の女生徒。隣の五組のクラス委員長でもある。どこかい練習場所が無いか兄に問うたところ、屋上を紹介されたそうだ。

普段はやや離れた場所で素振りなどをするだけだったが、ティアマットが元教会騎士（見習いだが）であることを知ってからは、時折手合わせすることもあった。槍を扱う彼女は、ティアマットに対して武の技量で勝り、魔の技量では劣る。互いに互いが参考になる彼女たちは、いつしか好敵手ライバルとも言える間柄になっていた。ティアマットは、密かにそのことを喜んでいる。

さてそんな彼女は、何故か僅かに開いたドアの前で固まっていた。ティアマットの声に少し飛び上がって驚くと、振り返って人差し指を唇にあてた。どうやら静かに、とのことらしい。

「ティアマットさん、おはよう御座います」

兄と同じように同じ年の学友にも丁寧な口調で、ポラリスは小さ

く挨拶をする。ティアマツトもそれにならって挨拶を返した。曰く、挨拶は対人関係を滑らかにする潤滑油である。

小さな声でポラリスは、引き続き事の次第を語った。

「それがですね…どうやら今日は先客が居るようなのです」

「先客？ 誰？」

この風の強く、寒い屋上。好き好んでこのような朝早くに來るというのだろうか。検討のつかなかった彼女はポラリスに問う。すると何故か彼女は、少し頬を緩めて言った。

「それは、貴女のクラスの委員長——ラスティさんですよ」

笑顔の意味と、何故彼がいるのか分からなかったティアマツトは、その言葉に首を傾げた。

????????????????

黒髪と緑髪の少女二人が、僅かに開かれたドアの隙間から、屋上の様子を覗いている。その視線の先には、黒い短髪に、全身黒系統で纏めた服を着た長身の男子生徒、ラスティハルト・ジーンの姿があった。

「鍛錬…かな？」

「多分そうではないでしょうか」

ラスティの右手には鞘に収められた細身の曲剣、霞霧が握られてカスミギリ
いる。左利きの彼は、両の手を重力に任せ、目を瞑り何やら小さな

声で詠唱らしきものをしている。その姿が、堕嚙と二人で戦った時のことを思い出させた。

暫く観察していると、彼の目がゆっくりと開かれる。今まで見たことが無かった、非常に濃い色の虹彩が、遠く空を見つめている。彼の口が、質問を課した。

「O a i r e f e e n e X e e n ? (世界を感じているか?)」

「

瞬間、人並み以上に敏感な体質らしいティアマツトとポラリスの両名が、空気の変わりように身を震わせる。

「何なのですかいまのは? あれは戦歌とでもいうのですか?」

初めてそれを見たポラリスの驚愕が、ティアマツトの耳に伝わる。彼女も、初めて見た時は、驚きで彼に問いただしいと思ったものだった。

戦歌とは、自分に幻想を??理想を重ねる術。現実とのすれ違いが存在を壊してしまうまで、自らをその理想の中に置ける技法。ただ、それは体内の血中の魔力に働きかけた強化よりも効果は薄いとされ、また、危険と常に隣り合わせであるため使い手は少ない。だが、ラスティのそれはどちらとも違うように感じられた。

戦歌も強化も、自らの内界に働きかけるもの。故に表立った変化は見えない??筈だった。ラスティの詠唱は、ティアマツトの右目には周辺の空間に広がっているように見えたのである。

そんな驚く二人のことになど気付かず、彼は静かに音をたてて剣を引き抜いた。右手に残された鞘が、空に溶けて行く。

「L a i n — R e d e (描空を辿れ)」

二人の視線は、その演舞に囚われた。

描空：その言葉が表すように、蒼く光る細い線が描かれる。それはティアマットの右目にしか映ってなかったが、ポラリスも何か感じ取っていたようだ。ラインを辿り、陽炎を残して左腕が振るわれる。振りぬかれると同時に、新たな線が生み出され、剣は運動を続ける。それは幾重にも重なって振るわれる刃の踊りだった。

剣が意思を持つかのように動き、ラスティの体がそれを邪魔すまいとしているかのよう。線に導かれるままに、銀閃は空に軌跡の芸術を生み出し続ける。

それが果たして何分の間続けられたことだろう。思うが俣に振るわれる剣の前に、息を潜めるという目的と関係なく、呼吸が最低限に抑えられる。

何時しか唇の動きで聞き取った、ラスティにかけられた最初の言葉のように、ティアマットの口からは言葉が漏れ出した。

「綺麗な……剣」

その演舞は、唐突に途切れた。左肩口からの袈裟の振り下ろしを最後に、ラスティを包んでいた空気の違和感が消え去ったのだ。振り切った姿勢のまま、彼は呼吸を荒げている。

「……こりゃあ……きついんかな……これが」

そうして大きく息を吐き出すと、その場に尻餅をついて座り込んだ。直後に化身した少年姿のアークが、置いておいたであろう水分の入ったボトルを彼に手渡す。受け取るなり、一気にそれをのどに流し込んだ。

「つくううう！ やっぱ体を動かした後の水は美味いんだよな、これが！」

「体が求めるものは、やはり美味しく感じるのでしょうか」

タオルも彼に手渡しながら、アークは微笑んで言う。タオルを受け取ったラスティは、流れる汗を拭き、再び立ち上がろうとした――時に、ドアの隙間から緑の光と紅の光が見えた。むしろ何故今の今まで気付かなかったのだろう。ラスティは、首にタオルを巻きつけたままで、少女たちに呼びかけた。

「おゝゝい！ 覗きは駄目だぜ？」

「え？ …！？！？ …… ひゃああ！？」 「ううう！？！？」

驚いた二色の光が、急に音を出して位置を低くした。どうやら驚いて足を滑らせたポラリスが、ティアマットを巻き込んで転んでしまったらしい。思いがけず驚かせてしまったことに苦笑しつつ、ラスティはドアの方に向かって歩いていった。

第一小節「北辰の槍・蒼穹の剣」

何時もは夕日を臨んで座る場所で、三人が朝日を背に座っている。ポラリスとティアマツトが並んで座り、その様子を後方からラスティとアークが観察していた。ポラリスは、黒地に緑のラインの入ったジャージに近い服装だ。

転んだ際に、ティアマツトを下敷きにしてしまったポラリスは、心配そうに声をかける。

「ほ、本当に大丈夫ですか？ ティアマツトさん」

「大丈夫。一応、それなりに丈夫だから」

平謝りしつつティアマツトの様子を伺うポラリスに、笑いかけて大事無いと言うティアマツト。その様子を面白そうにラスティは見つめていて、何時もと違う組み合わせと時間に、アークが色々と思案しているような仕草を見せている。

このままではポラリスが誤り続けそうだと判断したラスティが、二人に声をかける。二人は同時に後ろを向いた。

「なあなあ、もしかして二人とも、いつもここで朝練してたのか？」

その言い方では、クラブ活動の練習のように聞こえるが、二人はそのことは突っ込まなかった？？というよりもアーク以外そうは思わなかった。ラスティの質問に、ティアマツトが受け答える。

「うん。いつも朝早くにここに来て、ポラリスと一緒に素振りをするか、手合わせをしてた」

「その後は、（全十二階層中）第十階層のルームにあるシャワー室でシャワーを浴びてから、朝食に向かっていました」

ポラリスがティアマットの答えを引き継いだ。ここでの鍛錬の後、自室に戻ってシャワーを浴びようと思っていたラスティは、その行動を採用させてもらおうと考えた。勿論シャワーを浴びている間に、アークには着替えを持ってきてもらう。

そう思案するラスティに、あることに気付いたアークが、ティアマットとポラリスに質問をする。

「ですがそこは、教職員用のシャワールームではなかったのでしょうか？」

学院の全構造を‘記録’しているアークが、その問題点を告げると、ポラリスが自らの髪をかきあげながら言った。妖しく微笑むさまは、ゲルトの双子の妹だとは思いにくい。

「ふふふ…それは大丈夫ですよ。だってティアマットさんも一緒なんですもの。きっとラスティさんも以ご一緒されても大丈夫だと思いますよ？」

「は？　なんでさ？」

ポラリスの言ったことが理解できなかったラスティが、その詳細を問う。何故‘ラスティないしティアマット’ならば許されるのだろうか。それはすぐに、彼女の答えで解消された。

「貴方と彼女は、先日の事件の際、墮嚙を下してみせたのですよ？　貴方方のクラスの方達にとっても学院側にとっても、お二人は被害を最小限に…しかも死者を一人も出さなかった英雄のようなもの

なのですよ？ たかがシャワー室を早朝鍛錬の帰りに使うことを黙認してもらうくらいは、造作もないことです」

そして私はそれに乗せていただいています——そう言っ
て言を結んだ。‘英雄’という言葉をくすぐったく感じたラスティが、
恥ずかしそうに後頭部を掻く。ティアマツの方も、何時もの体育
座りで口元を膝で隠していた。

「まあ、いつか……そんなら俺も、そこでシャワー浴びさせてもら
おうかな？」

「殿方は更に別室ですよ？」

「はははははは！！ おいおいおいおい、俺が覗きなんてする訳無
いだろう？ 見たら最期、剣と槍に火葬させられちまうよ」

ポラリスのからかいを、笑い飛ばして答える。もう少し慌ててく
れるかと思ったらしいポラリスは、小さくため息をついた。アーク
は土葬が無いですが、と大分どうでもいいことを突っ込んでいる。

再起動したティアマツが、気付いたように残り時間を気にし始
めた。アークが確認したところでは、あと時間は四十分ほど残って
いるそうだ。それを聞いたポラリスが、置いていた槍を持ち上げ、
ティアマツに何やら耳打ちをする。暫くして二人は頷きあい、ポ
ラリスがラスティに手合わせを申し込んだ。

「折角まだ時間もあるようですので、よろしかったらラスティさん、
お手合わせお願いできませんでしょうか？」

「俺でいいのなら、是非」

彼女の提案に答えたラスティは、立ち上がって背筋を伸ばす。アークが‘^{ファンクト}接続’の為に姿を消し、ポラリスは広いエリアに降り立った。どうやらティアマットが審判のようなことをしてくれらしい。堕嚙を相手取って生き残るというラスティ。その彼と手合わせできるとうれしそうに笑うポラリスには、本当にゲルトとは違う性格なのだと思わされた。

ラスティが降り立ち、^{カスミギリ}霞霧を抜いたところで、ティアマットが何時もより大きな声をあげる。

「双方共に、刃には緩衝結界を張り殺傷性をなくすこと。魔術の行使は補助以外は基本無し。私が有効打と判断した一撃を先に入れたほうが勝ち、でいい？」

その言葉に、二人は首肯して同意した。

「:Fantaxia, sept redint. (幻想式、構築開始。)」

「:Fantax-^{ファンクト}ea, sept f^{ファンクト}ant (幻想準式、接続開始)。」

ラスティとアークが^{ファンクト}接続する。主の魔術行使を助け負荷の大部分を肩代わりするその行動は、高位精霊として授かった高い能力がなせる業である。数少ない精霊との契約者でも、これを行えるのはおそらく彼らしか居ないだろう——そのようなことは彼女たちは夢にも思っていないが、雰囲気の変化を感じ取る。

二メートル前後ほどの檜を構えるポラリス。彼女は既に臨戦態勢を済ませたようで、彼らの詠唱を待っていた。

「では、よろしいでしょうか？」

「あ、一ついいか？　一つだけ、魔術使っていいか？　それが無きや、俺素人同然なんだよ、これが」

ラスティが、何か思い出したかのように告げたことは、ポラリスとティアマツト、二人の首を傾げさせた。何故魔術が剣の実力に関係しているのか、それが彼女たちには見当がつかなかったのだ。

だがきつと、自分が知らないだけなのだと：（筆記では最下層地帯の）二人は自分の知識不足だと結論付け、ポラリスはラスティの言葉に首肯した。それを見て取ったラスティは、術式の生まれない詠唱を行った。

「O a i r e f e e n e X e e n ?（世界を感じているか？）

」

ラスティの鍛錬を除き見ていた時に感じた違和感を、その場に居た二人はもう一度感じた。ティアマツトは、その右目にラスティを包む靄もやのようなものを捉え、ポラリスは、自身が何か軽いものに包まれるかのような感覚に襲われる。

そうして、ポラリスの要望により始まったこの試合が開始した。

感じる違和感に表情を険しくさせながらも、ポラリスは力なく佇むラスティ目掛けて駆け出す。刃先をラスティにあわせ、水平を保ったままで身軽な彼女は疾走する。ラスティの対応は、やや遅かった。

「（アーク、槍のターゲットイングを。）先手必勝ってか!？」

「やあ!!」

やや初動に遅れをとったラスティに、鳩尾に向かう刺突が放たれた。身軽な動作から、姿勢を低く打ち出されるそれは、身長のあるラスティには下方から迫るように見える。

「つく！」

左手に握られた刀が、その切っ先を跳ね上げる。直前で遮られた刺突はすぐに引き戻され、ポラリスはヒットアンドアウェイの要領で距離を離す。辛うじて刺突をラスティが受け止めるという、今しがたの攻防では、明らかにポラリスに優位だったのだが、彼女はラスティの剣に違和感を感じていた。

「（今のは何です！？ あんなに不安定な体勢だというのに、なぜあのように剣が鋭いのですか！？）」

やや仰け反る体勢で振るわれたラスティの剣は、万全の体勢で放たれたポラリスの刺突を容易に弾き、反らしたのだ。感じた衝撃は、万全に放たれた時のように思われる。重い訳では無いが、速く、鋭い。それはあまりに異様な事態だった。

「（……もう一度、確かめてみるべきでしょうか……）はあ！ やあ！ せい！！！」

先ほどよりは遅いが、十分に速度の乗った刺突が二撃と、振り払いが一撃。幼少から教えを受けてきたであろうその一撃一撃の完成度は、未だ若いながらも高い。対するラスティは、その全てに反応がやや遅れ、対応が全てギリギリである。だというのに、その目は確かに動作を捉えている。まるで目だけが熟練した武闘家のようにだ。

左肩を狙った一撃目は横に逸らされ、ついで放たれた右胸への刺

突も振り戻す剣に遮られ、丹田を通すように振るわれた三撃目は――

「おおおお！！！」

雄たけびと共に振るわれた逆袈裟に大きく弾かれた。姿勢を崩されたポラリスに、ラスティが切り込む。首目掛けて放たれた斬撃は、上に弾かれていた槍を縦にすることで防ぐ。そのままポラリスは、鏑迫り合いのように自身を押し付けた。ラスティがよろめく。

「……ラスティさん、中々やりますね……今のは本当に危なかったです。判断力はともかくとして、その剣速は素晴らしいと思います」

「そんなことよりも、俺は小さい少女に力が拮抗されているのが悲しいな、これが」

小柄でありながら、武家貴族として鍛錬を積んだその肉体は、ラスティと拮抗しているようだった。どうやら僅かに、ラスティが押されている。そのまま暫くその体勢が続くと思われたが、ポラリスが行動に出た。

「ティアマットさんとこれをやろうとしますと、私では鏑迫り合いに持ち込むことすらできませんっよ！！！」

右足が放った蹴りが、ラスティの腹部を捉えた。予期したラスティが、後方に飛び去ろうとするが、殺せた威力は少ない。蹴り上げた体勢のままで、ポラリスは唇を吊り上げて笑った。ラスティは悔しげにそれを見つめている。

「なるほど、ティアマットは馬鹿力ということか」

「らすてい？」

どうでもいいことを口走った直後に背後に感じた殺氣に対し、誤魔化すためにラスティは駆け出した。左手一本で握られた刀が、地すれすれの位置からわきの下に食い込むように振り上げられる。それは、ラスティのターンを告げる狼煙だった。

「！！ 速い！」

弾いても、殆ど間を置かずに次の斬撃が飛んでくる。弾かれることを前提にしているせいか、防いだ剣は異様に軽く、だがすぐに曲線を描いて次の動作につなげる。

曲線が彼女を包囲するかのように襲い掛かる。長く剣閃の跡に残る薄蒼い光が、徐々に球を作り出すようだった。出来上がっていく球は、ポラリスを飲み込もうと迫る。

「ううううううおおおお！！！」

「つつ！！」

体の中央を横断する一閃。その時に出来た僅かな隙に、彼女は後方に跳ぶ。ギリギリまで追い詰められていた彼女はしかし、最後の最後まで剣撃を防ぎきったのだ。

振り下ろした姿勢のまま、息の上がったラスティは、最期まで追い詰められなかったことを悔やみ――

「はあ……はあ……」

「やあ！」

——容赦なく放たれたポラリスの殴打を頭部に受けて、その場に沈み込んだ。

第二小節「それは解らないことだから」

「お、おいおい、何があつたってんだあおい……」

「ら、ラストイさん？ ど、どうしたんですか？」

「ああ、これがな、今日の朝練の時に不幸な事故があつたんだ」

朝食を既に食べ始めていた級友のもとに姿を現したラストイは、額に包帯を巻いていた。苦笑いを浮かべる彼の後ろでは、アーク（少女）が心配そうに見上げていて、更に後ろにはポラリスとティアマットが並んで立っていた。

その面子を見て、双子の妹の性格を把握戦闘中していたゲルトが、事の次第を察した。遅れてハイスも理解したようである。

「ああ、ラストイさん。ポラリスに試合を申し込まれましたね？」

「ああなるほどなあ。お前の妹戦闘k y?????」

ハイスの顔面がスーパの中に沈んだ。後方に回り込むように制御された銀の飛礫つぶてが、彼の後頭部を捉えたのだ。ラストイが記憶していたところでは、これはゲルトの双子の妹が得意としてしていると聞いている。

そのハイスを意図的に無視した、髪染め嫌いで有名なポラリスが話を続ける。

「ラストイさんが動けなくなっているところに、思いつきり槍を打ち込んでしまったのです」

「うん。槍を突きつければ終わったのに……」

「まあまあまあ、俺が負けちゃったのは確かだし、緩衝結界（衝撃を和らげるために武器に纏わせる結界）のおかげで大事はなかったし……な？」

意気消沈するポリスに、ティアマットが追い打つ。ラスティの方は笑い飛ばしているが、ポリスは大分気になっているようだ。そしてそれ以上に、気にしている者が居た。

「それでもマスターは怪我人でいらっしやいます。朝食は私が運びますので、マスターは席にお座りになってお待ちになっていてください」

体の小さいアークが、ラスティの背中を押すようにして席に座らせると、小走りで朝食を受け取りに向かった。本当は持ってきてもらってもいいのだが、いつもラスティは自分で持ってきていたのだ。

朝食を受け取りに行くアークの後姿を見ながら、いつもしていた労力を払わなかったラスティが呟く。

「いつもこうだと、楽かなあ……」

それが翌日から実現されるということが、ラスティ以外の人間には容易に想像できた。今の言葉がアークに聞こえていたようであるからである。一瞬立ち止まるアークの姿が見られたことから、そのことは容易に判断できた。

??????????

「ラストイの剣って、やっぱり速いと思う」

早く朝食を食べ終わったゲルトたちは、自室に授業用の道具をとりに向かった。朝練組の三人はというと、結構ギリギリまで鍛錬するつもりだったようで、授業の道具はすでに準備している。ラストイが気絶・怪我をしたことで早く切り上げられたことで出来た時間は、本日の反省会のようなものに費やされることになっていた。

「私もそう思います。あれほど速い斬撃は受けたことがありません」

ティアマットの評価に、簡素なドレススカートに着替えていたポリスが同意する。だが結局は負けてしまったと、ややラストイは落ち込んでいる。そんな彼を見ていて、あることに気付いた彼女が、ラストイに向き直った。その視線は何故かやや非難するような雰囲気である。

「そういえば今までずっと思っていたのですが、授業の際、なぜ貴方は剣を使わないのですか？」

選択性の教科として盛り込まれているものに、‘体技・武技’という科目が存在する。ラストイ・ティアマット・ポリスの三人ともがとっているのだが、生徒の中で受けるものの割合が少ないために、複数のクラスが合同となって受けている。

その際のラストイは、剣術ではなく徒手空拳の体術を専攻して習っていた。他の武器系統には一切見向くことなく、ただその鍛錬を積んでいたラストイを、彼女は不思議に思っていたのだ。それはティアマットも疑問に思っていたことだった、が、その理由の一端を彼女は察していた。恐る恐る口を開く。

「これはちよつとした予想なんだけどね？　ラスティの剣って、もしかして魔術に頼って振ってる？」

「それはどういふことですか？」

魔術に頼る、というニュアンスにポラリスは首を捻り、ラスティとアークは大きく目を見開いた。その様子から、自分の予想が正しそうだと思ったティアマットが、直前よりも自身を持って自分の見解を語った。

「私の右目が、魔術の気配を捉えるんだけどね？　ラスティが剣を振るう直前に、‘線’が見えるの。はじめは錯覚かなって思ったんだけど、右目を閉じると見えなくなるから、多分何かの魔術だと思う。その上にラスティは……えっと……こう、なぞるように振ってたから、そう思った」

ティアマットが何を言っているかさっぱり分かっていないポラリスと、更に驚きを強めている主従が、なんとも対照的に見えた。少しの間があってから大きく息を吐いたラスティは、その言葉を肯定する。

「そっか、ラインも見えるのか……そうだよ、ティアマット。確かに俺は、剣術の殆ど全てを魔術に頼っている。詳細は秘密だけどな、これが。……まあだから、使っても身体強化系か移動補助系の魔術しか使えない授業では、そもそもとして体の使い方を学んだ方がいいんだよ、俺は」

ラスティはそれを軽いことのように言っているが、もし今この場にステラがいれば大騒ぎしていただろう発言だった。魔術に頼って体を動かす？？魔術とは幻想？？実在しないもの？？それを動作に用いるといっているということは、幻想を己が身に重ねる？？？自

分自身を幻想にしまいかねないということなのだ。

「そうだったのですか。ですから先ほどは、一つだけ魔術の行使を求めたのですね？」

異常さに全く気付いていない二人は、そういうものなのだと納得してしまう。誰かに漏らされたら面倒なことになると感じたラストイが、二人に頼む。

「まあ、そういうことだ。ああ後、俺のこの魔術って、結構珍しい——いや、正直知られるとあまり良くない類のものだから、誰かに言うなんてことはしないでくれないか？」

ラストイの頼みの理由を、‘秘伝（一子相伝の類の魔術の俗称。魔術師にとって切り札に近いもので、他人に知られていいものではないもの）’に通ずる何かだと解釈した武闘派二人は、特に何も考えることなく頷いた。

その話のあと、周囲に誰も居なくなった時を見計らったアークは、ラストイに一つ質問をする。

「（もしかしてマスターは、お二人ならば異常さを理解できないと思ってお話になったのですか？）」

その問いを、ラストイは内心苦笑いして黙殺するのだった。

第三小節「夏休みを前に」

現在、七月中旬。

中間テストも終わり、もうすぐ生徒たちが待ちに待った夏休みが始まるころになっていた。墮嚙事件の関係で、今年は体育祭が無くなってしまった代わり、どうやら今年は例年よりも期間が長いらしい。そのため何をしようかと、周囲では、夏休みの計画を立てる生徒たちの姿も見える。ラストイたちも、屋上での話題は夏休みの時期にどのように過ごすかという話題になっていた。

「ねえねえみんな！ みんなは夏休みに入ったら、実家に帰る？」

帰ってきたテストの成績がそれなりに良かったらしいステラが、隣のティアマットとは正反対の調子で質問する。夏になり気温が高くなったためか、服装はかなり薄手のワンピースである。他のみなも半そでやノースリーブを着ていたが、ティアマットだけはコートを着ていた??その中は薄着だが。

「オレは帰んねえだろうなあ。アシもねえしどうせ帰ったって何もすることねえしょ」

「僕は帰りますね。帰るなら本当はポラリスも一緒なのですが、どうやらクラブ活動（武術系のクラブ。ティアマットはよくポラリスに誘われている）の夏季合宿練習に参加するみたいなので、彼女は帰らないようですが」

「……やっぱオレ、帰ろうかな」

「俺は帰らん（帰れない）」

三人は次々に答えるが、何故かティアマツトがうつむいたまま答えない。今日は誰よりも早く屋上に来て黄昏ており、先ほどから異様にテンションが低い。気になったステラは、彼女の顔を下から覗き込むような姿勢をとって聞く。

「ティアマツトちゃん、どうしたの？」

心配そうに聞くルームメイトを見る彼女の視線は、焦点があまり合っていない。やや間があって、重々しく彼女は口を開いた。その彼女の事情に、皆が驚く。

「私、補習受けなきゃ……ダメなんだ……」

????????????????

詠語（リーディングとライティング）、式理論学（?・A）、魔術実技、魔石工学、歴史、公用語^{コクゴ}、生物生態学——全七教科九百点満点だった今回の前期中間テスト。余りに成績の悪い生徒は夏休み期間中補習授業があるというその宣告の下、生徒たちは必死に勉強していた。それ故か、平均点は合計で五百九十点（約65パーセント）ほどとなっているらしい。

ティアマツトの点数は、

リーディング…二十三（23）（補習対象）

ライティング…四十(40)
式理論(?)…十五(15) (補習対象)
式理論(A)…二十(20) (補習対象)
魔術実技…八十六(86)
魔石工学…八(8) (補習対象)
歴史…三十四(34) (補習対象)
公用語…六十一(61)
生物生態…五十(50)

合計…三百三十七(337) 平均得点率37パーセント

「……………うん……ドンマイ、ティアマット」

なんともいえない静けさが屋上を包む。膝に頭をうずくめるティアマットは、絶望に打ちひしがれていた。どう励ましてやればいいかと皆が考えていると、ティアマットが口を開く。

「夏休みが始まるのが(七月)二十五日からで、補修はそこから三週間だって言われた」

「ということは八月の十五日までですね? 夏休みは、今年は九月五日を始業式としてるので、後半半分は夏休みを過ごすことができるのでは?」

六週間ほどの夏休み。その半分は補修で潰れてしまうが、逆に考えると、もう半分は自由なのだ。その事実気付いたティアマットは、少しだけ元気を取り戻す。

「じゃあみんながみんな、夏休み中はここに居るわけじゃ無いんだ？」

ステラの言葉に、ゲルトとハイスが首肯する。ステラはどうやら残るようなので、ラスティとティアマツトに、夏休み中もここに集まろうと提案した。二人は首肯する。

男性陣が居なくなるって、どういうことなのだろう。そんな問いを、ラスティは口にする事はなかった。

それからは、皆終始夏休みをどのように過ごすのかという話題になる。

その翌日の昼休み、一年四組女子生徒たちは、緊急放課後会議を後日開くことを決定したという。

『アークのメモ』（夏休み開始一週目記）

「ゲルト&ハイス」

・夏休み中につき、実家に帰省中だそうです。ゲルトさんがいなくて本当に助かりましたね。おかげで■■■■さんの部屋を確保する

ことができました。本当、ゲルトさんは??（消された跡がある。良く見ると、普段は全く役に立たないですが、と書かれている）? タイミングがいい人です。

「ティアマツト・マキナ」

・酷く憔悴した様子でした。マスターに相当心配していただいてました。羨ましいです。

・毎日補修の日々だそうです。生徒数が極端に少なくなったおかげで、徹底的に叩き込まれているのだとか。

・彼女とマスターをくっ付けようとする背後の組織に、何やら動きが見られます。面白そうです。今度ステラさんに聞いてみようと思います。

「ステラ・エルミニア・ウィニングス」

・元気にクラブ活動をしているそうです。時折轟音と煙が西側の実習棟からあがってきますが、彼女ががんばっている証拠でしょう。

・そういえば、中間テストの成績はマスターの次に良かったそうです。ふっふっふ、甘いですよ。教科書を全て‘記録’する私の仕えるマスターに、貴女が勝利できるはずなどないのです。本当はオール満点も可能だったのですが、マスターに止められてしまいました。残念です。おかげでマスターが学年トップになることが出来ませんでした……はあ。

「ポラリス・イイリア・フィニエンス」

・彼女も補修対象でした。補修期間中はクラブ活動が禁止されているようで、酷くストレスが溜まっているようでした。昼の休憩時間にティアマツトさんを連れ出して、競技場に駆けていく姿が今日は目撃できました。ティアマツトさん、大変でしたら断っても大丈夫だと思いますよ？ どうせそこら辺の男子生徒が代わりに……はっ、いえいえいえいえ、ダメです！ もしそうなのはマスターが餌食になってしまう可能性が非常に高くなってしまうです！

ティアマツトさん、大変でしょうと思いますが、私のマスターのために頑張ってください。

「アルバ・アーキナム」

・先生は夏休み中も忙しいようです。今日は、教室から脱走しようとした女生徒を追跡する姿を目撃しました。私が見た瞬間、追いかけているらしい人影が廊下の角を曲がっていきました。一瞬だけ、緑が見えました。

第四小節「虹の少年、録視の目」

『僕は強くなりたい』

『貴方は何故それを願いますか?』

『僕は僕を極めたい』

『その道を何に願いますか?』

『もし求めるなら、僕は神にでもなんにでも祈る』

『そうですか、分かりました』

『え?』

『貴方は神に祈りをささげるのでしょうか?』

????????????????

「あれ?　ここはどこ?」

風の強いどこか高い場所で、少年は目覚めた。見知らぬ場所だということだけはすぐに察した。

色の薄い金の髪を持ち、黄や銅色の混じる狼に多く見られる色の目をしている。褐色がかったシャツを着ている彼の年齢は、十と幾つかだろうか。まだかなり幼いその少年は、状況を把握しようと周囲を見回す。

なんの装飾のされていない殺風景な様相に、予備の資材と思しきものが置かれているその様子からは、屋根のない物置のようなもの

なのだろうか思われる。どこかの施設の屋上、そうとだけは認識できた。

見回しているうちに、一人の男の姿が目に入る。どうやら、剣の鍛錬をしているらしい。

短く刈りそろえられた黒髪、高い身長。黒を基調とした動きやすさを重視した服装。左手に握られた曲がった細身の剣。

今すぐ声をかけ、ここがどこか聞くのが普通だったのかもしれない。だが彼は、これから行われるものを見逃してはいけないう直感的に感じた。男が、ゆっくりと言葉を紡ぐ。それは詠語と呼ばれる神秘のこもった言葉。この言語を使った詠唱ということは、男は魔術師だろうか。

「O a i r e f e e n e X e e n ? (世界を感じているか?)

」

その言葉の意味は、少年には分からなかった。ただ、何かを尋ねていることだけは分かった。そしてそれを理解すると同時に、少年の目は彼の姿を焼き付けた。

一閃。それは曲線を描いて大きく振るわれる。

二閃。剣の動きは止まることなく翻る。

三閃。減速せずまたも翻る。むしろ剣速は軌道変更の中でさらに加速している。

そこから先は、数えるのをやめた。

その鍛錬——いや、剣舞。そう、剣舞。剣による舞。それが最もしつくりとくる。

自らを中心とするかのように絶え間なく左腕の剣は振るわれる。銀色の残像が網膜に光の名残をのこしていき、上塗りするように新たな銀が走って来る。刺突動作の全く無い、斬撃動作のみで構成さ

れた曲線美。その全てを逃すまいと、目が乾くことも厭わずに焼き付け続けた。

「はぁ！」

声と共に、最後の一太刀が振るわれた。総計六十四撃。数えていなかったはずであるにも関わらず、少年はそれを確かに認識していた。

直後、沸き起こる衝動に駆られ、少年は駆け出す。

????????????

夏休みに入り、多くの生徒たちは実家に一時帰省した。顔見知りの大部分は校内におらず、居るものはクラブか補修で忙しい。そんな中ラスティは、アークと共同で書き上げた術式を刻み、鍛錬の場でそれを試していた。今、最後の斬撃が完遂される。

「（太極、両儀、四方、八卦、六十四象、固定動作式ライン式、工程を終了します）」

魔術式を終了したことが、アークから念話で告げられる。任意でラインを描くのではなく、計算された動作で六十四のラインを次々に描き出すその術式は、思いのほか感触がよかったと感じた。

「（どうだ？ 意外といいと思ったんだが）」

「（そうですね。同じ動作を通常の‘ライン’で行っても、恐らく全体的な要素は変わりありませんでしょう。ですが体力の消耗は大幅抑えられています）」

「そう——」

ラスティがアークに答えようとしたその瞬間、居るはずの無い、人の気配を感じた。振り返ると、そこには少年がたっている。

明らかに学院の生徒とは思えない。学院の生徒であるにしては幼すぎる。ここに来るまでに誰にも見咎められなかったのだろうか。だがそれよりも疑問に感じることがある。

今の今まで、精霊のアークですらその存在に気付かなかったのだ。

「なあ？ 君はだ——」

素性を問おうとしたラスティの言葉は、少年の懇願でさえぎられる。その余りの予想外の出来事に、しばらく固まってしまう。

「お願いします！！ 僕を弟子にしてください！！」

そしてさらに予想外の出来事が重なって、再起動するまでに相当の時間がかかった。

????????????????

『僕を弟子にしてください！』

その言葉を理解するまでに、大分時間がかかってしまう。剣を握り、腕を降ろした体勢で呆然と少年を見詰めるラスティと、その目の前で土下座さえ初めて懇願する金髪の少年。傍から見れば誤解を招いてしまいそうなのだが、困っているのはラスティの方だった。

「ちよつと待て、話の流れが掴めん。何でだ？ どうして？
Y^イ? Of^{オーフエ}e? いやちよつと待て、その前に君誰？」 WH^{ホワ}

少々混乱気味で、矢継ぎ早に少年に問う。気が動転したせいで、彼に素性を聞くといいことをすっかり忘れてしまいかけた。声をかけられ顔を上げた少年が、アンバーの目でラスティを見つめる。そして自らの名を告げようとした。

「僕の名前はア■■■っ、え!?!?」

自らの名前を声に出そうとするが、それが音にならない。何度も何度もそれを繰り返すその少年は、その奇怪な現象を前に、次第に顔を青ざめさせる。だがラスティには、その現象に、身に覚えがあった。アークに相談しつつ、困惑する少年に話しかける。

「（アーク、彼に何か‘呪’の類がかかってないか調べてくれ）も
しかして、名前が言えないか？」

「（‘呪’ですか？ ……!! ……そういうことですか？ ……はい、
了解しました。マスター）」

少年が、涙目がちにラスティの方を向く。名前をしゃべれないということは、それほどにこの少年にとって恐怖だったようだ。

「……そ、そうみたいなんです……ど、どうしましょう？」

「まあまあ、それは大事ではないだろうな、これが。最初の方だけは何と無く聞き取れたからな。確かアの後にはR音だった筈だから……うん、君の事はアル坊と呼ばせてもらう！」

驚いて飛び跳ねる。そんな彼をなだめ、前のほうからシャツをあげさせて見せた。そこには、胸部を中心に黒い刻印が渦巻いている。それを険しい目で見えるラスティに、アークから念話が寄せられた。

「（もうお気づきでしょうが……マスター、彼はどうやら、タイムパラ逆説の呪^{ドックス}」がかけられています……それも刻印付き、行動制限——
——基点は数年以上前の——過去です）」

アークの報告をかみ締めるように聞く。刻印を見つめたままで黙り込んでしまったので、アルは不安げにラスティを見つめたままである。そうしている内に、ラスティが刻印から目を離さずに口を開いた。

「お前、ノルニラム運命と未来に魅入られたな？」

「のるにらむ？」

幼い少年が、首をかしげて問う。ラスティは、説明するからという場所を移動した。いつも放課後に夕日を臨みながら座る場所に腰を下ろす。アルもその隣に座った。不思議そうにラスティを見つめる彼は、師事を懇願しているのが一時頭から抜け落ちているのか、答えを求めラスティの言葉を待っている。

「語源は北欧神話の——いや、なんでもない、忘れてくれ。……
ノルニラム：Nor n i r a m ってのは、時と運命を司る高位の精霊だとも思ってくれ。選別し、選んだ者を彼女（ノルニラムは女性人格）なりに幫助する。条件付でな？」

「条件、ですか？」

条件と言われ、アルは姿勢を正す。それを見て取るラスティは、そう硬くならんでもいいと力を抜けさせた。そんな微笑ましい様子を見せる彼に声を殺して笑い、ラスティは説明を続けた。

「ああ、条件だ。それも拒否権は無し。ノルニラムに魅入られた時点でそうなること決定の、な？　まあ、それが何かは俺にも分からんが、とりあえず、一つ言える事がある」

軽い調子で言っていたラスティだが、そこまで言う口調を改めた。アル少年もその言葉を聞き逃すまいとする、正座で。

「ここはお前が居た時代よりも未来、だ」

「はい？」

ここは未来。そう言われても彼は首を傾げるだけ。状況を理解できない。認識できない。受け入れられない。思考が凍結してしまったその少年に、ラスティは畳み掛けるかのように話した。混乱するかしないかなど関係ないかのようだ。

「お前の体に刻まれたのは、タイムパラドックスの呪。時間の異なる場所に存在するものが、ノルニラムの力で飛ばされる際に、世界から直々にかけられる極上の呪だ」

そういったラスティは、人差し指でアルの左胸？　呪の刻印の中心部、心臓の真上？　を突いた。少年は未だ放心状態のようにしてラスティの言葉に耳を傾けている。

「この呪は、時間移動の矛盾が引き起こす要因になることを認識させなかったりしなかったりする効果がある。さっきお前が自分の名

前を言えなかったのも、それを言ってしまうことで歴史が変化してしまう可能性があるからだ。だからお前が、^{未来}ここ、に居る限り、お前は自分の名前を名乗ることが出来ない」

心が抜け出していた状態が、ようやく治りつつあるようだ。だがラスティの言葉を聞いていくうちにその表情は青ざめていく。だが取り乱して騒がないのは流石だと、ラスティは内心でアルのことを賞賛した。

「その刻印に、多分どこかに時計状の刻印があるはずだ。その針が一周したとき、お前はもとの時代に強制送還される。一分一秒と違えずきっかり同じ時間に戻るぞ？」

「そ、そうですか……」

一応ラスティが言っていることは喜ばしいことではあるのだろう。だが困惑するその幼い心は、素直には喜べないようだ。そんな彼に、励ますようにしてラスティは言う。

「まあ、そんな困ったことでもないんだぞ？　ここはそんな危険なところでもない（筈）だし、（無事に）暫く生きてりゃ元の場合に戻る。まあ、お前の事情を知っちゃったしな、さっき言ってた‘弟子’の件、受けてもいいぞ？」

「ほ、本当ですか！？！？」

「ああ、本当だ。だが、あまり期待するなよ？　剣なんぞ教えられる自信なんて、ないんだからな？」

そこはやはり幼いが故だろうか。先ほどの話を受けてくれると聞

かされて、途端に表情が明るくなる。彼が過去から来たという事情を知ってしまったラストイが、放り出す訳にもいなくなってしまうからなのだが、言ってしまった以上、それなりにやって見せると心に誓う。

大喜びするアルは、暫く飛び跳ねて喜びを表現した後、深々と頭を下げて、元気のいい声で言った。

「ありがとうございます！　これからよろしくおねがいします、
師匠、！！」

そう呼ばれて、思わず緩んでしまった頬をアル少年に見られずに済んだのは、恐らく僥倖だったのだろう。

第五小節「戦乙女の伝説」

その日の夕、誰にも見つからないようにアークに先行偵察させながら（この時、アルは精霊と契約しているラスティに尊敬のまなざしを向けていた）自分の寮にたどり着いたラスティは、ここで待っているように言くと、購買パンを彼に与えて屋上に向かった。その日の夕は、疲れ果てたティアマットをラスティとステラが元気付けるということに費やされ、特に何かあったということもなかった。

今日は夏休みの宿題をやるかと言って早く解散することにし、怪しまれないほどに急ぎ足で寮に戻る。そこでは、パンの袋をきちんとゴミ箱に捨てていたアルが、はしゃいだ様子で室内を観察していた。

「はは、こういう部屋は初めてか？」

「はい！ 僕の？？？っ、うう……いたところは、これほど豪華ではありませんでしたから」

呪のせいで、自分の出自につながることを話せないことに戸惑いながらも、アルはしっかりと答える。状況への適応が早いと言うべきか、若い好奇心がなせる業か、どういうべきか迷うものだったが、とりあえず混乱は少なくて済んだようだった。大きく息を吐き出して、ラスティが安堵する。

「（アーク、ゲルトの部屋の鍵開けれたりするか？）一応ここに、暫く？？？多分お前の呪刻の針が一周するまでだろうな？？寝泊りしてもらうぞ？ 人の部屋だし、お前が居ることは秘密なんだからあまり騒いでも駄目だぞ？」

「はーい!!」

「（お任せください、マスター。ただの物理的な鍵など、私の前では意味を成さないことを証明いたしました！）ではアルさん、こちらにおいでください。部屋にご案内いたします」

何故か張り切った様子でアルをゲルトの部屋の前に連れて行ったアーク（少女）。その後ろを着いて行く少年の前でアークは、ドアノブに手をかける。かなり小さな声で何らかの力を行使したらしく、まるで初めから鍵がかかっていなかったかのようにあっさりとドアが開く。案内されるがままに、いや、案内を追い越してアルは部屋に駆け込んだ。

「いやっほおおおい!!!!」

勢い良くベッドに飛び込み、その布団の感触を堪能する。

「あまり騒ぐなと言ったばかりだろう? ……まあ、いつか。とりあえず、今日はもう夜だ、寝ろ。話は明日からだぞ?」

「はい! わかりました! 師匠!」

??????????

元気のいい弟子を部屋に残し、ラスティはゲルトの部屋を後にする。夏休みが終わったら、何かゲルトに奢ろうかなと、そんなことを考えていた。

静まった寮の居間で、ラスティはソファの上に腰を降ろし、寝そべる。その彼を、テーブル横の椅子に腰掛けたアーク（少年）が見

守っていた。ラスティが、疲れたように言う。

「それにしても、よりによってノルニラムかよ……冗談キツすぎやしないか？」

腕でアイマスクをするように言うラスティに、アークが椅子の背もたれによりかかり、椅子の前足を浮かせながら言う。その絶妙なバランス感覚はどこからくるのだろうか。

「別名ヴァルキュリウス、でしたでしょうか。私たち精霊の間でも殆ど伝説化している世界種でしたが、まさかその存在の証をこの目で見る事が出来るとは思いもありませんでした」

ラスティがアルにノルニラムのことを説明する際に、‘精霊’と称していたが、これは嘘である。説明するのにそれが最良だと判断したが故なのだが、ノルニラムは精霊ですら伝説上の存在では言うほどの希少存在であった。

「世界が英雄を求める時に現れる戦乙女。光を感じない目で、ふさわしい存在を探し出すために人知れず現れる世界種だ」

寝そべった体勢のまま、ラスティはアークに説明する。アルには説明できないような部分まで、ラスティはなるべく詳細に説明した。

「北欧神話というものがあってな、そこに出てくる、^{ヴァル}英雄を探し出す戦乙女^{キリー}、を基にした存在だ。存在^{たましい}を感じてその対象を選別する」

「確かにあの少年は、不思議な気配があります。マスターほどではありませんが、そばに居て心地の良いものです」

ラスティの言葉にアークはそう答える。‘マスターほどではない’、ということを少々問いただしてみたくもあったが、話をそらすのはいけないと判断したラスティは、そのことを心に留めておくだけにする。

「まあ、それでだ……きっとアルは、‘七年前の戦乱’に関わる事になる」

「!!!!!!」

アークは息を呑み、バランスを崩して椅子から転げ落ちてしまう。盛大に鈍い音を打ち鳴らして後頭部から見事着地したアークは、流石に痛いらしく頭を抱えて呻き出す。音に驚いたラスティは、勢い良く飛び起きてアークの方を見た。倒れた椅子の様子から事の次第を理解したラスティは、笑ってアークの様子をうかがう。

「おいおいおいおい、何やってるんだよ？　その手のネタ、中学以来だぜ？」

「うううう~~~~………中学なるものがなにかは存じませんが、笑うのはヒドイと思います」

頭を押さえ、恨めしげな上目遣いで気迫の無い眼光を出すアーク。ひとしきり笑ったラスティは、ソファの上から飛び降りて、自分の寝室に向かった。その後を、アークも椅子を立て直してから追う。

「まあとりあえず言えることは、何故か知らんがノルニラムは俺のところアルを送ったらしいということ、俺がどうにかしてアルを鍛えなきゃいけないということ……まあ、そういうことだ」

腕を組み、全身から怒気を滲ませながら立つラスティハルトの前には、正座をさせられて涙目になっているアークの姿があった。その頭には、三段アイスクリームが鎮座している。ゲルトを卒倒させたときよりも一つだけ多い。

「うう：すいません」

ことの次第はこうだった。起床時間近くになり、自らの主を起こそうとしたとき、アークの思考にゲルトの姿が浮かんた。初日に驚かせた時の反応が面白かったので、同じく一人称が僕であるアルにイタズラしてみようかと考えたのだ。騒ぐな（騒がせるな）ということをすっかり頭から抜け落としていたアークは、少女の姿になってアルの上に覆いかぶさり。双方の顔の距離が五センチほどになるまで接近する。その効果は覲面で、目の前に居た少女に驚いたアルは、朝っぱらから悲鳴をあげてしまった。そして今に至るのである。

「え、えっと師匠、そこまで怒らなくても…」

ゲルトと殆ど同じことを言い、ラスティを抑えようとするアル少年。元々拳骨だけで済まそうと考えていたラスティは、周囲の部屋の住人が皆帰省中であることに感謝して、その場を収めることにした。

「なんだかデジャブを感じるような気がするんだよな、これが」

あの時は拳骨は二発でしたと、アークが言った、その時だった。寮のドアを叩く音がする。

第六小節「貴女にとっての」

「ねえねえ実のところ、ティアマットちゃんはラスティくんのこと
どう思ってるの？」

それは、前日の会話だった。その日はラスティがやや早く姿を消
して、ティアマットもそれに倣おうとしたのだが、ステラに止めら
れたのだ。そうして座りなおして一番の言葉がそれだった。

「え？　ラスティのこと？」

「うん！　そうそう！　やっぱティアマットちゃんは、ラスティく
んのこと好きなのかなって！」

そうストレートに言われて、ティアマットの顔色がほんの少しだ
け色づく。そうして少しだけ思案した後に、彼女はこう答えた。

「どうなの……かな？　私、ラスティのこと、どう思ってるんだろ
う？」

出てきたのは曖昧な答え。そんな彼女の答えを予期していたとス
テラは言い、彼女に対しての質問を少しだけ変える。

「ふふふ、やっぱそうくるかなって思ってたよ？　じゃあ、ティア
マットちゃんにとって、ラスティくんってどんな人？」

その質問には、比較的早くティアマットは答えた。アークが居な
くなったことで風が先ほどよりも強くなり、彼女の長い黒髪が風に

なびく。

「……私の目を、初めて、綺麗、って言ってくれた人、かな」

ステラはその言葉に対して黙ったままである。まるでもつとあるだろう、まだ思うところがあるだろうと、そう促すかのようなステラの様子を受けてか、ティアマツトは続けて話した。今度は風が後方から優しく吹いてくる。

「私と一番話した人、初めて私の歌を聴いてくれた人、私が初めて背中を任せた人、私がこうして皆と話せるきっかけを作ってくれた人——そして、私の始めてのともだち」

思いのほか多く、容易く出てくると、ティアマツトは自分で言うてそう感じていた。それを聞いていたステラは、姉が妹に送る視線に似た眼差しを送る。夕日を見つめるティアマツトにはそれが見えず、小さく笑った彼女の声を耳にして振り返った。

ティアマツトが視線を向ける中、答えに満足した様子でステラは立ち上がる。そこで話題は終わったと、それで十分だよと言い聞かせ、次に放った言葉はこうだった。

????????????????

『ねえ？ 明日、ラスティくんのところに朝食作って言って皆で食べよ！』

そう言った彼女の勢いに押され、ティアマツトは彼女と一緒に朝食を作った。料理長が（新たな食材を開拓してくると言って、数人の見習いと料理クラブの生徒たちと共に）不在である今、残った人員のみで稼動する食堂は朝早くは開いていない。夏休み中は購買で

販売されているものか、自炊するかなどで生活する生徒が殆どだったのだ。

ラスティ（とアーク）が料理出来ないこと（と起床時間）はアークからステラは聞いている。毎朝六時起きという規則正しい生活を送っているらしかったので、それにあわせて彼女たちは料理を作った。

鍋と器を持ち、ラスティが愛してやまないというライスを携えて、向かった。力持ちのティアマットが重いものを持っていたので、片手を空けてステラがドアを叩く。

「ラスティくん！！ おっきてるくく？」

そうして耳を澄ませると、中で物音がしていた。どうやら起きているらしい。ステラは、勢い良くドアを開け放った。

「おっはよー！ ご飯作ってきてあげ……たよ？」

固まるステラと、その背中から顔を覗かせるようにして彼女たちが見たのは、

寝巻き姿のままのラスティと、少女姿のアーク、

そして、見知らぬ金髪の少年だった。

「その子ダレ？ ラスティくんの隠し子？」

その途端、ラスティとその謎の少年から全く同じタイミングで突込みが入るのだった。

「へえ〜、お弟子さんねえ〜?」

一悶着あったが、ラスティたちは二人に状況を何とか説明した。何故ここにそんな少年が居るのかという話はまだ分からなかったが、何とか話を誤魔化して、持ってきてくれたという朝食を食べることにした。

ちょうど四人がけの四角テーブルに、ラスティとアル少年。向かいにティアマツトとステラが座る。アークの分にとまって持ってきた分は、（アークに食事は無くても問題ないので）アルと名乗った少年に回る。皿の上には、一年四組の女生徒が聞いたというライスに合う、塩焼き素朴な調理法の魚??? 焼き鮭が乗っていた。ラスティがそれを見て興奮しだす。

「おおおおお!!! こ、これは……………」

「ふっふっふ、料理長に教えてもらって、私とティアマツトちゃんで作ったの! あと、これもね?」

そうしてテーブル中央に置かれた鍋のふたの下から見えたのは、大豆を塩と麴で発酵させたペースト状の調味料で作られたスープ、味噌汁だった。ラスティは驚きに言葉が出ないようだ。ティアマツトが、料理長がかつて聞いたという話を（ステラに肘で促されて）ラスティに教える。

「ライスに最も合うというスープだって言われたらしくて、昔ある人に料理長が、味噌っていう調味料の製造法の概念を言われただけで数年間研究して作ったっていった」

その日本食のことを知っている人物が居るという矛盾点に何も気付くことなく、ラスティは目の前の日本食に言葉を奪われる。その様子を、アル少年はずっと興味深そうに見つめていた。ここでもうやく、彼が口を開く。

「師匠、これは何ですか？」

質問されたラスティは、ティアマットがよそっている間にアルの方に向き説明を始めた。真剣に。

「まずこれはだな、神聖な炭水化物、我が故郷の主要食、ライス、と呼ばれるものだ。ごはんと言えば時には直接これを指すことがあるほどに——」

ラスティの御飯への愛情を感じさせる余分に詳しい説明を、少年は聞かされていた。引きつった表情に気付かないままに説明を続けるラスティの横顔を見て、ティアマットが微笑む。それを見て、ステラとアークが視線を合わせて口を大きくゆがませて笑う。

「マスター、盛り付けが終了しましたよ。早く召し上がりませんと、折角の御飯が冷めてしまいますよ？」

「——で、アル坊、それでだな——む？　そうだな、解説はここまでにしておこう。まずは腹ごしらえだ」

アークの進言で、ラスティがテーブルに向き直る。アル少年は視線でアークに感謝を告げると、同じく向き直った。ラスティが懐から——常備でもしているのだろうか——箸を取り出した。その見たことが無い用具に、アーク以外の視線が集中する。

「師匠、それは何ですか？」

「ラスティくん、ソレ何？」

「そういえば、前にライス食べてた時にも、それ、持ってた」

皆の言葉に反応し、何やら思案したラスティは、もう一度懐に手を入れた。すると何故か、新たに三組の箸がその手の中に出現する。軽く啞然とする皆にそれを配りながら、ラスティは説明する。

「こいつは、箸^{はし}、俺の故郷で使われてた、料理を食べるための器具なんだ」

こうやって使うんだとラスティが手本を見せ、教える。それに入る彼らを見て、どこか不思議な郷愁の念が浮かんだが、振り払った。

即興で教え込まれた皆は、食事をしながら、四苦八苦しつつ日本の朝食の代表格たちを食べた。意外なことに一番箸の扱いが上手いのはティアマツトで、ステラが最も下手であった。ピンセットのほうがいいなどと評し、スプーンに切り替える彼女に苦笑しながら、ラスティも自分の分の食事もとりはじめた。

少しだけ、味噌汁の味が濃かったような気がした。

????????????

「さって、飯も食い終わったし、皿洗いでもしますか！」

彼女たちが作り上げてきた食事を、御代わりの分も全て食らい尽くしたラスティが、腕を捲くりながら立ち上がる。寮室におかれた

少々小規模のキッチンの水洗い場に食器を持って行き、洗いはじめる。他の皆の食器を持ってきたティアマットが、それを手伝い始めた。

「師匠、僕もっ——！——」

「さあ、ボクはわたしと一緒にテーブルその他を綺麗にしましょうね」（あの二人を邪魔しちゃ、ダメ ヨ？）

アル少年がナニカを言おうとしたようだが、それはステラの行動で遮られる。振り返ったラスティが見たのは、耳打ちされ顔を青ざめ、激しく顔を上下させる、どこか哀れな弟子の姿だった。

洗淨した食器を、ティアマットが布巾で拭いて並べる。やや身長差のある二人だが、同じ色の髪色は、後方から二人のことを観察するステラとアークの頬を緩ませた。二人の間では、余計なことを口走らないように口元を封印されたアル少年の姿がある。

話しかけるラスティと、言葉数少ないながらもどこか楽しげに受け答えるティアマットが、印象的だった。

第七小節「意思ある箱舟・録視の蓮華・虹の原点」

「ああ、アル坊」

朝食の後片付けが終了した後、アル少年はラスティに声をかけられた。振り返ると、ラスティの方から何かを投げ渡される。落としそうになりながらも受け取り、それを見てみた。

「そいつは練習用の模擬刀だ。俺は彼女たちの部屋に食器類持っていくから、先に屋上に行ってくれ（アーク、送ってくれ。くれぐれも見つかるんじゃないぞ？）」

「（了解しました、マスター）では、行きましようか、アルさん？」

先に行ってくれと言ったラスティが、ティアマットたちが持ってきた食器類を全て持ち、二人の後について出て行った。取り残されたかたちになったアル少年に、アークが声をかける。返事をして、アークがやや先行し屋上に向かった。

石造りの廊下、本塔にたどり着くと、そこには人氣が殆ど存在しない。補修授業を行う先生たちはすでに教室棟に向かい、生徒たちも少ないため、殆ど隠れることなしに彼らは進んだ。

アルは模擬刀を抱きかかえて、前を歩くアーク（少女）を見る。軽い音を響かせて、まるで始めて来たところであるかのように見回しながら歩くその姿は、アルの目から見ても微笑ましく見える。だがそれを見て、アークが自身の師に向ける視線が少しだけ気になったような気がしたアル少年は、アークに質問した。

「アークさんは、師匠のこと、好きなんですか？」

ティアマツトをくっ付けようとするような行動が見られるが、だが自身も彼を愛しむような視線を送っていたことを気になっていたアルが言葉にしたのは、ある意味彼らしいストレートな聞き方。無機質な音ばかり響いていた中で、その言葉に反応したアークは、振り向いてアル少年に笑いかけながら語る。歩みは後ろ向きで止まらない。曲がり角もしっかりと曲がる。

「ふふふ、それを私に聞いたのは、貴方が初めてです。

……そうですね……恐らくアルさんが考えているものとは少々違った意味で、私はマスターのことを愛しています」

「?……どういことですか?」

アークの言う言葉の意味を察することの出来なかったアルが、首を傾げて再度質問する。アークは再び振り返り、前に向き直る。アルが首を再度傾げていると、突然仰々しく手を広げながらアークは語った。次第にその手は、ゆっくりと自らの体を抱きしめる。

「私の名は^{アーク}ARK。世界の力よりあの御方をお守りする、意思ある方舟」

その声音は今までアークが発してきたものと違う響きを持つ。広く冷たい石の印象を持つ廊下に声は緩やかに響いていき、意味を正確に伝えられないながらも、アルの心に言葉を染み込ませる。

「空と海の揺り籠たることを誓い、あの御方に仕えろと決めた精霊?…?それが私

私はあの御方の隣に立つ者足りえず、ただ空を抱き仕えるのです」

体を抱きしめる腕を解き、再度振り返ってアルに向き直る。目の前はすでに屋上への扉があり、その前でアークは立ち止まって見ていた。大きく見下ろす形となった構図で、アルも立ち止まってアークの目を見つめる。

「私は世界種で、性別の概念が存在しません。それにマスターには、すでにお似合いの女性もいらっしやるのです。ですから私は、貴方が言うような、人における‘愛’とは違った形で、マスターをお慕い申し上げるのです」

口調の戻ったアークが、呆けるアルをおいて行くように屋上への扉の向こうに消えていった。かけられた言葉を反芻するが、その意味を捉えきれないアルは、自分なりの解釈でよしとすることにした。

「要するに師匠は、モテモテということですね」

何も分かっていなかった。

????????????????

「今日はありがとな」

ティアマットとステラの寮に食器類を持っていく道中、ラスティは彼女たちにそう礼を言う。お礼なんていいと言う二人に、それはいけないとラスティは続けた。

「だってこの食事だって、俺がライス好きなの知って作ってくれたんだろ？ 朝食作ってくれただけでも有り難いの、俺の故郷の飯を作ろうとしてくれてたってんじゃ、有り難味は大きすぎるってな、これが」

流星にバレたかと反応する二人に、バレ無いと思ったのかと返すラスティ。せめてもの礼をと食器類を運ぶ中で、ラスティは別のことについても礼を言った。

「それと……事情、深く聞かなくてくれてありがとな」

アル少年のことだった。明らかに部外者の少年が、何故学院内に居るのかということ聞かないで、軽く事情を聞くのみにおさめてくれたことは、ラスティにとって日本食を作ってくれたのと同じぐらい有り難いことだった。照れ笑いを隠しながら、ティアマットがラスティに言う。

「なんだか、理由があるみたいだったから？？？それに、ラスティが何か悪いことしてるって訳じゃないのは、みれば分かったから」

やや小さな声でそういったティアマットに、ステラが大きく首を上下させて同意する。そんな彼女たちに――

「そっか……ありがとな」

――やはりラスティは礼を繰り返すのだった。

アークとアルが屋上に到着してから程なくして、ラスティもそこに到着した。ラスティが現れたところに、何処からとも無くアーク（少年）が小走りで駆け寄ってくる。お疲れ？？そう労いの言葉を送られたアークは、同じような言葉をうれしげに返した後、アルに

ついで言った。

「どうやらアルさんは、マスターが待ちきれなかったみたいのよう
で、剣を振り始めようとあちらに向かいました」

そう言ってアークが指差した方向を、ラスティは見る。やや離れた
方角に、剣を構えるアル少年の姿が見える。彼に気付かれないよ
うにそっと移動したラスティは、角材の積み上げられた場所に腰を
降ろした。頬杖をつき、アル少年のことを観察する。

「（俺、そもそも人に剣を教える自信が無いんだが、どうすればい
いかな、アーク）」

「（マスターの場合、剣術ではなく魔術ですものね、あれは）」

念話で会話する主従の前で、アルが動作を始めた。それは、大き
な曲線を描いて振るわれた。

「（おい……）」

ラスティが驚愕に声を出してしまいそうになるのをこらえた。ア
ークは呆然としている。

その剣筋は素人目にも直感的に分かるほどに未だ未熟すぎる。だ
が彼が行っている剣の‘型’は、突きの動作の無い曲線の軌道で構
成されたもの。それはあまりに見覚えがありすぎた。

しばらくの時間がたち、掛け声と共に最後の一太刀が振るわれた。
その数六十四。それを数えていたアークが、ラスティに念話で報告
する。

「（マスター、あれはどうやら‘録視⁶⁴の蓮華’を模倣しようとした
ものと見て間違いありません。どうやら彼は、全ての軌道を正確

に記憶している、ようです」

その驚愕とも言える事実には、更に言葉を失うラスティ。目の前に起こったことは、彼には到底信じられるものでは無かったのだ。

最初の一太刀目の逆袈裟の一振り、その次の翻った横の太刀、大きく軌道変更し打ち込まれる利き腕の肩口からの袈裟？？？全ての軌道の大まかなライン、翻る方向、振る目標？？それらあらゆる要素が、かなり未熟ながらも完全にアルには記憶されていたのだ。

「つはあ、はあ、はあ……」

確かに後半になるにつれ体力はきれるし、体裁きも鈍く、剣閃も棒切れを振り回しているに過ぎないもの。だが六十四の太刀、それも一度も止まることなく放たれるそれを覚えているのは異常極まらない。彼は一度しかそれを目にしていないのだ。

一連の動きを終えたアルが、ラスティが来ていた事に気付いた。今の動作を見られていたことを知り、恥ずかしいらしく、誤魔化すような笑いをしながら口を開いた。

「あ……み、見られちゃい……ましたか？」

切れる息を整えようとしつつ、彼はそう言葉を発する。六十四の無酸素運動をやり続けたのだ、今彼の体は全身が悲鳴をあげ、酸素を欲していることだろう。驚きを悟られないように、表情を元に戻したラスティはその場から飛び降り、用意した濡れタオルをその顔に軽く投げつけて言った。

「おう、しっかり見てたぞ？ それにしても最初から無茶するな、阿呆。力みすぎでそんな振ってればすぐにへたれるに決まっているだろう？」

つい先日それで痛い思いをしたラスティが、遠くを見ながらそう声をかける。模擬刀を置き顔を拭いたアルは、自らの師の顔を見上げて言った。

「りきみすぎ、ですか？」

「ああ、そうだ。まあ、俺の剣は特殊すぎるんだが……」

そう言って一度言葉を切り、アルの方を見つめる。その無垢な輝きを抱く瞳は、どんな困難でもやり遂げてみせますと語っていた。自分が魔術で行っていることを真似しようとするその精神には敬意を示したいが、正直彼はやめた方がいいのではと思っていた。だが不可能と決め付けるのは早々過ぎると思い、ラスティは自分なりのアドバイスを告げる。

「いいか。腕が剣を振るんじゃない。剣の動きを極限まで邪魔しないんだ。剣の軌道を導け、そして、自分ていう一つの、世界を感じろ、」

そうしてラスティは、百聞は一見に如かずと、自らの剣を取り出す。アークも、^{フランク}接続し、アルから距離とって、録視の蓮華の術式を発動させた。それは自らの体の内に走る式で、良く目を凝らすと皮膚の下に薄らと式の文様が見て取れる。

「O a i r e f e e n e X e e n ? (世界を感じているか?)」

理想を、幻想を自身の身に重ねる、魔術としても剣術としても異常なそれ。アルにはその異常性を知ることが皆無だが、そうである

故に純粹にその美しさに見惚れた。

全六十四の太刀は、淀み無く流麗で、曲線でありながら時に直線。劍の握りには余裕があり、腕に遅れて繰り出される刃先は空気を撫で斬る。一点で交わる全軌道は球を描き、その銀色の光を再び焼き付けさせた。

唾を飲む音が、アルから発せられる。その理想の高みを再認識し、それでも追い求めると瞳には強い意志が注ぎ込まれる。

左利きのラスティの姿を、鏡映しに映った姿と見立てて、アルはその動きを眺めていた。

六十四の太刀を終え、予告無く追加の動作を開始する。通常の‘ライン’で行われるそれは、先ほどほどの連続性は失われているが、鋭さは増している。アルを正面に見据え、間合いのほんの少しだけ外から放たれる斬撃は、アルの顔に剣圧を感じさせる。だがそれに目を閉じることは無く、しかとその全てを焼き付けた。

しばらくしてその動作が止まる。剣を収め、アークから水を受け取ってそれをあおると、少しだけあがった息でアルに話す。

「他には……俺は細かいことを言える自信は無い。自分の体を信じてみな、最良の動きは体が知ってるはずだ」

そうしてアルは、その言葉を心に刻み、向かい合って鍛錬を続けた。手本を見せるように、時折ゆっくりと動いてみせるラスティ、それを鏡写しのように真似るアル。そんな光景が、長時間にわたって見られた。

アルが疲労で動けなくなるころには、日は高く昇りきっていた。

第八小節「あるもの含めの夕日の眺めに」

「やつほ〜！ おつまませ！」

何時もの夕日を臨む時間。大好きな研究活動に没頭することですトレスの解消されたステラと、頭脳労働のせいでストレスの溜まりきったティアマットが姿を現した。二人が用意してくれた夕食が、その手に提げられている。

ラスティとアルは、細かく休憩を挟みつつも一日中屋上で鍛錬していた。アルの表情には生気が少なく、疲れがありありと見て取れる。ラスティは声を上げて答える。

「おう！ 待ちくたびれたぜ！ 早く食おうぜ！」

仲間内で屈指の食好きのラスティのそんな台詞に皆が苦笑を漏らす。ステラ、ティアマット、ラスティ（後ろにアーク）、アルと並んだ。

八月に入り気温が高くなり、皆の服装は薄いものになっている。ラスティは濃紺の七分丈のズボンに黒の半そでのシャツ、アルはアークが何処からとも無く調達してきた何故か極彩色の半袖短パン。アーク（少女）は何時ものゴシッククロリータ調のドレスで、ステラは白いワンピース。ティアマットだけは、紅いコートに黒い皮手袋というまるで冬のような出で立ち。暑くないのだろうか、皆の視線が集中する。汗一つかかないティアマットは、皆の視線の意味が分らず首を傾げるだけである。

「なあ、ティアマット……暑く、無いのか？」

ラスティがついに言葉を発した。自ら製作に携わったそのコートには、精霊の魔術技術を盛り込んだ環境調整機能がついているが、それにしても季節感が無さ過ぎるのだ。

「うん。暑くない」

当然のように頷く。そんな彼女の様子に、その話題はこれ以上追求すべきではないと言う意見が暗黙の了解として取り交わされた。ステラは持ってきた夕食を広げる。

流石に朝食のときのように日本料理では無く、サンドイッチなどの手で掴んで食べれるもので構成された食事だった。ラスティは沢山食べたいと言うので、彼のために量は多目である。

「いっただっきまゝあむ！」

最後まで言い切らずにアルがサンドイッチを食む。西洋っぽい文化なのに、中途半端なところで日本文化が混ざることによってラスティは苦笑しつつ、同じように食べ始めた――二つ重ねて。

「アル坊！ 沢山食わんと俺みたいに背が高くなれんぞ！」

「ふあひ！」

ラスティの発破にアルが呼応、二人は勢い良く食らっていく。そんな二人の様子に微笑みながら、ティアマツトとステラはゆっくりと食べていた。

夕日が少しだけ沈み始めたころ、皆が食べ終わる。ラスティは満足げな表情で、限界近くまで食べさせられたアルは顔をやや青ざめさせている。

「ううゝゝ、食べ過ぎました……」

「マスターと同じ量を食べようとするからそうなるのです」

アルのそんな呟きに、何故かアークが誇らしげに胸を張って答える。そんな年少（片方は姿だけ）の二人のやりとりには、心和まされた。

「ラスティたちは、ずっと今日はここに居たの？」

ポラリスにつき合わされ、この時間になるまでここに来ることの出来なかったティアマツトが問う。一度様子を見に来ていたステラが首肯して、ラスティは笑って答える。どうもアルの中途の音の上がりようが面白かったらしい。

「ああ、今日はずっとここに居たぜ？　まあアル坊はちょっと休みすぎだな」

「師匠と同列にしないでください……そもそも歳が違います」

「はは、違うないな、これが」

アークがこまめに水分補給やミネラル補給の管理をし、間食もはさみつつずっと続けていたようだ。まだ幼いアルは体力が追いついていかず、ラスティの鍛錬を見ている時間が長かったらしい。

「わたしはクラブ活動だったよ！　新しい魔具が出来そうなんだ！」

今日一日だけで三回の原因不明の爆発現象を引き起こしているステラが、にこやかにのたまう。事情の知らないアル以外の三人は顔

を引きつらせて笑う。理解できていないアルに、ラスティはにこやかに笑いかける。

「ステラが魔具を作ってきたら、お前に試させてやるよ」

「え、ほんとですか!」

その言葉の意味を全く知らないアルが、心の底から喜んでみせる。心の中で合掌しつつ、そんな純粋なアルの様子に皆は微笑む。今日はどうしていたという話題において、ティアマットが最も低い調子で語る。どうやら大分参ってきているようだ。

「私は……ずっと、補修だった」

体育座りのまま膝に顔を埋める彼女の声は暗い。一応頑張っているようだが、連日の長時間の勉強は確実に彼女の精神を蝕んでいるようだ。ステラが彼女の背中を軽く叩いて励ます。

何時もとは一風変わったやり取りに新鮮さを感じつつ、彼らは思いいに話を募らせた。夕日が半分以上沈んだ頃、アルの首が断続的に重力に負けそうになる。どうやら疲れのせいで睡魔が襲ってきているようだ。

「アーク、アルを部屋に送ってきてくれ。寝かせたら戻ってきてくれよ?」

「了解しました」

ラスティの言葉に反応して、アークが立ち上がる。瞼が閉じかかっているアルを何とか立たせ、背を押すようにして連れて行った。その姿を見届けた後、ステラがラスティに問う。

「どう？ アルくんは」

どういう意味で言われたのか定かでは無いが、才能かそのあたりだろうと解釈したラスティが言う。二人が出て行った扉を見つめたままと言うそれは、ティアマツトも含めて二人を驚かせた。

「凄く努力家でさ———それで、それが霞む位に———天才だ」

「天才？」

ティアマツトが、ラスティの言葉に反応する。それはただ天才と言う言葉に反応したのではなく、まるで恐れるかのようなラスティの口調に疑問を持ったというのが大きかった。二人の方に向き直ったラスティが、声色を抑えて言う。夕日は半分以上沈み、辺りは次第に暗くなっていく。

「ああ、天才だ………ティアマツトは、前ポラリスにやってみせたあの連続攻撃、流れだけでも再現できるか？」

急なラスティの話題の変換をいぶかしむも、ティアマツトは首を横に振って答える。

「無理。形と軌道が複雑すぎる。それに、一太刀の再現だって、直線的な騎士の剣が染み付いた私じゃ、難しい」

ラスティの剣閃の異様性をうかがわせるようなティアマツトの発言。苦笑しつつそうだろうと答えるラスティは、彼女にとって驚くことを言った。

「でもアル坊はよ、やってのけたんだ、これが。まだ一つ一つは雑すぎるが、六十四の連続した軌道を完全に覚えてたんだ」

「わお、凄いんだね」

ステラはラスティの剣舞を未だ見ていなかった故に驚きは薄いですが、ティアマットはあいた口が塞がらないといった様子だ。

ラスティの剣術？いや、剣を振るための魔術は、傍から見ると異様な曲線を描いているように見える。ラスティの想像の中で空間に引かれた路線ラインの上をすべる剣は、時折不可能に近い剣閃を繰り返すことさえある。故に彼は、ラインさえ引ければどのような体勢からでも十全の剣撃を繰り返してみせる。

彼に編まれた‘録視の蓮華’と名づけられた式は、あらかじめ設定しておいたラインを引くものである。軌道は常に連続性を保ち、ただ運動エネルギーの損失を抑えて斬り続けることを目的としたそれは、ただ六十四種の型を連続して繰り返すなどよりも遥かに複雑怪奇な軌道を描く。

それを、アルは一度で記憶してみせたのだ。

「完全記憶能力？」

ステラがそのように予想を言う。だがそのことを、ラスティは否定した。

「いいや、それは無いだろう。何か別質の異能か何かかもしれない」

だがラスティの記憶のなかで、該当しそうなものは無かった。見たものを完成度高く再現してみせる異能は存在するが、未熟過ぎるアルの剣を見る限りそれは違うと確信する。記憶にも、‘NOTE’にも無い能力かもしれないと思われた。それは僅かにラスティを

混乱させている。

「まあだからって、何か問題あるわけでもないんだがな、これが」

そう言って表情を緩ませる。大きく息を吐いて仰向けに寝転がり、星の見え始めた空を眺める。

雲は少しだけ多い。

??????????

アークが戻ってきた頃には、すでに日は沈みきってしまった。途中で立ったまま寝てしまっただ変だったとアークは言う。

今日はこの辺りで解散しようということになって、帰るといった時だった。

「あれ？ ラスティ、帰らないのかな？」

屋上を後にしようとしたところで、ラスティが未だ動き出さないことに気付く。ラスティはあれから、少し言葉数が少なくなっていて、ティアマットはそのことが気になっていた。ラスティの方を向いた彼女の耳元で、ステラが囁いた。

「ほらほら、いってきなって。ラスティくんの様子、心配でしょ？ わたし、部屋でまってるから、ほら！」

「え！?!?!? いや、ちょっと——」

ティアマットの背中を強く押し出すステラは、そのまま屋上を出て行ってしまった。行きがけにがんばってねと、ウィンクしていく。

「うううう~~~~……はぁ……行こうかな、やっぱ」

その彼女の行動に頬を若干染め恥ずかしながらも、結局ティアマットはラスティの方に向かって歩いていった。心配だったのは凶星だったらしい。

????????????????

「お願い！ あの二人の会話、これで録音してちょうだい！」

アークに向かって頭をおろしているステラの手に握られているのは、彼女特性の小型録音魔具。二人の間で交わされる会話を、これで録音してもらおうと言う魂胆のようだ。ソレを見るアークの視線は酷く冷ややかだ。

「そうすることで、私になんのメリットがあるというのです？」

言外にメリットさえあれば受けようという姿勢が垣間見える気がしないでもないアークの言動。そんな精霊に、どうしてもと懇願する。

「……ダメ？」

「駄目です」

一切の考慮も無く切り捨てられたことに肩を落とすが、表情を改めると、腰の辺りにつけられていたポーチを漁り始める。そこから出てきたのは、複数枚の写真だった。

「むむう……じゃあ、これと引き換えならどう？」

「こ、これは?!?!」

それには全て、ラスティの姿が映っていた。その予想外の光景に、アークの目は釘付けになる。ステラが写真を揺らして見せると、それを追うように眼球が動く。ステラは獲物を吊り上げたとき、不敵に笑みを浮かべる。

「ふっふっふ、アークちゃんがラスティくん大好きなのはわかってるのだ! クラスの写真部の子が盗s?? 写したこのラスティくんの写真十枚セット……それに今なら……」

「っ……い、いまなら?」

のどを鳴らす音が、無音の廊下で妙に響く。心が揺れ動くアークに対し、交渉の最後の切り札をステラは切った。

「このラスティくんの居眠り写真もつけちゃうよ! 授業中で、先生が忘れ物を取りに行くのとラスティくんが居眠りするのが重ならなくて撮れないというレア物だよ! さあ、どうする!?!」

「この仕事、よろこんで引き受けさせていただきますしょう!!」

それでアークは落ちた。嬉々とした表情で写真を受け取り、二人は強く握手を交わしたのだった。

第九小節「それは心の剣だから」

「ラスティ？ 起きてるの？」

仰向けになるラスティの顔を、ティアマツトが覗き込む。彼の目は見開かれていて、それは彼女と視線を交差させた。ゆっくりと、ラスティが口を開く。

「ティアマツト？ 帰ってなかったのか？」

「うん。ラスティ、なんだか元気なかったし、帰ろうとしなかったから気になったの……」

そう言ってティアマツトはラスティのそばに腰を降ろす。冷たい夜風が間を通り抜ける中、二人は並んで夜空を見た。ラスティは、仰向けのままでティアマツトに言う。

「心配かけちゃったか……はは、らしくないな、これが」

自嘲気味にそういうラスティの声は力なく、何か考え事があるとうことが容易に見て取れる。そんな彼に話しかけるティアマツトの声色は優しく静かで、それでいて少し不安げに聞こえる。

「一人の方が、よかった？」

「いいや、そんなことは無い。ありがとな、ティアマツト」

礼を言うラスティは、勢いをつけて姿勢を起こす。背筋を伸ばし、

夕日が落ちた方を眺めた。ティアマツトもそれに倣うように見る。雲が、その方角に抜けていく。

しばらく二人の間に会話は無く、微かに遠くからの生徒たちの声や動物の鳴き声だけが聞こえていた。そうしているうちに、もう一度らしくないとつぶやいたラスティは、ティアマツトに向かってこんな質問をした。

「ティアマツトにとって、‘剣’ってなんだ？」

正直、質問の意図があやふやだった。何故このタイミングでそのようなことを言うのだろうか？？恐らく彼の様子の変化に関係があるのだろう、そうティアマツトは思案する。

「私にとっての……剣……」

そう考えたところで、ティアマツトにはラスティの問いに対して満足な答えを用意できなかった。彼女にとっての剣、それは彼女本人ですら考えたことが無かったのだ。

「なんなんだろう……私は、剣を握るしかあそこ教会に居場所がなかったから、必要だったから……だから……ごめん、なんだかよく分かんない」

「いや、いいんだよ。いきなり悪かった」

答えを上手く返せず落胆するティアマツトを、ラスティが励ます。大きく息を吐いたラスティは、アルのことについて言った。

「アルにとってのはさ、強い剣士って憧れだったらしい。‘己を極める’って言葉知ってるか？ 何年か前騎士の間で流行った言葉らし

いが、あいつは未だそれに憧れるやつなんだとさ……誰の言葉だったっけな……えっと……」

「前の教会騎士総団長。前の戦乱で無くなった人の口癖みたいなもの……私もよく、昔は聞いてた」

記憶が定かでないラスティに、ティアマツトが助け舟を出した。かつて教会の見習い騎士だったティアマツトの言うことに、ラスティは大きく首を上下させた。

「ああ、そうそう、そうだったそうだった。まあ、それは良いとして……要は、アイツも、憧れただけなんだよなって話だ。……それで、俺はさ、剣の道を歩むってのに、憧れたんだ」

口調が一変して、ラスティは言う。強い剣士に憧れるのではなく、剣を握る者そのものに憧れたと、彼は言う。ティアマツトには、理解しにくい憧れだった。遠くを見て、ラスティが腕を突き出す。その手の甲には、アークとの契約の刻印が刻まれていた。

「夢追いかけて、鍛えて、鍛えて……天才に追いつかなくなっちゃってそれでも諦めないで、鍛え続けて??そんな人間に……憧れた」

憧れた??その一言に込められた感情は、声色、表情、動作???ありとあらゆるものが物語っていた。音楽以外のことで、ここまです夢見るような彼の表情を見たことが無かったティアマツトには、それは非常に新鮮に見えた。

「時と努力と心で鍛え上げた技、それって格好よく無いか?」

同意を求めてくるように顔を向けてくるラスティに、ティアマトは同意するように頷く。内心では、本当に子供っぽい彼の言動に対し生暖かい微笑を送っている。

だがそうしているうちに、ラスティの表情は沈みこんだ。

「でもさ、俺出来なかったんだ。血中魔力が殆ど無くて、強化式できないんだ」

その事実には驚いたティアマトは、大きく瞳を開かせる。通常人間は、魔獣や魔物でないが、生まれた時から周囲に魔力が存在する、ので、血液中には微量に魔力が溶けている。魔術師や戦士はそれを利用することで、筋肉組織や神経組織の結合を強め、高い身体能力を得るのである。

つまりラスティは、才能があるかないか以前の問題として、戦士として話にならなかったのだ。

「だから俺は、戦歌と魔術を併用して使うんだ。俺の剣は技じゃない、剣の形をした魔具を振ってるだけの魔術なんだよ……だからさ、アル坊のこと、羨ましいって思うんだぜ、俺。
あゝあ、俺にも才能ぐらいあればなあ……」

自分には出来ない、努力して辿り着く余地を持つということ。しかも弟子としてとった少年は類まれな才能の持ち主。羨ましがるのも、無理は無いのだろう。剣の肉刺の出来ない手を見つめて、ゆっくりとその手を握り締めるラスティの表情は、剣士に憧れながらも本当の意味でそうなれない自分を責めているようで――

ティアマトは、そんなラスティには納得できないでいた。

「ラスティは、剣士なの？」

紡ごうとしたラスティの言葉を、ティアマツトが遮った。唐突なことで、ラスティは半ば驚いた様子で彼女ののことを見ていると、その左手を握られた。握られた手は、薄い黒皮の生地で覆われていて、それを隔てて硬い感触が伝わってくる。

「これがね、剣士の手。小さいころから握らされて、硬くなっちゃった私の手。

これは騎士だった私の証。でも、私の手は皆と違いすぎるの。皆は魔術師で、私は今まで騎士だったから」

大きく息を吸う。どう伝えていいか分からない。だが言葉は伝えたいと、そう思った。

「剣士の努力は、体に苦行を課すること。魔術師の努力は、精神に苦行を課すること。前騎士総団長は、そう言ってた。ねえ？　ラスティのしたい努力って、それじゃダメなのかな？」

そう問われるラスティは、ティアマツトの言葉に答えを返せない。彼女は更に言う。

「ラスティが剣を振るのって、魔術師としての努力じゃないの？　何時間も同じ魔術を繰り返すのって、努力じゃないの？」

そう言って、彼女はラスティの手を離した。後に残った感触を確かめるように、互いの手は握りもせず開けられもせず、中途半端な形で止まっている。

「ラスティは、私の歌を心の歌って言った。じゃあきつと、ラスティの剣は心の剣。きつとラスティの心が、それを綺麗って思うから、ラスティの剣はきつとあんなに綺麗なんだろう。私も、歌は綺麗

だって、思うから……」

そこから先に、言葉が続かなくなってしまった。伝えたいと思うことは多くあるのに、それを上手く言うことの出来ない自分が、これほどもどかしいと思ったことは無い。そんな色の混ざりきらない感情を抱えているうちに、ふと、ラスティは笑った。

「……だよな、そうだよな」

ティアマツトが見ている前で、突然立ち上がりだしたラスティ。その表情には、いつものような前向きで楽天的なそれが戻っていて、どこか吹っ切れたことをティアマツトに悟らせた。

「そうだよ、俺は憧れたんだ。こんな風に剣を振れたら綺麗だろうなって、そう考えていつつも想像してたんだもん——俺は剣士じゃない、ああ、そうだよな。確かにそうだ。強い剣士になりたいって言うアル坊のこと見ててすっかり忘れてたぜ。」

俺は魔術師だ。幻想だけの剣を持つ魔術師だ。ああ、阿呆だ、ホントに阿呆だ。なんで俺はこんな簡単なこと忘れてたんだ？」

ひとしきり言い切ると、大きく息を吸って、ゆっくりと息を吐いた。

「あゝあ、何だか最近、ティアマツトに助けられっぱなしだな。格好悪いや、俺」

また別なことで落ち込み始めたかと思うと、ティアマツトの方を向いて、何時もの表情でラスティは言う。

「ありがとな、ティアマツト」

そう、今日は彼の口から良く聞く言葉に微笑みで返しながら、ティアマットは小さな声で言う。それはラスティに聞こえることは無く、ただ自身のみみに届くだけで消えていった。

「(大丈夫、私は、今まで貴方に沢山助けられたから)」

そんな彼女の心の声は当然、彼の耳に入ることはなかった。

――

「はっはー!!! どうしたどうした! ついて来い、アル坊!」

「ま、待ってくだ――」

ティアマットと話した一件があつてからというもの、ラスティはこれまで以上にアル少年と共に鍛錬に打ち込むようになった。そんな彼らの光景を、ステラが怪しすぎる笑みを浮かべながら眺めていて、アークは何やらメモ帳ではなく一回り大きなファイルを手にとりしている。何を見ているのだろう。

「たゝのしそうだね」

屋上を元気に走り回るラスティとアルの姿を見て、ステラがアークに呼びかけるようにして言う。同じページを一心不乱に凝視しているアークは、軽く首を上下させて答える。

そんな日常が、二十日近く過ぎていった。

第十小節「問答秘文・回答は出ず」

夏休みが始まって三週間、ようやくティアマットの補習授業が終了した。その日の夕食に顔を見せた彼女は、やや顔色がよろしくないものの希望と開放感で満ち溢れている。それほどに勉強が苦痛で堪らなかったのだろうか……ここ最近表情が本当に豊かになってきている彼女のそんな表情を、皆は少しだけ面白がって笑う。

「本当に……長かった、辛かった……」

何か思うものがあるのだろう。ただし、ティアマットは補修組の中では真面目な生徒なのだ。運動したくて脱走を試みるポラリスなどに比べると、彼女はまさに優等生と言っても良かっただろう。数日に一度の割合で、ポラリスと先生たちの逃走・追跡劇が数日おきに発生していたことを、アークはしっかりと把握している。

「でだ、今日で補修は終わったわけだが、明日からはティアマットはどうするんだ？」

具の入らない塩おにぎりを手に、ラスティが問う。頬の緩みきつたその表情が、彼のその食ライスに対する愛を物語っている。

ラスティの問いを受け思案するティアマットには、特に何かするということは無いうだ。ソレを見たステラが言う。

「ねえ、新しい魔g……?」

「もし予定無いならさ、鍛錬付き合ってくれないか？」

ステラの発言が拙いと感じたラスティが、それを遮るように咄嗟の判断でティアマツトを誘う。ラスティの意図を察したティアマツトが、冷や汗をかきつつも首を激しく縦に振って同意した。ステラは若干悔しそうに頬を膨らませている。

「むうう、ラスティに盗られた」

「ははは……わ、わりいな（俺は死亡フラグを回避させてあげただけだ）」

膨れるステラに対し、後頭部を搔きつつ謝るラスティ。人に試用されるなら、まずは出力系ばかりに熱を注いで制御系基盤をおろそかにする癖をどうにかして欲しいと、心の奥底から彼は願った。

咄嗟に出た鍛錬への誘いの件だが、近いうちに彼はティアマツトに相手を申し込もうとは思っていた。それはアル少年がもとの時間に戻ってからと考えていたのだが、ちょうど良い（？）タイミングだったのでつつい申し込んでしまったのだ。

「明日からは、ティアマツトさんも一緒にするんですか？」

どこか嬉しそうな表情で聞いてくるアル。手本にする人間が増えることが嬉しいのだろうか。

そんな彼に、塩おにぎりを放り投げながらラスティは言う。おにぎりを受け取ったアル少年は、まだ食べなくてはならないのかと表情を歪ませた。

「まあ、ティアマツトの余裕がある時間に、だ。ティアマツトは夏休みの宿題も片付けなくちゃだめだからな」

「……………」

宿題??そのワードを耳にしたティアマットの表情が凍りつく。
次第に、補習授業の時期のような苦い表情を見せたかと思うと、膝に顔を埋めだした。禁句を言ってしまったかと、ラスティは冷や汗をかく。

「そうだった……宿題、あるんだ。私……まだ……文字を見なくちゃ駄目なんだ」

「て、ティアマットちゃん?　だ、大丈夫?」

急に鬱になりだしたティアマットに心配そうに声をかけるステラ。補習授業で何かあったのだろうか、文字に対し何やら拒絶反応を起こし始めているようだ。どう声をかけてやればいいか、二人は迷ってしまふ。

「もう……やだ……」

「ほ、ほら、俺たちの鍛錬に付き合った後とかでもいいんだぞ?よく考えてみる、流石に宿題は残ってるが、一日中勉強しなきゃならない訳じゃないんだぞ?」

ラスティの言葉をうけて、ティアマットはそのことに気付いたようだ。気を少しだけとり直したようで、顔を上に上げた。ラスティとステラは胸をなでおろす。

わずかに生気の戻った目で、ティアマットはしみじみと語った。
一体何が彼女をそこまで追い詰めていたのだろう。

「うん、そうだね。もう、一日中アレを見なくてもいいんだよね……そっか……うん」

何やら自己完結したようすでうなずき始めたティアマット。ここになって、皆（アル以外）は彼女の精神が相当限界に近いことを感じ取った。

結局その日は、早く休ませてあげようという皆の総意があつたことでまだ日が沈みきらないうちに解散することになった。皆がもう解散するからと言いくるめ、ステラが部屋まで彼女を連れて行く。屋上から去っていく二人を見つめ、アル少年がラスティに問う。

「師匠、ティアマットさんは、今日はどうしたのですか？」

「ああ、疲れてるんだよ、きつと」

そういう彼らに、冷たい風の音が入った。

「俺がアル坊に示してやれるものってったら、やっぱ手本とかそういうったもんなんだからな」

「それで、私が相手するの？」

ラスティがティアマットも鍛錬に誘ったその翌日、朝の屋上の上でラスティとティアマットが対峙していた。やや離れたところにある角材の山の上で、アル少年が座ってその光景を見ていた。

アークとの接続を終えたラスティが、剣を左手にして言う。

「まあ本音を言うと、一度手合わせして欲しかったただけなんだけど

な、これが」

「ふふ、そっか」

それを聞くティアマツトは苦笑気味で、愛用の十字兵装^{クロスウエボン}??片^{ハンド}手半剣^{アンドハーフソード}を正眼に構えた。やや腰を低く重心を落とすその構えは、重い獲物を扱うことに慣れている証拠だ。

対するラスティは、細い曲刀――打刀を重力にまかせており、切っ先は地面すれすれである。右足を一步前に踏み出した高い姿勢は、独特のものであろう。

ルールは以前ポラリスと行った手合わせと同じものである。一応審判とされたアル少年が、二人に合図を送った。

「えっと、じゃあ、はじめ!」

「O a i r e f e e n e X e e n? (世界を感じているか?)」

その言葉を合図に、動き出したのはラスティ。いつも剣を振り始める時に言う言葉を告げ、駆け出す。

速度をもって接敵、左下から右上への逆袈裟を繰り出す。だがそれは、容易にティアマツトに弾かれた。弾かれた勢いを利用し、ラスティの刀は大きく弧を描いてティアマツトの右から首筋を狙う。だがその動作も、予想していたかのように弾かれた。

ラスティが振るい、ティアマツトが弾く。四方八方、弧を描いて襲い来る剣閃をティアマツトは焦ることなくさばいていた。細い刀身に、高速の剣速、規則性の無い動作のつながった連撃。ポラリスがやっとの思いで防ぎきったそれを、ティアマツトは完璧に対処できる。

一步、ティアマツトは踏み込んだ。

「!? つくそ!」

「はああ!!!」

悪態についてラスティが後方に跳躍、直前まで居た場所を剣がなぎ払う。弾くのでは無く受け止めて一步踏み込んだティアマットは、カウンター紛いの一撃を繰り出したのだ。仕留められなかったことに、ティアマットが眉をひそめる。

墮嚙の時は出来なかったが、これが彼女の戦法。堅い防御でしなぎ、タイミングを見計らって重い一撃を放つ。教会騎士は一般に守りが堅いとされているが、ティアマットはそれに輪をかけて防御への比重が高い。

追撃することなく、低く構えて歩み寄るその小さき剣士に、ラスティは舌打ちをする。

「っ!! 俺の線^{ライン}が見えてるんだもんな……」

「私の目は幻想による歪みを見るから、ラスティの剣は分かりやすい」

もともと防御が得意なティアマットだったが、ラスティの剣を完璧に打ち払えたのには理由があったのだ。ラスティの剣は、あらかじめ剣閃を‘幻視’してから振るわれる。それは本来空中に現れず、見えることは無いのだが、ティアマットの右目^{クリスタルム}??水晶眼^{オクルス}は違った。

彼女の二つ名になりつつある‘紅晶眼^{ルビーアイ}’の通り、ルビーの輝きを放つその目は、特異な体質により魔力が水晶体内に結晶したもの。幻想をこの世に顕現する鍵たる魔石と同質の目を持つ彼女は、人に見えない様々なものを見ることが出来るのだ。彼女の前では、とあ

る幻想種の持つ光学迷彩ですら意味を成さない。

こうやって斬ろう——そう思い立った段階でティアマツトにそれを気付かれることになっているというのは、武器同士の戦闘では余りにも致命的である。一太刀目の段階でラスティが反撃を受けなかったのは、彼の止まらない連撃によるものであったのだ。

「ラスティの剣は、私と相性が悪い」

ラスティの剣の本質と、ティアマツトの目の情報があれば、誰にでも分かる結論。実力云々ではなく、致命的なまでに相性が悪すぎるのだ。

だがその言葉を受けてラスティは、笑うだけである。

「だったら、もっと疾くってな、これが!!」

再度の交差。お互いの相性を、先ほどの攻防で悟った両者は、だがしかし、その主戦法を変えることは無かった。

ただ疾く、防がれることを前提に次を次をと振るい続けるラスティ。

レイピアよりも手数が多い斬撃を、力にものを言わせた斬撃で振り払うティアマツト。

ラスティの弧はティアマツトまで届くことは無く、また彼女の暴風はラスティを捕らえるには至らない。

ついては離れ、接しては弾かれ、飛び込んでは飛び退かれる。その戦いはまだ稚拙で、技術も未熟で、だがそれでも人を惹きつける。アルは、その光景から目を離すことが出来なかった。

「まだだ、まだだまだだまだだまだだ!!」

初めて見たときも、今まで見てきたときも感じたその美しさ。戦

いに扱われる剣だというのに、師の左腕に握られるその剣は少年の目にはあまりに美しく、それが描く弧は一瞬の瞬きをいつまでも心に残した。

「!! そこ!」

幾度と無くそれは掻き消される。戦いの場に居ることを否定されたかのようにあっさりと散っていく銀閃たちは、それでもまた違うものをと描き続ける。

描いて、壊されて、また描いて、また壊される。二人の戦いは、アルの目にはそう映っていた。それは彼が夢見てきた戦士の戦いはかけ離れていて、だが言い尽くせない、誘い込まれそうになる何かが存在した。

しかと目に焼き付ける。自分がいつかその背に追いつけるように、いつか彼の相手として自分も立てるように、いつか彼のようにするために。

「オー アイレ ファーネ ジーン……」

知らず、その言葉を呟っていた。

第十一小節「それは災難なこと」

アル少年が見守る中、二人の試合は様相を変えることなく続けられていた。ラスティは幾数もの斬撃を繰り出すが、全てをティアマットに弾かれる。ティアマットはチャンスを見て必殺の一撃を繰り出すが、それはラスティを捉えない。膠着状態が続いていた……その時だった。

「っ！！」

歯を噛み締め、放たれた逆袈裟の一撃。ラスティの放つそれは、今まで彼が放ってきたものとは一線を画すほどに遅い。動作のキレも無く、素人の放つようなそれを——ティアマットは反応することが出来なかった。

「え……………?」

何が起こったのか理解できていない彼女の首筋に、冷たく金属光沢を放つ刀が添えられる。寸で止められたそれは、ラスティの勝利を表していた。

呆然と、ティアマットが首筋に当てられた刀に見入っていると、その表情を見たラスティが笑って言う。

「^{ライン}線、^{バツ}ばつか見てるからだ。そっちばつかに気向けてるからそうなるんだよ」

それが、ラスティの使った手段だった。ティアマットは、その水

晶眼の能力のおかげで、ラスティの攻撃を事前に予測することが出来ていた。だがそれは、ラスティの魔術を利用した攻撃に限るものだった。

同じような展開が長引き、ティアマットが機械的にラスティの剣を捌き始めたころ、彼は自身の身体能力だけで一撃を打ち込むという手段に出たのだ。線に重なるように剣を用意し続けていたティアマットは、本来防げるはずの素人丸出しの一撃を見切ることが出来なかったのだ。

速度を上げてくることで押し切ろうとティアマットに思い込ませたラスティの勝利である。

「ううう~~~~……」

低く唸りながら、剣を降ろすティアマット。それに合わせて、ラスティも刀を仕舞った。カスミギリ負けたことがよほど悔しいのだろうか、ティアマットは下を向いて呟いた。

「…………もう、いつかい」

「はい？」

うまく聞き取れなかったラスティが、ティアマットに聞き返す。すると彼女は、勢い良く顔を上げたかと思うと、再び剣を構えだした。何やら闘志が溢れている。

「もう一回、やる」

「て、お、おい待て、やるにしても剣構えさせ——」

大きく、彼女は得物を振りかぶった。

・ ・ ・ ・
ステラが昼ごはんを届けに来たときには、疲れ果てて地に倒れ付
すラスティと、何か大きなことをやり遂げた後のような清々しい表
情をしたティアマットが、真っ先に視界に入ったと言う。

????????????????

「何故、何故俺は災難なのだ……」

妙に古めかしい言い方で、ラスティがサンドイッチを食べる。栄
養が偏らないように、大量の野菜が挟み込まれたそれにかぶりつく
と、みずみずしい野菜を食む爽快な音が響いた。それにならうよう
に食べるアル少年は、歳相応に輝かしい笑顔を放っている。

「師匠はやっぱり凄いです!」

最早ラスティの^{魔術}剣術の信望者になってしまっているのではと危惧
させられてしまうほどに、彼のラスティに向ける視線は熱い。結局
あれから、激しい動きをするラスティが体力を尽きさせるまで行わ
れた試合は、ラスティの勝ち越しになっていた。どうもティアマッ
トには、単調な展開になってしまふ癖があるようで、裏をかかれる
ことが多々あったのだ。

「はあ……私のほうが長く剣握ってきたはずなんだけどな……」

ラスティを最後に昏倒させたことで表情が緩んでいたティアマッ
トだったが、総計でいくと負け越していたことに気付き落ち込んだ。

そんな彼女に、ラスティは励ますように声をかける。

「いやでも、素の剣術でいったら一瞬で殺られるって。俺のこれは、剣術っつうよりも、むしろ魔術だからな」

それでも彼女は、剣を握って日の浅いラスティに負けてしまった
ということをやみ続けている。何時もの体育座りが、今日は縮こ
まってしまったている。

日の昇る太陽の下でコートを着込む彼女は、膝に顎を乗せながら
呟いた。

「はあ……ポラリスの言ってたあれ、行ってみようかな……」

「ポラリスちゃんに、何か誘われたの？」

すかさずステラが質問する。膝に顔を乗せたままの状態でステラ
の方に向いたティアマツトは、少し拗ねた様に答えた。彼女の長い
黒髪が、その表情を少し隠している。

「うん。何だか、夏休みが終わる少し前に、武術倶楽部系の主催で、
強い人たちが集めて指導してもらったのがあるんだって。毎年学校
の伝手で人集めてきてるみたいで、有名な人とかも来たりするって
言ってた。参加は自由で、毎年武術倶楽部系じゃない人達も多く来
るみたいで、一緒に行こうってポラリスに誘われてるの」

「ほえ……」

良く分からない声をあげてステラは反応する。彼女が言うには、
堕嚙が来るまで
しばらく剣を握っていなかったことで鈍ってしまった分を取り戻し
たいのだそうだ。彼女としては、それほど剣に思い入れがあるわけ

でもないので断ろうかと思っていたようだが、ラスティに負け越してしまったことを重く受け止めたらしい。体技の授業の時に、同輩たちを軽々と吹き飛ばしている彼女も、本格的な鍛錬の必要性を感じたようだ。

「それは、師匠よりも強い人が沢山来るんですか？」

「そうだぞ？　どうするアル坊、そいつらに師事してみるか？」

アル少年の言った言葉に反応し、ラスティが悪戯っぽく笑ってみせる。その笑いの意図を察することの無かったアルだったが、彼は頭振ってそれを否定した。

「いえ、僕は師匠の剣がいいです！」

満面の笑みで言っただけの彼に少し驚き、それを照れの表情に変えながら、ラスティはアル少年の頭を掴み、髪を掌で掻き乱しながら軽く押し付ける。その行動に恨めしげな視線を送って見せたが、ラスティは軽く流した。気分を変えようとしたところで、アル少年がラスティに質問をする。その質問は他の二人――特にステラも惹き付けた。

「そういえば、師匠がいつもいってる、オー　アイレ　フィーネ　ジーン、ってなんなんですか？　呪文ですか？」

思いもよらなかったその質問に、ラスティが驚く。食いついてきたステラが、彼の質問に続けた。

「そういえば、魔術実技の授業の時にもたまに使ってるよね？　○^{オー}で始まる疑問文型って見たこと無いんだけど、それって何か特別

な用法なの？　　っていうか何て意味なの？」

学者志望の彼女としては興味そそる話題だったのだろう。ラステイとステラの間にはティアマットが座り込んでいるが、彼女はどこか居心地が悪そうだ。勉強関係の話になると思つての表情だろう。

「ああ、それな。まあ、定型文系（慣用句みたいな使用法のこと）の一種だ。意味は……」

そこで彼はいったん言葉を区切った。意味を教えてもいいものだろうかと考えていたのだが、どうせ深くは勘繰られないだろうと思ひ、彼は意味を教えた。本来、魔術師が知る定型文型の詠唱は人に教えるなどということは無いのだが（それを訊こうとすることもちろん無い）、ラステイはあまり深く考えていなかった。なおかつ、普通は意味が無いのだ。

「世界を感じているか？　だ」

その答えを受けて、余り深く考えずに頷くステラ。だがその隣のアル少年は、やや思案顔になっていた。それは、師より受けたアドバイスの中で、最も語調を強く言われたものに近かったからである。歳不相応に、気難しく考え込むアル少年は、その意味を反芻して頭の中で唱えた。

「せかいを……かんじているか？」

それは、どういう意味なんだろうと、彼は考え込んだ。

第十二小節「夏休み、湖の守護精霊」

夏休みも残り二週間。その日も皆は屋上に集まっていた。日照時間の長いこのごろは、皆が集まる時間帯ではまだ空が紅く色づかず、遠くからは活動に励む運動部の生徒たちの声が聞こえてくる。

思えば今まで夏休みの殆どを、青春というには余りに鈍色過ぎる送り方をしてきたと、アル少年以外は思っていた。最も、ティアマットには特に何かしようということではなく、ラスティもまたその生活サイクルになんら不満があるわけでもなかった。ティアマットはそれほど遊びを知らず、ラスティは結構体育会系の人間だったのである。

だが、ステラは違った。

「ねえ！ 皆でどっか行こうよ！！」

皆が集まっていきなりの発言だった。何ら文脈の無い提案だった故に、他の皆は驚いて回答するのにやや間ができた。だが皆からの回答がある前に、ステラが一気にまくし立てはじめる。何かあったのだろうか？

「この夏休み、わたしたちは学生らしからぬ(?) 日々を送って来た！ もう夏休みは二週間しか無いのに、わたしたちは何処にも遊びに行っていないんだよ！？ ダメだよ駄目！ というわけで、みんなでどっか行こう！！」

彼女の所属する??? 魔工学、錬金etc何れかの倶楽部で何かあったのだろう。妙に使命感に満ち溢れた表情で力説するステラ。

その気迫に気圧されながらも、ティアマットは恐る恐る彼女に尋ねてみる。爆発物を取り扱うかのような表情だ。

「えっと……どこに、行くの？」

「むっふっふっふ……」

不敵に笑い始めるステラ。どうやら候補地はすでに決まっているようで、何やらどこかに置いてあったらしいバッグの中身を漁り始めた。その中から出てきたのは、水中ゴーグルと思しきものと、マスク状の魔具だった。受け取ったラスティがそのマスクを見てもみると、異様なまでに細密に書き込まれた術式があった。

「目的地はズバリ！　ここから北西の山中の湖なのだ！！」

「で、こいつを使って潜ろう……って？」

ラスティの問いに、満面の笑みで彼女は大きく首を縦に振る。

ラスティの手元のマスクは、装備しただけで魔石部分が皮膚に接するようになっていて、また術式は、呼吸しようと思うだけで空気を供給するように異常なまでに起動部に力が注ぎ込まれていた。これを作るのにいくらかかるのだろうということ、バッグから見える人数分のマスクを見てラスティは計算した。式を構築するための良質の魔石や加工費を考えると、どう安く見積もっても合計三百万円以上はかけられている。貴族とはこうも金遣いが荒いものなのだろうか。

手元のマスクを、アーク（少年）が覗き込む。その出来の素晴らしさに、アークは息を深く漏らした。

「なるほど……これなら確かに付けるだけで呼吸が出来るでしょう

ね……流石です、ステラさん」

精霊のアークが保障するその品質は、普段の彼女の作品の危険性から考えると驚きものだった。流石にこの手の魔具は、細心の注意を払って作ったのだろう???それが普段から出来ていれば、保健室の先生はもう少し楽になるはずだ。

「そしてこのマスクを使って、湖底探索なのだ!」

効果音がつきそうな切れのある動作で拳を上突き出す。彼女だけが異様にテンションが高いのだが、本当に何があったというのだろうか。

それを問う勇氣こそ無かったラスティだが、一つ気になることがあった。それは、その湖のことだった。

「なあ、そういえばさ、その湖って土地守護精霊が居なかったっけ? 確か霊地だぞ?」

それも常にミストが発生している正直危険地帯に指定されそうな場所だった。頭のいい彼女のこと、それを忘れているということは無いだろう。すると、答えたのはステラではなくアークだった。

「あ、だからステラさんはこの前、私に他の精霊と交渉できるかと、ミストを祓えないか訊いたのですね?」

どうやら問題はアークにより解決していたようだった。確かに超の付く高位精霊のアークなら、地霊と交渉してその場所で遊ばせてもらうことは可能だろう???そうラスティは納得した。だが同時に、何がそこまで彼女を惹き付けるのか気になった。

「なあステラ、どうしてそこまで行きたがるんだ？」

その答えは、案外簡単なものだった。

「何言ってるのラスティくん！？ 普通だったら人が入れられないような精霊が守護してる場所で遊べるかもしれないんだよ！？ 楽しいよ、きっと！」

知的好奇心と快楽的欲求を満たそうというその行動原理に、ラスティは苦笑しつつも納得した。そんな未知の場所と言っても間違いではないような場所に行けるとあって、アル少年の目も好奇心に輝いてきていて、どうやら目的地はそこで決定ということになりそうだった。

そして彼らは、何を持っていくのかということを話し合う。

御飯命のラスティは、弁当におにぎりは必須だと声高に主張し、そもそも友人たちと遊びに行くこと自体が初めてのティアマツトは、言葉少なく会話に参加し、言いだしっぺのステラはレジャーグッズ一式を持っていくと言い出し、アル少年は練習用の模擬刀を持って行きたいといい、アークは候補にあがったものを一つ残らずメモしていた。

そうしているうちに日は沈み、解散の時刻が近づく。その頃には皆思い思いの候補を上げ終わり、選択することも完了していた。

最後にアークが、持っていく物を書き込みながら言った。

「では後は、アルさんを大きなバッグに詰めて隠しつつ、校外まで持ち運べば、準備は万全ですね！」

その言葉をうけてアル少年が顔を青ざめさせたのは、仕方の無いことだろう。

話し合いがあつてから二日後の早朝、ラスティとアーク、アル少年、ティアマット、ステラは目的地たる湖に出発することにした。外出届けにステラは‘四人’と書いて、事務の人に問い詰められるというハプニングがあつたが、アークを人数に入れてしまったと誤魔化すことでどうにかなつた（普通使い魔はカウントしない）。

この学院に来てから、学院領の外に出たことの無かつた彼らは、緑と青が大部分を占める景色を前に、深呼吸をする。南側にある正門から抜け、領を時計回りに迂回するように歩いていると、山側の方向に一本道が見えてきた。霊地となつている湖へ向かうための道である。幅一メートルほどの土肌の見えた道は、緩やかに坂をつくつて続いていた。

朝日を受ける森の木々たちは風に揺れ、心地の良いざわめきを耳に届けてくる。傾きの浅い日差しは、ラスティたちをななめ後方から照らし、山から吹き降ろす向かい風を緩めてくれているように感じた。

妙に大きなバッグの中からアル少年を出し、アーク（少女）を含めた五人が道を進んでいく。これから待ち受けるだろう霊地の湖が、余程楽しみなのだろう、ステラは荷物を詰め込んだバッグをもつていないかつた。

「ふふっふふっふふっ、どんなっかな？　きれっいっかな？　たのしみだな」

山道ということで、薄手ながらも長袖の白っぽい上下をステラは

着込んでいた。スカート類の多い彼女も今回はズボンで、その全身は白を基調としている。やや濃い肌色のステラに、その色は似合っているように思えた。これは彼女の尊敬するアルナ導師という人物の好む色らしい。

「す、ステラ、もう少しゆっくり歩かないとアル君がついてこれないよ」

先行気味のステラの足を遅くさせようとするのはティアマツト。最早彼女の標準装備になった紅いコートは、実は数着ストックされていて、何らかの要因があつて汚れてしまつても翌日には別の同型コートを着てくる。今回も彼女は二着ほど予備のコートを用意していて、背負うバッグからは紅い布が見えている。コートの下は半そでの灰色のシャツで、ステラが言うには、下には水着を着込んでいるそうだ。前日にティアマツトを町に連れ出して買ってきたらしい。

「し、ししよ〜」

一人遅れ気味のアル少年は、シャツの上に若草色のベストを羽織っている。彼の荷物は一番軽いのだが（アークを除き）、足を速めるにはきついようだ。少なくとも疲れていないのは、きつと日々の運動によるものだろう。一ヶ月ほどの鍛錬だったが、彼の体は歳不相応に引き締まりつつあった。生真面目な正確なのか、鍛錬は休むまいと模擬刀がバッグから突き出ている。

「ほらほら、頑張れよアル坊。案外道のりはあるんだぜ？　まあ、疲れてない分には大丈夫みたいだろうけどな」

総計二十キロ強ほどの荷物を背負っているラスティは、アル少年の歩調に合わせつつ応援している。黒い上下に黒のジャケットとい

う黒尽くめの彼の装備は、今回も発揮されていた。短距離走では遅いらしいラスティだが、体力そのものは自信があるようで、最も多くの荷物を持っている。

「あの、マスター、少しお持ちいたしましょうか？」

戦士としてはそうでもないだろうが、学生としては重装備のラスティを、アークは心配そうに見つめている。世界に課せられた干渉制限のせいで、少女ほどの力しか出せないアークは、メンバーの中で最も荷物が少なかった。すでに制限の七割の力を発揮しているアークだったが、精霊である以上体力は誰よりもある。そのため十割近くまで持とうと自身の主に問いかけたのだった。

日も昇り、時刻は十一時半。出発したのは五時前で、休憩の時間を除くとすでに六時間ほど彼らは歩いている。湖から流れ出す大きな河を望んで歩行しているが、彼らには疲れの色の見えている。帰りは筏いかだでもつくって河を下ろうというラスティの提案には、皆が無言で頷いた。

一行の進行方向に、何やら気配を感じたらしいアーク。ふと視線を遠くにやると、皆に断って駆け出した。

「どうやら、先に湖があるみたいです。私は先行して精霊と話をつ——交渉してきますので、皆さんは少々歩調を緩めて歩いてきてください」

人と違う体構成のアークが、疲れの色など微塵も見せない様子で姿を消していく。その背を見守りながら、ラスティは誰にも聞こえないように呟いた。

「頼むから、そこの精霊を消すなんて真似はしないでくれよ……お

前だと、なんだか殺っちまいそうで怖いんだ」

妙なところで信用されていないアークだった。

????????????????????

ラスティ達より先行しアークがたどり着いた場は、神聖な空気を醸し出す場だった。そこは青いミストが漂い、視界を遮るものではないが存在感を持って存在している。アークから対岸にあたる部分は、山の岩肌が見え、周囲は取り囲まれるかのように木々が生い茂っていた。それはミストの発生する場特有の植物なのか、太く大きく、広がるように枝を伸ばしている。隣の木々とながらうように成長したソレは、空中から見ると一つの大きな木に見えることだろう。透明度の高い湖水は、水中の様子を容易に知ることが出来て、空色の水晶をのぞいているようだった。水は洗練されていると容易に想像できて、水中を除くと魚たちが泳いでいるのが見て取れる。

中の様子をしばらく見つめて、アークはその場からゆっくりと離れる。すると湖底から何かが姿を現した。固定化した実体にならないでいるそれは、この霊地を守護する精霊だった。水を表す深い青色の光が収束し、ゆったりとした衣を羽織った成人した女性の姿をかたどった。アークより人の姿への化身が得意なようで、髪の色は人にあっても不自然ではない銀髪だった。もともと、身長以上に長く伸ばされたそれは、人には理想に過ぎないものであろう。

アークが精霊に、自己紹介をした。

「初めまして、ですね。私の固体名は、‘アーク’です。階位は、まあ、察してください」

「はい、承知しました。

私の固体名は、‘ウンディーネ’です。階位は？で、この地の守護

に当たっています。……あの、つかぬ事をお伺いしますが、何故、アーク様のような上位階位の方がこちらにおいでになったのでしょうか？」

容姿的にはその精霊のほうが年長に見えるが、それは所詮化身でしかない。精霊は自身とアークとの階位の差を感じ取り、敬意を表した態度で接する。どこかその声は震えているようにすら聞こえた。対するアークは堂々とした雰囲気で、口調こそいつものように丁寧なものだったが、上位の者の威厳を感じさせていた。

「あら？ 一応察してくれると思ったのですが……まだマスターたちは貴女の知覚範囲に入っていないようですね」

マスター。その単語に精霊は動揺の表情をあらわにした。アークほどの上位精霊が人に仕えるなどということは精霊にとって常識外れどころではなかったのだ。無礼承知で訊こうとしたのだが、その時、丁度知覚範囲内に進入してくる四つの気配があった。そのうちの一つが、精霊に更なる動揺と、少しの納得をもたらす。

「も、もしやアナタ様はひとに――！？！？！？ っこ、これは一体！？」

「貴女にはわかるでしょう？ ……そういうことです。」

そうしてしばらく間をおくアーク。精霊が、どうしてアークが人に仕えているか、を理解したところで、本題を切り出す。

「それで、貴女にお願いがあるのですが……ここ二、三日かその間この地の滞在とこの地域で遊ぶことを了承してもらおうと思うのですよ」

「あ、遊ぶ……のですか？」

妙齡の女性の姿が、緊張が抜けたかのように姿勢が一瞬ゆるんだ。精霊ですら普通は決してお目にかかれないような高位の精霊が自分のもとを尋ねてきたと思えば、その用件は遊ばせて欲しいというものだったのだ、拍子抜けもするだろう。その一言で、人々の中にある精霊のイメージが瓦解してしまいそうになる空気が、二人の間に流れ始めた。

「いやあ、そうなんですよ。マスターのご友人がこの地に興味を示したようで、マスターも大分乗り気だったので……拍子抜けでしょうが、そういうことなんですよ。あ、マスターたちの前に現れることがあれば、口調は通常通りのものでいいですよ。私が‘エックスナンバー’なのは秘密なので、その時は下位階位の者に話す時の口調で結構ですのぞ」

「……了解いたしました。ですがアーク様はつねに丁寧な口調でいらっしゃるようですが」

そこは気にしないのです。そう言ってアークは人差し指を唇にあててウインクを送った。送られた精霊は苦笑して、どう反応しているか決めかねているように見受けられる。

そしてマスターたちの距離が近づいてきた頃、報告すると振り返り、道を引き返そうとするアークに、ウンディーネが引き止めるように声をかけた。アークは上半身を捻って振り返る。

「あ、あの……私も、あの御方にご挨拶申し上げたいのですが、よろしいものなのでしょうか？」

緊張故なのか、体のサイズが小さくなったウンディーネが、上目遣いでアークに尋ねる。アークはそんな彼女に微笑むと、満面の笑みで答えた。

「それは恐らく大丈夫でしょう。私の方から、マスターに申し上げておくので、他の方にばれないようなタイミングでお願いしますよ？」

「あ、ありがとうございます！」

表情が一転し、飛び跳ねんばかりの勢いで喜びだしたウンディーネ。そんな彼女に、気がついたようにアークは付け足して言った。その台詞に、ウンディーネの笑顔は凍りついた。

「あ、ですがくれぐれも、無礼の無いようにお願いしますよ？　そうでなければ、塵芥一つ残さず——もとい、お仕置きですよ？」

固まり、青ざめるウンディーネを残し、アークはその場から去っていった。

第十三小節「それは初めての光景で」

話はつけて来たと（交渉ではなくなっていた）アークが報告に戻り、一向は湖に、目的地に向けて足を速める。守護精霊ウンディーネが気を利かせたらしくて、アークの代わりにミストを祓ってくれていた。これで心置きなく楽しむことができると、ステラは疲労を忘れて笑みを浮かべ始めた。

そうしていると、まもなく湖が姿を見せた。眼前に広がる光景が、ステラ以外の疲労を溶かしていく。

「おおおお～～～、凄い、素晴らしい！！　これが、これが精霊の守護する霊地か！！」

「綺麗……」

アル少年は言葉も出ないようで、ステラは荷物を降ろすための場所をすでに探し始めていた。適当な平坦な場所を見つけたステラが、皆に手を振って叫び、呼ぶ。その声に気付いた皆は、その場所に集合し、荷物を一まとめにして置いた。

振り返ったステラが、光り輝く湖畔を見つめて目を輝かせている。今にも走り出して飛び込みそうなその様子だったが、ソレをこらえたように唇を結ぶと、再び振り返って皆に声をかけた。

「よし！　まずは諸々の準備しちやお！　そのあとは目一杯あそぼ！」

「」「」「おお～～～！！」「」「」

そう言つて勢い良く拳を突き上げるステラの動作を真似ながら、皆が声を上げる。水際から数メートルほど離れた地点に、皆が運搬してきた諸々のレジャーグッズを準備していく。あらかじめ役割は決められていたため、すぐに行動に移っていた。

大きな半球状のテントが組み立てられ、パラソル付の円形テーブルがその隣に置かれ、夕食の時に使用する予定のバーベキューの機材も設置されている。魔獣の出没する可能性の高いミスト地帯でそれなりの規模のキャンプするという、冒険者ならば卒倒するであろう光景が広がっていたが、ここは精霊の守護する霊地。害をなす魔獣幻獣が現れるようなところではない。それを考慮しての装備であった。

設置を終えた皆は、そろって湖のほうを眺める。頭上から降り注ぐ陽光が湖面に反射し、光り輝く。感極まったステラが、衣服を勢い良く脱ぎ捨てた。

「ふふふふふ………ついに解禁だよ！ さ、ティアマットちゃんも脱ごう！ 買ってきた水着を見せるときだよ！」

「え！？ あ、わ、す、すてら！？！？」

一思いに水着姿になったステラが、口元を大きく歪ませる怪しい笑みを浮かべながら、ティアマットを脱がしにかかる。湖に見入っていたせいで咄嗟のことに反応できなかったティアマットは、なすがままに脱がされていた。情操教育に悪いと、アル少年を後ろに向かせるラストィ。アークは口元を押さえて笑いながら彼女たちを見ていた。

「よーし！！！！おっよぐぞー！！！！」

元氣良く走り出すステラと、手を引かれながら半ば引きずられる

かのように湖に引きずり込まれていったティアマツトは。おそろいなのか同デザインのビキニ。色はそれぞれ白と赤。お互いのトレードカラーとも言うべきそれは、互いの魅了を引き立てるに十二分なものである。褐色の肌に灰銀色の髪を持つステラに白の布は映えていて、濡れ羽色に輝く髪のティアマツトは紅い布がそれを一層際立たせる。普段肌の露出度が皆無な服装であるせいかな、その肌の色は白い。血色は無いが、か弱い印象を全く受けることの無い彼女の水着姿は、非常に新鮮に思えた。

潜水していったのだろう、やや距離のあるところで顔を出したステラが、大きく手を振ってくる。その隣にはやや遅れてティアマツトが姿を現した。

「ほらほら早く〜ってふひゃああ?!?!?」

直後、彼女から二メートルも離れていない地点に、アークが着弾する。精霊の中でも更に高い身体能力をフルに使って飛び込んだアークは、十数メートルの距離を弧を描いていったのだった。弧を描いている時に確認したアークの水着は、何故かスクール水着と呼ばれる代物。知識の出所が知りたいラスティ。

巨大な水柱を上げるといふ悪戯——初めからそれを狙っていたであろうアークは、そのまま着弾地点に顔を出すと、頬を膨らませるステラから逃げるように泳いでいった。

「こらあ! やったなあ〜!!」

追いかけてようとするステラだが、身体能力の差から次第に差が広げられていく。追跡を諦めようとした彼女の隣を、大きく水しぶきを上げながらティアマツトが追い越していった。やられたらやり返す性質^{たち}なのかどうなのかは分からないが、その眼差しは大分本気のようなのだ。その証拠に、過ぎ去っていく瞬間に見たティアマツトの

右目は紅く輝いている。水晶眼の恩恵をフルに発動している証拠だ。

「え、はい？ て、ティアマツトさん？ は、疾くないですか？
あ、貴女は本当に人間ですか！？」

後方を振り返ったアークが表情を強張らせる。水面をクロールで疾走する彼女は、巨大な音を上げながらアークに迫り来る。アークは全力で逃げようとするが、距離を引き離すことが出来ない。

「……逃がさない」

水面から、ティアマツトの姿が消失した。恐らく潜水しているのだろう。息継ぎを行えない代わりにロスのない推力を得たティアマツトが、次第にアークに接近していった。彼女の手が、アークの足を捕らえる。

「え？ ティアマ——」

言葉は最後まで続かなかった。水音をたて、アークが姿を消していったのだ。まるで空気を求めるかのように手を天に突き出す腕が水中に沈んでいく様は、中々にホラーである。あとには同心円の波紋が残るだけだった。

その光景を、師弟は無表情で見ていた。とりあえず見なかったことにすると決めたようで、ラスティがアル少年に声をかける。二人とも競泳用の水着なのは、アル少年の体に刻まれた刻印に配慮してのことだった。

「……時にアル坊。お前、泳げるか？」

「……泳げます。僕の居る■■■っ、いたところでは、たまに川に

行くこともありました」

久しぶりに発動したパラドックスの呪に動揺したが、アル少年はしっかりと答える。彼らの視線の先では、アークが空高く水中から飛び上がる光景が映っていた。射出地点にティアマットの姿が見えるのは何故だろうか。

「はは！ 僥倖僥倖ってな、これが。それじゃアル坊。競泳と行くか！！ 目標は対岸！ 負けたときは、フッフッフッフ……」

「え！？ 何ですかそれ！？ あ、待ってください師匠！ 師匠年上なんですからハンデくださいよう！」

出遅れたアル少年が、ラストイを追って駆け出す。懇願する彼の声に、手を振るだけでこたえるラストイは、一足先に湖に飛び込む。それを追って、アル少年も水中に入ってしまった。

彼の奮闘もむなしく、結局彼はラストイに追いつくことが出来なかったのはある意味当然のことであるのだろう。

「いやーほんとに凄いよね、ここー！」

三時半を少し回った頃、彼らは所謂三時のおやつタイムなるものをとっていた。半を回っているのは、遊び始める時間がやや遅かったためである。

パラソル付の白い円状のテーブルに、時計回りにステラ・ティアマット・ラスティ・アルと座り、皆の前にはそれぞれ紅茶とクッキーが置かれている。ステラが持ってきたものだった。

席に着き、紅茶を一口飲むと、ステラが湖の感想を言う。水から上がったばかりの彼女はタオルを羽織っていて、まだ水に濡れる髪は鈍く輝いている。日差しから隠れるその笑顔だが、光り輝くと言うに相応しいほどに彼女の笑みは皆に元気を与える。隣に座るティアマットにアルも感化されたように、表情が緩んでいった。

「一度こんなことしてみたかったんだ。霊地で遊べるなんて、普通じゃ考えられないからね」

「確かにそうだね。騎士の人達は霊地の精霊を敬ってて、同時に恐れてもいたから、昔の私は、霊地には近づくなんてよく言われた」

しみじみと語って見せながら、両の手でカップを包み込むようにティアマットは紅茶を飲む。今回ここに居るメンバーの中で、泳ぎが一番上手いのは彼女だった。アークですら水泳では彼女に敵わず、その速度と潜水時間は圧倒的だった。そんな彼女を見ながら、‘やっぱ海の母神の名前だからかな？’などと思っていたりした。名前の言語に神秘性がもっている世界である以上、恐らく間違いではないように思われた。

「あ、そういえばさ。ここの精霊に挨拶しといた方がいいよな？アークが一応話したからって言っても、やっぱそうしたほうがいかなって思うんだが」

思い出したかのようにラスティはそう提案する。途端、空気が凍りつくような雰囲気がラスティを襲った。アル少年に至っては、顔

が青ざめている。

重々しく、ステラが口を開いた。

「と、土地の精霊に直接会うって……ら、ラスティくん、本気？」

その言葉に本気だと、ラスティは真顔で返してみせる。人に会うのと変わらないというような彼の感覚が、余程彼女には信じられないようで、呆れたようにため息をついた。ティアマツトも同じような表情をしている。

「土地を守護する精霊って、人が契約できる精霊とは訳が違うんだよ？ 怒らせちゃったらひとたまりも無いんだよ？」

実際はアークはその土地守護精霊よりも相当上位の存在なのだが、事情が分からないステラは言い聞かせるように話す。ラスティは念話でアークをなだめるのに必死で、彼女の話は半分ぐらいしか聞いていなかった。

「大丈夫だって。俺、精霊には好かれる体質だから。まあ、俺だけでも挨拶に行つて来るよ。あ、マスク借りていくな？」

そう言つて紅茶を全て飲み干すと、彼女が用意してきた水中活動用のマスクを借りていく。どれだけ言い聞かそうとも止まる気配が無いと感じたステラが、再び大きくため息をつく、気を付けてと声をかけた。ティアマツトも同じことを言う。そんな中、アル少年だけが違う言葉を発したのだった。

「ししし師匠！ 僕も連れて行つて下さい！」

精霊の存在を聞いて一番動揺していたアル少年が、ラスティに同

行を願った。人々が土地守護精霊に抱く、神に近い者というイメージから、恐れ多くてこの件について挨拶に行きたがらないだろうと踏んでいたラスティは、目を見開いて振り返る。その視線の先では、すでにアル少年は紅茶とクッキーを食べつくし（ラスティは後に取っておくためクッキーは残していた）、マスクを手を走りよって来ていた。

意外な行動に固まっていたラスティだったが、彼もまた精霊には好かれる体質のようだとアークから聞いていたため、その小さな頭の上に手をのせてから、一言言った。

「いいぞ？ お前がついてこれるならな」

そうして彼らは湖に足を進めていった。その背中を見て、残された女性二人はため息をついた。ステラが視線を向けずにティアマトに言う。

「ホント、男の子って怖いもの知らずなものかな？」

「……少し、違う気がする」

彼女たちのカップに二杯目の紅茶を注ぎながら、アークは忍び笑いをしていた。少し、紅茶を入れ過ぎそうになってしまったのは余談である。

第十四小節「魅入られたもの」

湖の中に、ラスティとアル少年は飛び込む。澄んだ水色の湖は、マスクをつけて潜ってみるとより一層幻想的な光景を彼らに披露した。生命体が澄めないほどに綺麗過ぎでないそこは、青い光が支配する空間だった。湖面より差し込む光は天使の梯子となり、白い砂の湖底に文様を描いている。時折、彼らの目の前を魚の群れが通り過ぎた。

「（少し深いところ、湖の中心を目指す。ついて来い）」

ルーンが空気中に文字を描くのと同じ現象を利用した細長いお手製のペンで、水中に文章を描くラスティ。やや扱いに癖があるため、魔術の素養の無いアル少年はそれが使えず、首肯することで答える。それを見たラスティは、水を書き分けるようにして進んでいった。その後をアル少年が追う。

程なくして湖の中央付近にたどり着いた。そこでラスティは、水深三メートルほどの場所で姿勢を直立にすると。魔石で作ったペンを勢い良く振り払った。彼を中心に、空色の波動が広がる。精霊を呼んでいるのだ。

波動が静まり数秒後、辺りは生命体の気配を失い、無機質的な空間が彼らの周囲に出来ていた。視覚的に何か変化があったわけではないが、気配が静まり返っている。アル少年が不安げに周囲を見渡し始めた頃、彼らの足元に巨大な魔方陣が浮かび上がってきた。ラスティのものとは違い、濃い青色に光るそれは、青（水）を示す色。重ねて緑色の中規模の魔方陣も浮かび上がり、同時に青い魔方陣を足場にするように空気のドームが出来上がった。それは、精霊の魔術により作られた空域だった。

呼吸が出来ることを察したラスティが、マスクを取る。それに習ってアル少年もとったが、何がおきたか分からないようで、足元の魔方陣を不安げに見つめている。そんな彼の隣のラスティは至って冷静な様子で、空気のドームを眺めながらその出来を賞賛した。

「空気の精製と、流体操作による結界の応用か。流石精霊、やることの規模が人とは違う」

「お褒めに預かり、光栄であります」

その声と同時に、魔方陣の下から魔石の結晶と思しき物体が現れる。その結晶が光を放つと、ドームの周囲から集まってきた水がヒトガタを形成した。

それは、アークと会った時とは違う、この地の守護精霊の化身した姿だった。

「大丈夫かな、二人とも」

ラスティとアル少年が、精霊の水中結界に入り込んだ頃、精霊に会いに行くといった二人のことを心配するティアマツトが、小さくもらした。水晶眼という、世界とつながる要素があるので、この地がどれだけ神聖というに値するべき場所で、その地を護る精霊がどれだけ強大なものなのか察することが出来ていた彼女は、残った三人の中で一番気にしていた。

「大丈夫ですよ。マスターが先ほどおっしゃったように、あの方は精霊に好かれます。湖の守護精霊がマスターを傷つけることは無い筈です」

もしそうなら、自分が跡形も無く消し去ると、心の中で付け足したアークは、ティアマットのカップに五杯目の紅茶を注ぎ込む。笑顔でそう語るアークに、何やらからかおうというのかステラが言う。

「そんなこと言って、実はアークちゃん、マスター盗られない心配なんじゃないの？」

「フフフフフフフフ、すてらさん、おもしろいことをいわれますね。土地守護精霊がそんなことする訳無いじゃないですか」

背後からかけられたその言葉に、（化身の能力で、服装も自由）ミニドレスのスカートを翻して満面の笑みでそう答えるアーク。図星というわけではないようだが、その笑顔の裏に感じ取れる圧倒的重圧に、ステラは笑って同意しながらも、大量の冷や汗を流した。後ろに居るティアマットは、地雷を踏んだ友人に心の中で合掌する。そんなやり取りの合間に、アークはタイミングを見計らって気付かれないように周囲を見回す。遠くを見つめながら、小さく口を動かした。

「それにしても、何やら森が騒がしいような気がしますね」

呟いたアークの声は、二人の耳には入っていない。

????????????

水中に作られたドーム状の結界の中、ラスティとアル少年は湖の守護精霊を目の前に臨んでいる。水の集合体のような容姿を持つその精霊は、視線を二人のほうに向けていた。濃い青色の顔が微笑み、恭しくラスティに向かってお辞儀する。その精霊の行動に驚いたアル少年は、勢い良くラスティのほうに顔を向けた。彼は困ったように笑いながら、唇に人差し指をあてて口だけで言う。秘密だぞ、と。

「お初にお目にかかります。私が、この地を守護する精霊であります。固体名はウンディーネ、階位は？であります」

精霊の挨拶に反応し、向き直ったラスティが応える。後ろ手で背中に文字を隠すようにして、アル少年に向けてメッセージを送る。

‘俺は少し事情があつて、精霊に対してちよつと優位な人間なんだ。このことは秘密だぞ？’ 非常識極まりない言葉であつたが、純真なアル少年は、師匠ならばありえるのだらうと納得してしまった。土地守護の精霊すら彼には敬意を払う。そのことが、ある意味一層アル少年をラスティの信望者に変えていることにラスティは気付かない。

「固体名と階位はアークから聞いてるよ（ウンディーネ、そのままだな。ということは、恐らく女性人格固定の精霊だな）。俺はラスティハルト・ジーン。世界から特に階位が与えられたわけじゃ無いんだが……まあ、さしずめ？？といったところかな、これが」

階位という言葉と数。アル少年——いや、世界中の人間が知らないであろう単語でやり取りをする両者に、彼は首を傾げる。聞きたくはあつたが、精霊との会話に介入するなどということは余りに恐れ多く、彼は傍観しているしかなくなっていた。

世界種同士で行われる挨拶——互いの固体名と階位の情報交換――

―を終え、ラスティが精霊に対して礼を言う。精霊に対し砕けた口調で話すということが、アル少年には信じられなかった。

「それにしても、本当にありがとな。霊地は人が容易く足を踏み入れている場所でも無いのに、無理言って遊ばせて貰ってさ」

対する精霊――ウンディーネの方は恐縮しているといった様子で。だが落ち着いた様子で受け答える。そこはやはり中高位精霊ということなのだろう。階級が上位の精霊ほど確固とした自我（と慮の深さ）を保有するため、それなりに高い位である？階位を保有するウンディーネは、それなりに大人の対応をすることは当然ではあった。これが下位精霊なら動揺で舌を噛むんだろうかと、その光景を想像したラスティは内心で笑ってしまう。

「貴方様が御気になさることはありません。皆いい波動の存在の者たちです。この地に来る幻想種たちも、日が沈む前には彼らの存在に警戒を解き、訪れると思われますよ」

「そっか。それは良かったよ。連れて来たこっちとしては、心配してたことが減ったな」

ウンディーネの発言に、言葉通りの安心した表情で微笑むラスティ。その表情を見て彼女もまた安堵したのか、若干姿が緩んだように見えた？？と思うと、その視線はアル少年のもとに向かう。目の合った彼は、緊張で硬直した。自らが師と仰ぐ人物のようにいかないこと自分のことを、内心恨む。

「ここにはラスティハルト様だけがいらっしやると思ってましたが、どうやら小さき客人も一緒のようですね」

「ははははい。ぼ、僕はア■■ーっ」

緊張してしまったアル少年が、自身のフルネームを言ってしまいそうになる。パラドックスの呪でそれを止められたのだが、起こった現象にウンディーネが動揺する。小さく阿呆と呟いたラスティが、彼女に説明した。

「今ので……分かった、よな？ 一応愛称は‘アル’ってことになる。そう、呼んでくれ」

「ノルニラムに魅入られた者ですか……存在が始まってからというもの、見たことはおろか耳にしたことすら無かったのですが……そうですか」

何やら納得したらしいウンディーネが、滑るようにしてアル少年に近寄る。驚いた彼だったが、ラスティに大丈夫だと言われたことでなんとか踏みとどまる。手が届くほどに近寄った彼女は、その深い青の手を彼の頬に当てる。彼の頬にひんやりとした感覚が伝わる。それは人ならざるものを表す、体温の無い感触で、だがそれは、更なる同様を与えることなく、寧ろ緊張から来る振るえを解いた。

「ノルニラムに魅入られた者よ、この地はどうだ？」

「とても、綺麗だと……思います」

口から発せられたのはありきたりな感想。だが、彼に直接手を触れていた彼女は、それだけで満足する答えが得られたらしく、また滑るような動作で彼から離れていく。見て取りにくい彼女の表情だったが、笑顔であることは容易に見て取れる。

「過去から来たものよ。そなたには私の加護は必要ないだろう。そなたには空がついている故、水の存在たる私に出る幕は無い」

その口調が、本来人と接するときの彼女の口調なのだろう。アル少年の中に存在する精霊のイメージに合致するその雰囲気は、ラスティに話すときのものとは違う。人には発することの出来ない気のような、重圧にも似た存在の重みが、彼には感じることが出来た。

そんな彼女を見て、やはり精霊は神々しいものなのだと、彼は認識を再び確かなものにする。

第十五小節「墮ちた精霊」

「？ あれ？　なんだか、周りが……」

ふとティアマットが、周囲の異変を感じ取り、紅茶のカップを置くと周囲を見回す。何かしら気配を感じるというわけでも無かったのだが、右目が疼く様に何かを訴えかけているかのような感覚に襲われたのだ。

ティアマットの発言を受けてステラは首を傾げるが、アークは感心したように反応した。

「流石はティアマットさん。世界の異変に敏感ですね」

どうやらアークの方はすでに察知していたという風で、立ち上がつて水際に立ち、湖の対岸の岸壁の上の方を見ていた。隣に駆け寄ったティアマットがその方向を見てみると、感じる違和感が一層強くなる。未だ視認出来ないが、その崖の上に何かが現れようとしているのが感じられた。少し遅れてステラも二人の隣に移動してきた。恐る恐るといった風にステラが二人に問う。

「何か……来るの？」

「まもなくこの湖の守護精霊の近く範囲内に、敵性存在が侵入します」

見向くことなく告げられたアークのその突然の宣告に、ステラが

強い動揺を示す。慌てて敵性存在というものが何なのか問いだそうとするが、それを問うよりも早く、アークが二人に向かって叫んだ。

「!?!?!? 領域内で急加速!?!? 土地守護精霊の知覚範囲ギリギリで加速…来ます!?!?」

直後、崖の上から爆発音と共に何かが飛び出し、同時に岩の破片と、風により吹き飛んできた大量の砂塵が彼女たちに降り注いだ。咄嗟に身をかばおうとする二人だったが、その破片たちが自分たちに降り注ぐ前に何かに遮られる音がした。ゆっくりと目を開けてみると、アークが手をかざしている。周囲を見てみると、自分たちを中心に、立方体状の結界が出来上がっている。今のタイミング、詠唱できたとしても一節しか唱えられないだろう時間に、三人を包んで尚薄くなりすぎないほどの結界をつくり上げたのだ。

「あ、有難う、アーク」

「いえ、この場に私が残っているのですから、お二人が怪我をしよものなら、マスターに示が付きません。それを考えると、労力がこれだけである分には問題はありませんので……」

アークによるものだと思われたそれは、翳された手が下りることで消滅した。大したことでもないという風に佇むアークは、遠く向こうの方を見ている。その先には、緑色の異形が存在した。

巨軀に大きな翼。爬虫類を思わせる目に強靱な顎。屈強な足には鍵爪が生え、長い首と尻尾を持つ。

「ワイ……バーン?」

ティアマットが呟く。だがその言葉をステラが否定した。

「多分違うと思う。ワイバーン種に四つ翼なんて無いし、鱗が緑の種類なんてないはずだよ」

一見すると、幻想種の一つワイバーンにも見える姿だったが、その体には四枚の翼が生えていた。羽ばたくことをせずに、翼を広げ咆哮するその異形。見ると真下の水面が、何か透明なものが沈んだかのように窪んでいる。魔術的に風を送ることにより浮かんでいると、ステラは予想した。

その姿を見るアークは、いつに無く険しい表情をしている。だがその顔に焦りは無い。それは他二人も同様だった。

ここは、精霊が守護する土地であつたからである。

「A r d i b e（打ち払いなさい）」

響き渡るのは女性の声。直後、異形の真下から水柱が立ち上った。急加速した異形はそれをかわすが、続けてその進路を阻むように水柱が立ち上る。上に向かう急流に、異形は大きく上方に打ち上げられた。

「凄い水柱……短命令文であそこまで規模のある魔術が出来るだなんて……」

その光景を感無量といった風に見ているステラ。非常に不謹慎と言わざるを得ないが、土地守護精霊の魔術行使を、（自分に向けられる恐れのない状況下で）目の当たりにすることが出来ることはそうあるものではない。精霊の実力を信じて疑わないのも奏をこうして、二人はその戦闘に見入っていた。だが、アークの表情は依然険しいままである。

「An delfenne mio sukulla (水面に私
は歌うでしよう), umt quorieck weil aim
ein radlowner (そして静まりゆく波は集い), fe
nn sukolluriossa (彼方に向かい降り注ぐ)」

水面に、水で構成された女性の姿が現れた。二人は、それが精霊だと直感で理解する。先ほどよりも長い詠唱で語られた魔術は、その足元に半径にして三メートルもの魔方陣を作り出す。周囲から集い来る水たちが、数十本もの水の杭を作り出した。それが一斉に、空中に打ち上げられた異形に打ち込まれる。

言語と聞き取れないその咆哮は、どうやら詠唱であるようで、口元を中心に緑色の魔方陣を作り出した。圧縮された空気が、光を歪ませ球体状の陰りになる。水の杭がその身に届く直前、それは爆ぜた。圧縮から開放された空気は、一方向にのみ噴出し、迫り来る障害の尽くを吹き飛ばした。だがそれに飽き足らず、その奔流は精霊にも襲い掛かる。精霊が、空気の奔流を受け、姿勢が揺らいだ。

圧倒的と思われた精霊の魔術行使に、相殺どころか貫通をしてのけた異形の幻想に、見ている二人は唾然とする。あれは何かと問うことも出来ないほどの衝撃を受けていた。

アークは、かけられていない問いに答える。

「堕ちた精霊……七年前の戦乱を境に見ることは殆どなくなりましてが……あの堕嚙オチガミの共振現象に当てられて暴走でも起こしましたか……不憫なものです」

「あ、アークちゃん？ 堕ちた精霊なの？ アレ」

聞き返すステラに、首肯して答えるアーク。再び視線を送った先では、堕ちた精霊と呼ばれた者が精霊との壮絶な魔術戦を繰り広げていた。人が及びもつかない領域にいる精霊と互角に戦うその存在は、なるほど同じ精霊であるからこそだった。

堕ちた精霊、世界の秩序を守る存在とされる世界種と呼ばれる存在の中でも、魔術的な能力に特に優れた精霊種によく起こるものである、‘堕ちる’という現象より生まれる存在。強い感情の波や環境の急激な変化により起こるもので、感受性の異様に強い精霊だから起こるものである。戦場や、災害で人が死ぬ場など、強い感情がたくさん生まれる場合に、その受ける感情に自身の自我が押しつぶされることで、ただただ暴走して回るようになってしまうのだ。

ここ最近そのような場所が近辺で発生したということは、アークの知る限りでは、堕嚙があるとある遺跡付近の施設内で活動を再開したとき、それだけだった。それなりに多数の人間が死に、また堕嚙自身も単体で幾千人もの感情を束ねたほどの空腹の感情波を発する。恐らく近くに居合わせた精霊がそれを受けてしまったのだろうと、アークは推測した。この分では、他にも数体の固体が堕ちてしまっているかも知れない。

その問題はおいておくことにして、世界の歪みの極みとも言える存在を直視しているティアマットに、氣遣う声をかけた。

「ティアマットさんは、アレを見て大丈夫ですか？」

「うん。見えて気持ち悪いけど、大丈夫」

心配の声をかけられるティアマットは、そうは言いながらも顔色はあまり良くは無い。眼が集めてくる情報の多さに気分が悪くなってしまうのだらう。アークはそう思うと振り返った。

「アレに関しては心配は要らないでしょう。いくら同じ精霊とはいえ、ウンディーネは土地守護精霊。必要とあらば世界から援護を受けることが出来るのですから。まもなく堕ちた精霊は駆逐されるでしょう。じきにマスターもお戻りになられるでしょうし、ここはテールブルの方にもどって……」

そこでアークの言葉は途切れた。振り返った時に眼に入った光景に絶句してしまっていたからである。

第十六小節「チリアクタヒトツノコサズ」

「あ、そ、そんな……………」

アークがその場に、膝をついて崩れ落ちる。何事かと思って二人が振り返ってみると、皆で設置したキャンプ設備は、大きな石片の被害こそ受けてはいないものの、砂塵が降りかかっており、テーブルの上のお菓子たちは駄目になってしまっていた。勿論、ラストイが手を付けずに残しておいたクッキーや、アークが彼のために用意していた紅茶などは全滅である。

その光景を見て、額を押さえるステラ。どうやら彼女は、アークがこれほどまでに絶望している原因がよく分かっているようで、元氣付けようとその肩に手を置こうと―――した直前、アークが激しい怒気と共に拳を地面に打ち付ける。

「赦すまじ、あの糞畜生が!!!!!!」

怒号と共に、周囲の魔力が励起した。オーラのように光る、励起した魔力を身に纏い、幽鬼のようにゆっくりと立ち上がる。

「オノレエ……………こうなれば、この私が直々に獅子奮迅にして四肢粉塵にし、その体躯を埋め尽くすほどに串刺しに、腐れきったその核は抉り潰し、塵芥一つ残すことなく消し去り、果ては転生する余地すら与えずその存在概念の根本から否定しつくす!!!!!!」

普段のアークからは想像もつかない罵詈雑言。今にも暴発しそうなできかけの幻想を身に纏うアークに、二人は総身を震わせ、怯える。焦点の合わないその視線が振り返ろうとしたとき、彼女たちに

とって待ち望んだ存在が帰ってきた。
アークのストッパー

「みんな、無事か!？」

水辺より、ラスティとアル少年の姿が現れる。途端、怒気が消え? ? 押し込められた。帰ってきた主を、アークは心和む笑顔で出迎える。先ほどまでのアークを目の当たりにした二人は、とても心和むような状況ではなかったが。

「お帰りなさいませ、マスター。現状、お二人に怪我はございません」

「そうか、よか——? どうした、二人とも?」

顔色の悪いティマツトとステラに、ラスティが問いかける。それと同時に、ラスティの視界の外で振り返ったアークは、口元だけ微笑んで唇に人差し指を当てる。声を出さずに、唇だけで言っていた。
‘ イッテハイケマセンヨ,’

「ううん、何でもない。多分あの堕ちた精霊の歪みを見てあてられただけ……だから、大丈夫」

「わたしはちよつとびっくりしちゃってただけだからだいじょうぶだよ」

二人のその言葉を受けて、そうか、と安心したようにラスティは微笑んだ。とりあえず、最悪の事態は免れたのだ。

アークがラスティからやや離れ、その足元に魔方陣を展開する。自らの主のほうに振り返り、満面の笑顔を送りながらアークはこれからの行動の旨について告げた。

「それではマスター、浜辺かテーブルのほうで休憩なさって下さい。アレは私がブチこ——討伐してきますので、どうか心配なさぬよう……」

「そっか。アークが行くなら大丈夫だろうな……分かった。行ってくる、頼んだぞ？」

「了解致しました」

深々とお辞儀したアークは、移動補助術式を発動させると、堕ちた精霊のもとに向かっていった。今までアークが単独で戦闘するころなど無かったため、他の三人にはアークの精霊としての力量が分からないでいたが、どうやらラスティは絶対の信頼を置いているようである。振り返ったラスティは、戦闘に見入るアル少年と、固まっていた少女二人に向かって言った。

「折角のアークの仕事場なんだ。人間の俺たちは端で鑑賞でもしてようぜ？」

????????????

「◆◆◆!!!!!!」

堕ちた精霊の咆哮が、術式を作成する。撃ち放たれた圧縮空弾は、岩すらも打ち砕くほどの密度を持っていた。それをウンディーネは、水の壁で防御する。この場はウンディーネの得意とする水の存在するエリア。精霊として、青（水）の幻想の生成に長けている身としては、これ以上無いまでに有利な場である筈だった。だが、両者の戦闘力は拮抗している。その事実、彼女は内心で悪態をつく。

「（つく、コイツ：元はそれなりの階位の精霊だったのだろう……）仕方ない、世界の加護を使うしか無……」

「いいえ、それには及びませんよ？」

平行線となっている両者の戦い、その状況を変えようと、ウンデイーネが負担覚悟で世界から援護を受けようとしたその時、彼女の耳にアークの声が届いた。途端、堕ちた精霊が何らかの衝撃に横殴りにされる。

驚くウンデイーネに背を向けるようにして、アークは水面に降り立つ。水面と足裏の間には小さな魔方陣が見受けられ、それを足場に行っていると理解できた。降り立ったその場所で、アークはウンデイーネに振り向く。笑顔の裏に感じられる黒い感情に、ウンデイーネはたじろぐ。

「獲物を横取りするようすいませんが、アレは私がブチコロシてもいいですか？」

「は、はい！ ……で、ですが、アナタ様のお手を煩わせるほどの者でも無いと思われますが……」

「気にしなくて良いのです。そう、少しだけアレを粉々にしてやりたい気分なだけなんですよ……ええ、ですから貴女は、‘核’に結界でも張って聖域を保護してください。最後に本気の魔術を打ち込むので——」

アークの言葉をかき消すように、その地点に圧縮空弾が打ち込まれた。体勢を立て直した堕ちた精霊が、やや長めの詠唱をもって打ち込んだのである。巨大な水柱が立つが、その内側から発せられる

怒気に、巻き込まれる気配を感じたウンディーネは水中に潜っている。直後、アークを中心に衝撃波が放たれた。

水しぶきが降り注ぐ中、アークは眼を閉じて佇んでいる。風が吹いているわけでもないのに靡く髪とミニドレスは、一切水に濡れていなかった。

アークが、自身の周辺に防音結界を張る。

自らの主に、自らの声が聞こえないようにする細工が済むと、アークはその表情を怒気に歪める。理性など無いはずの精霊がたじろぐ……いや、根本の本能で感じ取っているのだろう。‘コロサレル’と。

「私が話している最中でしょうか？　もう少し待とうとは思わないのですか？　ああ、もう言葉を発せられないぐらいに堕ちているのでしたね……ああ……雑魚の分際でええ！！」

翼を持つ敵以上の速度で、アークは突貫する。反応の遅れた堕ちた精霊は、その首根っこをアークに捕らえられた。大きく振りかぶり、水面に勢い良く叩き付ける。速度をもって打ち付けられたその衝撃は、液体にと言えど人体であれば容易く破壊してみせるほどの衝撃を持っている。質量差をものともせずに行われるそれは、精霊に対しアークが発揮できる力の一片でしかない。

「私がどれほど今日という日を待ち望んだか貴様に分かるか！？　夏休み開始直前からステラさんと共に計画し、あたかも短期間で作った計画と見せかける為にした苦勞が！！　その為に費やした費

用と時と（資金を援助してもらうために）ステラさんに提供した情報が！！」

振り返りざまに、もう一度打ち付ける。

「この午後のティータイムの為に、マスターの眼を盗んではクッキの作り方と紅茶の淹れ方を学び……一月以上に渡って準備してきたのだぞ！？」

そして更にもう一度――それを数十回に渡って繰り返した。

「この日に間に合わせるために全精力を傾けた！！」

夜は成人男性に化身しわざわざその度に髪を染め、全速力でマイスターの元に通い詰めた！！

深夜を過ぎては、睡眠時間をとる必要も無い故に夜通し紅茶を淹れ続けた！！

記録も併用して、ありとあらゆる紅茶を調べに調べつくした！！

その地に赴いて度重なる交渉を重ね、

ようやく手にすることの出来た茶葉を受け取った時の喜びが分かるか！？

マイスターにもステラさんにも免許皆伝を得るほどに、技術を磨き上げた時の達成感が分かるか！？

それをマスターに褒めてもらうために、

わざわざステラさんには最初一杯をあえて失敗していれてもらったのだぞ！？

そこまで計画は完璧だった！

だというのに、だというのに貴様が……キサマがああ！！」

万感の思いを注ぎ込んだ叫びと共に、アークは堕ちた精霊を水平に投擲する。水切りのように水面を跳ねて飛んでいくその巨軀から、

アークがどれだけ力を注ぎ込んだかがい知れる。

いまだ宙に浮いている敵に、腰だめにした右拳を突き出した。

「G e n—d e d d a（ブチ殺す）！！！！！！」

最早詠唱ですらない呪詛と共に、‘撲殺する’という概念だけで構成された衝撃波が飛ぶ。体の中央部に直撃し、堕ちた精霊は対岸の岸壁に打ち付けられた。

「！！！！……◆■■！！！！」

その翼を縫い付けるように、四本の光線が突き刺さる。光る矢の形をしたそれは、岸壁から離れようとする敵の体を固定した。そこに迫い討ちをかけるように、更に青い光の槍が打ち込まれる。

縫い付けられた敵の約四、五メートル程離れた空中にアークは降り立つ。これもまた、魔方陣が足場となっていた。

未だ冷めない怒気を全身から発し、無表情に堕ちた精霊を睨み付けるアーク。すでに戦闘を続行できないまでに衰弱しているソレに、だがアークは全力だった。

「I r a i n r e c h n e n A R K（我が名はアーク）・ F i r e n n n e n d i o X E N E a i l a r k（主に仕える意思ある方舟）」

時が凍りつく。そう形容するべき現象が起こった。アークを中心とするように、空間の色が反転していく。その領域内に見える景色は停止し、一枚の写真のようになる。

「E n o w d i o k e n x e o w e l w a n d（世界の力に抗する者），Y e c e k t a d e f t e n k t t x i m e（

なればこそ我は時を破却する）。Txime xin kao（時は僅かに）、senta Xein qent pils xaxi xu（砕けた空は硝子に還り）aion sin voxami ren xao（その歌は鏡にうつる）」

アークが天に腕を突き出す。同時に、空間が粉々に砕け散った。硝子の破砕音を出しながら割れる空は、歪な修復音と共に直っていく。だが割れた空は次元を一つ落とし存在し、硝子の破片となってアークの周囲に浮かぶ。その手をゆつくりと前にかざし、開く掌を握った。

瞬間、硝子の欠片たちが殺到する。最早動くこともままならない堕ちた精霊に、体を埋め尽くさんほどの欠片が飛来し、その全てが体を貫く。全ての破片が射出し終わる頃には、敵は白い剣山になっていた。

ゆつくりと、足場を作り出しながら歩むアーク。最早視覚すら確保できない敵の眼前に立ち、心臓部に腕を突きたてた。肉を抉る低音と空の硝子が擦れ合う高音が、アークの耳に入る。何かを掴んだようすのアークは、勢い良く腕を引いた。

少女姿のその右腕が握るのは、大きな結晶体。スピリトゥスコア核晶と呼ばれる。精霊の中枢たる、言わば心臓と脳を兼ねた部位である。核晶を取り除かれた巨体の動作が、止まった。

「還りなさい、世界の礎に」

その言葉と共に、空の硝子が爆ぜた。化身体が光の粒子と消え、手の中の結晶も砕け散る。

白色閃光が収まり、ラスティたちの視界にアークの姿が再び見えたときには、堕ちた精霊はその存在の痕跡すら残さずに消えていた。

第十七小節「考えられたこと」

「ううゝゝゝ、折角、折角マスターに褒めてもらいたくてあそこまで準備したのに……」

「ほらほら、アークちゃん。また作れば良いじゃない」

アークの憂さ晴らしが済み、ラスティたちは機材やテントにかかった粉塵を払った。砂まみれになり最早食べることの出来なくなっってしまったクツキーを見てラスティは落ち込み、それを見たアークが更に落ち込んだ。ステラがそんなアークを励まし、ラスティはその二人を見て首を傾げている。

「それにしても、堕ちた精霊か……堕嚙の影響を受けた固体なんだろうな、あれは」

ラスティが呟いた。その視線の先には、岸壁にある、大きく岩の抉れた部分??? 堕ちた精霊が打ち付けられた場所があった。基本、世界種にしか発揮できないその攻撃力は、大規模な魔術行使にもかかわらず周囲に全く戦闘の余波を出していない。打ち付けられた衝撃だけであの規模の跡が出来るなら、もし物質界への干渉制限が無ければどうなっていたらうと想像すると、ラスティは青ざめた。恐らくあの岸壁は崩壊し、自分たちは湖もろとも埋まっていただろうと思ったからである。

そうして遠くを見ているラスティの背後で、アル少年がアークに駆け寄った。

「凄いですアークさん!! ああ、あの精霊をいとも簡単に倒すなんて！」

アークもまたその精霊だということが完全に抜け落ちているアル少年が、そう賞賛の言葉をかける。そんな彼の言葉に、光のともらない目で礼を告げるアーク。本当、一体何があったのだろうとラスティは思うが、追求しないことにし？？とりあえず労いの言葉をかけてやることにした。アークの機嫌が直った。

「にしても、みんな和んでるな……」

皆の様子は、戦闘直後とは思えない、なんとも緊張感の無い様子だが、精霊に護られているという感覚がそれをもたらすのだろう。この世界の人々の精霊へのそういった信頼感はかなり高い。人と契約するような精霊とは一線を画す個体能力を誇る守護位級（ヴィーナンバー以上の精霊を総括して人はそう呼ぶ。階位のことは人に知られていない）の精霊は、魔術師の導師クラスが行使用する魔術をいとも簡単に退ける。秘文魔術や、それ相当の魔具でなくては抵抗すら出来ないと言われるその能力は、人々から恐れ敬われると同時に、守護を受けられるならば絶対の安心感をもたらすのだ。

そんな信頼に適ったかどうかは分からないが、堕ちた精霊が襲撃してきたのにも関わらず、ラスティたちが受けた被害は紅茶とラスティのクッキー（とアークの楽しみ）だけだった。

「だって、ここは精霊の領域。ここに居ることの許された者は、その場に留まるうちは精霊に守護されるって、教会に居たときから私もよく聞いてた。精霊の地に居るならば武装していることは無意味だって、前の騎士団長はいつもみんなに言ってた」

隣に來たティアマツトが、そのように教えてくれた。なるほどそれならば、彼女がいつも肌身離さず持っている筈の十字の武器が姿を表さないのは納得だと思った。それと同時に、経験があるらしい

前騎士団長はいい人だったんだろうなとも思った。精霊の地に留まることの許される者は、総じて人の良い者や気性の優しいものが殆どだからである。

「へえ、てことはその人は精霊の地に留まったことがあるんだろうな。流石教会騎士の頂点の人、貴重な体験したんだな」

「うん。でもこれで、私たちも同じような経験をしたことになる」

そう言う彼女は、どこか嬉しそうに目を細めて微笑む。かなり信仰心の強い人が集まる教会騎士団にとって、神に近い地とも言える霊地は、もはや聖地に近いものなのだ。彼女の信仰心がどれほどのものかは分からないが、霊地に憧れに近いものを持つてるようであるのは、窺い知る事が出来た。

「はは、きっとゲルトとハイスが聞いたたら羨ましがらるだろうな」

「来年は、皆でここに来ればいいと思う」

羽織ったタオルを両の手で押さえ、水際につま先をつけるティアマットは、そのように提案する。精霊への迷惑は考えないのかと突っ込みたかったラスティだが、自身もまたこの場所に来たいという感情は強かったのであえて言わなかった。

そうして並ぶ二人の姿を、いつまでも三人は見ていた。若干一名が口を押さえられた状態で……

????????

時刻は五時を回ろうとしている。襲撃の後とは思えない生命力のある湖の風景が、完全に戻ってきていた。この地は心を安らがせる

効果が魔術的にあるのではないかと、思わずラスティは疑ってしま
う。それほどに、静かに風は吹いていた。

今日はもう泳ぐのは止めようという意見で一致したので、ラス
ティたちは水着から着替えた。女性を先に、男女交代でテントを使用
した。

着替えが終わり、アル少年が剣舞をせがんで来たので剣を手にし
たラスティは、重要なことに気付いた。

「ん？ テントが一つしかない？」

そう、一つしか無い。それはつまり、寝るときは皆一緒のテント
で寝るということ。その事実には、彼は一瞬平静を失いそうになった。
ステラとアークが練り上げた計画の一端がこれであることに、ラス
ティは気付かない。ティアマツトもまた、気付かない。アル少年は
論外である。

「……おい、寝るときはどうするつもりなんだ？」

焦りを隠そうと抑えた声で、ラスティがステラに問う。テントが
一つしかないということを、今気付いたかのような完璧な演技をも
って、彼女は驚いた反応をした。

「あ！ そういえば急いで準備したせいですっかり忘れてた！
……ま、でも大丈夫だよ！ ラスティくんだったら変なことをしな
いって信じてるから！ ね、ティアマツトちゃん」

「え？ う、うん。そうだね」

ラスティの反応を待つことなく、ティアマツトに同意を呼びかけ
る。ラスティは、自分は外で寝ると言い出そうと思ったが、持って

きているのが（荷物削減のためという理由で）薄いタオルケットのみだという事実に思い当たり、口をつぐんだ。この事態を防ぐために事前に講じられた策であることに、やはりラステイは気付かない。

「……そ、そうか……うん、分かった。了解した」

ティアマットとラステイの寝るスペースが隣り合わせに、既に用意されているという事態に気付くことも無く、ラステイは後頭部を搔きながら去っていった。どうかしたのかと、ラステイが居なくなった後にティアマットがステラに聞いた。そんな彼女に、彼女は満面の笑みで返す。

「全然気にすることないよ。ラステイくんが、女の子と同じ空間で寝るのが恥ずかしいって思っただけだから」

「？」

騎士での生活がそうさせるのか、ティアマットにはその感覚が分からない。初心っぽいティアマットの反応を見て楽しもうと思った彼女だったが、上手くはいかなかった。ティアマットは首を傾げるだけである。

なかなかどうして、どうやらラステイの方がこの手の話題には面白い反応がかえってくると、この時ステラは思ったのだった。

第十八小節「夕食の前に」

キャンプ地からやや離れた場所、そこにアル少年とラスティの二人が、それぞれ得物を手に対峙している。落ち着いた表情で力なく佇むラスティ。それを真似ようとするが、どこか力みが抜けないアル少年。両者の睨み合いは、少年の振込みにより終わりを告げた。

「は！」

アル少年の腕が、横殴りに振るわれる。小さな腕の中の得物が、その腕に引きずられるように飛来する。その起動の先は、ラスティの左腕。

そんなアル少年の動きをなぞるように、ラスティの剣が同じく横に滑る。空気を掻き乱すことの無いその剣閃が、アル少年の剣を誘導するように振るわれる。下から柔らかい力を加えられたアル少年の剣は、目標を見失って空を切った。それを前提としていてか、少々勢いをロスしながらも続けて振るわれる。それもまた、銀のレールにのせられて走り去った。

幾度となく繰り返される。振るい、逸らされ、振るい、逸らされ……右利きのアル少年と左利きのラスティのその行為は、鏡写しに動作を繰り返しているようにすら見えた。だが、鏡写しというにはまだ遠い。

アル少年が剣を振り始めて幾分かたち、彼の動きが止まった。肩を大きく上下させて倒れこんだ彼の肺は、深く大きく、それでいて早い周期で酸素を求めている。無茶に近似したその行動に、大きく息を吐きながら、彼は仰向けに倒れこんだ少年の顔を覗き込むようにしてしゃがんだ。

「……やっぱり、まだ……師匠の……ように……はいきませんね」

「阿呆。そんな容易く追いつかれたら俺の立場が無いだろうが」

悔しそうな言葉を言う少年に、ラストイはそう笑って言い返すと、その顔に濡れタオルを被せる。水音をたてて落ちたそれは、少年の顔から火照りを除いていく。だが呼吸が苦しくてすぐに取り払った。

あいも変わらず舞のような剣舞を披露する自らの師を見て、傍で休憩していたアル少年はため息をつく。技を盗む、そういうと易しく感じられるかもしれないが、とても難しいと、少年は感じている。

「やっぱり、師匠は凄いなあ」

だが、ここに来た時に感じた直感の間違っていなかったと、アル少年は思う。自身はそう強くないと言ったのける彼だったが、少年の目に映る彼はいつも強く、格好良い——憧れた英雄の姿が目の前にあるようで、そんな彼に師事している自分が誇らしいと、その幼い心は感じていた。

そしてそれと同時に、その剣は届くかどうか怪しいほどに高みにあるとも感じていた。

湿気のある空気が、いつの間にか師の剣に露をつけていたのか、剣が振るわれる度に雫のような物が飛翔する。それが本当に雫であるかは分からない。だが少年はそうのように感じていた。

剣の振るわれる跡にはその粒子が舞っている。それは木漏れ日を受けて、屈折率の違いから幾つかの色に分かれて目に飛び込んでくる。その外側が赤で、内側が紫だ。

虹だ。

そのように、アル少年には見えた。弧を描く軌道と、その七色は、

人によって作られた虹。それを見たアル少年は、腕をその虹に伸ばす。唇は、小さく動いた。

「そういえば、虹ってどんなに追いかけても近づけなかったっけ」

そうして遠くまで行ってしまい、よく母に叱られたと、彼は思い返した。それと同時に、しばらく合っていない両親と兄妹と友人の顔が、脳裏に横切った。師の言葉を信じるなら、自分はじきにもこの場所に戻るのだ。それも、今自分が体験していることがほんの一瞬であったかのように、もとの時間そのままに戻るのだという。今は少し寂しくても、少し長いお泊りだと思えばいいと、少し熱くなる目頭を押さえた。

「世界を感じているか……」

数少ない師のアドバイスの中で、最も印象に残る言葉を口にする。世界を感じるとはどういうことなのだろう、自分は何を感じればいいのかだろう。そんな、灰汁あくの残る苦々しい感情が、抜け切らない。

勿論、自分も一ヶ月かそこらで強くなれるとは思っていない。だが、それとは違う何かが自分には足りないのだと、右手に握る模擬刀を握り締めて考えた。

結局、分からないままに彼はまた剣を振り始めた。

??????????

一方その頃、ティアマツトとステラは二人っきりでキャンプ地に居た。しばらくして突然、剣の鍛錬をすと言い出したティアマツトの、その剣の鍛錬が気になったステラは、見せてもらうことにしたのだった。

何時ものように紅いコートを羽織ったティアマツトは、懐から十ッロスウェボン

字兵装を取り出す。小柄な彼女の持つ片手半剣は、両手剣のように大きく見える。

友人が見守る中、ティアマットは一步踏み込む。

「やあ！」

剣自身の重量を生かした、限りなく縦に近い袈裟斬り。空気をなぎ払う音が唸り、引き戻される横の一閃が、仮想の敵を吹き飛ばす。力強い演武が、繰り返される。

ステラに武の知識など皆無だが、道具の知識として、片手半剣が難しい武器であるということは知っていた。片手持ちと両手持ち、どちらでも使えるようになってるのが片手半剣。だが、その片手で持つには重く両手で持つには軽いというほどの中途の重量と、長い刀身ゆえの不自然な重心は、使用に際し専用の訓練が必要とされる。

目の前の友人が、才が無いといいながらも、片手で軽々と操ってみせるのは、望まないながらも積み重ねてきた鍛錬のおかげであるだろう。そう、少しでも悲しいような気分で、彼女は様子を見ていた。

「少し、変える」

予告するように言った彼女の言葉の通り、次の太刀からは剣は両の手で握られた。大きく、右に両手の剣は加速距離をとる。上半身の捻り戻しが、剣を引き戻した。

「つつ!!」

右から左へ、やや斜め下方へ向かう斬撃が放たれる。今までよりも運動エネルギーの込められたそれは、剣を止めるのに相当の臂力

が要ると思われた。

だから、彼女は止めようとはしなかった。

振りぬき動作に入る直前のタイミングで、彼女は右手を柄の端まで滑らせる。丁度左に振りぬかれた剣を左利きの両手剣の持ち方になったような格好だ。

左手を軸にするかのように、右手が柄を前方に押し込む。軌道を小規模の円運動に変えられた剣は、渦巻くように頭上に振り上げられた。そのまま、重力の力にも助けられて剣が振り下ろされる。すると今度は、棒術のような動作で剣を翻させる。そんな曲芸のような剣が、披露された。

だがそれは数度繰り返された時、彼女の手から剣が滑る。

「あ」

どのような確率でそれが起こるのかは分からない。だがそれは、見事にパラソルをへし折った。ステラの眼前を風を切って飛び去った剣が、地面に落下する音が聞こえた。その直後、固まったステラに折れたパラソルが襲い掛かる。

「うひゅ!?!?!」

奇妙な声を上げて、ステラの姿がパラソルの向こうに隠れた。一歩間違えば大惨事だったことに顔を青ざめつつ、ティアマツトはステラに駆け寄る。

「だ、大丈夫!?!」

「コ、コワカッタ〜」

取り払ったパラソルの向こうでは。ステラが目を回して椅子ごと

倒れていた。

その後、夕食時になってラスティとアークとアル少年が戻ってきた時には、一生懸命謝罪するティアマツと、気にしなくていいとなだめるステラの姿が見られたという。パラソルは、少し短くなっていたらしい。

第十九小節「蛇を」

「な、なるほどな。確かにそれはぞつとするな」

午後七時を回った頃、バーベキューの準備をしながら、三人はティアマットとステラに起こった事故(?)のことを聞いた。炭を燃やすための道具と金網を設置し終えたラスティは、引きつった笑いで反応する。ステラは特に気にしているという風でもないが、ティアマットは申し訳なさそうな様子で、視線を下ろし気味で食器類を用意していた。

そんな彼女の様子を見ると、ふと、ラスティは彼女に違和感を感じる。やや急ぎ足で彼女に近寄ると、皮手袋をはめる彼女の手をとった。瞬間、彼女の体が強張る。それを見たラスティが大きくため息をついた。

「阿呆。そういうことな……ティアマット、ちょっとこっち来てくれ。すまんステラ、ちょっと借りていく(アーク、これから頼むものを持ってきてくれ)」

「え?」

驚くステラとアル少年を置いて、ラスティは近くにある小さな川のほうへと、ティアマットを引っ張っていった。何があるのか気になったが、アーク(少年)が何か箱を抱えてその後についていたので、あまり触れない方がいいと思い、追求しないことにした。アル少年にも声をかけ、準備に戻る。

ただ、アークにカメラを持たせることだけは忘れなかった。

????????????????

湖から流れる幾つかの川のうち、小規模な小さな流れのものの付近まで、ラスティはティアマットを連れて行った。それについていく彼女の表情は険しく、ラスティのほうは呆れたという風な表情だった。

「まったく、気付かれないとも思ってたのか？」

「うん……ごめん」

振り返り、腰に手を当ててラスティはティアマットに問う。気まぐすように目を伏せる彼女は、小さく謝罪の言葉を告げた。

追いついてきたアークから箱を受け取ると、地面に座り込んでその箱を開けた。アークに促されその前に腰を落ち着けたティアマットは、促されるままに両の手の皮手袋をとられた。すると、その皮手袋と彼女の手からは紅い液体が滴り落ちた。

「……心配、かけちゃうかなって思ったから……一応、後で自分でやろうとは……思ってた」

弁明する彼女のその手は、何をどうすればこうなってしまったのか、手の皮が大きく破け出血していた。それを今まで隠していた皮手袋は血に濡れてしまっていて、現在アークが川で洗っている??それがいいかは分らない。

未だ出血する彼女の手は、とても自身で処置できるものの様には思えない。阿呆、ただ一言だけ言って、ラスティはロールになった包帯と、何やら半透明のシートを取り出した。

「ほら、手出してくれ。まずは右手からだ」

そう促されるままに、彼女は自身の手を差し出す。ラスティは中位ほどのボウルを胡坐の間に乗せ、その上でティアマットの手を水ですすいだ。傷に沁みる冷たい痛みに、彼女は顔をしかめる。すすいだ直後、手際よく彼はその手に半透明のシートをかぶせた。それは皮膚に張り付くように傷を覆い、出血を抑える。左腕にも同じ処置を行った。傷をふさいだそのシートを、彼女は興味深そうに見つめる。

「保健室の先生から教えてもらって買ったんだ。なんでも、培養の研究で生み出された、応急処置用の止血シートなんだとよ。ほら、その上から巻くのもあるから」

「あ……」

そう言ってラスティは、再びティアマットの手をとる。取り出したテープ状の包帯を、巻きつける。手の動きが邪魔にならないように包帯の巻き方を考えるのも忘れなかった。巻かれている間、ティアマットはずっと目を伏せていた。

「努力してきたんだな」

彼女の手袋の内側の、その手を見てラスティはそう呟く。度重なる皮膚への負荷で、その手の皮膚は厚みと硬さを持っていて、負荷から皮膚が破れてしまうのを防いでいる。だが今回はそれ以上の負荷が一度にかかったようで、こうなってから破れる事の無かった皮膚はことごとく裂けている。そんな自分の手を見て語るラスティの一言は、特に強い剣士になろうと思ったわけでもなかったティアマットには、気恥ずかしい。

「そんなことない。こうするしか、無かっただけ」

「そっか……でもそれもまた、努力だと思うぞ、俺は」

努力の証。これをそう語るラスティの語調は、どこか羨望すらうかがわせて、更にティアマットを複雑な気分させる。羨望を受けるほどに、彼女はこの手を誇りには思っていない。

普通の成人男性以上の臂力を発揮してしまう彼女は、剣を振り回すように扱うことが多い。そのため裂けまいとする皮膚は硬化し、戦闘要員でないシスターは勿論のこと、少数の女性騎士ですら自分ほどに手は硬くない。そう、ティアマットは思い返していた。

そうしているうちに、ラスティは処置を終え道具を仕舞った。それにタイミングを合わせたように、アークからティアマットに、皮手袋が渡される。ご丁寧なことに、乾燥までしてもらったようだ。ティアマットは二人に礼を言う。

「二人とも、ありがとう」

「どういたしまして、だな、これが」

そう言って照れを隠すように笑うと、彼は勢い良く立ち上がる。座ったままで彼を見上げるティアマットに、少しだけあきれた様子で言った。悪戯っぽい、そしてからかうようなその口調は、少しだけ、ティアマットを元氣付けた。

「全く、どんな剣の振り方すればそんな裂け方するんだか……馬鹿力に任せて振りまくったのか？ 無茶はいかんぞ、ティアマットは皮膚の結合よりも筋肉が圧倒的なんだからな」

そう言って手を差し伸べるラスティ。その目は気にするなと物語

っていて、ついつい彼女はそんな彼の配慮に甘えてしまいそうになる。だが少しだけ恥ずかしくて、結局、少しだけ頬を膨らませて言った。

「馬鹿力って、いうな」

差し出された手を握るときに、照れ隠しに力を入れてしまう。少しだけ嫌な音がして、悶絶するラスティ。

それを見て、逆効果だったかと彼女は思い至るのだった。

一連のシーンが、後に一年四組女子生徒の間で流通することを、二人は知らない。

「あ、二人ともお帰り！」

処置を終えたラスティたちがキャンプの場に帰ると、殆ど準備を終わらせてしまっていたステラとアル少年が出迎えた。ラスティは左手を上げてそれに答え、ティアマットは頬を人差し指で掻きつつ気まずそうにはにかみ、アーク（少年）はステラに向かって親指を突き立てて笑顔を送る。ステラは視線だけで労った――アークに。

「すまん、ティアマットがさっきのやつで手から血が出てたみたいでさ。ちょっと洗って止血してきた」

隠すことなく、あったことをラスティは正直に、聞かれる前に白状した。その言葉を受けてステラは驚く。全くその様子を見せていなかっただけに、そのことに気付いていなかったのだ。慌てて駆け寄ってティアマットに大丈夫なのか尋ねる。

「し、止血って…ティアマットちゃん、大丈夫なの!？」

「う、うん。もう応急処置はしちゃったから…それに、活性化かければ明日には傷は塞がってるから、だから、大丈夫」

そう話す彼女の右目——水晶眼は普段の状態よりも強く発光している。彼女の手で巻かれた包帯には、皮膚に触れていると細胞分裂を活性化させる式が発動するようになっていて治療用の魔具の一つなのだが、どうやら水晶眼も似たような働きを行使しているようだ。恐らく無意識下で発動するものだろう。この分では、傷が塞がるどころか傷跡まで無くなるのではとラスティは考える。とりあえず、明日も湖で遊ぶ分には何ら問題は無かった。

とりあえず大事は無かったということで、ステラは肩をなでおろした。とりあえず腹が減ったと言うラスティは、バーベキューを始めようと言い。皆もそれに賛同する。

????????????

「それじゃあ、はじめますか!」

ラスティがそう告げると同時に、炭に魔術を用いて火をつける。着火剤を使用せずに炭が燃え上がるその光景を見て、ラスティはどこか感慨深そうな表情を見せる。

赤熱する炭の上に金網を置き、油を染み込ませた布で拭いて油を塗りつける。そうしてしばらくして温度の高くなった金網に、皆は

一斉に串を置いて焼き始めた。水分が一気に飛んでいく音と、気化した水分に乗ってくる香りが、食欲をかきたてる。待ちきれない様子のアル少年がラスティに問う。

「これって、魔術で早く焼き上げたり出来ないんですか？」

「炭化していいならやってやるぞ？」

「……やっぱやめます」

魔術で早く焼きあがらないか質問した彼にラスティは答える。彼の答えに、しばらくの沈黙の後にアル少年は提案を取り下げた。事実、今この場に食材を焼き上げる程度に火力を調整できる術者がいないので、アル少年の提案は無理な話だったのだ。操作が繊細なハイスが居たならば可能だったであろう。

しばらく経ち、表面が焼きあがったあたりで、肉のみを刺した串をラスティは手に取った。

「ふむ、そろそろ頃合だな。んじゃ、一足先に……いただきます」

未だ肉の赤い部分が見えているが、何やら一言二言呟いた後、ラスティはそれにかぶりついた。皆は戦慄する。

「ちよちよちよつとラスティくん！?!?」

「ん？ どうした？」

中まで火が通っていないどころか、炙っただけというレベルの肉にかぶりつきながら、驚くステラに向けて不思議そうな視線を送るラスティ。ステラは彼の行動をとがめようとしたが、その前にア―

クが歩み出て説明をした。

「ステラさん、大丈夫です。今回持ってきた肉類は、私が殺菌処理を施し、寄生虫の有無をあらかじめ確かめておりますので」

事情を説明されたステラは、一応は納得する。だがやはりラスティの行動は納得できないという表情でいる。これが好みなんだと語る彼に、それ以上は何も言わないことにした。

次第にみなの方も焼きあがっていき、串を手にとっていく。各々思うように食べ始めた。

「うん！　おいしい！」

やや幼げな調子で言うステラは、やはり貴族出ということなのか、このようなバーベキューでも食べ方には気品が感じられる。ティアマットは無言で頷きつつ食べていて、その様子がいかにも微笑ましい。アル少年はラスティを真似てか豪快にかぶりつき、食べている。だが流石に超レアの焼き加減では食べないようだ。ラスティは二串目に突入しており、アークは次に彼が食べる分を焼いている。

「バーベキューか。俺、この食い方は初めてなんだよな、これが」

「そうなんですか？　随分と手馴れた御様子でいらっしやいましたが……」

串にかぶりつきながら語るラスティに、超レアの焼き加減で焼き上げた肉を手渡しながらアークが問う。隣に居たアル少年も、口いっぱいに肉と野菜を頬張りながら頷いて同意していた。本当なんだから、そういうラスティは苦笑気味で、だが内心では、そう思われても仕方が無いと思っていた。

ラスティがティアマツトの方を見てみると、串焼きの棒を興味深そうに見つめながら何やら考え込んだ様子で見つめていた。何か問題でもあったのか気になり、訊いてみようとしたのだが、その直前に放たれた彼女の一言がその動きを止めた。

「蛇もこれで焼いたら……おいしいかな？」

瞬間、場の空気が凍った。驚愕的なその発言を耳にして、その場の皆の視線が集まる。周囲の空気の変化に気付いたティアマツトは、あわてて周囲を見回した。

「え？ え？」

何故視線を向けられたのか分かっていない様子の彼女に、ラスティが代表して声をかける。言い聞かせるように、妙に優しい声だった。笑顔がつっているのがありありと分かっているのは仕方の無いことだろう。

「蛇は、焼いちゃいかんぞ？」

「う………うん」

何故か肩を落としたティアマツト。彼女の過去に何があったかは容易に想像できる？？？野営訓練とか実戦なら、食糧確保はそういうことなのだろう。何故その考えに至ったのかは考えない・聞かないことにしたのだった。話題を変えて、会話を再開させる。

そうして、金網を囲みつつ食事をする五人は、火が沈むまで談笑しつつバーベキューを楽しんだ。また食べ過ぎたアル少年が、テントの中で一足先に行動不能になってしまったのは……仕方が無いのかどうかは、わからない。

第二十小節「水の戯れに音奏で」

バーベキューが終わる頃には日が完全に沈みきってしまった。そこで皆は焚き火を起こすことにして――薪を集めていなかったことに気付いた。あわてて薪を探しに行こうとする皆だったが、あることを思い出したアーク（少年）が引き止めた。皆がアークに振り返ると、湖の方を指差した。

「見てください。洗幻虫です」

その指差す方角から、一つ、また一つと、青い小さな光が立ち上っていった。その光の増加速度は、次第に早くなっていき、次第に辺り一体を照らし出した。日の光ほどに明るくは無いが、夜の光源としては十分すぎるその光。その光に照らされた湖は、それ自体が発光しているかのように見える。

自分たちの周囲を飛び交う、光る虫、洗幻虫を見て、それを捕らえようとするようにティアマットは手を伸ばした。数多い虫たちと広い空間は、その距離感を失わせて、手はただ空を握った。だが、それを残念とは思わない。

「綺麗……」

そう言って周囲を見渡す。満ちた青い光は、まるで自身を水の中に居るかのよう錯覚させ、息苦しさを感じさせないながらも全身を包まれる感覚を覚えた。その光に魅入っている中、ラストイが彼女に声をかける。

「なあ、洗幻虫の性質って知ってるか？」

彼の言葉を後ろに聞きながら、首を横に振った。すると、その問いにはステラが答えた。流石に学者を志望するだけあって、知識量は多いようだ。ラスティに関しては、皆は‘そういうものだ’という認識で一致しているのが、少しだけ笑えるところではあった。

「体に幻子を溜め込んでいるから、その場の魔力に応じて光の色を変えられるでしょ？」

とか言ってラスティくん、ティアマットちゃんの歌、聴きたくなっただけでしょ？」

「はは、流石に分かるか」

ステラの指摘に、潔く自身の胸のうちを明かすラスティ。アークはそんな彼に微笑を送って、荷物から持ってきたのか、座るためのシートを敷き始めていた。状況を察して持ってきたのだろう。そしてその後ろからは、腹痛の治まったらしいアル少年が付いてきていた。目を輝かせ洗幻虫たちを見ている彼に、ラスティは子供は寝る時間だぞと言うが、この光景を見て寝ていられないと反論した。元々寝かせようとは思ってなかったラスティは、そんな彼の頭を掻き乱して笑っている。

そんなじゃれ合いに似た行為をしている二人に、ティアマットは不思議そうな視線を送っていた。

「どうして、洗幻虫と歌が関係あるの？」

「ふふふ、ティアマットちゃん。歌ってみれば分かるよ。ほら、しばらく聴いてなかったし、ラスティくんが聴きたがってるんだから、歌ってあげなくちゃ」

ティアマットの疑問には答えず、ステラは彼女に歌うようにと促す。それを受けて彼女は、傾げた首を戻した。そうしてため息をつくとき、軽く頷いた。気付くと、既にラスティとアル少年はシートに腰を降ろしていて、聴く体勢を整えている。そこまで聴きたいのだと主張する彼の表情は、ティアマットの頬を少しだけ赤らめさせた。だがそれは、青い光の中のおかげで、悟られることは無い。

コートの中から、三色の魔石を取り出すティアマット。湖を背に、ラスティたちの方に振り向いた。そして、手から色の三原色が零れ落ちる。

「Fie si—fxilieus（さあ、歌いましょう）
Xiehait en fowsa, halt yien（空に
響くように、心を込めて）」

光が弾けた。粒子となった光は、ティアマットがいつも行うようにラスティたちを取り囲もうとして——更に広がった。

「え？」

彼女に、内側から広げられていく感覚が襲う。少しの違和感ではあったが、すぐに動揺を抑える。周囲を見ると、彼女の領域が湖全体にまで広がっていた。三色の光の領域は、洗幻虫たちもその内側に取り込んでいて、すぐにその結果が現れてきた。

「綺麗」

先ほどと同じで、それでいて少しだけ感情を強く込めて、その言葉は呟かれた。周囲を飛び回る洗幻虫たちが、赤・青・黄の三色に色づいて、先ほどよりもさらに幻想的な光景を描いていた。彼女を中心に波打つように発光する洗幻虫は、心なしか彼女の周囲に集ま

つてきているかのように思えた。

それがラスティの見たかったものなのだと、この時にティアマツトは察した。振り返って見ると、やはり彼は満足げな表情をしている。自然と、彼女自身の表情も緩んだ。

足場を整え、大きく息を吸う。

目を半眼に、焦点は少し遠くの景色を見据える。

そうして、彼女は歌い始めた。

それは、初めて聴く歌だった。今までの彼女とは違う、戯れる水を歌った曲。澄んだ音はそのままに、明るいようで神秘的な静けさを持った、そんな歌だった。

詠語ではなく、人の言葉で歌われるその歌が、広がっていく。それは彼女の歌としては珍しいものだった。恐らく教会出典の曲では無いのだろう。

「（水の傍らで）

（水面を見つめ）

（水の精たちの踊りを見てる、戯れを見てる）

（手招きを見てる、私はたじろぐ）」

洗幻虫たちが、その歌に合わせるように光りだす。一見不規則に見えるそれは、歌詞に合わせているようであることが分かる。波紋が広がるように、音と心と光が、強弱をつけてくる。鈴唱の波にゆられ、湖が彼女の場となる。本来人の心に侵されていい場では無いこの霊地も、彼女の歌で狂うことは無い。ラスティは、初めからこのことを予期していた。水晶を体内に持つことの出来る人間が、世界を犯すことなどありえはしないからだ。

「（私は君たちと違うんだ）」

（水の上では踊れないんだ）

（でも彼らは笑いかける）

（大丈夫、大丈夫）」

人よりも世界に近く、でも世界種よりは遠い。そんな彼女の歌う歌は、その双方に語りかける。

大丈夫、大丈夫と歌うその声は、まるで自分たちに呼びかけているようだ。涼しくも暖かい安堵に包まれる。洗幻虫もそれを感じるのか、明らかに彼女の周囲には多くの洗幻虫が飛び交っていて、ティアマツトは三色の光に照らされる。それでも彼女は、自身の色をしつかりと保っていた。

「（無理だよ言う声も）」

（大丈夫の声に掻き消され）

（遊ば遊ぼうと言う）

（その声に誘われて）

（水面に降り立つの？？？）

（？？？共に舞踏して）」

「（あ、見て！！）」

その時だった。彼女の後方から、人では無いものたちが姿を現し始めたのだ。それは幻想種と呼ばれるものたちで、世界種とは違う、どちらかというと魔獣に近い存在である。だが、この水域に留まることを許される幻想種たちは皆、彼女の歌に誘われて出てきたように、近くに腰を降ろして聞き入るものまで出始めていた。詠語は世界の言葉とも言われる——だがそうではないこの言葉が、彼らには歌が分かるのだろうか。そればかりは、ラスティですら分からない

い。

「（波紋は一つ、また一つ）

（もう一つ、もっと一つ）」

「すごい……幻想種たちが聞きに來てるだなんて……」

蛇の姿のものや蛙の姿、半魚の姿——果ては一角獣すら姿を現す。

彼女を境界にするように、こちら側には人、向こう側は幻想種。そんな観客席の割り振りが、自然と出来ていた。だが鈴唱の領域は、彼らすべてに平等に、だが音を少しも衰えさせることも無くいきわたらせる。音の真の媒体が魔石になっている鈴唱は、いついかなる時でも場所でも、最高の音を届けるのだ。

「（いつしか水面は波打って）

（還る彼らは歌いだす）」

「あ、精霊さんだ」

いつの間にか鬼火のような存在たちが姿を現す。下位の精霊であろう。水の上を跳ね回るように飛んでいる精霊は、紛れも無くティアマットの歌に惹き付けられたものたちだった。

架橋に入る歌は、さらに強い光を降り注がせる。湖の色も、光の色に色づき、その上の洗幻虫たちは、水の戯れを表現するかのよう

に飛び交っている。

「（水面の上で水と戯れ）

（波紋の下で精が戯れ）

（舞踏の中で私は歌う）」

彼女の前で人は聴き入り、彼女の後ろで幻が聴き入り、その間で彼女が歌う。恐らく彼女は後方の光景に気付いていないだろう、瞳を半開きに歌う彼女は、完全に歌の世界に入り込んでゐる。

彼女のことを驚かせて歌が途切れないように、という配慮なのかどうかは分からない。だが彼女の視界に入らないような位置に、幻想種たちは集まっていた。

「(回れ 廻れ 波打て 集え)」

(孵れ 巡れ 渦巻け 弾け)

（戯れは続く。私を乗せて）

ておけばいい」

ラストィの声が、背中から聞こえてきた。その言葉に従って、スカートのすそを持ち上げるかのようにコートをつまむと、恭しくお辞儀をする。フリーズした思考の中で、言われるがままに行った行動であったが、その動作に世界種たちの歓声が強まると、次第に状況を冷静に考えることが出来るようになってきた。

頭を上げて、見渡してみる。彼女の目に映る、見渡す限りの幻想種たちは、皆総じて彼女のことを見ている。敵意など微塵も無いその眼差しを見て、ようやく彼女は彼らに向かって笑顔を送ることができた。

すると、彼女の目の前を割るように、幻想種たちが道を作り出した。その奥から何かが来るということが容易に察せられて、その方に目を向けてみる。するとそこから歩んでくるのは、水で構成されたヒトガタ???ウンディーネだった。その後ろには、鬼火のような精霊たちが付き従っている。

その事態には、目の前の幻想種に微笑むことの出来たティアマトでも、笑顔が緊張で凍った。精霊が、それも高位の精霊が、自分からわざわざ自分のもとにその足で訪れるのだ。一国の王と謁見する以上の緊張が、今の彼女には襲い掛かっていた。

ウンディーネが、ティアマトの眼前まで歩む。彼女の姿は、ティアマトの身長に合わせられていて、それがどうしようもなく彼女には恐れ多かった。せめて大きければ、少しでも緊張が和らいだことだろう。

「そう固まらなくてもいいのだぞ、ルビーの眼を抱く子よ」

「は、はははい」

尻すぼみになる彼女の声。はい、の一言すら満足に言えないほど

に緊張する彼女に、ウンディーネは可愛げのあるものを見たかのように微笑む。そして彼女は、その姿を変えた。それはアークと出会った時のような、衣を纏った女性の姿で、だが身長はティアマットに合わせられていた。銀に輝くその髪は、立っていながらすでに地に付いてしまっている。だがそれを、彼女は一向に気にしない。

精霊ではない、人の姿をとったのは、彼女なりに気をつかったのだろう。ティアマットの肩の力が、ほんの僅かに抜ける。

「そなたの歌。聞き届けさせてもらった。素晴らしいものよ、世界の言葉でも無しに、あれほどの鈴唱を歌ってみせるとはな……」

彼女は本心から彼女のことを賞賛していた。だからこそわざわざ自分から、相手の目線にあわせて訪れたのだろう。囁むところ無かったが、彼女はその賞賛の言葉に対し、カタコトで礼を返す。見ているラスティたちが不安になるほどだった。

だがそんな彼女に、ウンディーネは気を悪くすることも無く、彼女にてを伸ばす。その腕は彼女の頬を撫でた。やはりティアマットは強張る。

そうして彼女の水晶眼の上を優しく包むように手を滑らせて、その上を覆った。だがこの行動には、ティアマットは緊張の反応を見せない。

「赤の水晶を抱いているが……成る程、そなたは青の気が強いようだ……丁度いいものだ……いい歌を聞かせてくれた礼だ、受け取ってくれ」

そう言っただけで彼女は、三言ほど言葉を呟いた。するとティアマットを包む青い光が湧き上がる。

それは精霊の加護と祝福だった。

第二十一小節「それは叶わない」

かのように軽く浮かび上がる。それは光が収まっていくと同時に、再び囚われた。

光を浴びた自身の体の調子を確かめるかのように、彼女は自身の手を見つめ、しきりに手を握ったり開いたりしている。そんな行動がとれるあたり、どうやら彼女の緊張は抜けたのだろうと思われた。再びウンディーネの方に向かったその視線は、いつもの落ち着いた色を取り戻している。

そんな彼女の変わりようには、ウンディーネの方も少し驚くことがあったのだろう。口元を押さえて少しだけ、笑った。

「フフフ、……。繰り返しになるが、それは私からの礼だ。祝福と加護を授けた。これからの生で、役に立つこともあるだろう」

ウンディーネのその言葉に、ティアマットは深々と礼をする。続けて感謝の意を述べようと口を開こうとしたが、その行動は彼女に手で静止される。不思議そうな視線を送られるよりも早く、彼女はティアマットに告げた。

「礼など良い。こちらは好きでそなたに与えたのだ……。だが、礼とするならば、もう一曲、聞かせてもらえるとありがたい」

「もう一曲……ですか？」

ティアマットに聞き返されると、ウンディーネは後方の幻想種たちを指し示すように振り向いた。それにつられてティアマットが視線をやると、そこに居た幻想種たちは、総じて彼女のほうに目を向

けている。種こそ違えど、皆期待するような感情を込めているということが容易に感じられた。

そんな幻想種たちを示して、彼女は口を開く。

「この者たちは、わざわざそなたの歌を聞こうと集まってきたのだ。人ではあらずとも、皆聴衆なのだぞ？ 期待に応えるのが歌い手であろう……もつとも、私に言われずとも歌は続いていたであろうかな」

そうして顔だけ振り向かせて笑みを送ると、彼女は湖に向かって歩いていった。その時に一瞬、彼女の視線はティアマツト越しにラストィと交差した。その時に、少しだけ念話でのやり取りが行われる。精霊同士のパスとラストィとのパス、その両方のあるアークを紹介して、行われた。

「（大変なもんだな、神聖視される身の上というのも）」

「（それは仕方の無いことで御座います。貴方様が我々の交流の場に赴いたならば、同じような状況になると思われますが……）」

「（……気が持たんな。まあとりあえず、お勤め（？）ご苦勞様。アイツにわざわざ加護なんて与えてくれて、有難な）」

「（いえ、これは本心からのものですので、お気になさらずに……それではラストィハルト様、失礼しました。良い日の終わりを送れるよう、願っております）」

念話が途切れると同時に、彼女の姿が湖に消えていった。それと同時に、ティアマツトばかりでなくステラやアル少年、幻想種たちまでもが体の力を抜いた。その光景を人事のように見ていたラストィ

イは、思わず噴出しそうになってしまふ。精霊の発する重圧に似た
雰囲気は、あらゆる生物を緊張させるのだということが、よく分か
るワンシーンだった。

その後に、言いようも無い静けさが漂う。幻想種たちは一心にテ
ィアマットのことを見つめ、ラスティたちは戸惑う彼女の背中に視
線を投げかける。洗幻虫たちまでもが、彼女のことを急かすように
飛び回る。

その奇妙な場の空気の中で、自身がとるべき行動を見失いかけて
いるティアマット。その姿が不憫に思えて、ラスティは助け舟を出
した。

「ほらほらティアマット。俺ら他オーディエンス多数が、お前の歌
を待ってるぜ？」

あ、次は詠語の歌詞で頼む。じゃ無いと幻想種たちがわかんない
かも知れないからな」

「え、あ、うん……そっか、歌えば……」

冷静さを取り戻したのか、ティアマットが懷から再び三色の魔石
を取り出した。精霊と会うという行為のせいで集中が乱れ、鈴唱の
場が消えてしまっているの、再び作り直すのだ。

そうしてそれから、恐らく世界でも初であろう——人と幻想
種と世界種を聴衆にコンサートが行われたのだった。度重なるアン
コールに、押しに弱いらしいティアマットは何度も何度も応える。結
局、九十分もの間、彼女は歌い続けたのだった。

????????????????

「疲れた…怖かった…疲れた…吃驚した…疲れた」

（多分）世界初、人外の存在相手のコンサートをようやく終えたティアマットは、最後の一曲を歌い終わると、ややフラ付きつつラストイたちのもとに移動する。シートのエリアまで辿り着くと、そのまま突っ伏して呻き始めた。彼女にしては珍しいその行動だが、流石に九十分も歌い続けるとなるとやはりこうもしたくなるのだろうと思われた。

歌が終わり、周囲の幻想種たちは各々の行動をとり始める。自身の寢床に戻るもの、どこかに飛び去っていくもの、その場に横になりだすもの、アル少年と遊び始めるもの……。様々だった。生まれただばかりと思われる幼い精霊たちが一瞬ラスティのほうに向かうような動きを見せたが、すぐさま湖の中に戻っていった。何があったのかは分からない。ウンディーネに呼ばれでもしたのだろうか、そうラスティは結論付けた。

「ううう………」

怖かったとそれ以外の感想を交互に口に出していたティアマットは、移動を始めた幻想種たちが居なくなるところでようやく起き上がった。アークが彼女に水の入った水筒を手渡す、と彼女は一気にそれをあおる。

「お疲れさん、相変わらずいい歌だったぜ？……だが、よくもまあそこまでアンコールに応えたな」

彼女が押しに弱い部分があるということを知っていながら、ラスティは少しからかうように言う。水筒の水を一気に飲み干したティ

アマットは、少し恨めしそうな視線を彼に送った。豊かになってきた感情表現力を使い、やや口を尖らせて言う。

「だって、皆あんなに声出すし、こっち見てくるし……なんだか、断ったらいけないような、気分だった」

そう言って拗ねる彼女の頭を、ステラは撫でて宥めた。実際のところは、自分のことが評価されたことについては不満が無かったのだ、表面で言っているほどに不満は無かった。だが、言ってしまった分にはそれを保っていなければならない気がして、ティアマットは撫でられることを受容しながらも唸る。

すでに時間は十時近い時間になっていた。翌朝もまた朝から遊ぶつもり満々だった皆は、今日のところは寝ようということで見解が一致する。ラスティの手で幻想種との遊びの場から連れ去られたアル少年は、今まで遊んでいたかれらに手を振る。蛇のような姿をしたそれは、頭を擡げてそれに応えていた。その姿を見て、アレと遊べるアル少年の胆力は素晴らしいものがあるとラスティは感じる。

「あ、ラスティくん！ ごめん、さっきまで居た場所にわたし水筒忘れてきちゃった！」

アル少年を回収するラスティより一足先にテントに戻っていた女性陣？のステラが、テントから顔だけ出してラスティに向かって叫んでいる。水筒を忘れてしまったという、彼女にしては珍しいとも思える行動にため息をついて、ラスティはその声に応えた。

「了解した！ 俺が取ってくる！」

「ではアルさんは私が連れて行きますね」

そういうアークの提案に、ラスティは礼を言いつつも、今まで肩に抱えていたアル少年を下ろす。今まで遊んでいた幻想種が居た方をしきりに盗み見ていた彼だったが、アークに何やら耳打ちされると、顔を青ざめさせて、アークに手を引かれるままにテントに向かっていった。

その光景に首をかしげながらも、ラスティは頼まれた水筒を取りに向かった。

「まったく、制御式以外ならミスをしないといわれるステラらしくない。あ、アル坊にとってこさせればよかったんじゃないか……無理か」

道を引き返して水筒を回収してきたラスティは、テントに向かって歩みを進める。飛び交う洗幻虫の青い光に見とれながらも、テントの前まで辿り着いた。

その中に入ると、すでに皆は寝てしまっているようだった。皆川の字になるように寝ていて、ラスティから見て右から順に、アル坊、ステラ、ティアマツトとなっていた。

「（って、俺の隣はティアマツト！？　くそ、ステラ。アル坊の横空けといってくれたっていいじゃないか、……）」

彼女たちと自分の間にアル少年を挟み込むことで、精神の安定を図ろうとしていたラスティであったが、何故かラスティの寝ることの出来る出来るスペースはティアマツトの隣になるように限定されていた。ちなみにステラはいつも抱き枕を使っているのだろうか、アル少年を抱き枕に寝ている。心なしか彼の表情は苦しそうだっただろう。どうやら状況的に諦めるしかないと思ったラスティは、シャツだけになってティアマツトの隣に横になった。彼女の使うシャンプーの匂いだろうか、彼の嗅覚は花のような香りをとらえる。隣に女性

が寝ているということを意識させられ、自然、鼓動が早くなった。

「俺、寝相悪いんだけどなあ、これが」

そうして彼は、上着を枕にしてタオルケットを体の上にかぶせると、その瞼を落とすのだった。

第二十二小節「聖域」

「ん……」

朝の訪れを告げる光が、テントの入り口のわずかな隙間から差し込んで来る。朝のやや冷えた空気を暖めるその色は、まずティアマトの顔を色づけた。寝たときの姿勢から微塵も身動きする事の無かった彼女が、初めて動作を行う。瞼の向こうから降り注ぐ光にまぶしさを感じ、ゆっくりと目を見開いた。

「あら？ ティアマットさん、おはよう御座います。お早い起床ですね」

ティアマトが目覚めたのに反応して、ラスティの寝顔が覗き込める位置に座っていたアーク（少女）が彼女に挨拶をした。挨拶を返し、ゆっくりと起き上がる。そのまま上半身を起こした姿勢で周囲を見回した。

非常に荒れていた。

ステラの布団は荷物の上に掛かっていて、寝返り打つ彼女の体の下にはアル少年が下敷きになっている。苦しそうな表情でしきりにうなり声を上げている彼は、果たしてどのような夢を見ているのだろうか。

ラスティのほうは、右腕が下になるように……つまりティアマトのほうに顔を向けて寝ていた。丸めたタオルケットを胸に抱え込み、抱き枕のようにしている。これは彼が利き腕である左腕を労つての行動なのだが、それがどうも微笑ましく見えた。ティアマトに朝の挨拶を告げたアークは、そんな彼の寝顔に見入っている。

ラスティから視線を外して、ティアマトのほうを見る。少し名

残惜しそうな表情をして、アークは彼女に告げた。

「まだ起床の時刻まで、半刻（三十分）ほど残っていますが……日も昇り、ティアマットさんも起きたことですし、皆様を起こすようにしましょうか」

アークが起こしている間に、ティアマットはテントの外に出る。朝日と澄んだ空気が彼女を出迎えて、自然、彼女は深呼吸する。それを三度ばかり繰り返した後、彼女は黒革に包まれた自身の手を見た。

ラスティに処置してもらったその両手は、昨日は皮手袋が外されることは無かった。それなりに大きい規模で処置された自分の掌を見られて、ステラに心配をかけたくなかったのだ。自分の怪我の状態を濁して報告したラスティは、気を遣ってくれたのだろうか、そう思い返す。

ゆっくりと、その両手の皮手袋をとり、包帯を解いた。良く見ると布地と同色のインクで術式が刻まれている包帯のしたから出てきた自身の掌は、完全にその傷の跡を消していた。それを見て喜びつつ、でも少しだけ暗い声色で、彼女は呟いた。

「また、少し厚くなっちゃったかな」

皆がテントから出てくる物音が聞こえてくるまで、彼女はしきりに両手を握り、開く……その動作を繰り返していた。

????????????

朝起きてから、皆はすぐに着替えを済ませ、いつものような格好になっている。勿論、その下は水着だ。そして皆でテーブルを取り

囲むと、軽めの朝食を食べ始める。その食べ終わるころには、岩に押し潰される夢を見たらしいアル少年の顔色も戻ってきていた。

時刻が七時を回った頃、湖の浜辺を臨んで五人が並んでいる。まだやや角度の浅い日差しを受けて輝く湖面が視界を必要以上に明るくする。やや目を細めつつ、その湖面の様子を見ていた。

「よし！ 今日のもつぐるぞー！！！」

「おおー！！！」

マスクを片手に掲げて、ステラとアル少年が気合十分にポーズを決めている。ステラの号令に合わせる様に、アル少年はややぎこちなくマスクを取り付けた。顔の前面を覆う、ゴーグルと呼吸機部が一体となったマスクが、水着とは不釣り合いに無骨で、どこことなく滑稽である。

「ステラ、いつもだったらまだ寝てるのに……」

「そんだけ楽しみだったんだろう、これが」

横二人の熱気とは対照的なテンションのラスティとティアマットが、彼らの斜め後方で苦笑しつつマスクを取り付けている。厳密には肺呼吸の必要の無いアークは、マスクを取り付けず彼らの様子を見ていた。ラスティは、何故水着のチョイスがスクール水着であるのか問い質したいという気持ち在必死に落ち着ける。

皆が準備を終えると、真っ先にステラ、続いてアル少年が湖に飛び込んだ。後を追って三人が飛び込む。

飛び込んだ際につけてきた外気の気泡が、視界を一瞬塞ぐ。飛び

込んだ勢いに振り払われたそれは、成すすべなく水上に昇っていく。視界を遮るものの無くなった視界には、青く色付く世界が広がっていた。

昨日も潜ったはずであるラスティにアル少年も、眼前の光景に感嘆する。視界を横切る魚たちの姿はそのままに、昨日はその姿を隠していた幻想種たちが泳いでいたのだ。人よりも大きな水棲種が多数横切っていく光景を見て、ティアマツトは綺麗と呟く。だがその音は気泡に囚われて水上に消えていく。

「へすごいすごいすごい!!!!!!」

目の前の光景に感極まったステラが、魔石ペンを振り回して周辺空間に凄いの文字を書きなぐる。文字を書くのではなく、ペン先から削られた魔石の粒子が、意識した文字を描き出す仕様になっているためそのような現象が起きているのだろう。半ば暴走に近かったこの地ではいくら戦闘行為が認められていないとはいえ、周囲の幻想種を刺激してしまいかねないその行動は拙いと思い、ティアマツトが彼女の腕を掴んで止める。圧倒的腕力を前に僅かにも腕が動かなくなってしまったステラは、後方を振り返る。ゴーグルの向こうから伝わる非難の視線を受けた彼女は、目を細めて気泡をふきだした。‘アハハハハ……ゴメン’そんな文字が、右手のペン先からこぼれ出している。

「へそれにしても、本当に凄い場所だね！ 幻想種たちがこんなに沢山、それもこんな近くで見られるなんて!」

気を取り直して、湖観光を続けていると、先行していたステラが振り返ってそのように書き出した。背泳ぎの要領で泳ぎ続ける彼女に向けて、アークがある発言をした。水中での活動に全く問題の無いアークは、ペンを使用せずに会話が可能だった。

「この幻想種たちもそうでしょうが、この地にはもつと素晴らしい場所があるのですよ？」

その言葉を受けたステラが、獲物を捕らえにかかる大型魚ばかりにアークに食らいついた。一瞬のその行動に全く反応できなかったアークは、ステラの オシエテ の視線を受けてたじろいだ。落ちて着くと両者の間に文字を投げ込んだラスティが、アークからステラを引き剥がす。彼もまた視線にたじろぎ掛けたのだが、マスクのおかげでそのことを悟られることは無かった。

開放されたアークが、ラスティに感謝しつつ、ステラに向かってその場所を告げた。

「この湖の中央湖底に存在する領域……この霊地の中枢ですよ。どうでしょう、行ってみませんか？」

アークが告げたその場所には、ラスティですら驚愕した。

驚いていないのは、その言葉の意味を判っていないアル少年だけであった。

第二十三小節「迎える世界」

霊地。それは世界に、神に近いと言われる場所。その地には必ず守護精霊が存在し、その聖域を害する者その全てを排除するという。その守護精霊が護る場を霊地と呼ぶが、それはある意味で正しくは無い。精霊たちはその場を守護しているというよりも、その地の奥深くに存在するあるものを護っているのだ。だがそれは非常に繊細であるが故に、底を中心とした一帯を守護しているに過ぎないのだ。故に真に霊地とはその場所の中心部のことを、精霊たちの間では言う。

そんな、彼らにとっては聖地というべき場に皆を招待すると、アークは言う。その言葉に皆は驚愕で驚くばかりで、ペンを落としてしまいそうな様子でアークのことを見つめていた。不安げな視線を送るラスティにだけは、アークは念話で事情を言う。

「(昨日マスター方がお休みになっている間、ウンディーネの方には既に言っております。私やウンディーネが影響を抑えますし、世界に近いマスターやティアマットさん、それにノルニラムに魅入られたアルさんは、中枢に影響を与えることは御座いません。ステラさんの影響を抑えるだけであれば、正直私一人でどうにでもなるのです)」

「(それはいいが……なんでまた中枢だ何て……そこはお前たち

精霊には神聖な場所だろうに)」

人が精霊や神を信仰するならば、精霊たちは世界そのものを信仰すると言ってもいい。精霊たちにとって霊地とは人間が思うのと同じく神に最も近い場所で、神聖にして侵さざるべき場所であった。そのような場所に人を招き入れるというのは非常識どころの騒ぎではない。

ラストイとて見たいという気持ちはあった。だが幾ら‘描き手’とはいっても人間の身、無理を言ってみせてもらうというのは余りにも凶々しいものだとも思っていた。だからこそ彼は、昨日湖の中央に來たものの湖底に赴かず、わざわざウンディーネを魔石で呼んだのだ。

だがそんな彼の考えは検討違いなのだと、アークは告げた。

「（マスター、だからこそですよ？）」

ラストイはその意味を問い質そうとするが、それはステラの感動の（アークへの）抱擁に遮られる。

「（やったー！！ ホント本当HONTOU！？ あの伝説の霊地の中心伝承にしか無いって言われてその存在すら疑われて信じる人も疑う人も半々だって言ってそれで——）」

右手の魔石ペンから言葉を立て続けに垂れ流しながら、ステラはアークを力いっぱい抱擁していた。乱れた念話で、言葉にならない悲鳴がラストイに直接伝わってくる。ティアマットのほうはステラとは違う方向性の喜び方をしていて、夢の世界に飛び立っていた。とりあえず彼は、落ちた魔石ペンを急いで回収したアル少年を労っておく。

二、三分のさばお——抱擁から開放されたアークは、体内で崩

壊した組織の一部を吐き出した。すぐに何処からか取り出した魔石を飲み込んで回復する（体の構成物質と魔石は同じものであるため）。吐血後に薬を飲み込んだように見えるその光景に、再びステラは苦笑交じりの謝罪をした。世界種相手でなければ力を発揮できないアークは、思いもよらない攻撃に顔を引きつらせつつも、にこやかな表情を維持しようとしながら言った。

「それでは皆様、私の後に続いてきてください。実は昨日の夜にウンディーネさんの許可はとっているのですそのあたりは心配しなくても大丈夫です——っ!？」

まだ残っていたらしい組織が、アークの口から排出された。

??????????

アークの後ろについて皆は泳いでいる。水圧の影響を遮るための結界が、ウンディーネの手によりいつの間にか彼らの周囲には張られていた。皆は遠距離から対象の周辺に結界を展開してみせる土地守護精霊の実力に感心していて、これにはアークでさえも感心している。世界に付与された防衛のための力は、こういった面ではアークを上回っているらしかった。ちなみにアークは殲滅に特化しているという。

深度が深くなるにつれ、水中に届いてくる光の量も少なくなってくる。だがある一定の深度を過ぎたあたりで、徐々に周辺は明るくなってきた。それが分かるようになって、アークがラストイに向けて念話を行う。

「（マスターは、御自身が人の身であることをお気になさっているようですが、それは私たちには杞憂というものですよ?）」

「（だが俺以外はどうかんだ？）」

「（マスターのご友人であれば、それだけで招待する理由には十分です）」

アークのそんな応答を聞いて、どうしてそこまで自身が優遇されるのだろうか、ラスティは疑問に思う。その疑問をぶつけてみると、やや呆れつつも愛おしさのこもった声音でアークから答えが返ってきた。

「（何をおっしゃるのですか。貴方様はこの世界を御造りになった方、世界の父にして母、我々の真に信ずる神そのものなのですよ？ 貴方様に我々の信仰の地を御覧に頂けるのであれば、人間が数人付いてくることなど些細なことではありません）」

そう力説するアーク。話しているうちに、次第に周囲は明るく青く色づき、水中であることを忘れてしまいそうなほどに光に満ち溢れてきた。霊地は近い。

「（ウンディーネと二人で話したのですよ？ マスターをここに連れて来るにはどうすればいいかと……普通に提案したら遠慮で断ってしまいそうでしたから、勝手ながらこのような形にしてしまいました。これに関しては、申し訳御座いませんでした——）」

断らせない状況に持つてくるために、感極まるステラの存在を半ば利用させてもらったのだとアークは語る。謝罪するアークだったが、その声には後悔は無かった。彼らの真下に、空色の光が広がる。

「（——ですが貴方様には、どうしても御覧になって頂きたかったのです。」

さて、そろそろ見えてきましたね。

マスター……これが、幾多とあれど、コレを目の当たりにした人間は片手で数えられるほどの、人の世で伝説の中と歌われる地で御座います。そしてこの地に招待されたヒトは貴方様のみ……いかがで御座いましょう——」

そこから先は、振り返って皆のほうを向いて言った。その地を誇るアークの心情が、言葉と表情と動作に、隠されることなくあらわれる。

「これが我々精霊の守護する霊地の正体、

——ディースイクスマーカー是空大結晶——

（我らが神よ）ようこそおいでなさいました」

球体の形をとる薄蒼い結晶体が浮かんでいる。円盤状に光る床の上に漂うようにして存在するそれは、魔石の大規模な結晶体だった。半径にして数十メートルはあろうかという光る床。足をつけて感じる感触は固く、だが有機的な暖かさを抱いている。足元を良く見ていると、ただ発光していると思われたそれは、超微細に書き込まれた膨大な量の術式で、絶えず式を更新しているのが分かる。式が生きているかのように脈動し、変容するその光景に、皆のマスクから排出される気泡が少なくなる。

その生きる術式に浮かぶ大結晶は、既存のどの属性色にも属していない。四、五メートル程の半径を持ち、その内に見た目以上に大きな空間を持っているのではないかと思われる摩訶不思議な様相を呈していた。

「そろそろ……来ます」

アークがそう告げたとき、水ごと空間が鳴動した。

「すごい……これは…式？」

「言葉が、泳いでる」

直後現れ、皆の周囲を泳ぎ始めたのは、アルファベットの文字の羅列。大結晶を中心に半球を描くように絶え間なく、緩やかに周回するそれは、訪れを歓迎するかのように淡く輝いている。

そんな文字列の中に、ラスティは偶然……？いや、ひょっとすると意図的に見せられたものだったのかもしれない、ある文章が目に入った。眼前をゆっくりと、通過していく。

「(A i f i n e n t l i c h e y u - i n : a u f e n
f a - d a : : : そっか、お前が……)」

過ぎていくその文字列を、顔を動かして追うラスティ。それはラスティから離れて程なく、フェードアウトして消えていった。役目を終えた言葉は、ラスティとその傍らのアーク以外の人に見られることなく解けていったのだ。消えていった文字の跡を見つめながら、アークがラスティに言う。

「(、ようやく貴方に会うことが出来ました、我らが父よ、――――」

ふふ、マスターにここを訪れて欲しかったのは、どうやら私たちだけでは無かったようですね」

ここは数ある世界の力の中継点、そして精霊たち世界種が直接世界より意思を受ける場所。そのことを知識以上の要素で理解したラスティは、視線を大結晶のもとに戻した。相変わらず、淡く、輝いていた。

????????????????????

別にその存在が確定され、役割を知られたところで、世界には何の損失も無い。そうである故か、ステラがアークに投げかける様々な質問に、アークは懇切丁寧に答えていった。ステラは質問の内容に気を遣っているのか、あまり突っ込んだことは聴いてこない――ものの、その質問の量が多い。

ステラが知識欲を満たさんとしている最中、ティアマツトとアル少年は、泳ぎ回る文字列たちを追いかけようにして泳ぎ回っていた。その尽くが二人に理解のできないものであったが、文字を捉えて読もうという二人の行動は微笑ましい。いつの間にか幼い精霊たちまでもが、二人に混ざって泳ぎ回っていた。子供のような無邪気な念を送ってくる精霊たちの相手をしながら、ティアマツトは漂う言葉たちを読もうとする。

「(……全然読めない……)」

自身の学の身につかなさに、少々落胆するティアマツトだった。

第二十四小節「精霊にとっての高嶺の花」

世界がその意思を直接告げることもあるその場所は、精霊にとって、人における教会の大聖堂と同じようなものだと言える。人が神を、精霊を、龍を信仰するように、世界種たちもまた神を信仰する。中でも精霊の信仰心は群を抜いて高く、そのことは人の世にすら伝わる程であった。精霊の前で彼らの神を侮辱したら、速やかに自害した方が自身の為であろう——そのようなことまでもが言われている程だった。

だからこそ、ステラには疑問があった。

ラスティは中枢部だけでない部分を見ようと周囲の観光に赴き、幼い精霊と遊んでいた二人も何処かに行ってしまう。蒼い文字のドームの中には必然的にアークとステラが残されていた。一しきり質問を終えたステラ、そして周囲を見渡し誰も居ないことを確認すると、ラスティの元に向かおうとしていたアークの腕を掴んだ。悲しげに振り返ってくるアークの表情に罪悪感を覚えながらも、ステラは文字を書き出す。

「へアークちゃんって、もしかして本当は凄い偉い精霊だったりするの？」

単刀直入、そんな疑問がぶつけられる。思わなかった事態では無いが、この場でそれを問われると思わなかったアークは、ステラにも分かってしまうほどに動揺を見せる。

「それはまた、何故」

自然になのか、アークの語調と声の振動が変化する。普段のアークからは見られない、その威圧感に似た雰囲気に一瞬たじろいだス

テラだったが、それでも文字を描く。

「へ本当は、最初から気になってたんだ。キミは既存の属性色のどれにも属さない色をしているから……でも確信は持ててなかった」

アークは黙ってその文字を読んでいる。続きを促されたようで、ステラは一気に根拠を書き出した。

「へあの時は疑問に思う暇がなかったんだけど、キミはあの堕ちた精霊を圧倒してたのが、まず一番に気になったの。だって湖の精霊とそれなりに戦闘してたんだよ？　なのにキミとの戦闘では、キミが一方的だった——湖の精霊が、弱いのかなんて思っちゃうくらい……」

そしてね、今回のココに案内してくれたこと——ティアマットちゃんもアルくんも全然気付いて無いけど、ここに来れるって本当に異常なことなんだよ？　教会関係の情報だから中々見つかなかったんだけど——昔わたしが調べた資料じゃ、ここに‘招待’された人間なんてだれも居なかった。

アークちゃんがラステイクン大好きなのは知ってるから、彼に見せてあげたかったのかなって思ったんだけど……でももしそれだけなら、精霊使いが訪れていた記録があってもおかしくないはずだもの。だから、アークちゃんがホントはものすごく偉くて、この精霊さんをお願いしたのかなって……」

一気に書き出して、ステラは腕を下ろした。中空に漂う文字が、世界の修正力に掻き消されるまで、アークはじっとその文字を見続けていた。文字が消え去った後、アークとステラの視線が一致する。しばしの沈黙の後、アークは観念したと大きくため息をついた。

「はぁ……。どうやら貴女の知識量を見誤っていたようですね……」

分かりました、貴女に敬意を表して幾つか、私のことについて教えて差し上げましょう。ですが、私が言ってしまったことは、マスターには言わないで下さいね？」

人差し指に手をあててそう微笑み、雰囲気をいつものものに戻したアークを見て、

勿論だよと、そう笑ってステラは頷いた。

??????????

湖底の砂浜に降り立つ。踏みしめると同時に舞い上がった白砂が、踝までを包んだ。その際に見えた蒼い光が、そこに魔石の粒子を含んでいることを教えてくれる。

霊地中央部からやや離れた位置、ラストイは湖底の砂丘を見て佇んでいた。是空大結晶からはあまり離れていないためか、彼にじゃれつくように幾つかの文章が纏わり着いている。感情など無いはずである‘世界の力’。幻想を制御し、世界を調律する存在は、大結晶を通してラストイに甘えているようにも見えた。

腕に纏わり付いた文字を見てラストイは微笑む。マスクから泡が零れ出るだけのその反応に、世界は何か感じたのだろうか――少しだけ強く光る。

しばらくそんな光の文字を見ていると、ふと、突然それは水に消えていった。ラストイは訳が分からず首を傾げていると、背後から声をかけられた。

「ここにいらしていたのですか、ラストイハルト様」

「（ん？ ウンディーネか）」

その声の主はウンディーネ。水の化身のような姿ではなく、人に近い姿で彼女は現れた。水の中で軽く漂う銀髪が、蒼い光に色づいて輝いている。ラスティの前に姿を現した彼女の頬は僅かに色付いており、口調も何処と無く強張っていることから、緊張でもしているのだろうと思われた。

そんな彼女が現れたことで、文字^{セカイ}はその姿を消したのだろうか――そうラスティは思う。世界に体面^{設定していない}のような考え方が存在するかどうかは彼に分からなかったが、‘分らない’以上、もしかしたらそのようなこともあるのかもしれないと、ラスティは自然に笑みがこぼれた。

「あ、あの、ラスティハルト様？」

「（いやいや済まない。なんでもないんだよ、これが）」

ウンディーネは、ラスティが突然笑ったことに困惑するが、すぐに彼がなんでもないと言う。困惑が抜け切らない様子のウンディーネだったが、そんな彼女の姿を見て、思い出したという風にやや大仰な動作をラスティはとった。そしてウンディーネにあることを頼む。

「（あ、そうそう。言い忘れてたが、俺のことはラスティって呼んでくれ）」

瞬間、ウンディーネの周囲の時だけが停止した。

「!?!?!? ……そ、そんな…あああなたさまをよよびすてにするなどとわわたくしには……」

その直後、途端に困惑し始めるウンディーネ。その囁みに囁みまわった言葉に、アル少年やティアマツトに話しかけるときの威厳など欠片も残っていない。恐らく最初に会った時は、彼以外の人間の前ということで精神を平静に保っていたのかもしれない???ウンディーネの大人らしい容姿とのギャップに、思わず噴出してしまいそうになったラスティだが、それを懸命に抑えて話しかけた。

「（まあ、恐れ多いって言うような気持ちも分かるが、あまり気にしないでいいんだぞ？ こっちとしては、ハルトまで付いてると長いような気がするだけだからさ、これが）」

「は、はい。あ、貴方様がそそう仰るのであれば……」

そうして彼女は、動悸を抑えるかのように深呼吸をする。顔初々しい恋人同士が、初めて愛称で呼び合うかのように顔を紅潮させる様な有様で、それを見て、同じ精霊でもここまで反応が異なるのかと彼は感想を持った。

アークに同じことを言った時は???『ではご主人様で???と真顔で答えてきたので、大慌てで直させたと、追想する。結局マスターという妥協案が採択され、アークは結局、ラスティ、と彼に向かつて言うことは無かった。

「ら、ららす、ててィ……」

「（……………もし難しいなら、今までどおりでいいんだぞ?）」

「うう、申し訳御座いません、ラスティハルト様」

結局ウンディーネは、彼のことを愛称で呼ぶことが出来なかった。頭を垂れて落ち込んでしまったウンディーネが妙に哀愁を感じさせて、ラスティは少し罪悪感を感じてしまう。

「(……なんだか、すまん……で、どうした？ 何かあったのか?)」

念話での会話で、ラスティはウンディーネと話す。何かあったのかという問いに、ウンディーネは何も無いと答えた。ただ何をしているのか気になったのだという。

「(まあ、そうだな……折角ここに来たんだから、少しばかり周辺も見て回ろうかなって、な)」

霊地、世界の力(主に修正力)の発信地、アンテナのような役割を果たすここが、中枢部のみで出来ている訳でないということをラスティは知っている。今までに五箇所程の、増幅用の魔晶石のタワーや、精霊たちの手で建てられたと思われる祭壇のような場所を見てきていた。

湖底だというのに、遠くまで見渡すことのできる透明度と光量の中、ラスティは周囲を見回しながら語る。

「(やっぱ凄いよな、ここは。知識として知ってて、大体どんな姿でどんな色でどんなものなのか分かってるっていうのにさ……いざ来てみると、それが現実に目の前に存在してるのに驚いてばかりだ。来て良かったって、ほんと、思うよ)」

「あ、ありがとうございます！ そう言って頂けますと、この地に招いた私共としても非常に嬉しいものです！」

ラスティの感想に、目を細め笑顔になるウンディーネは、実に嬉しげに顔を赤らめる。霊地は、精霊にとって人における教会・そこを守護する守護精霊はいわば司祭。故に、自身の霊地を賞賛されるのは嬉しいものなのだろう。

「ではラスティハルト様は、残りの場所も回られるのですか？」

「ああ、そのつもりだ」

折角の招待なんだからなど、その後にラスティは続けた。ここはもう見たと、ラスティが次の場所を探そうとすると、急にウンディーネが彼を引き止めて、何かを言おうとする。

「あ！ あ、あの、ラスティハルト様」

呼びかけられたラスティは振り向いた。だが肝心のウンディーネは、何故か急に恐縮してしまったようになり、中々言葉が出てこないという風な状態になってしまった。

「あう……いや、そのう……」

ようやく（ほんつつつつの少しだけ）戻ってきたと思った大人びた様子が、打って変わったその幼げな動作にもどってしまったことに、ラスティは思わず破顔してしまう。笑い声を出しはしなかった為、それがウンディーネに知られることは無かった。

ウンディーネのその様子に戸惑ったものの、ふとその事情に思い当たることがあった。

その予想を元に、アークなら積極的に言い出すんだろうなどと、ラスティは想像した。そんな想像を振り払って、中々用件を言い出せずにいるウンディーネに、ラスティは声をかける。

「そういえばウンディーネは、ここの地形覚えてるんだよね？ 案内してくれるか？」

「はい！ 私で宜しければお供いたします！」

急に元気になったウンディーネを見て、アークだったらただ微笑んで、付いてきてくれるんだろうなと、そう思った。

「（このことをアークが知ったら、アイツ嫉妬とかするのかな？）」

試してみようとは思わないまでも、そうなったアークを想像してみても、最後は噴出してしまったラストイだった。

第二十五小節「戯れの精霊」

「（遊ぼ遊ぼう）」

「（一緒に泳ごう）」

「（ヒトと一緒に、人間と一緒に）」

何体かの、光玉のような姿の幼い精霊が、ティアマツトとアル少年の周囲を泳いでいる。じゃれついて、くつついては離れくつついては離れを繰り返す様は、精霊であるということを忘れてしまいそうなほどに微笑ましい。

アル少年だけでなくティアマツトもそんな精霊たちの遊びに付き合って、いつの間にかやや離れたところまで来てしまっていた。どうしようかと一瞬悩んだティアマツトであったが、いざとなれば湖面まで浮上すればいいだけだと思い、気にすることを止めた。今現在、自分の体はウンディーネの張った結界に水圧から守られているということに完全に失念している。

「（ティアマツトさん、この精霊さんたちは僕よりも（年齢的に）小さいこたちなんですか？）」「

彼らと遊んでいるうちに、そう疑問のわいたアル少年が言葉を口にしようとする。だが、それはマスクを被っているせいで上手く発音できず、泡の吹き出す音にしかならなかった。視線を向けられたために、何か言おうとしていたことは理解出来たティアマツトだったが、如何せんその言葉が聞き取れない。首をかしげて、右腕を振るった。

「へごめんアル君。何言ってるのか、分からない」

その文章を読んだアル少年は、腕を組んで何やら思案する。そして右の手で左の掌を打つと、湖底にしゃがみこんで海中に指を使って文字を書き始めた???が、書けなかった。

「……………」

一文字書いてみて、次の文字を書こうとして生まれた水流が、文字を掻き消したのだ。きめ細かな白い砂が元の姿に戻っていく様を見て、アル少年が肩を落とした。

すると、精霊が彼の頭の上にのしかかった。突然の軽い重みにつんのめり、引っ繰り返りかけた姿勢で上を睨める。何か挙動を示すわけでもないのは、恐らく念話をしている為だろう。幼い精霊は、念話以外にコミュニケーション手段を持たない。

アル少年の表情が、疑念を持ったものから、次第に喜色を帯びてくる。そして抱きつくようにして喜ぶと、彼はその幼い精霊に左手を添えて右腕を振るった。直前に、アル少年よりも幼い声が詠唱を行う。

「Fantax—ea, sept f a n c t (幻想準式、接続開始)」

すると湖底の砂から魔石の砂だけが浮かび上がり、文字を形成する。光が集うその様子に、ティアマットは啞然とするばかりだった。精霊が接続により、アル少年の意識を読み取って文字を描いたのである。

「へ見てください見てください！ 精霊さんが手伝ってくれるそうです！　すごいや、まるで魔術師になったみたい！」

嬉しそうに腕を振り回す彼は、魔術の素養など無いにも関わらず幻想が行使できたと大喜び、質問のことなど頭から抜け落ちた。彼の喜びに答えるように、周囲の青い光たちも飛び掛るようにして動き回る。

「へこの話し面白い!」

「へおもしろい面白い!」

「へいつもと違う話し方」

「へ有難う有難う、虹の人!」

アル少年の周囲に文字を殴り書く彼らは、いつの間にかお礼を言う立場が逆転していた。

だがそんなことよりも、アル少年は自身の呼び名が気になった。ティアマツトも同様に首をかしげている。

「へ、虹の人、って、どういうこと?」

アル少年が、フランク接続した精霊を胸の前に抱きかかえながら聞くと、その胸の中に納まった精霊から、答えが返ってきた。

「へキミからはいい匂いがする

おひさま浴びたお空の匂い

虹の匂い だからキミは虹の人」

アル少年はただ訳が分からず困惑するだけだった。だがティアマツトは、精霊のその発言に驚く。

精霊は感受性が高い。それは魔術に携わるものだけでなく、傭兵のような者にも知れ渡る話だった。その感受性は、世界と近い高尚な存在ゆえであると教会では言われ、彼らは自然、相手の本質を見抜くのだという。

彼らは世界の加護に敏感である。この世界の人々は、ある特殊な手法で名が決まるのだが、それは必ず詠語の名で世界からの加護があると云う。精霊の言う‘虹の匂い’というのは、彼の名の加護から来る気配なのではないか――ティアマツトはそう推測した。

そう思案していると、アル少年に向けられていた関心はティアマツトのほうにも向いてきた。

「〈それでねそれでね虹の人〉」

「〈あのひとは潮の香り、海の匂い〉」

「〈命と色の混ざった匂い、いい匂い〉」

「〈へえゝゝゝ、そうなんだ〉」

海？　それが自身の名前に関係するのだろうかと思案し始めるティアマツト。だが彼女の思考の中では結論など出ず、オーバーヒートしかけた思考で、やはり後でラスティカステラに聴いてみよう、疑問をとっておくことにした。

精霊たちは続けて、丁寧なことに訊いていない人達のことについても話し始めた。

「〈大きいほうの女の人〉」

「〈お星様の匂いがする〉」

「〈大きいほうの男の人〉」

「〈お空の匂い、とってもいい匂い〉」

「〈あの人の匂い、一番好き！〉」

「〈でもおっきなお舟がコワイ〉」

「〈もっと近くに行きたい〉」

「〈でもお舟のひと、コワイ〉」

「〈コワイ〉」

「へおっきなお舟？ それってアークさんのこと？」

精霊とアル少年のやり取りを聞いて、思わずティアマツトは噴出しそうになってしまった。恐らく星の匂いとはステラのこと。そしてお空の匂いはラスティで、おっきなお舟はアーク。

昨日アークが、‘自分の主は精霊にとっても好かれる’と断言していた理由が、少しだけ分かったような気がした。恐らく精霊たちは、ラスティの気配を察して直感的に彼のことを気に入るのだろうと結論付ける。一番好きということは、それだけ彼は精霊に好かれやすい体質なのだろう。

「（そういえば——）」

思えば自身も、彼に対してそれに近い感覚を受けてはいなかっただろうかと思ひ返した。彼ら精霊のいうような匂いというほどのことではないが——

「（ラスティは、なんだか、広い）」

大きいというよりも、広い。細身の彼に、そのような感覚を抱いていた。彼に対する、軽く薄く包み込まれるようなイメージ。それは、‘空’に類するものではないかと、ふと思ったのだった。印象、それが精霊には加護の感覚として伝わるのかなと、彼女は思案していた。教会に身を置いていた時期がある分、精霊や世界や神について考えさせられることは多い。これが勉強に関係していることならば、既に思考を放棄していただろう。

考えて黙り込んでしまったティアマツトの視界に、視界を埋め尽くすほど近くに精霊が現れた。驚いて仰け反って、思わず睨んでしまう。

「へおどろいたおどろいた!」

そういった文面を撒き散らしながら、アル少年の方に逃げていった。大人気ないかなとは思いつつ、やや本気でその精霊を追いかける。そうして鬼ごっこじみたことをしながら、ウンディーネの呼び声に精霊たちが反応するまで遊んでいた。

アークのことが怖いというのは……ティアマットには思い当たる節が存在した。

流石に守護を任される程の高位の精霊も、霊地中枢への干渉と水圧から保護する結界を維持し続けるのに限界が近づいてきたという。その意を告げられたラスティはアークに念話を送り、彼らは再び中枢に集った。ティアマットとアル少年は押さない精霊たちが一緒に居る様で、ウンディーネが念話で連れて来るように言ってもらうことを忘れずに。

アークとステラはずっとその場に居たようで、そこにラスティが現れるのを出迎える。大きく手を振り、出迎えてくれたステラに、ラスティも同じように振り返した。そんな彼らにウンディーネは気を遣ったのか、水の姿になり視認されにくい形態で居て、密かに移動している。ステラはその姿に気付いていないが、アークはしっかりと感知しているようだ。

「へおい! ラッステイクくん!」

「マスター、お帰りなさいませ。（ウンディーネ……羨ましいです）」

言葉でラスティを出迎えつつ、嫉妬と羨望のこもったアークの念話がウンディーネに届いた。そんなアークの視線（と念）は少し痛かったが、それを堪え、ステラに気付かれないように、核晶を上手く隠しつつ大結晶の影に身を潜めた。その様子を、何回か盗み見るようにして、アークは見ていて――視線をラスティの方に戻す。

「（……まあ、あまりピリピリしすぎるのも見つとも無いですから……）周辺の御観光を為さっていたのですね。如何でしたでしょうか？」

「（ああ、本当に綺麗だったよ……というかアーク、ずっとここに居て、何してたんだ？）」

「へあ、あのねラスティくん。アークちゃんがね？」

念話で行われたラスティの問いに、アークの表情が強張った。それを見て取ったステラが、念話で何か聞かれていると察知し、ラスティに話しかけて意識を逸らす。彼女の援護に、アークは彼の影でステラに向かってお辞儀し、ステラはこっそりと親指を立てて応えた。そうしてステラも交えて会話をしていると、ティアマットとアル少年が帰って来る。

幼い精霊たちと遊んでいたらしい二人の周囲には、幼い精霊たちが、幽霊に付き従う鬼火のように漂っていて、思わずステラとラスティは苦笑いしてしまう。亡霊のようだと、同じような感想を抱いていた。

そんな彼らの感想も知らず、ティアマットとアル少年は降り立った。付いてきていた精霊たちは結晶の影のウンディーネのもとに集

まっっていつて、何か言葉をかけられた後、何処かに消えていく。去り際にラスティにじゃれ付いて、アークに睨みつけられたのはご愛嬌である。

逃げるように姿を消していく幼い精霊たちを見て、全くけしからんと腕を組むアーク——君は幼児保育に向いていないと、その姿を見てラスティは思うのだった。

最後になって、わざわざ水晶の影から現れたウンディーネに見送られて、ラスティたちは水上に向かう。ラスティは当然として、加護を受けてからというもののティアマットはウンディーネに対する恐怖心が無くなったようで、彼女が姿を現しても平然としていた。アール少年はそこそこに、ステラは間接の数が減ったのではと思われるほどに終始緊張していた。

ラスティが泳ぎつつ後方を振り返ると、水の姿をしたウンディーネが彼に向かって御辞儀をしていた。勿論他の皆が見ていないが故の行動である。

そんなことを初め、ラスティ以外の人間の前に姿を現すときは毅然としている彼女が面白くて、噴出してしまいそうになるのを何度も必死にラスティは堪えていた。その様子を察知していたウンディーネは、もし人に近い方の姿であれば羞恥で顔を紅潮させていたことだろう。水の姿で現れたのは正解だったといえる。

第二十六小節「虹のその名は」

時刻は十三時過ぎ、昼食を食べ終えた皆は、思い思いの自由行動をしていた。彼らの昼食の場での話題は尽きず、終始霊地の話題だった。そうして昼食を終えた彼らは、興奮が冷め遣ったせいで少し怠惰感を感じており、休み意味合いを込めて自由時間となっていたのである。

「はあゝゝ、凄かったなあゝゝゝ」

興奮冷めやらない様子のステラは、円形のテーブルの上で夢見心地の表情でずっと中空を眺めていて、延々と感傷に浸っている。学者志望であるゆえか、貴重な体験が出来たことが余程嬉しいのだろう。彼女の周囲には幸福に満ち溢れた空間が形成されており、だがその中には彼女しか居ない。他の皆は砂浜に居た。

「ZZZZZZ……うう、お……い」

疲れが出たのか、アル少年は昼食を食べ終えた後、深い眠りについてしまい、砂浜で仰向けになって寝ている。深く寝入っているのだが、その表情はともではないが安らかであるとは言えない。原因はその両隣で土木作業を行う二名が原因だった。

「（いいかアーク、そつとだぞ？　まあ、アル坊は寝入り深いみたいだから大丈夫そうだが）」

「（了解です、マスター）」

ラストイとアークの主従は、寝ているアル少年の埋め立て工事を

行っていた。騒音を考慮してか、会話はすべて念話で行われている???が、若干一名の安らかな眠りを妨げていた。

少し離れた位置では、ティアマットがその光景を体育座りで眺めている。水着の上に大きなタオルを羽織って、敷いたシートの上、砂浜に突き刺したパラソルの下で涼んでいる。それなりに長さのあったパラソルの柄は、地面の上に見える部分の高さは何故かそれほどでもない。

座った姿勢のままでティアマットが観察を続けていると、砂を大きな芋虫状に盛り上げるという小規模工事の終わったラスティが、ティアマットの方に歩いてきた。砂の両端には、蠢く金色の頭と白い肌の足が見えていた。それを見てティアマットは何も言わない。完全にスルーする方針である。

「よ、土木作業終了につき俺も休憩ってな、これが……隣、いいか？」

「うん」

パラソルの下で涼むことを選択したラスティは、ティアマットの許しを得て、上着を枕に横になった。その視線はカラフルなパラソルの布地に向いている。

「ん？ 何だかパラソル低くないか？」

「え？ そ、そうかな」

パラソルと、寝転んだ自身との距離が思ったよりも近かったことに、ラスティは素朴な疑問を告げる。パラソルを立てた張本人のティアマットは、そんな彼の感想が思い違いではないか???といった態度でいる。あまり気にしていなかったラスティは、気のせいだろ

うかと思い、その疑問について考えないことにした。

もしこの時ラスティが、地面の下のパラソルの柄の長さを見たならば、深く突き刺さるその長さに驚愕したことであろう。

勢い良く突き刺したほうが良いというステラのアドバイスに従って、パラソルを立てていたティアマットは、彼が追求してこなかったことに内心安堵する。

そうしていると、遠くのほうから小走りに走り寄る足音が聞こえた。

砂を蹴って小走りに走り寄る足音、それはアークであった。両手に何か抱えているようで、覗き込むようにして顔を出す。一瞬だけ思案顔になったが、特に何も言うことなく、抱えたものをラスティに差し出した。

「（？　なんだか深く刺さりすぎているような気が……）マスター、枕のほうをお持ちいました。ティアマットさんの分も持っていました。お使いになられますか？」

アークが両手に抱えてきたのは、ラスティとティアマット両者の枕。ラスティが昼寝をすると言い出したので、走って持ってきたらしい。ご丁寧なことに、ティアマットの分も持ってきてくれていた。気の利いたその行動に、二人は揃って礼を言う。

「お、気が利くな……ありがとな、アーク」

「ありがとう」

「いえ、これぐらいはどういうことはありません。では、失礼します」

二人に枕を渡したアークは、お辞儀をするとテントの方に駆けて

いった。砂を蹴る細かな音が遠ざかっていく。

元々昼寝を始めるつもりだったラスティは勿論、ティアマットも彼と同様に横になった。パラソルの柄が二人の間に入り、それが棒でありながら仕切であるかのような感覚を受ける。

吹き降ろしの風が弱くなる。アークが結界を張ってくれたのだろう。水着の上にタオルを羽織っただけのティアマットとジャージの上を着ているだけ（下は水着）のラスティには有り難いものだった。内心で二人は礼を言う。

瞳を閉じる。風に吹かれる木々が葉をこすり合わせ、どこかで跳ねた魚が湖面の水を打ち、何かの嘶き、周囲の自然を感じ取れるような気がした。視界に割く神経が無くなり、その分がその他の五感に割り振られる。少しずつ少しずつ眠りに向かう脳は、それでも鮮明に周囲の情報を拾っていた。

そうしてラスティが自然に耳を傾けていると、近い位置から声が聞こえる。直前に、頭を動かす音が聞こえた。

「ねえラスティ、まだ起きてる？」

その問いに、瞳を閉じたまま首肯してラスティは答えた。既に癖になっている、右腕を下にして眠る姿勢をとっているため、ティアマットには背が向けられている。そのラスティの首肯を見たティアマットが、少し話してもいいかと問う。もう一度、ラスティは首肯した。今度は‘おう’と返事が加えられている。

「あのね、さっき湖の底に行ったときなんだけどね？ 私とアル君が、生まれたばかりの精霊と一緒に遊んでいたの。その時にね、‘海の匂い’って、言われたんだ」

「……!？」

投げかけられたその言葉に、ラスティは思わず表情を強張らせ息を飲み込む。ティアマットには背を向けている体勢であった為、その動揺は知られることは無かった。ただラスティは、少しだけ驚いたように反応の返事をしただけである。

ラスティの動揺に気付かないまま、ティアマットは言葉を続けた。

「あと、命と色の混ざり合ったって言われた。精霊って相手のことを見抜くから、きっと、私の名前のことに関係あるのかなって……どう思う？」

「多分そうだと思うぞ？ 幼くたって精霊だ、その言葉は覚えていたほうがいいと思うぞ」

人に付けられる詠語の名前は意味を持つ——教会ではそれをよくよく教え込まれ、名を騙ることを絶対禁忌として教えられる——教会の出身者である彼女だからこそ、精霊に言われたことに、名前が関係があるのだと思ったのだろう。ラスティは彼女の問いに、同意して、覚えておくと良いとアドバイスする。

ティアマット。それはラスティの世界での古代メソポタミア文明の女神、神々たちの母にして海を象徴する女神。故に精霊は、彼女に海を感じたのだろう。色の混ざり合う——色の三原色‘青’、‘青’、‘黄’、この三色を混ぜると‘黒’になる——それは混沌でもあったティアマットだからなのだろう。彼女が緑の系統が苦手なのだが、その理由を、この時ラスティは理解した。

覚えていたほうがいいと言われたティアマットは、その意見に同意して頷いた。シートが擦れる音で、そのことがラスティに伝わる。ティアマットは更に続けた。

「あと、アル君は‘虹’って言われてた。ステラが‘星’で、ラスティが‘空’で、アークは‘おっきなお舟’」

「ぷっ!!　　おいおいおい、なんでアークだけ表現が幼稚なんだよ」

ティアマツトが、アークに関しては精霊が言ったことをそのままで言ったため、思わずラスティは噴出してしまう。震える背を見て、ティアマツトが事情を言って弁明した。そんなことだろうと一応は思っていたラスティは、分かったと言って後ろ手に手を振って返す。少しだけ、ティアマツトの頬は膨れた。

他愛の無い応答を繰り返している間、ラスティはアル少年の‘虹’について考えていた。同時に、アークに早いうちに聞いておけばよかったと後悔する。

虹。恐らくそれがアル少年の本名に関係するワードなのだろう。そしてその頭文字二つはAr。ラスティは頭の中で、Arで始まる虹に関連のある言葉を探していた。同時に、次第に瞼が重くなる。

「（ん？　　そういえば――）……………」

「？　　ラスティ？」

急に黙り込んでしまったラスティに、ティアマツトは声をかける。だがその背は何の反応も示さず、ただ呼吸していることを表す音が聞こえるだけだった。

要は、寝てしまっていた。

「……………」

予告無く寝入ってしまったラスティに、少しだけ恨めしげな視線を、ティアマツトは送る。だがそのようなことをしたところで、ラスティが再び目を覚ますことは無い。

仕方なく、彼女もまた昼寝とすることにした。

第二十七小節「叶ったこと」

「マスター、ティアマットさん。もう三時を回りましたよ?」

「んあ……あーくか」

「……おはよう?」

アーク（少年）の声に、重い瞼を開けてラスティとティアマットは半覚醒した。時刻を聞いてとったラスティは、今現在ステラが用意しているであろう‘お茶とお菓子’を食べる為に起き上がる。パラソルの影から出、南中から過ぎた少しだけ西よりの日差しを浴びる。硬直した筋肉を解す為に、大きく伸び上がった。涼しげな空気が肺に満ちて、脳の覚醒を促す。

そうして深呼吸しつつストレッチをしていると、パラソルの影からティアマットの声がする。

「ラスティ、すこしさがって。パラソルぬくから」

「ん? 応、了解した」

まだ少しだけ眠そうなティアマットの声を受けて、ラスティは言われたとおりに少し?…? 一歩だけ離れた。それを確認したかは知れないが、直後にティアマットは行動を起こす。

シートを踏みしめ、強く皺を作り出す音がまずラスティの耳に入り、続いて柄の素材が変形の悲鳴を上げる。明らかに強度の限界近い力が加えられていることが直感的に分かった。

そして数秒の後、ラスティの鳩尾ほどの高さにあったパラソルに

変化が起こる。合図はティアマットの気合の声だった。

「っはああああ！！！！」

「うお！?!?!」

明らかに状況とは不釣合いの声。それと同時に、パラソルはラスティの頭上遥か高くまで上昇した。突然のことに、ラスティは飛びし去り尻餅をつきかける。

見ると、ティアマットがパラソルを掲げるような格好で立っていた。背を向けて立つ彼女の足元??地面から二十センチほどの高さの地点にパラソルの柄の先が見えていた。ラスティは驚愕しつつ、全長三メートルほどもあるかというパラソルを見ている。

脳内ですばやく彼が計算したところ、どうやら彼女は一メートルも、地面にパラソルの柄を突き刺していたらしい。アル少年の埋め立て工事を行っている最中に背中越しに彼が聞いたパラソルを刺す音は、僅かに一回。つまりティアマットは、一度の動作で、柄を一メートルも差し込んだということなのだ。ソレを成し遂げる為の運動量は計り知れない。少なくとも、ラスティにはどうあがいても不可能な所業だった。

感嘆したラスティは、（彼なりに）賞賛の言葉を告げる。

「さ、流石馬鹿力????」

直後、ティアマットがパラソルを折りたたむために倒した先にラスティが居たことは、恐らく偶然であろう………きつと。

????????????

「なあ、俺がやっぱ悪いのか?」

「ダメだよラスティくん。女の子に馬鹿力なんて言っちゃ」

「そうなんですか？」

「アルくんも気をつけないとダメだよ。女の子にソレは禁句なんだから」

一悶着あったものの、皆は白い円形のテーブルに腰を落ち着けた。女性陣は水着から着替え、男性陣は既に乾いてしまっていた水着の上から衣類を着ている。ラスティの額が、何故か赤く腫れていたが、皆は苦笑いで彼に声をかけている。ただティアマットだけが、どこか申し訳なさそうに俯いてラスティの様子を盗み見ていた。

先ほどのラスティのティアマットの発言に対する会話が交わされる中、アークが皆にお菓子を持って来た。昨日クッキーを口にすることの出来なかったラスティは、一番心待ちにしている表情だ。そして、視界の端に映った青い姿に、ラスティは視線を向ける。

「お？ 今日アークが紅茶淹れるのか？ ……っていうか、出来たのか」

それはティーポットを手に見れたアークだった。アークの後方では、恐らくステラ製であろう魔石コンロと、茶を淹れるための道具一式が置かれていた。それを横目に見つつ、ラスティは、それが昨日の時点では存在していなかったものだど気付かない。

アークは、そんな驚いた様子の主の言葉にはに cand 応え、真っ先に彼のティーカップに紅茶を注ぐ。瞬間、鼻腔にかつてない香りが飛び込んできた。その感動に、思わずラスティは感嘆の声を上げる。

「おお、素晴らしい……」

アークが死に物狂いで収集した知識を元に厳選された茶葉（風味を損なうことを恐れ、わざわざ専用の保管用魔具まで作り上げたここまで持ってきてある）。汲みたての新鮮な硬水で淹れられたそれは、濃い暗い？？だか鮮やかで綺麗な色をしている。ラスティの故郷の水は軟水であるため、このような色合いの紅茶を見るのは初めてだった。英語で紅茶のことを‘ブラックティー’と呼ぶ理由がそこにあった。

一口、紅茶を口にする。寝起きで水分量の少なくなっていた口内に、ストレートティーが広がった。色が濃いにも関わらず、渋みが見た目より少ないのは、やはり硬水ゆえに渋みの成分が少ない故であろう。緑茶を主に飲む文化で育ってきたラスティだが、その香りと旨みが、並大抵の技量ではなされないということを容易に察することが出来た。それほどに、アークの淹れた紅茶は素晴らしい言うに値するべきものだった。

「あの……マスター、いかがでしたでしょうか？」

皆に注ぎ終えたアークが、空になったポットを手に、少しだけ不安そうに、だが期待に満ちた目でラスティの表情を覗き込む。それが何を期待しているか悟ったラスティは、ティーカップを置きアークに笑顔を向けた。

「俺は紅茶に関しててんで素人だが、それでもコレが凄い美味いってのが分かる……凄いなアーク、まさかここまで凄いだなんて」

「！ 有難う御座います！！」

飛び跳ねんばかりの？？？いや飛びたたんばかりに喜ぶアーク。

見るとステラがアークに向かって親指を上げていた。ソレを見たラストイは、ステラが絡んでいたのかなと、推測する？？？だが折角のことなので、追及しないことにした。紅茶が美味しかったからというのが最大の理由ではあったが。

「それにしても、みんな飲み方違うもんだなあ、これが」

ラストイが皆を見ると、紅茶の飲み方にしても、それぞれに個性が見られた。ラストイはやはり文化の影響かストレート。それを真似しようとしたアル少年だが、やはりまだお子様なのだろう。ストレートで飲むのはキツかったようで、一口飲んですぐにミルクと砂糖を混ぜた。ティアマットはミルク大目の砂糖込み、そしてステラが砂糖大目のミルク込みといった具合だった。

「ラストイ、ストレートなんだ」

ラストイが紅茶に何も加えないのを見て、ティアマットがそう漏らす。甘党の自分にはストレートは無理だと、ステラが続けた。アル少年は、真似しようと思って飲んだストレートの苦味に顔を顰める。アークは、さりげない事前調査でそのことは既に知っており、故にアークはストレートで飲むのに適しているという茶葉を選択してきていたのだった。だからか、何故か誇らしげな表情をしている。

「まあ、俺の故郷じゃ緑茶が主流でな、紅茶を飲んだとしてもストレートなんだよ、これが」

「師匠、りよくちゃって何ですか？」

「茶葉の発酵を防ぐために、蒸すか釜炒り等を行い、揉んだ後乾燥させて作られるものですよ」

いつの間にかお茶の知識を増やしていたアークが、アル少年の疑問に即座に答えた。最も、それがアル少年に理解できているかは謎だ。

「緑茶って、飲んだことはないけどストレートで飲むのが普通だって、聞いた事がある」

「何？　じゃあ飲んだことがないのか？」

飲んだことが無い。ティアマットは、そのように言った。それはステラも同様のようで、どうやらこの場で緑茶を飲んだことがあるのがラスティだけであったことが判明する。それにはラスティ、すかさず緑茶について語り始めて？？？？？

そうして、昨日は台無しになってしまった分もあってか、彼らは長い間お茶の時間を楽しんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3137x/>

いつかどこかの俺の世界

2011年11月8日02時04分発行